愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第17集

清洲城下町遺跡

1990

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

目　次

第１章　調査概要 …… (鈴木)…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　立地と環境 …… 3
　第３節　調査の方法と経過 …… 4
第２章　遺構 …… (鈴木)…… 5
　第１節　基本層序 …… 5
　第２節　A期の遺構 …… 7
　第３節　B期の遺構 …… 14
　第４節　C期の遺構 …… 16
　第５節　地震跡 …… 23
第３章　遺物 …… 24
　第１節　A期の遺物 …… (城ヶ谷)…… 24
　第２節　B期の遺物 …… (城ヶ谷)…… 45
　第３節　C期の遺物 …… (鈴木)…… 53
　第４節　その他の時期の遺物 …… (鈴木)…… 90
第４章　自然科学的分析 …… 92
　第１節　土器胎土重鉱物分析報告 …… (鈴木)…… 92
　第２節　材質同定 …… (鈴木)…… 98
　第３節　清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸(付昆虫遺体) …… (森・伊藤)…103
第５章　考察 …… 109
　第１節　清洲城下町遺跡下層出土土器の検討 …… (城ヶ谷)…… 109
　第２節　A期の遺構の変遷 …… (鈴木)…… 113
　第３節　C期の遺物 …… (鈴木)…… 115
　第４節　C期の遺構の変遷 …… (鈴木)…… 120
　第５節　今回の調査と清須城下町 …… (鈴木)…… 124
第６章　まとめ …… (鈴木)…… 126
付表 …… 127
図版 …… 141

図版目次

図版1 遺構図(1)
図版2 遺構図(2)
図版3 遺構図(3)
図版4 遺構図(4)
図版5 遺構図(5)
図版6 遺構図(6)
図版7 遺構図(7)
図版8 遺構図(8)
図版9 63F区A期全景・63K区A期全景・62F区A期全景
図版10 SB14・SB15・SB20・SB60
図版11 SB29土器出土状態・SB74・62H区掘立柱建物群
図版12 62J区B期全景・SK85土器出土状態・P81土器出土状態
図版13 62F区C期全景・63K区C期全景・63F区C期全景
図版14 SD112・SD136・SD118
図版15 62J区C期全景・62K区C期全景・62L区C期全景
図版16 SE125・SE110・SE108
図版17 SD137・SE120・SB101
図版18 SD136土器出土状態・SK142土器出土状態・SD142遺物出土状態
図版19 A期の遺物
図版20 A・B期の遺物
図版21 A・B期の遺物
図版22 B期・墨書土器
図版23 B期・墨書土器
図版24 C期の遺物
図版25 C期の遺物
図版26 C期の遺物(瓦・石製品・銭貨)
図版27 C期の遺物(木製品)
図版28 珪藻遺骸の顕微鏡写真

挿図目次

第1図 清洲城下町遺跡調査区位置図……1
第2図 清洲城下町遺跡と周辺の遺跡分布図……2
第3図 調査の経過……4
第4図 清洲城下町遺跡東壁基本層序模式図……5
第5図 62E区東壁セクション図……6
第6図 SB14・SB15・SB16実測図……9
第7図 SB52・SB53・SB54・SB20実測図……10
第8図 SB08・SB09・SB10・SB59～SB62実測図……11
第9図 A期掘立柱建物実測図……13
第10図 P81出土状態実測図……14
第11図 SB81実測図……15
第12図 C期溝セクション実測図……17
第13図 SD137・SE110・SE125実測図……18
第14図 SE120実測図……20
第15図 SE108・SE111・SE118・SE124・SE121実測図……21
第16図 63N区地震痕実測図……23
第17図 須恵器器種分類(1)……26
第18図 土師器器種分類(2)……27
第19図 A期の遺物実測図(1)……29
第20図 A期の遺物実測図(2)……30
第21図 A期の遺物実測図(3)……31
第22図 A期の遺物実測図(4)……32
第23図 A期の遺物実測図(5)……33
第24図 A期の遺物実測図(6)……34
第25図 A期の遺物実測図(7)……35
第26図 A期の遺物実測図(8)……36
第27図 A期の遺物実測図(9)……37
第28図 A期の遺物実測図(10)……38
第29図 A期の遺物実測図(11)……39
第30図 A期の遺物実測図(12)……40
第31図 A期の遺物実測図(13)……41
第32図 A期の遺物実測図(14)……42
第33図 A期の遺物実測図(15)……43
第34図 A期の遺物実測図(16)……44
第35図 灰釉陶器・土師器器種分類図……46
第36図 B期の遺物実測図(1)……47

第37図　B期の遺物実測図(2)……48
第38図　B期の遺物実測図(3)……50
第39図　B期の遺物実測図(4)……51
第40図　B期の遺物実測図(5)……52
第41図　C期の遺物器種分類(1)……54
第42図　C期の遺物器種分類(2)……55
第43図　C期の遺物実測図(1)……59
第44図　C期の遺物実測図(2)……60
第45図　C期の遺物実測図(3)……61
第46図　C期の遺物実測図(4)……62
第47図　C期の遺物実測図(5)……63
第48図　C期の遺物実測図(6)……64
第49図　C期の遺物実測図(7)……65
第50図　C期の遺物実測図(8)……66
第51図　C期の遺物実測図(9)……67
第52図　C期の遺物実測図(10)……68
第53図　C期の遺物実測図(11)……69
第54図　C期の遺物実測図(12)……70
第55図　C期の遺物実測図(13)……71
第56図　C期の遺物実測図(14)……72
第57図　C期の遺物実測図(15)……73
第58図　C期の遺物実測図(16)……74
第59図　C期の遺物実測図(17)……75
第60図　C期遺物器種分類(3)……77
第61図　C期の遺物実測図(18)……78
第62図　C期の遺物実測図(19)……79
第63図　C期の遺物実測図(20)……80
第64図　C期の遺物実測図(21)……81
第65図　C期の遺物実測図(22)……82
第66図　C期の遺物実測図(23)……83
第67図　C期の遺物実測図(24)……84
第68図　C期の遺物実測図(25)……86
第69図　C期の遺物実測図(26)……87
第70図　C期の遺物実測図(27)……88
第71図　C期の遺物実測図(28)……89
第72図　C期・その他の時期の遺物実測図……91
第73図　清洲城下町遺跡関連試料胎土重鉱物組成…95
第74図　胎土分析試料実測図……97
第75図　材質同定試料(漆椀)の実測図……102
第76図　試料採取地点……103
第77図　清洲城下町遺跡中堀中の珪藻遺骸分析結果…108
第78図　清洲城下町遺跡出土須恵器・土師器変遷図…112
第79図　A期遺構変遷図……114
第80図　土師器皿細分類一覧……116
第81図　土師器鍋C1類の分類……116
第82図　清洲城下町遺跡・C期主要器種変遷図…119
第83図　C期北地区主要遺構変遷図……121
第84図　C期主要遺構変遷図……122
第85図　清洲周辺の変遷……122
第86図　調査区付近の地籍……124

表　目　次

第1表　遺跡地名表……3
第2表　竪穴住居一覧……8
第3表　C期井戸一覧……22
第4表　C期溝一覧表……23
第5表　A期遺物器種分類……27
第6表　B期遺物器種分類……46
第7表　C期の遺物器種分類表(1)……56
第8表　C期の遺物器種分類表(2)……77
第9表　清洲城下町遺跡関連試料土器胎土分析試料表…93
第10表　清洲城下町遺跡関連試料土器胎土重鉱物分析結果…94
第11表　清洲城下町遺跡出土材の樹種……99
第12表　用途別の樹種構成……101
第13表　昆虫遺体分析結果……105
第14表　清洲城下町遺跡中堀より検出された珪藻遺骸 106
第15表　器種構成……109
第16表　編年対比表……111
第17表　各遺構出土の土師器皿一覧……115
第18表　主要遺構出土遺物組成表……118

序

清洲町は、織田信長の居城として知られる清須城や弥生時代の環濠集落として有名な朝日遺跡などがあり、古くから人々が生活を営み、政治、文化の中心地的存在であったと思われます。特に、清須城は清洲町のシンボル的存在で、現在では本丸推定地は史跡公園として整備されております。また、清須城は本丸部分だけではなく、広大な城下町を持っていたと推定され、その全容は徐々に解明されつつあります。

このたび、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、県道新川・清洲線の拡幅工事に伴う事前調査として、清洲城下町遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施しました。調査の結果、城下町の武家屋敷や町屋の様子が分かり、また、古代の集落や寺院推定地なども発見されました。当時の人々の生活や文化に関する重要な知見を得ることができ、これらの歴史的遺産を今日に受け継ぐため、ここに報告書を作成しました。本書が広く歴史研究の資料として活用されると共に、埋蔵文化財に対する御理解に役立つことができれば幸いです。

発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め、関係者および関係機関の御理解とご協力を頂いたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長　松川　誠次

例　言

1．本書は愛知県西春日井郡清洲町に所在する清洲城下町遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は愛知県土木部が進めている県道新川・清洲線建設に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた㈶愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は昭和62年４月～平成元年３月である。

4．調査担当者は、細野正俊・水谷朋和・梅本博志・佐藤公保・川井啓介・鈴木正貴・中野良法・岡本直久・飴谷一であり、調査補助員として、石原智恵子・河合明美・杉山美雪が協力した。

5．調査に当たっては次の各関係機関のご指導・ご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県土木部・清洲町教育委員会

6．遺物の整理、製図等については次の方々の協力を得た。
岩崎繁子・牛田長子・尾崎加代子・加賀良子・河合明美・木全左奈恵・小島洋子・柴山英子・杉山美智子・武市康子・田宮豊子・西野あさ子・洞地喜子・水野里美・山川和子・山口ヤス子・山口やよい・吉田恒美

7．調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

8．本書の執筆は鈴木正貴が担当したが、第３章第１節、第２節、第５章第１節については城ヶ谷和広、第４章第３節については森勇一・伊藤隆彦が分担執筆した。遺物の写真撮影は鈴木が担当した。

9．報告書をまとめるに当たり、次の諸機関・諸氏にご教示、ご協力を賜った。
三重県教育委員会・一宮市博物館・一宮町教育委員会・浜松市博物館・赤羽一郎・内堀信雄・遠藤才文・加藤安信・小島道裕・斉藤孝正・佐久間貴士・下村信博・千田嘉博・巽淳一郎・田辺征夫・玉田芳英・土山公仁・土山健史・檜崎彰一・野口哲也・林部均・前川要・水野和雄・森下恵介（敬称略）

10．本書の編集は鈴木が担当した。

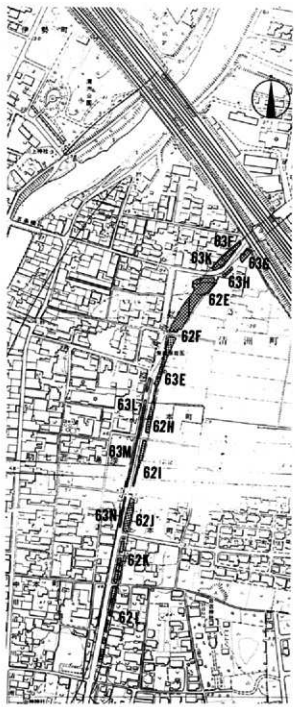
11．調査に関する資料はすべて㈶愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経緯

愛知県土木部は、愛知県西春日井郡内の都市計画道路建設計画の一貫として、同郡清洲町地内に県道新川・清洲線の拡幅工事を計画した。工事予定地の北半部は、清洲城下町遺跡（遺跡番号21002）[1]の範囲に含まれ、また、南半部についても同じく清洲城下町遺跡の範囲内である可能性が高く、そこで愛知県教育委員会文化財課の指導の下に、㈱愛知県埋蔵文化財センターが、昭和61年に遺構の所在確認のための試掘坑（トレンチ）を４箇所（合わせて40㎡）設定した。この結果、古代末から中世の遺物、及び清須城下町に関連する遺構が確認され、工事予定地全面に渡って遺跡が存在することが判明し、事前の発掘調査が必要となった。

発掘調査は、愛知県土木部より、県教育委員会を通じて委託を受けた、㈱愛知県埋蔵文化財センターが担当することとなった。調査期間は昭和62年４月から平成元年３月までで、調査面積は7660㎡である。



第１図　清洲城下町遺跡調査区位置図（１：5000）

8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

第2節　立地と環境

愛知県、岐阜県、三重県にまたがって位置する濃尾平野は、木曽川をはじめとする大小の河川によって形成された広大な沖積地である。清洲城下町遺跡は、この濃尾平野のやや東部を南北に流れる五条川中流域に存在する標高約5mの自然堤防およびその後背湿地に立地する。今回発掘調査を実施した調査区は、五条川左岸の自然堤防に所在し、幅10m弱、長さ約500mの南北に細長い調査区であった。調査地地番は、清洲町大字清洲2680番地他である。現在、本調査区の周辺は、北と西と南は五条川によって形成された自然堤防の微高地（標高約5m）が展開し、東は平坦な水田地帯（標高約2m）が広がり、後背湿地が展開している。清須城の天主台と本丸の推定地とされる清洲公園（清須城故地）は、調査区の北端から北西の方向に約250mの五条川を隔てた地点に位置する。

清洲城下町遺跡の考古学的な発掘調査は、本丸推定地で昭和36年に東海道新幹線建設に伴うボーリング調査[2]が初めて行われたが、それ以後、発掘調査は中断した。しかし、昭和56年名古屋環状2号線建設に伴う発掘調査[3]で、改めて清洲城下町が遺跡として認識され、現在では財愛知県埋蔵文化財センター及び清洲町[4]によって、開発に伴う緊急発掘調査が進められている。

清洲町及びその周辺にかけての自然堤防上には多くの遺跡が存在する。弥生時代の遺跡にはこの地域の中心的集落遺跡である朝日遺跡のほか、阿弥陀寺遺跡、また調査区のすぐ東には西田中遺跡が知られている。古墳時代になると、前方後方形墳丘墓を検出した廻間遺跡や土田遺跡などが現れ、また古代に入ると、南西に集落遺跡である大渕遺跡や、甚目寺あるいは尾張国分寺といった寺院跡などの遺跡が展開する。中世になると自然堤防上に集落あるいは墓域が形成されるようになる。調査区の北には朝日西遺跡、西には土田遺跡、方領遺跡、森南遺跡、阿弥陀寺遺跡等の遺跡が広がる。これらの遺跡のほとんどは15世紀代には消滅していくようである[5]。それに変わって15世紀末から16世紀にかけては、清須城をはじめとして各地に拠点的城館が形成されるようである[6]。清洲の北約5kmには下津城、北東約7kmには岩倉城、南西約6kmには那古野城などが配置される。

清須城が築かれるのは応永年間（1394～1428）のこととされているが、1478年頃に尾張守護代織田敏定によって、守護所が下津から移転されて以来、この地方の中心的都市として発展してきたと考えられる。1555年には織田信長は守護代織田信友を倒して清須に入城したが、勢力の拡大と共にその居城を移した。その間も清須は重要な拠点としての地位を保っていたと見られ、信長の没後はその次男信雄が尾張を支配し、清須を居城とした。その後も豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直などの有力大名がその領主となった。1609年に名古屋築城が決定されると、清須城をはじめ、武家、寺社、町屋など城下町をすべて名古屋に移転した。このいわゆる「清須越」は1614年頃に完了したと言われ、これ以降は清須宿が置かれ、宿場町として発展し、それ以外の領域では新田畑などに開発された。

第1表　遺跡地名表

1	岩倉城遺跡	6	平田城跡	11	廻間遺跡	16	森南遺跡	21	名古屋城三の丸遺跡
2	下津城跡	7	貴生町遺跡	12	土田遺跡	17	阿弥陀寺遺跡		
3	尾張国府跡	8	朝日遺跡	13	増田長盛邸跡	18	大渕遺跡		
4	丸ノ坪城跡	9	西田中遺跡	14	方領遺跡	19	甚目寺跡		
5	野崎城跡	10	清洲城下町遺跡	15	屋敷遺跡	20	小田井城跡		

←第2図　清洲城下町遺跡と周辺の遺跡分布図

第３節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は、まず南の調査区（62Ｊ、62Ｋ、62Ｌ）を昭和62年４月から実施した。試掘調査の結果から、この調査区では古代末から中世及び、城下町期の遺構が検出される可能性があった。果たして調査を開始すると、予想通り城下町の遺構、遺物が確認されると共に、62Ｊ区では調査区内に設定したトレンチから平安時代前期の遺物が出土し、当該期の遺構の存在が想定された。実際、黄褐色シルトを掘り込む形で竪穴住居が検出され、遺跡の時代幅を拡大して認識する必要が生じた。これと同時に、「沙中房」などと記された墨書土器が出土し、これに伴うものと見られる掘立柱建物跡も検出された。これによって、当初計画では新たに拡幅される部分についてのみ調査する予定であったが、当時の現道部分についても調査が必要であるということになり、昭和63年度に63Ｌ・63Ｍ・63Ｎの各調査区を設定した。

昭和62年９月からは、調査区の中央地区（62Ｅ、62Ｆ、62Ｈ、62Ｉ区）の発掘が開始された。この地点は南地区とは異なり、62Ｅ区の一部を除き水田となっており、標高が他の地点より低いため、遺構がどの程度残存しているかが問題となった。当初は、城下町期の遺構のうち、掘り方が深い遺構は検出されたが、他の時期に関しては、トレンチから遺物が出土するものの遺構はなかなか検出できなかった。ところが、62Ｅ区、62Ｈ区の南半部の調査を進めていくと、焼土の堆積が発見されて、シルト層を掘り込みかつシルト層で埋没された極めて検出しにくい竪穴住居が存在することが判明した。このことによって、以前、清洲町教育委員会の調査時に遺物が出土していた奈良時代の遺構、集落が確認され、さらに古墳時代の遺構も発見された。しかし、古代の遺構が確認される前に調査した62Ｈ区の北半部および62Ｉ区については十分な検出がなされないまま調査を終了しており、該期の遺構の広がりに若干の空白が生じている。

昭和63年度では北地区（63Ｆ、63Ｇ、63Ｈ、63Ｋ）と中央地区（63Ｅ）および現道部（63Ｌ、63Ｍ、63Ｎ）の各調査区を発掘した。

注

1）『愛知県遺跡分布地図（１）尾張地区』愛知県教育委員会1986

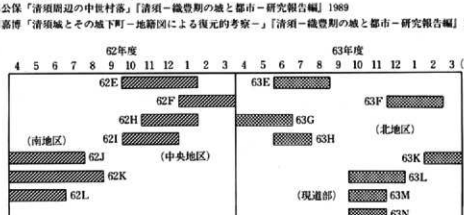
2）『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』文化財保護委員会編1965

3）『埋蔵文化財発掘調査年報II』㈱愛知県教育サービスセンター1984他

4）『清洲城下町遺跡Ｉ』清洲町教育委員会1987

5）佐藤公保「清須周辺の中世村落」『清須－織豊期の城と都市－研究報告編』1989

6）千田嘉博「清須城とその城下町－地籍図による復元的考察－」『清須－織豊期の城と都市－研究報告編』1989



第３図　調査の経過

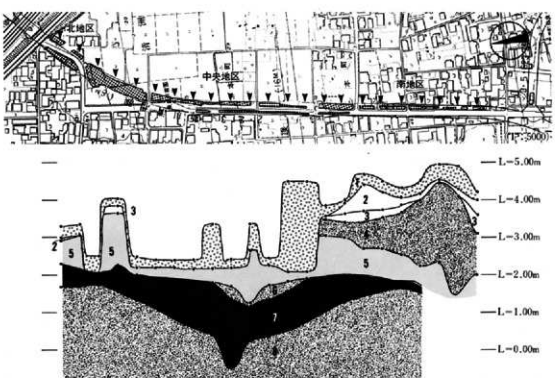
第２章　遺構

第１節　基本層序

土壌堆積は後述するように、基盤層の起伏に加え大規模な洪水、江戸時代以降の新田開発による土地改変などがあり、調査区全体を貫く安定した連続する水平堆積層は認識しにくい。したがって、遺構検出面は地点によって異なる。調査区は、調査当時の地形などから次の３地区に区分し、各地区ごとに層序を述べる。北地区は63Ｆ区、63Ｇ区、63Ｈ区、63Ｋ区、および62Ｅ区の一部であり、中央地区は62Ｅ区の一部、62Ｆ区、62Ｈ区、62Ｉ区、63Ｅ区、63Ｌ区、63Ｍ区であり、南地区は63Ｎ区、62Ｊ区、62Ｋ区、62Ｌ区である。

北地区

調査当時の地表は畑地あるいは宅地である。基本層序は上位から第１層耕作土層、第２層褐色砂質土層、第５層黄褐色シルト層、第７層灰色粘土層、第８層灰色砂層と堆積する。第５層は淘法の悪いシルト層が厚く堆積し、粘性の有無によって上層と下層に区分できる。第５層の上層からは中世の遺物が出土し、この層の上面から城下町期の遺構が掘り込まれる。第５層の下層ではその上面から古代の遺構が検出された。第７層は地点によって黒灰色粘土層が厚く堆積する。第８層は濃尾平野のいわ



１．表土　２．暗褐色砂質土　３．褐色砂質土　４．灰色砂
５．黄褐色シルト　６．灰色砂　７．灰色粘土　８．灰白色砂

第４図　清洲城下町遺跡東壁基本層序模式図

ゆる上部砂層に相当する灰色粗砂層であり、湧水が著しい。井戸の掘削はこの層まで達する。

北地区は古墳時代までに形成された自然堤防上に位置し、古墳時代以降連綿と集落が営まれていた地区である。この間たびたび湿水してシルトなどの堆積が繰り返された。

中央地区

中央地区は現代に至るまで標高２ｍ強の水田として経営されてきた地点である。基本層序は第１層耕作土層、第５層黄褐色シルト層、第７層灰黒色粘土層、第８層灰色砂層となる。恐らく江戸時代以前には北地区と同様な堆積であったと思われ、大規模な掘削（新田開発）によって上層が削平されたものであろう。これは水田地帯に散在する標高約４ｍの畑地（いわゆる島畑－62Ｅ区南半部）や道路部の土層を観察すると、北地区で見られたような本来上位にある堆積を見出せることから裏付けられる。奈良、平安時代以降の遺構検出面は第５層上面であり、古墳時代の遺構は第５層中で検出された。

また、第８層である灰色砂層は62Ｈ区で急激に落ち込み、谷を形成していた。そこには黒灰色粘土層が厚く堆積している。調査区の東には広大な水田面が広がり、後背湿地帯を形成していたと推察され、この湿地帯の一部が62Ｈ区付近に伸びていたものと思われる。

南地区

調査当時の地表は標高４ｍ～５ｍの畑地、宅地である。基本層序は第１層耕作土層、第２層暗褐色砂質土層、第３層褐色砂質土層、第４層灰色砂層、第５層黄褐色シルト層、第７層灰色粘土層、第８層灰色砂層と堆積する。第２層、第３層は砂質土に黄褐色シルト塊などが混入する斑土であり、この中から城下町期の遺物が出土することから、この時期の盛土、整地層であると考えられる。第４層は遺物をほとんど含まない砂層であり、河川の氾濫による堆積と見られる。62Ｊ区、62Ｋ区では、第４層と第５層の間には黄褐色シルト層に砂が混入した層があり、この上面で平安時代後期の遺構が検出された。第５層は62Ｌ区で落ち込み、シルト層で形成された自然堤防は62Ｋ区までである。

以上をまとめると次のようになる。北地区から62Ｋ区までに広がる自然堤防上に古墳時代後期から平安時代前期の遺構が展開し、その後は河川の氾濫などがあり、不安定な状況であったと考えられる。この中でも平安時代後期の遺構群が部分的に存在するが、鎌倉、室町時代に自然堤防が安定するまでは大規模な遺構群は展開しない。江戸時代初期で遺構群が消滅すると、後背湿地に近いところは新田開発による掘削が行われ、上層の遺構群の大半は破壊されたものと思われる。

今回検出した遺構は３つの時期に大別できる。Ａ期は古墳時代後期から平安時代初期の遺構群、Ｂ期は平安時代後期の遺構群、Ｃ期は鎌倉時代から江戸時代初期の遺構群である。

１．黒灰色粘質土　２．暗褐色砂質土　３．黄褐色砂質土　４．褐色粘質土　５．暗褐色砂質シルト　６．褐色砂質シルト　７．灰褐色砂質シルト　８．灰褐色シルト　９．明灰色シルト　10．暗褐色粘質土　11．黄褐色粘土　12．灰色粘土

第５図　62Ｅ区東壁セクション図（一部　１：80）

第２節　Ａ期の遺構

Ａ期の主な遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、溝、道路、土坑などがある。遺構は、後世の河川氾濫や耕作などの削平を受けて上部構造は遺存せず、下部のみの検出にとどまった。

なお、時期の細分については第５章で改めて後述した区分を用いる。Ｃ期の場合も同様である。

竪穴住居

竪穴住居は、その可能性のあるものも含めると70基存在する。これらは他の遺構による破壊や調査区の制約のため全容を把握し得るものが少ないが、、全て平面形が隅丸方形を呈していたと推定され、床面の標高は1.9m～2.5mの範囲に収まる。竪穴住居は自然堤防を形成するシルト層を掘り込む形で存在するが、その埋土も河川氾濫によるシルトである場合が多く、検出は困難を極めた。竪穴住居は規模によって、一辺の長さが7.0m前後のもの、5.7m前後のもの、4.5m前後のもの、3.0m前後のものの４群に大別できる。また主軸の方位によっても、真北を向くもの、Ｎ－16°－Ｅになるもの、Ｎ－33°－Ｅになるもの、Ｎ－38°－Ｗになるものの４つに区分できる。柱穴は対角線上に４個あったと思われるものが多数を占めるが、平面形の規模が小さいものの中には柱穴が２個しかないものや、規模の大きいものには６個あるいは８個あったと推定されるものもある。また、柱穴が全く存在しないものもあるが、もともと柱穴が存在しないのか、検出できなかったのかは不明である。周溝に関しても、全周するものもあれば、全く検出できなかったものもある。カマドはＩ期の竪穴住居にのみ存在する。カマドは竪穴住居の北面、あるいは北西面のほぼ中央に位置する。カマドは赤く焼成した袖のみを検出し、煙道やその他の施設はすでに消滅して検出できない。カマドの脇に土坑を持つ場合がある。これらの土坑は比較的深く掘り込まれ、貯蔵穴の可能性も考えられ興味深い。Ⅱ期以降の竪穴住居はカマドを持たないが、住居の床面に焼土、炭化物の広がりを持つものがみられる。この焼土、炭化物の広がりは住居内のほぼ中央に位置し、壁面に構築したカマドを用いない煮炊方法が想定される。

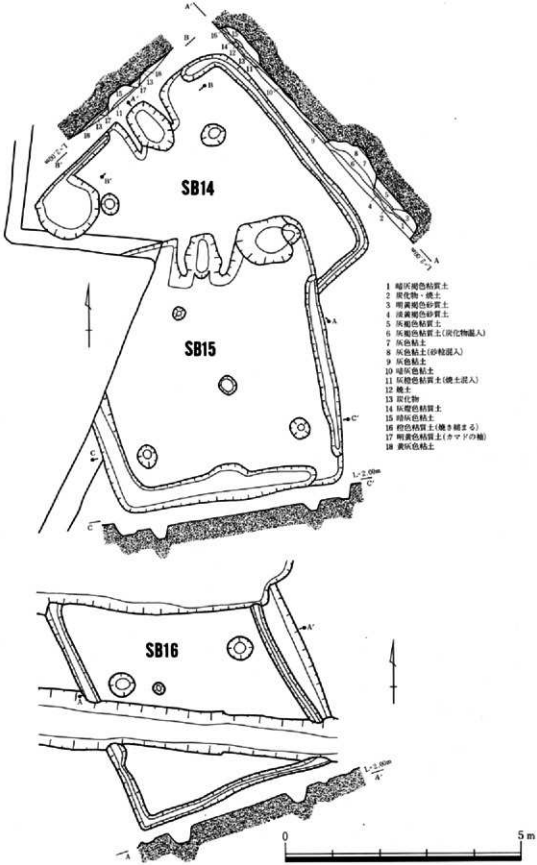
以下に遺存状態の良好な代表的な竪穴住居を取り上げて詳説し、その他のものは一覧表にまとめるに止める。

ＳＢ14　62Ｅ区西端に位置する5.4m×5.5mの規模を持つ隅丸方形の竪穴住居である。南半部はＳＢ15に切られ、遺存しない。床面の標高は約1.7mであり、周溝は全周していたと推定される。主軸の方位はＮ－38°－Ｗを測り、柱穴は対角線上に４個存在する。カマドは舌状に伸びた袖が粘土によって設けられ、その内側を深さ約10cm掘削している。煙道となる掘込みは壁面からは検出されず、後世の削平により、破壊されたものと考えられる。カマドの内面やその周辺は焼土、炭化物の堆積がみられ、使用の痕跡が認められる。この住居から須恵器の杯Ｈや土師器甕Ａ・Ｂなどが出土しており、これらからＩ期の竪穴住居と比定できる。

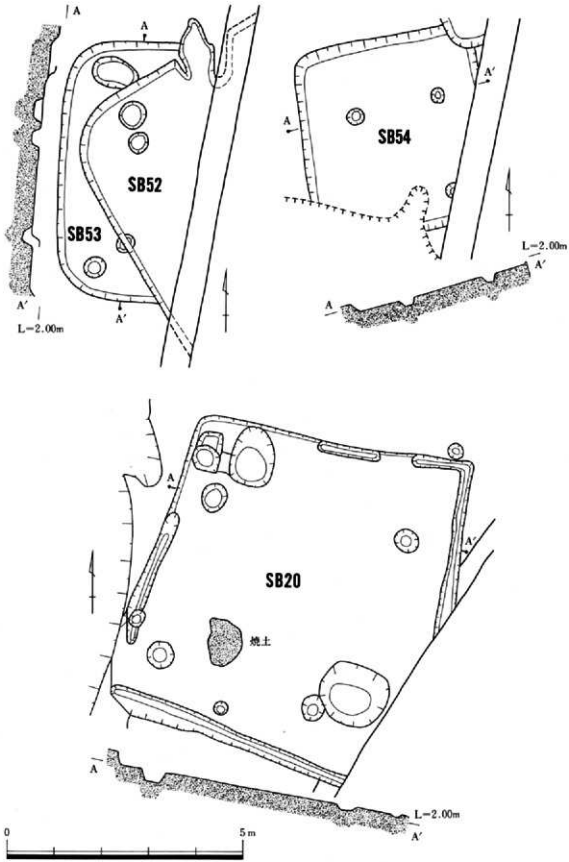
ＳＢ16　62Ｅ区中央部に位置する4.8m×5.2m以上の規模を持つ竪穴住居である。北半部は新田開発による耕作で破壊され、現況で畑地となっている部分のみ遺存する。床面の標高は約2.1m、周溝は全周を囲むと推定され、柱穴は東西に各１個ずつ計２個が存在する。カマドの有無は北壁が遺存しないため不明。出土遺物からＩ期の竪穴住居と比定される。

番 号	規模(m)	方 位	カマド	焼土	周溝	柱穴	時期	備 考
S B01	5.7 × 5.5 × 0.20	N－5°－E	×	×	×	(3)	Ⅲ	
S B02	6.1 × 5.4 × 0.23	N－32°－E	×	×	×	不明	Ⅲ	
S B03	5.3 ×(3.3)× 0.25	N－38°－W	×	×	×	(1)	Ⅲ	S B04に切られる。
S B04	(3.6)×(3.0)× 0.18	N－0°	×	×	×	不明	Ⅲ	S B03・S B05を切る。
S B05	(5.2)×(3.4)× 0.20	N－0°	×	×	×	不明	Ⅲ	S B04に切られる。
S B06	3.9 × 3.8 × 0.20	N－28°－W	×	×	×	(3)	Ⅲ	S B07を切る。
S B07	2.9 ×(2.1)× 0.10	N－16°－E	×	×	×	(2)	Ⅲ	S B06に切られる。
S B08	3.4 × 2.8 × 0.10	N－7°－E	×	×	×	不明	Ⅲ	S B09に切られ、S B10を切る。
S B09	3.4 × 2.6 × 0.05	N－10°－E	×	×	×	不明	Ⅲ	S B08・S B10を切る。
S B10	4.6 × 3.7 × 0.10	N－38°－W	×	×	×	不明	Ⅲ	S B08・S B09に切られる。
S B11	(1.5)×(1.2)× 0.13	N－7°－E	×	×	×	不明		
S B12	(5.3)×(5.1)× 0.39	(N－10°－E)	×	×	×	×	Ⅱ－2	
S B13	(4.0)×(1.6)× 0.10	N－20°－E	×	×	×	不明		
S B14	5.5 × 5.4 × 0.15	N－38°－W	○	×	○	4	Ⅰ	S B15に切られる。
S B15	5.7 × 5.3 × 0.20	N－12°－W	○	×	○	(2)	Ⅰ	S B14を切る。
S B16	3.6 ×(2.7)× 0.10	N－7°－W	×	×	○	(1)	Ⅰ	
S B17	4.8 ×(5.2)×0.05	N－20°－W	×	×	○	2	Ⅰ	
S B18	4.6 ×(1.4)×0.10	N－33°－E	×	×	○	不明		S B19を切る。
S B19	4.7 ×(1.0)× 0.15	N－22°－E	×	×	×	不明		S B18に切られる。
S B20	7.1 × 6.6 × 0.35	(N－15°－E)	×	○	○	4	Ⅱ－3	S B21・S B22を切る。
S B21	7.2 ×(5.5)× 0.15	N－7°－E	○	×	○	×	Ⅰ	S B20・S B22に切られる。
S B22	6.1 ×(4.5)× 0.10	N－25°－E	×	×	×	不明		S B21を切り、S B20に切られる。
S B23	3.9 ×(2.4)× 0.20	N－38°－E	×	×	×	×	Ⅱ－3	
S B24	4.5 ×(1.5)× 0.20	N－33°－E	×	×	○	不明		
S B25	(2.1)×(2.0)× 0.10	N－3°－E	×	×	×	不明		
S B26	5.4 ×(3.1)× 0.10	N－45°－E	×	○	○	(2)		S B27に切られる。
S B27	(4.0)× 3.8 × 0.05	N－0°	×	×	○	不明		S B28に切られ、S B26を切る。
S B28	6.2 ×(5.6)× 0.10	N－7°－E	×	×	○	不明	Ⅰ	S B29に切られ、S B27を切る。
S B29	5.0 × 6.5 × 0.10	N－13°－E	×	○	○	不明	Ⅰ	S B28を切る。
S B30	5.9 × 1.6 × 0.05	N－37°－E	×	×	○	(1)		
S B31	7.8 × 7.1 × 0.05	N－12°－E	×	×	○	(4)		S B32に切られる。
S B32	7.1 ×(3.2)× 0.10	N－37°－E	×	×	○	(3)		S B31を切る。
S B33	6.9 ×(3.6)× 0.10	N－38°－W	×	×	○	(2)		S B34・S B35を切る。
S B34	(4.2)×(4.1)× 0.05	N－5°－W	×	×	○	不明		S B33に切られる。
S B35	(2.7)×(3.0)× 0.10	N－7°－W	×	×	×	(1)		S B33に切られる。
S B36	(4.3)×(3.3)× 0.10	N－25°－E	×	×	×	(2)		
S B37	(2.5)×(0.8)× 0.18	N－7°－E	×	×	×	不明	Ⅰ	S B38を切る。
S B38	(2.2)×(1.0)× 0.05	N－17°－W	×	×	×	不明	Ⅰ	S B37に切られる。
S B39	5.4 ×(6.7)× 0.15	N－16°－E	×	×	○	(4)	Ⅰ	S B41に切られる。
S B40	3.7 ×(0.8)× 0.10	N－15°－E	×	×	×	不明		
S B41	5.0 × 6.0 × 0.05	N－13°－E	×	×	×	不明		S B39・S B42を切る。S B43に切られる。
S B42	6.2 ×(4.2)× 0.15	N－10°－E	×	×	×	不明		S B41に切られ S B44を切る。
S B43	6.4 ×(5.1)× 0.15	N－7°－W	×	×	○	×		S B46に切られ、S B41・S B44・S B45を切る。
S B44	(4.2)×(2.4)× 0.15	N－17°－E	×	×	○	(1)	Ⅰ	S B42・S B43に切られ、S B45を切る。
S B45	4.5 × 4.4 × 0.05	N－7°－W	×	×	×	(3)	Ⅰ	S B43・S B44に切られる。
S B46	4.2 ×(4.0)× 0.20	N－42°－E	×	×	×	(1)		S B48を切る。
S B47	5.0 ×(1.0)× 0.15	N－32°－E	×	×	○	不明		S B48を切る。
S B48	(5.0)×(5.5)× 0.05	N－30°－W	×	×	×	不明	Ⅰ	S B46・S B47に切られる。
S B49	4.6 × 3.7 × 0.15	N－9°－W	×	○	×	(3)	Ⅱ－2	S B50に切られる。
S B50	7.2 × 4.7 × 0.15	N－23°－W	×	○	×	(2)	Ⅱ－2	S B49・S B52・S B53・S B54を切る。
S B51	(3.8)×(2.0)× 0.10	N－12°－W	×	×	×	不明	Ⅱ－3	
S B52	(4.8)×(4.2)× 0.15	N－30°－W	○	×	×	(1)	Ⅰ	S B50に切られ、S B53を切る。
S B53	5.5 ×(3.0)× 0.10	N－6°－E	○	×	×	(2)	Ⅰ	S B50・S B52に切られる。
S B54	4.2 × 3.9 × 0.20	N－9°－W	×	×	×	(3)	Ⅱ－1	S B50に切られる。
S B55	(1.0)×(1.3)× 0.15	N－5°－W	×	×	×	(1)	Ⅰ	
S B56	(3.2)×(3.9)× 0.05	N－36°－E	×	○	×	不明	Ⅱ－2	S B57を切る。
S B57	(3.9)×(2.0)× 0.10	N－5°－E	×	○	×	不明	Ⅰ	S B56に切られる。
S B58	(1.5)×(2.3)× 0.20	N－5°－W	×	×	×	不明	Ⅰ	
S B59	4.2 × 4.1 × 0.60	N－35°－W	×	×	×	(3)		
S B60	3.4 ×(1.5)× 0.40	N－19°－E	×	×	×	(2)		
S B61	2.6 ×(3.4)× 0.50	N－18°－E	×	○	×	×	Ⅲ	S B62を切る。
S B62	(2.8)×(4.0)× 0.50	N－36°－E	×	○	×	×	Ⅲ	S B61に切られる。
S B63	3.0 × 2.3 × 0.45	N－5°－W	×	×	×	×	Ⅱ－1	
S B64	2.9 × 1.9× 0.20	N－5°－E	×	×	×	×	Ⅱ－3	
S B65	(4.1)×(3.5)× 0.15	N－39°－W	×	×	×	(1)	Ⅱ－2	S B66・S B67を切る。
S B66	5.3 ×(4.2)× 0.05	N－10°－W	×	×	○	(1)	Ⅱ－2	S B67を切る、S B65に切られる。
S B67	(3.1)×(2.6)× 0.05	N－28°－W	×	×	○	不明		S B65・S B66に切られる。
S B68	4.4 ×(4.1)× 0.10	N－22°－W	×	×	○	不明	Ⅱ－3	S B69を切る。
S B69	(2.3)×(1.3)× 0.10	N－17°－W	×	×	○	不明	Ⅱ－1	S B68に切られる。
S B70	(3.6)×(2.3)× 0.10	N－43°－E	×	×	○	(1)	Ⅰ	

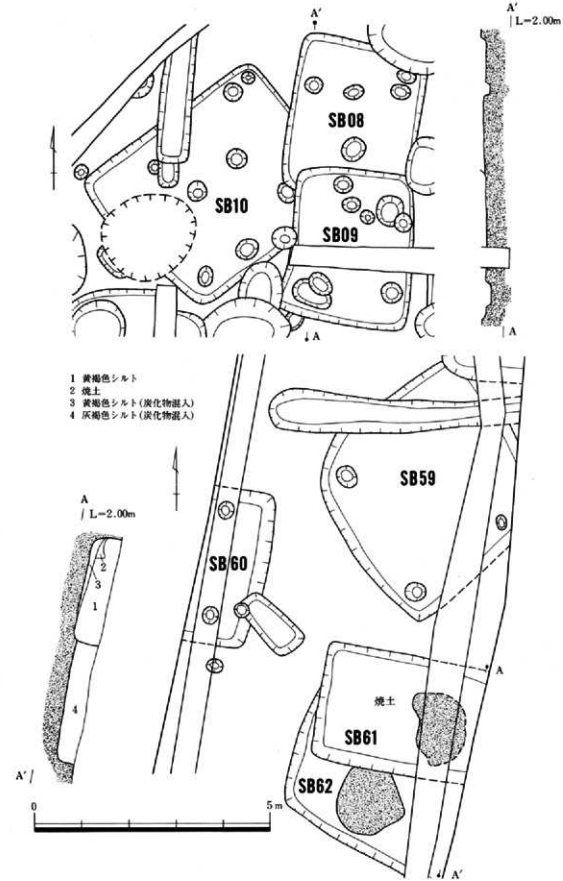
第２表　竪穴住居一覧



第6図　SB14・SB15・SB16実測図



第7図　SB52・SB53・SB54・SB20実測図



第8図　SB08・SB09・SB10・SB59～SB62実測図

ＳＢ20　62Ｅ区に位置する7.1m×6.6mの規模を持つやや歪んだ隅丸方形の竪穴住居である。東南端は調査区外で不明である。床面の標高は約2.1mであり、南西部に焼土面が広がる。カマドは存在しないため、この焼土面が煮炊方法を推定する手掛かりとなるだろう。柱穴は対角線上に４個存在し、周溝もほぼ全周する。西北部に土坑があるが性格は不明である。この住居からは須恵器などの多量の遺物が出土し、住居廃絶の後、廃棄土坑として用いられた可能性も考えられる。出土遺物からⅡ－３期の竪穴住居である。

ＳＢ61　62Ｊ区に位置する隅丸方形の竪穴住居である。調査時には湧水が著しかったために、周溝や柱穴は検出できなかった。床面には焼土と炭化物の比較的厚い堆積がみられ、カマドは存在しない。出土遺物からⅢ期の竪穴住居に位置付けられる。

掘立柱建物

ＳＢ71　62Ｈ区に所在する３間以上×４間以上の掘立柱建物である。柱穴は平面形が円形で、深さは0.3mを測る、埋土は砂が混入した黄褐色シルトである。方位はＮ－２°－Ｗである。検出面はＳＢ49等の下位、ＳＢ52・ＳＢ53の上位である。出土遺物からⅡ期に属すると考えられる。

ＳＢ72　62Ｈ区に存在する３間×２間以上の掘立柱建物である。柱穴は平面形が一辺が約0.9mとやや大きい方形で、深さは0.3mを測る。検出面はＳＢ71と同様で、方位はＮ－４°－Ｅとなり、時期はⅡ期である。

ＳＢ73　62Ｈ区に位置する５間×２間以上の掘立柱建物である。柱穴は平面形が方形で、深さは0.2mを測る。埋土や検出面はＳＢ71と同様で、方位はＮ－２°－Ｅとなり、時期はⅡ期である。

ＳＢ74　62Ｊ区に所在する庇付きの掘立柱建物である。調査区の制約のため東側の様子は不明であるが、西面に庇を付け、南北は５間である。身舎の柱穴は方形を呈し、庇の柱穴は円形である。このことから北面に庇のあった可能性が考えられなくはない。建物はシルト層を掘り込み、埋土は砂の混入したシルトである。Ｐ42では遺存状態は不良であったが柱根が残存しており、柱径は25cmを測る。出土遺物からⅢ期に位置付けられる。

柵

ＳＡ01　63Ｆ区に位置する東西方向に並ぶ柵列である。細かい時期は特定し得ない。

ＳＡ02　62Ｈ区に存在する南北方向に並ぶ柵列である。ＳＢ71などと同様に建物跡になる可能性も残されるが、対応する柱穴が存在しないので柵列とした。時期はⅡ期と推定される。

溝

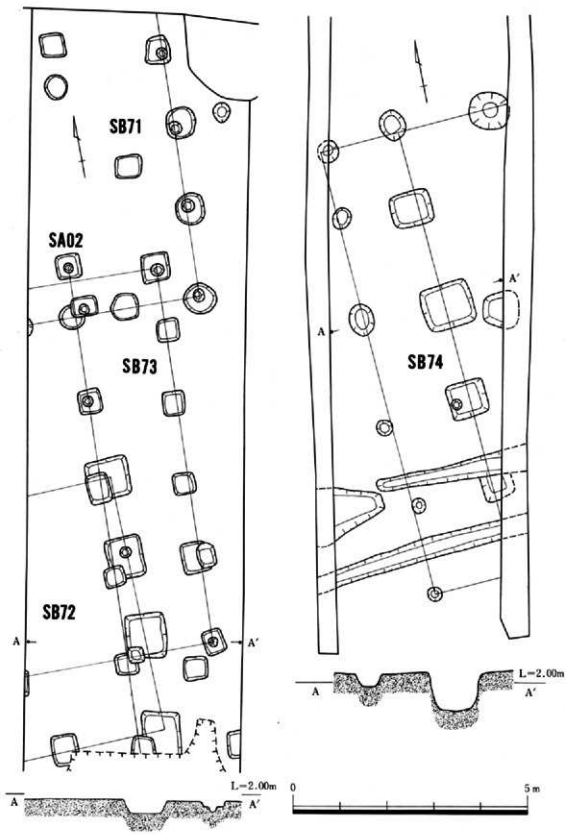
ＳＤ03　62Ｅ区の東端に位置する南北方向に走る幅約2.0m、深さ約1.0mのⅠ期の溝である。

ＳＤ06・ＳＤ07　62Ｅ区で東西方向に並走する溝で道を形成すると考えられる。Ⅰ期。

ＳＤ08　62Ｆ区で南北方向に走る幅約1.4mの溝である。時期はⅡ期である。

ＳＤ19　62Ｆ区に位置する溝で、ＳＢ41等の下位で検出された。時期はⅠ期である。

ＳＤ24・ＳＤ25・ＳＤ26　62Ｊ区で並走する溝であるが、性格は不明である。



第9図　A期掘立柱建物実測図

第３節　Ｂ期の遺構

Ｂ期の主な遺構は、掘立柱建物、ピット、土坑である。

掘立柱建物

ＳＢ81　62Ｊ区で検出された庇付きの掘立柱建物である。調査区の制約のため、東側の様子は不明であるが、西面に庇をつけ、南北３間、東西２間以上の規模を持つ。方位はＮ－１°－Ｅで、規模は南北6.0m、東西4.1m以上を測る。建物の周囲は南面、西面、北面の３面に雨落ち溝と思われる幅約0.5mの溝が巡る。柱穴の掘形は全て平面形が円形を呈し、深さは約0.2mを測る。建物は黄褐色シルト層に褐色砂が混入した層をベースとし、検出面上には黒褐色砂質土、褐色砂質土、暗褐色砂質土の順で包含層が堆積する。この包含層から「沙中房」などと墨書された灰釉陶器が多量に出土し、これらの遺物から建物の廃絶した時期は11世紀前半に比定できる。

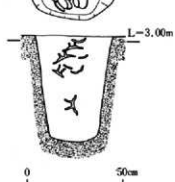
ピット

Ｐ81　62Ｅ区に位置するピットである。掘形は直径0.4mの円形で、深さは推定0.6mを測る。黄褐色シルト層を掘り込み、埋土は明灰褐色シルトである。この中から土師器の椀、皿が合計21個体出土した。このうち１点はピットの下部で出土し、白色の胎土をもつ有脚の椀である。他の20点はピットの上層からまとまって折り重なるように出土したものである。全て火を受けた痕跡があり、いずれも一過性の使用を考えさせられるものであり、このことからピットは地鎮などの祭祀的性格が想定される。これらの遺物は11世紀後半から12世紀前半に比定できる。

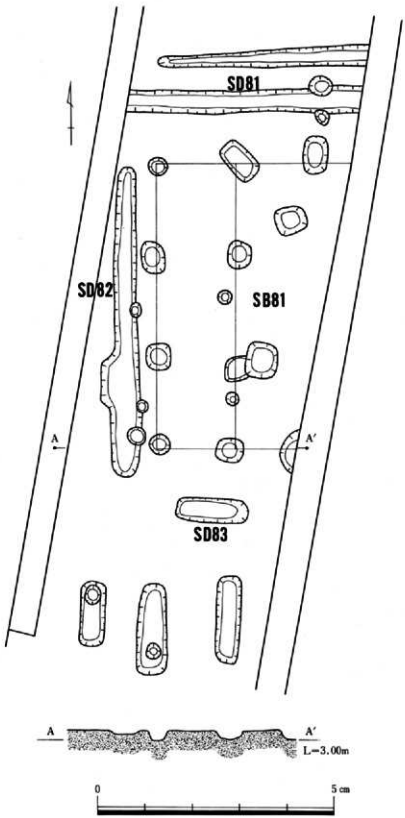
土坑

ＳＫ81　62Ｊ区に位置する平面形が隅丸方形の土坑である。西側は調査区の制約のため不明であるが、深さは0.2mを測り、埋土は赤褐色土である。ここからは灰釉陶器の皿、段皿、土師器の甕が出土し、10世紀前半に比定される。

ＳＫ82・ＳＫ83・ＳＫ84　62Ｊ区に存在する平面形が長方形を呈した土坑である。３基は東西方向に配列し、棚列などを成していた可能性も考えられる。検出面はＳＢ81と同様である。



第10図　Ｐ81出土状態実測図



第11図　SB81実測図

第４節　Ｃ期の遺構

Ｃ期の主な遺構は溝・井戸・掘立柱建物・柵列・土坑などが存在する。遺構は一部耕作などの削平をうけ、上部構造が遺存しないものがある。

溝

溝として確認できたものは数十例存在するが、このうち主要なものについてのみ概観する。

ＳＤ101　63Ｆ区の東に位置する南北方向に走る溝である。深さは約1.5m、幅は推定で約8.2mを測る。西肩は深さ約0.8m、幅約4.0mのテラスを持つ。テラスにはこの溝に平行して走る溝ＳＤ102が存在する。溝の東肩は段を持たずに立ち上がる。埋土は下層で黒灰色の粘土、上層では砂が混入する暗褐色粘質土である。この溝はいったん埋め戻された後、幅約2.5m、深さ約1.0mを測る溝に掘り直される。下層からはⅡ－1b期の遺物が出土し、上層からはⅡ－1c期の遺物が出土する。掘り直した溝もⅡ－1c期の遺物が出土するが、清洲町の調査の所見からⅡ－2a期まで存続する可能性も考えられる。

ＳＤ103・ＳＤ104　63Ｆ区の中央に位置する東西方向に平行して走る幅それぞれ約0.5mの溝で、Ⅱ－2a期の遺物が出土する。

ＳＤ106・ＳＤ107　ＳＤ103、104と同様な溝で南北方向に平行して走る。

ＳＤ109　63Ｋ区にある東西方向に走る溝で、南肩の大半をＳＤ110に切られる。Ⅰ－２期。

ＳＤ110・ＳＤ111　63Ｋ区で東西方向に平行して走る幅約4.0m、深さ約1.5mの溝である。溝の間は道路ＳＦ101を形成しており、Ⅱ－1b、1c期には２本の溝は共存していたと思われる。しかし、ＳＤ110が埋め戻された後もＳＤ111はⅡ－2a期まで存続する。

ＳＤ112　63Ｇ区に位置するＬ字に屈曲する溝である。幅は東西方向で3.0m、深さ約1.2mを測る。南肩で狭いテラスを持ち、柵列ＳＡ102が存在する。南北方向では溝の最深部が検出できなかったが、幅4.8m以上のテラスがあり、ＳＤ101と対になっている。

ＳＤ116　ＳＤ110に続く溝と見られるが、調査区が狭いため詳細は不明である。

ＳＤ117　西端で立ち上がって溝は終わり、ＳＤ111とＳＤ117の間で土橋を形成していたと推測される。Ｃ期の遺構であるが、近世以降もゴミ穴として用いられた。

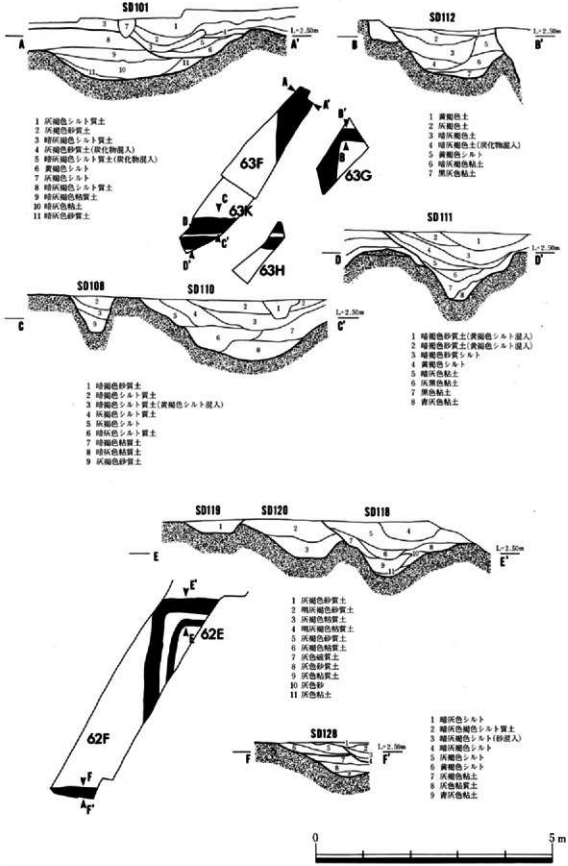
ＳＤ118・ＳＤ119　62Ｅ区に存在するＬ字に屈曲する平行して走る溝である。ＳＤ118は幅約3.6m、ＳＤ119は1.6mを測り、この溝の間は土塁あるいは塀が存在した可能性がある。Ⅱ－1aからⅡ－1c期の遺物が出土したが、ＳＤ118は南北方向についてのみ掘り返されたものと見られⅡ－2a期まで存在する。ＳＤ118は更に北方向に延びる可能性がある。

ＳＤ120・ＳＤ122　ＳＤ118に平行して走り、大半はＳＤ118に切られ一部が遺存する。Ⅰ－２期。

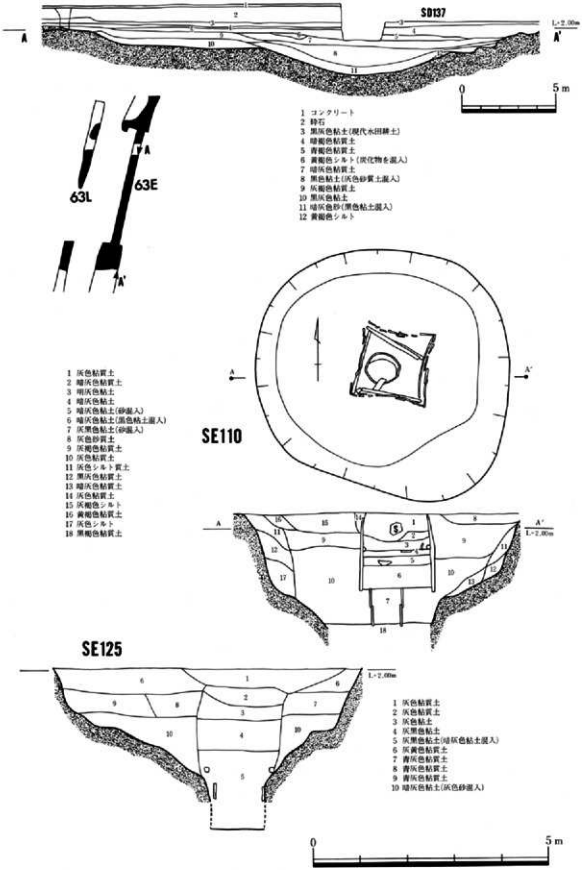
ＳＤ125・ＳＤ127　62Ｆ区で東西方向に平行して走る溝である。いずれも幅約1.2m、深さ約0.3mの規模をもち、溝の間は道路になる。ここからはⅠ－２期の遺物が出土する。

ＳＤ128　62Ｆ区の南端で検出した溝で、東西方向に走る。南肩は検出できず規模は不明である。３度掘り返されたと思われ、最下層ではⅠ－１期の遺物が存在し、中層ではⅡ－１期、上層ではⅡ－２期の遺物がそれぞれ出土した。

ＳＤ136　63Ｅ・Ｌ区に位置するＬ字に屈曲する溝で、幅4.2mを測定し、埋土は黒灰色粘土である。



第12図　C期溝セクション実測図



第13図　SD137・SE110・SE125実測図

南北方向に走る溝が南端部で西に屈曲し、屈曲した地点から約20mのところで溝は終結する。西側の様子は未調査で不明であるが、土橋があったと推察できる。多量の土師器の皿とともにⅡ－1a期の遺物が出土した。

ＳＤ137　62Ｈ・63Ｅ・Ｌ区にまたがって検出された幅約25.0m、深さ約2.5mを測る大溝である。埋土は上層が暗褐色粘質土で、下層は黒灰色粘土である。溝の北側ではテラスになっており、最深部は南に寄っている。出土遺物は須恵器や灰釉系陶器などを多量に混入するが、Ⅱ－2a期の遺物を共伴することから、この時期の溝と思われる。ＳＤ137はその規模・位置から『清須村古城絵図』（蓬左文庫蔵）にみられる「中堀」に相当すると考えられる。

ＳＤ138・ＳＤ140　62Ｈ区で東西方向に平行して走る溝である。出土遺物はⅡ－2a期である。

ＳＤ142　62Ｊ区の南端に位置する東西方向に走る溝である。幅は3.5m以上を測る中規模の溝で、多量の陶磁器類や石材などが投棄されていた。時期はⅡ－2b期である。

ＳＤ143、144、145、147、148、149、150、154、156、157、159、161　いずれも東西方向に走る溝で、幅は1.0m前後、深さは0.5m以下と浅い小規模のものである。２本あるいは３本平行して走るものが多く見られ、道路を形成していた可能性も指摘できる。

井戸

Ｃ期の井戸は33基を数える。井戸はいずれもこの地域の湧水層である上部砂層の深さまで掘削している。沖積地の軟弱な地盤を掘削して作るため、井壁が崩れやすく、これを防ぐため、内部に木製などの構造物を持つものが大半である。構造物が遺存しないものでもその痕跡が認められるものがある。ただし、井戸の上部構造は後世の削平などのため遺存しない。井戸は内部構造物に曲物桶を用いたもの、結桶を用いたもの、瓦を用いたものに分類できる。以下にその代表的な例を示して詳説する。

ＳＥ101　63Ｆ区に存在する井戸である。掘形は円形で、上層に瓦を８枚用いて簡状にしたものを４段、最下層に結桶を用いている。現代まで用いられた新しい井戸である。

ＳＥ108　62Ｅ区に所在する結桶が２段遺存した井戸である。桶は他のものに比べ小さく、時期はⅡ期である。

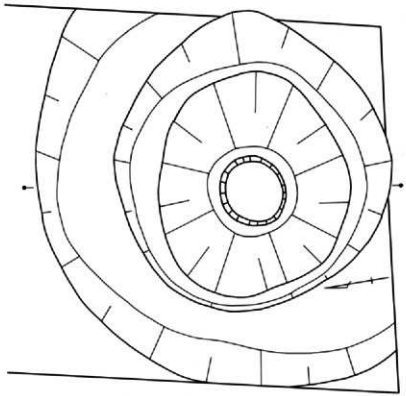
ＳＥ110　62Ｆ区に位置する井戸である。掘形は楕円形で曲物桶が１段存在し、その上に方形の木組みが存在する。方形の木組みははぞ加工を施した角材を横桟状に組み立て、その周囲に縦板を配列する。木組みの上部は遺存せず不明である。Ⅰ－２期に比定できる。

ＳＥ120　62Ｈ区に存在する結桶が３段重なった井戸である。３段の結桶はそれぞれ直径70cm前後、高さ80cm前後を測り、中段の結桶は小孔が数十個穿たれている。タガは木製の楔が差し込まれて締められる。井戸桶内からは釣瓶などが出土し、Ⅱ－２期に比定できる。

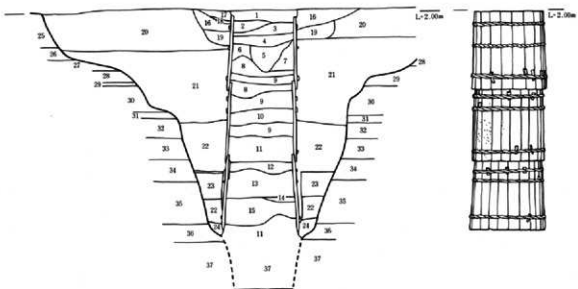
ＳＥ124　62Ｉ区に所在する井戸で、内部構造物は遺存しない。しかし、竹製のタガと木製の楔が出土していることから、本来は結桶を内部に持つもので井戸を廃絶するとき結桶を抜き取ったものと推定される。またこの井戸内には廃絶時に投棄したと見られる石材が多量に出土した。Ⅱ期。

掘立柱建物

ＳＢ101　63Ｆ区に位置する２間×２間の掘立柱建物である。方位はＮ－８°－Ｅで、柱穴は径0.6mを測る。規模は南北約3.8m、東西約4.0mを持ち、時期はⅡ－１期と推定される。

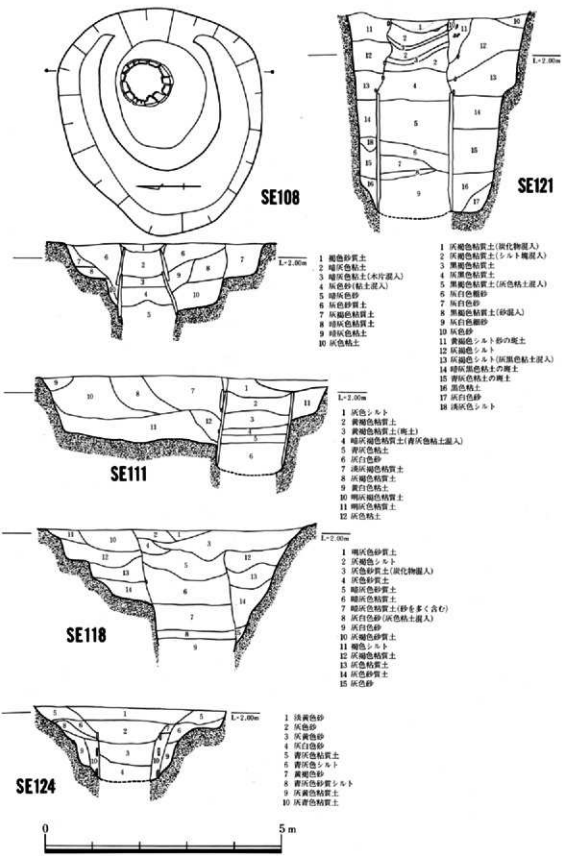


SE120



1 灰黄色砂質土
2 灰色砂質土(灰黄色粘土混入)
3 灰色砂質土
4 暗褐色砂質土
5 暗褐色砂質土
6 暗褐色砂質土(灰色砂混入)
7 灰色砂
8 灰青色粘土(暗褐色粘土混入)
9 黒灰色粘土(灰色砂混入)
10 黒灰色粘土(褐色粘土混入)
11 黒灰色粘土(灰白色砂混入)
12 灰色粘土(灰白色砂混入)
13 暗緑色粘土
14 暗緑色砂
15 灰白色砂
16 淡灰色砂質土
17 灰色砂質土
18 黄色シルト
19 灰色粘質土
20 灰黒色粘土(灰色砂質土混入)
21 灰黒色粘土(灰青色粘土混入)
22 黒灰色粘土(灰青色粘土混入)
23 灰青色粘土(暗褐色粘土混入)
24 暗灰青色粘土
25 灰褐色シルト
26 灰青色粘質土
27 灰色砂質土
28 灰色粘土
29 灰青色粘土
30 暗灰褐色粘土
31 淡褐色粘土
32 黒褐色粘土
33 淡褐色粘土
34 黒色粘土
35 灰青色粘土
36 黒色粘土(灰褐色粘土混入)
37 黒色粘土(砂混入) ┐湧水
38 灰白色粗砂 ┘

第14図　ＳＥ120実測図



第15図　SE108・SE111・SE118・SE124・SE121実測図

ＳＢ102　63Ｋ区に位置する２間×２間以上の掘立柱建物である。調査区の制約や他の遺構による破壊のため東側は不明である。南北約5.5ｍの規模を持ち、Ⅱ－2a期に比定できる。

柵

ＳＡ101　63Ｋ区に位置する東西方向に並ぶ柵列で、ＳＤ103・ＳＤ104に平行して走る。屋敷地を囲む柵列と想定され、時期はⅡ－2a期と考えられる。

ＳＡ102　63Ｇ区に所在する東西方向に配列する柵列である。ＳＤ112の南肩のテラス上に設けられ、溝とともに屋敷を囲む柵列と想定できる。時期はⅡ－1a期である。

道路

ＳＦ101　63Ｋ・63Ｈ区に存在する東西方向に走る道路である。北側はＳＤ110・ＳＤ116、南側はＳＤ111・ＳＤ117が存在し、幅は約1.0ｍを測る。道路面は堅く踏み固められ、砂利が若干敷かれていた。出土遺物は存在しないが、両側の溝の時期と堆積状況からⅡ－1b期・Ⅱ－1c期に比定。

土坑

ＳＫ101　63Ｆ区の北部に存在する土坑である。平面形は調査区の制約とＳＤ101に破壊されているため特定し得ない。埋土は黒灰色粘土で、溝である可能性がある。時期はⅠ－1期である。

ＳＫ103・ＳＫ104・ＳＫ105　63Ｆ区に位置する平面形が楕円形を呈する土坑である。3基は一直線に並び、建物を構成していた可能性もある。Ⅱ－2a期。

ＳＫ107・ＳＫ108・ＳＫ109　63Ｆ区に所在する土坑で一直線に配列する。Ⅱ－1b期。

ＳＫ142　62Ｋ区に位置する平面形が径３ｍの円形と推定される土坑である。擂鉢などの遺物や石材が一括して出土した。Ⅱ－2b期。

番号	規模	構造	時期	番号	規模	構造	時期
ＳＥ101	1.6ｍ×1.6ｍ	瓦積み4段＋結桶1段	現代	ＳＥ118	2.0ｍ×2.6ｍ	結桶か？(タガを検出)	
ＳＥ102	2.3ｍ以上×3.1ｍ以上	不明(結桶か？)	Ⅱ－2b期	ＳＥ119	2.0ｍ×1.6ｍ以上	方形木組(＋曲物桶か？)	Ⅰ－2期
ＳＥ103	1.8ｍ×1.9ｍ	結桶１段	Ⅱ－2a期	ＳＥ120	4.1ｍ以上×5.2ｍ	結桶３段	Ⅱ－2期
ＳＥ104	3.8ｍ以上×7.2ｍ	結桶１段	Ⅱ－1c期	ＳＥ121	2.5ｍ×2.1ｍ以上	結桶２段(竹製編物有)	Ⅱ期
ＳＥ105	3.8ｍ×3.2ｍ以上	結桶１段	Ⅱ－2a期	ＳＥ122	1.5ｍ以上×3.8ｍ以上	不明	
ＳＥ106	1.5ｍ×1.6ｍ	結桶１段	Ⅱ期	ＳＥ123	1.5ｍ以上×2.3ｍ以上	不明	
ＳＥ107	1.1ｍ×1.3ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期	ＳＥ124	2.1ｍ×2.2ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期
ＳＥ108	2.1ｍ×2.3ｍ	結桶２段	Ⅱ期	ＳＥ125	3.0ｍ×3.3ｍ	方形木組＋曲物桶１段	Ⅱ－1a期
ＳＥ109	1.7ｍ以上×2.5ｍ以上	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期	ＳＥ126	2.5ｍ×2.7ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期
ＳＥ110	2.5ｍ×2.8ｍ	方形木組＋曲物桶１段	Ⅰ－2期	ＳＥ127	2.1ｍ×2.3ｍ	不明	Ⅱ期
ＳＥ111	1.6ｍ×2.7ｍ	結桶２段	Ⅱ－1期	ＳＥ128	0.8ｍ以上×2.0ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期
ＳＥ112	2.0ｍ×2.9ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期	ＳＥ129	3.7ｍ×3.6ｍ以上	結桶２段	Ⅱ－2期
ＳＥ113	2.9ｍ×3.2ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期	ＳＥ130	2.9ｍ×1.8ｍ以上	不明	Ⅱ－2a期
ＳＥ114	1.7ｍ×1.9ｍ	結桶か？(タガを検出)	Ⅱ期	ＳＥ131	5.7ｍ×2.0ｍ以上	不明	Ⅱ－2a期
ＳＥ115	2.1ｍ×2.1ｍ	曲物桶１段	Ⅰ－2期	ＳＥ132	3.0ｍ×3.2ｍ	不明	Ⅱ期
ＳＥ116	1.7ｍ×2.1ｍ	不明(結桶か？)		ＳＥ133	1.5ｍ以上×2.6ｍ以上	不明	Ⅱ－2a期
ＳＥ117	1.8ｍ×1.8ｍ	不明(曲物桶か？)	Ⅰ－2期				

第３表　Ｃ期井戸一覧

第5節　地震痕

地震痕は63N区で微小なものも含めて21本の地割れを確認できた。その走向はN－10°～20°－Wで，傾斜はほぼ垂直であった。幅は1cm～7cmを測る。この調査区ではA期の遺構群が検出されたが，その検出面上部は現代の撹乱層によって完全に破壊されており，A期以降の遺跡の状況や地層は不明である。地震痕はこのA期の遺構群を貫いている。従って，地震痕の時期はA期以降であり，これが天正地震あるいは濃尾地震かは特定し得ない。

第16図　63N区地震痕実測図

地震痕の幅

No.	幅	No.	幅	No.	幅	No.	幅
1	7 cm	7	3 cm	13	6 cm	19	5 cm
2	6 cm	8	2 cm	14	7 cm	20	4 cm
3	3 cm	9	3 cm	15	4 cm	21	6 cm
4	2 cm	10	3 cm	16	4 cm	22	1 cm
5	2 cm	11	2 cm	17	7 cm	23	4 cm
6	3 cm	12	1 cm	18	3 cm		

遺構番号	X座標	Y座標	方　向	幅	遺構番号	X座標	Y座標	方　向	幅
S D101	−87400.0	−29182.4	N－8°－E	8.0	S D133	−87541.9	−29275.0	N－88°－W	1.5
S D102	−87410.0	−29186.3	N－5°－E	0.6	S D134	−87556.8	−29275.6	N－87°－W	0.8
S D103	−87410.2	−29195.0	N－81°－W	0.2	S D135	−87557.5	−29278.0	N－76°－W	1.0
S D104	−87412.3	−29195.0	N－81°－W	0.7	S D136	−87578.0	−29283.2	N－6°－E	4.2
S D105	−87410.0	−29194.3	N－5°－E	1.1		−87590.6	−29297.0	N－87°－W	――
S D106	−87420.0	−29202.7	N－3°－E	0.6	S D137	−87607.2	−29300.0	N－88°－W	25.0
S D107	−87420.0	−29203.6	N－3°－E	0.6	S D138	−87640.3	−29300.0	N－81°－W	0.8
S D108	−87426.6	−29206.0	N－77°－W	1.0	S D139	−87642.9	−29296.0	N－86°－W	0.7
S D109	−87427.1	−29205.0	N－82°－W	―― 北側	S D140	−87644.1	−29300.0	N－80°－W	1.2
S D110	−87429.1	−29210.0	N－84°－W	4.2	S D141	−87666.9	−29311.4	N－7°－E	0.9
S D111	−87433.2	−29215.0	N－85°－W	3.2	S D142	−87729.4	−29333.0	N－82°－W	2.3
S D112	−87408.3	−29170.0	N－81°－W	3.0	S D143	−87774.4	−29325.0	N－82°－W	0.7
	−87415.0	−29171.9	N－11°－E	―― 東側	S D144	−87778.4	−29325.0	N－86°－W	0.7
S D113	−87412.7	−29173.0	N－82°－W	0.4	S D145	−87782.1	−29326.0	N－81°－W	1.2
S D114	−87414.6	−29175.0	N－82°－W	0.4	S D146	−87795.0	−29331.3	N－6°－E	0.4
S D115	−87420.0	−29173.8	N－12°－E	0.4	S D147	−87802.9	−29333.0	N－9°－E	2.3
S D116	−87433.5	−29190.0	N－85°－W	―― 南側	S D148	−87818.9	−29333.0	N－81°－W	0.6
S D117	−87436.2	−29190.0	N－81°－W	3.2	S D149	−87824.2	−29335.0	N－80°－W	0.4
S D118	−87469.4	−29238.0	N－82°－W	2.4	S D150	−87826.6	−29338.0	N－86°－W	3.0
	−87475.6	−29242.1	N－6°－E	3.5	S D151	−87845.0	−29338.3	N－26°－W	1.0
S D119	−87473.4	−29233.0	N－85°－W	1.3	S D152	−87860.4	−29341.0	N－84°－W	7.3
	−87475.0	−29236.9	N－11°－E	1.3	S D153	−87862.4	−29341.0	N－88°－E	3.5
S D120	−87471.6	−29235.0	N－84°－W	―― 南側	S D154	−87866.1	−29343.0	N－89°－E	0.5
S D121	−87475.1	−29244.0	N－84°－W	3.4	S D155	−87869.4	−29345.0	N－82°－W	3.2
S D122	−87485.0	−29241.7	N－5°－E	―― 東側	S D156	−87899.4	−29350.0	N－78°－W	―― 南側
S D123	−87500.0	−29248.5	N－5°－E	0.7	S D157	−87900.5	−29350.0	N－86°－W	1.0
S D124	−87502.7	−29260.0	N－82°－W	1.0	S D158	−87907.5	−29350.0	N－88°－W	2.1
S D125	−87508.0	−29260.0	N－85°－W	1.6	S D159	−87905.5	−29350.0	N－76°－W	1.1
S D126	−87511.1	−29265.0	N－89°－W	1.4	S D160	−87912.4	−29351.0	N－88°－W	2.2
S D127	−87513.6	−29265.0	N－86°－W	2.8	S D161	−87924.8	−29353.0	N－82°－W	0.8
S D128	−87516.6	−29260.0	N－86°－W	―― 北側	S D162	−87940.0	−29356.5	N－4°－E	―― 西側
S D129	−87526.0	−29266.5	N－7°－E	0.7	S D163	−87940.0	−29357.9	N－6°－E	0.5
S D130	−87530.0	−29266.0	N－4°－E	0.8	S D164	−87945.7	−29360.0	N－82°－W	4.3
S D131	−87530.0	−29267.1	N－5°－E	0.7	S D165	−87950.0	−29360.4	N－16°－E	0.7
S D132	−87530.0	−29270.3	N－6°－E	2.2					

第4表　C期溝一覧表

第３章　遺物

第１節　Ａ期の遺物

Ａ期の遺物は須恵器と土師器などで、調査区北部から中央部の竪穴住居を中心としてまとまって出土している。なかには土器棄て場として利用された住居もあり、良好な一括資料を得ることができた。割合からみれば須恵器が多いが、土師器もかなりの量が出土している。Ａ期は遺構のあり方などから大きく３時期に分けられるが、それぞれ遺構ごとにとりあげて述べる。なお、器種分類は第17・18図に示した。

１）竪穴住居出土遺物

竪穴住居は全部で70軒に上るが一部のものについては遺物の残りもよく、当時の土器様相を知る上の手がかりとなる。以下、時期毎に代表的な住居をあげて説明する。

ＳＢ14（第19図－１～４）　この住居からは須恵器杯Ｈ、土師器甕Ａ・Ｂが出土している。杯Ｈ（１・２）は口径約10.5cmで口縁部が少し内傾して立ち上がる。底部は比較的丁寧なヘラケズリをする。甕Ａ（４）は口縁部が屈曲しながら立ち上がり、内面は横ハケメ、外面を横ナデする。体部は内・外面をハケメ調整する。体部内面は下半分をヘラケズリする。ハケメは細かく、外面にはススが付着する。甕Ｂについても同様の調整をする。Ｉ期に位置付けられる。

ＳＢ15（第19図－６～17）　ＳＢ15はＳＢ14を切る住居である。須恵器杯Ｈ、杯蓋Ｈ、土師器甕Ａ・Ｂ・Ｄ、甑がある。須恵器杯Ｈは口径が約10.5cmで口縁部が内傾するもの（６・９・11）と口縁部の立ち上がりが少し短く直立するもの（７、８）に分かれる。後者は年代がやや下がるものである。土師器甕Ａ（12）は口縁の屈曲が少し弱くなり、体部内面のハケメを省略したりナデのみのものもある。把手（17）は甑のものであろう。この住居はＩ期に位置付けられるが、ＳＢ14より新しくＩ期はさらに２小期に区分できる可能性がある。

ＳＢ52（第21図－47～60）　須恵器杯Ｈ、杯蓋Ｈ・Ｂ、高杯、甕Ａ、土師器甕Ａ・Ｂ、甑がある。杯蓋Ｈ（47）は天井部２分の１に回転ヘラケズリし、丸みを持つ体部との境に段がつく。杯Ｈ（50）は口径14.0cmで口縁部内面がくぼむ。甕Ａ（56）は口縁部に段がつき、体部下半に沈線が巡る。体外面は平行タタキ、内面はナデ調整する。土師器甕Ａ（54～56）は口縁部があまり屈曲せず立ち上がる。甑（59・60）は底部中央が帯状に残る２つの穴のものであり、体部上半に把手をもつ。同一個体かどうか不明であるが、60は口縁部までまっすぐ開いて立ち上がる。内外面共に細かいハケメ調整を加え、底部はヘラケズリする。杯蓋Ｂ（51）についてはこれ１点のみであり評価は難しいが、この住居はＩ期に位置付けられるものと思われる。

ＳＢ54（第23図－97～108）　ＳＢ54からは須恵器杯Ｈ・Ａ・Ｂ、杯蓋Ｈ・Ａ・Ｂ、高杯、横瓶、細頸瓶、提瓶、廷、壺Ｂ、甕Ａ、甑Ａ、土師器甕、甑が出土している。杯Ａ（98）は口縁部外面が少しくぼみ底部は回転ヘラケズリする。杯Ｂ（99）は高台が低く底部と同じ位の高さとなる。高杯（101）はやや浅目で小振りのものである。提瓶（103）は肩の所に二つボタン状の突起がつく。甑（105）は平

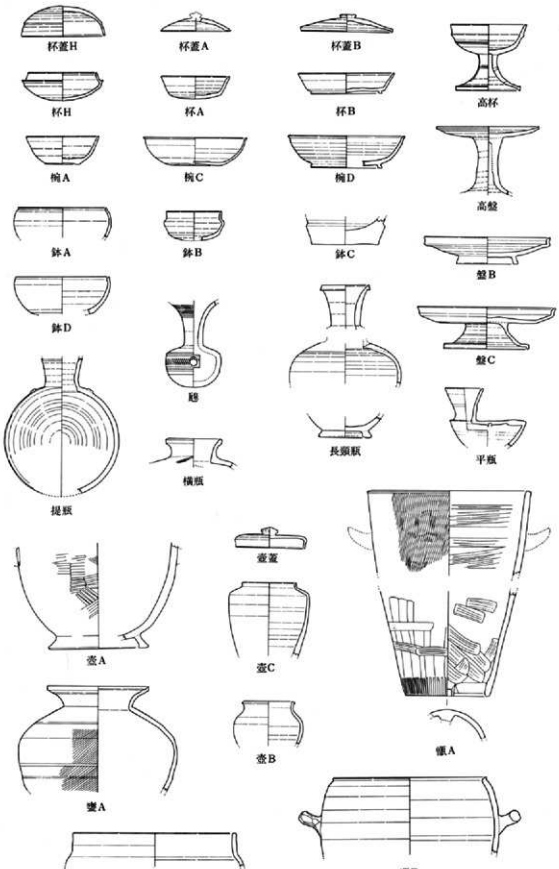
行タタキをする。土師器甕は口縁部の屈曲が弱い。甑は須恵器だけでなく土師器にもあり、底部は不明であるが、口縁部はハケメとヘラケズリで調整する。Ⅱ－1期に含まれるものと思われる。

SB50（第22図－73～91）　SB50からは須恵器杯H・A・B、杯蓋H・A・B、高杯、鉢A・B、平瓶、甕、細頸瓶、横瓶、壺B・C、甕A、土師器甕A・B、杯A、土錘が出土している。供膳具は前代のものに加え、杯A（76）や杯蓋A（77）・B（78・79）が見られる。杯A（76）は底部を回転ヘラケズリする平底のものである。鉢A（81）は口縁部の内湾が強く、底部を欠くが丸みを持つものと思われる。鉢B（82）は口径の小さな肩の少し張るものである。甕（83）の口縁部外面には放射状の文様の崩れたものがつく。土師器甕A・B（88～91）の口縁部の屈曲は弱い。土師器杯A（86）は内面に放射状の暗文を持っており、畿内産と考えられる[1]。須恵器は古い様相と新しい様相が混在しているが土師器甕の形態や、土師器杯の形態から見てⅡ－2期に属すると考えられる。

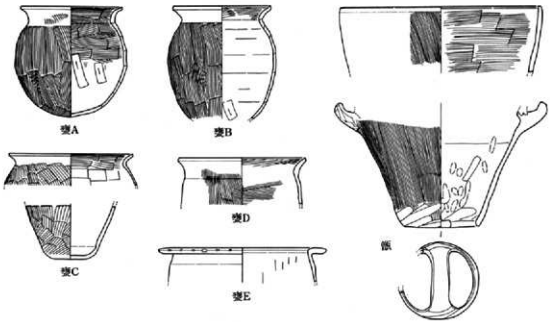
SB63（第24図－127～139）　SB63はⅡ－2期に属する。須恵器杯H・A・B、杯蓋H・A、高杯、甑、細頸瓶、長頸瓶、土師器高杯、甕A・C・D、甑が見られる。須恵器杯H（127）は蓋受けのかえりが短くなり内傾する。杯蓋A（128）のかえりは短く、退化している。土師器甕C（135～137）は"く"の字状を呈する口頸部を持つ平底のもので外面をやや荒いハケメ調整する。口縁部内面はヨコハケメがつき、体部内面はヘラケズリ調整する。底部は木の葉の圧痕を持つものもある。土師器高杯（134）は畿内産と思われる。

SB02（第25図－164～172）　須恵器杯A・B、杯蓋B、椀D、鉢C、横瓶、甕A、甑C、硯、土師器甕C、鉢がある。須恵器杯A（164）は底部を回転ヘラケズリするもので、「×」のヘラ記号を持つ。杯B（165・166）は高台が低く腰の出も小さい。椀D（168）の調整は丁寧である。硯（170）は水平硯の一種と思われるが、4つの脚がつく。海の部分は板のようなもので塗でている。171は手づくねの土器で口縁部が少し残るのみで詳細は不明である。Ⅲ期に属する。

SB20（第26図－194～第28図－257）　SB20は住居廃絶後、土器棄て場として使われたと考えられるが、須恵器236点、土師器163点が出土している。なかには完形のものも数点あり、時期的にも短時間に廃棄されたものと思われ、良好な一括資料となろう。器種は須恵器杯H・A・B、杯蓋H・A・B、椀A・D、盤B・C、高盤、鉢A、平瓶、長頸瓶、壺B、甕A、甑A・B、土師器甕A・Cがある。須恵器杯Aは底部が丸みを持ち回転ヘラケズリするもの（210）、底部が平底で、回転ヘラケズリするもの（209）、底部が丸底で、静止ヘラケズリするもの（214）がある。杯Bは89点と全体の約23%を占める。大きくみると、口径が大きくて深いもの（233）と小さくて浅いもの（220）に分かれる。底部は回転ヘラケズリするが、中心部に糸切痕を残すもの（224）もある。口径にはバラエティーがあり、6つに分かれる。杯蓋Bは天井部約2分の1から3分の2を回転ヘラケズリする。つまみは偏平なもの（196）や擬宝珠のもの（204）に加えて、宝珠つまみを持ち丁寧に調整するもの（205）も見られる。椀D（237）は体部下3分の1を回転ヘラケズリするもので調整は丁寧である。盤C（240）は深めの盤部にやや太い脚部を持つ。高盤（243）は盤部外面をヘラケズリする。長頸瓶（246）は3段接合である。甑A（250、215）は、体部外面上半をハケメ調整し下半分をヘラ削りするが、最下部はタタキをする。内面は強く横ナデをし、孔の部分はヘラで面取りをする。孔は5つであると思われる。土師器甕C（255）は"く"の字状口縁でハケメは粗く、器壁はうすい。底部（256）は平底で木の葉



第17図　須恵器器種分類(1)(1/6)



第18図　土師器器種分類2）(1/6)

須恵器

杯蓋	H	天井部が丸い古墳時代通有の蓋杯の蓋
杯蓋	A	つまみを持つものでかえりを有するもの
杯蓋	B	つまみを持つもので口縁端部を折り曲げるもの
杯	H	蓋受けのかえりを持つ古墳時代通有の蓋杯の身
杯	A	無台杯身
杯	B	杯Aに高台の付いたもの
椀	A	深みのある体部が丸みを持って立ち上がり、底部を回転糸切するもの
椀	B	椀Aに高台の付いたもの
椀	C	体部が丸みを持って立ち上がり、口縁端部を折り返すもの
椀	D	椀Dに高台の付いたもの
高 杯		深みのある体部に脚の付いたもの
盤	A	浅い体部に口縁部を折り曲げるもの
盤	B	盤Aに高台の付いたもの
盤	C	盤Aに脚の付いたもの
高 盤		偏平な体部に細長い脚の付いたもの
鉢	A	尖底もしくは丸底のいわゆる鉄鉢
鉢	B	短い頸部を有するもの
鉢	C	体部がやや開きながら立ち上がるいわゆるすり鉢
鉢	D	平底で口縁端部を内傾するもの
壺 蓋		つまみを持つもので口縁端部を深く折り曲げるもの
壺	A	広口の短頸壺でいわゆる薬壺形のもの
壺	B	短頸壺で体部が丸いもの
壺	C	短頸壺で体部が長胴のもの
瓶		体部に注口を持つもの
長頸瓶		頸部が長く口縁部が開くもの
平 瓶		注口部が体部の中心につかないいわゆる平瓶
横 瓶		短い頸部に楕弾形の体部が付いたもの
細頸瓶		頸部が細長く口縁部が少し開くもの
提 瓶		体部を横にして注口をつけたいわゆる提瓶
甕	A	口縁部が開きながら立ち上がるもの
甕	B	口縁部が短く直立するもの
甑	A	体部が直線的で牛角把手が付くもの
甑	B	丸みのある体部に半環形の把手が付くもの
甑	C	短い頸部をもつもの

土師器

甕	A	体部が球形で口縁端部をつまみ上げるもの
甕	B	体部が長胴で口縁端部をつまみ上げるもの
甕	C	体部が長胴で口縁端部がそのままのびるもの
甕	D	口頸部が余り締まらないもの
甕	E	口頸部を直角に折り曲げるもの
甑		体部が逆ハの字形をし、把手が付いたもの

第5表　A期遺物器種分類

の圧痕が明瞭に残る。土師器は細片が多く復元できるものは少ない。土器の量は多いが時期的にはまとまっており、ほぼⅡ－３期のものとして良いであろう。

ＳＢ61（第29図－270～286）　ＳＢ61からは杯Ａ・Ｂ、杯蓋Ｂ、椀Ａ・Ｄ、鉢Ａ、長頸瓶、壺Ｂ・Ｃ、甕Ａ、甑Ｂ、土師器甕Ａ・Ｅ、甑が出土している。椀Ｄ（280）は体部外面をほとんど回転ヘラケズリする。甑Ｂ（281）は焼成不良で淡褐色を呈する。土師器甕は甕Ｃ（282～285）に加えて甕Ｅが見られる。甕Ｃは口縁部の屈曲が短く肥厚するもの（282）と“く”の字にはっきり曲がるもの（283～285）が見られる。どちらも体部外面を荒いハケメで調整し器壁を薄く仕上げている。甕Ｅ（286）はこれ１点のみであるが、口縁部は体部からほぼ垂直に折れ曲がる。口縁端部は刺突の痕がある。体部はナデとヘラケズリで仕上げハケメは見えない。三河地方によくみられるタイプである。この住居はⅢ期に属するものと思われる。

２）掘立柱建物柱穴出土遺物

掘立柱建物は４棟あるが、いずれも出土土器は少ない。

ＳＢ74（第30図－293～295）　ＳＢ74からは須恵器杯Ｈ（293）・Ｂ（294）、杯蓋Ｂ（295）などが出土しているが、295は口縁部を屈曲させるもので８世紀後半以降に位置付けられるので、Ⅲ期に含まれるものと思われる。

３）その他の遺構・包含層出土遺物

ＳＤ20（第30図－298～305）　ＳＤ20からは須恵器杯蓋Ｈ、甑、甕Ａ、土師器甕Ａ・Ｂなどが出土している。杯蓋（298）は天井部の稜がはっきりしている。甑（299）は口頸部の列点文が２段になり、注口も突出していない。体部の列点文や沈線もしっかりしている。甕Ａ（300）は口縁部に段がつき、ヘラによる文様が施されている。土師器甕は口頸部が屈曲しながら立ち上がり、端部を上につまみあげる。Ⅰ期に属する。

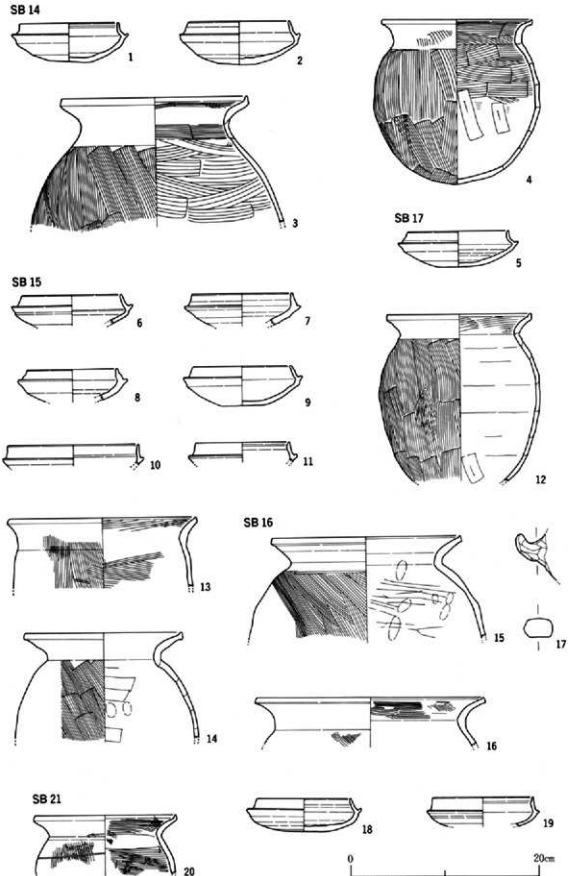
ＳＤ12（第30図－306）　ＳＤ12もⅠ期の溝で、須恵器高杯（306）は完形で杯部に段と沈線を持つ。脚部には２方に短冊型の透かしが２段と沈線が２条中央にはいる。

ＳＤ08（第30図－315）　ＳＤ08からは須恵器杯Ａ、長頸瓶、平瓶、甕Ａ、土師器皿Ａなどが出土している。須恵器杯Ａの底部は小平底で、回転ヘラケズリ調整する。土師器皿Ａ（315）は底部内面に螺旋と１段の放射状の暗文を持つ。長頸瓶は少し時期が下がるがそのほかのものはⅡ－２期に位置付けられるものと思われる。

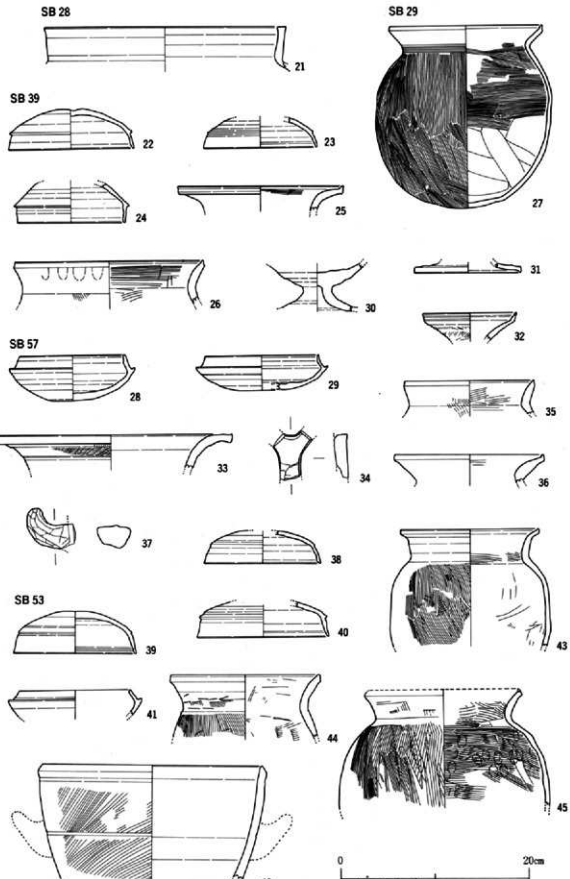
ＳＤ23（第31図－316・317）　316は合子と思われる。体部や底部のつくりは杯Ｂと同じである。317は少し深目のもので底部回転ヘラケズリする。Ⅱ－３期に属すると思われる。

ＳＤ25（第31図－321～332）　ＳＤ25からは須恵器杯Ａ・Ｂ、杯蓋Ｂ、長頸瓶、壺Ａ、甕Ａ、土師器甕Ａなどが出土している。須恵器杯Ｂ（323）は底部が高台より突出するものである。壺Ａ（321）は焼成不良で灰白色を呈すが、体部はタタキで調整している。外面には黄土が塗布されており、肩のしたに２つの牛角把手が付くものと思われる。Ⅱ－２期に属する。

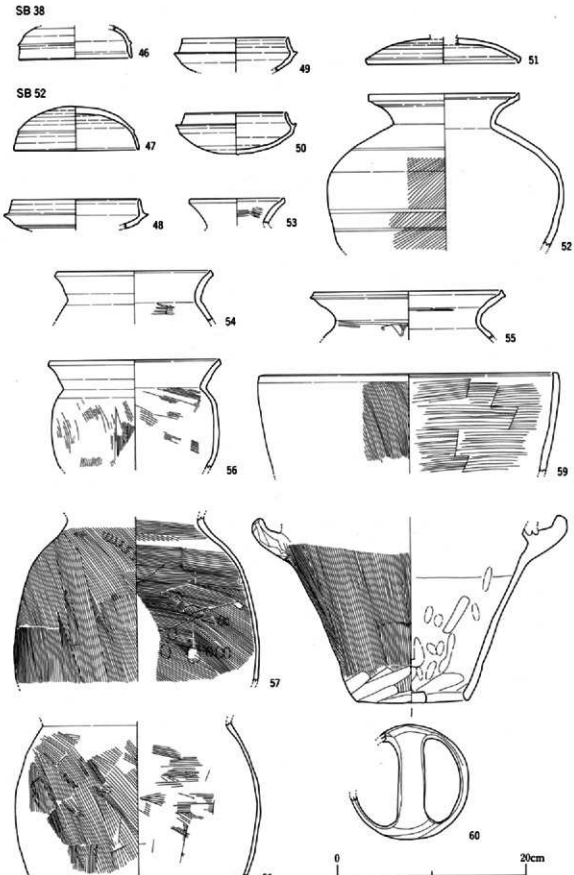
421～424は上面の遺構から出土したもので猿内産の土師器である。421は椀Ｃで胎土がやや疎である。423は皿Ｂで内面に放射状の暗文を持ち、外面はヘラミガキをする。422・424は皿Ａであるが、摩滅が激しく暗文の有無については不明である。



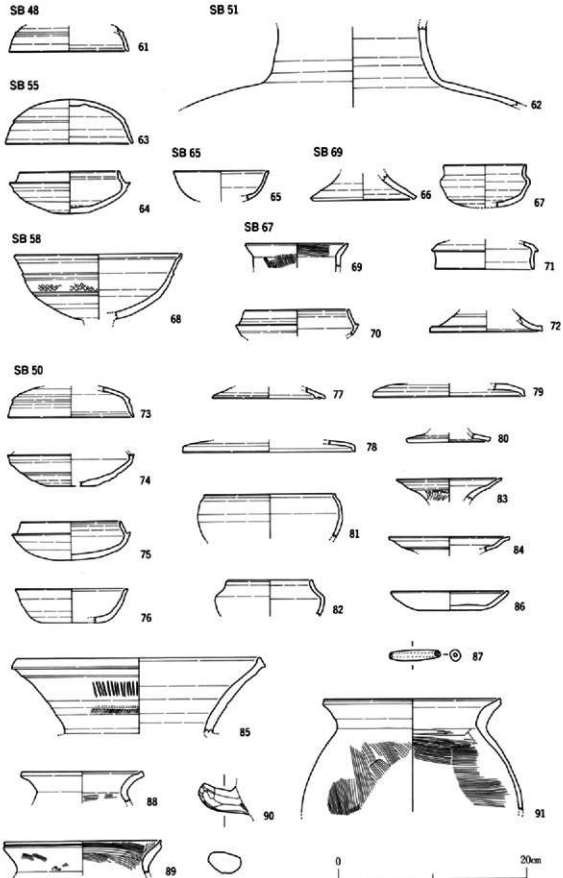
第19図　A期の遺物実測図(1)



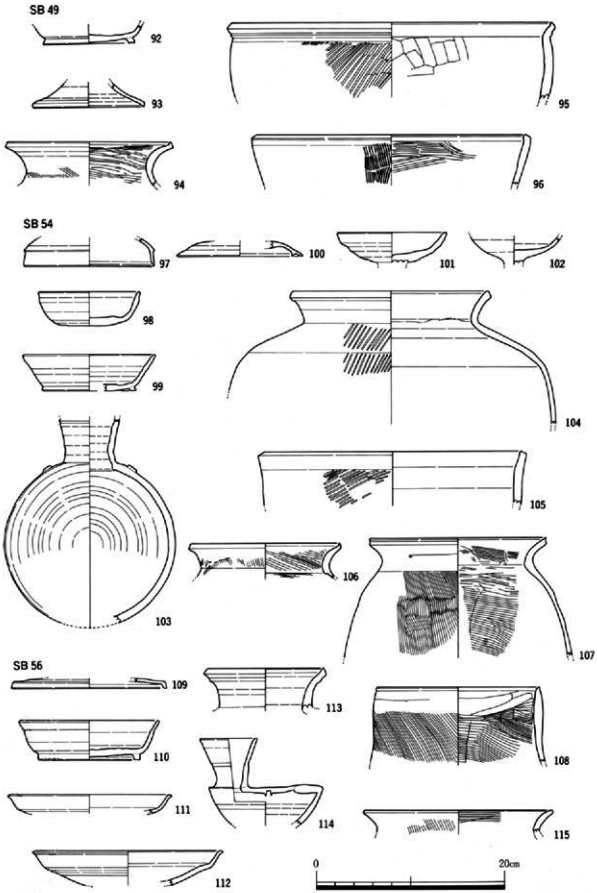
第20図　A期の遺物実測図(2)



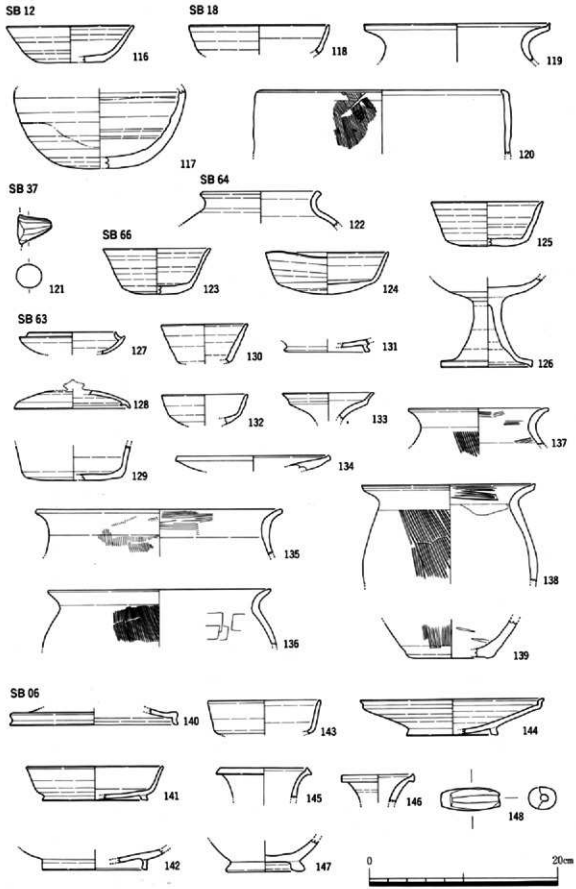
第21図　A期の遺物実測図(3)



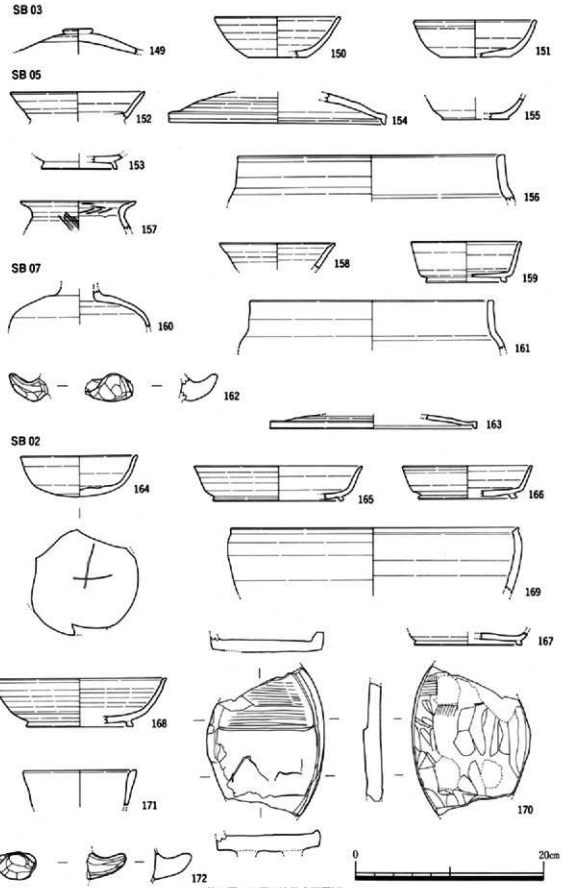
第22図　A期の遺物実測図4)



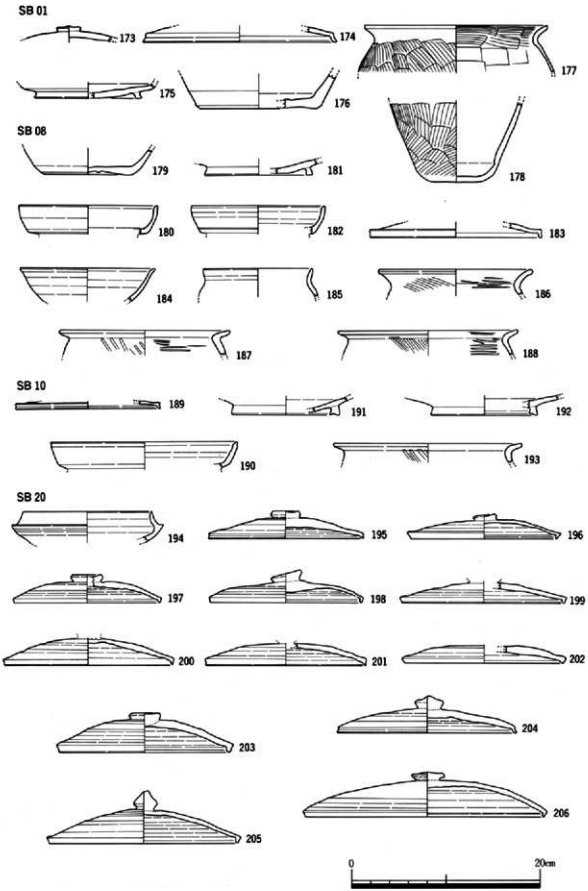
第23図　A期の遺物実測図(5)



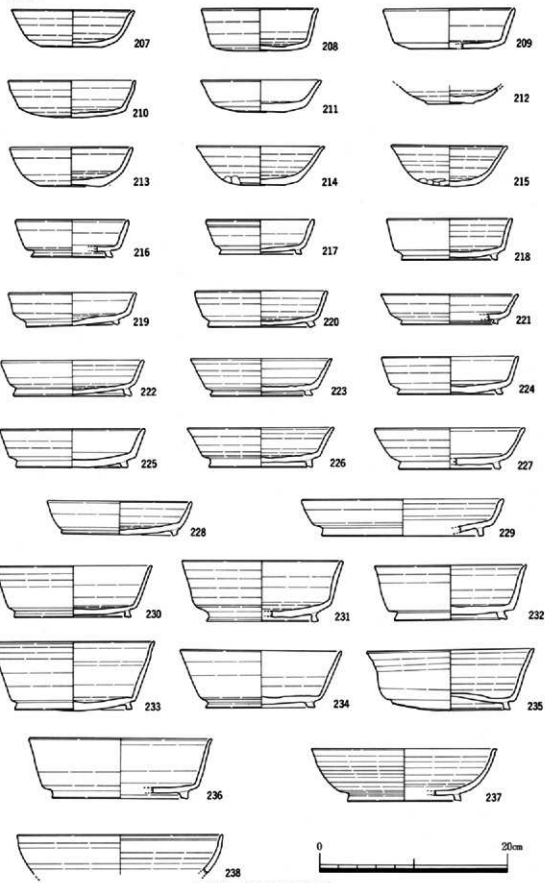
第24図　A期の遺物実測図(6)



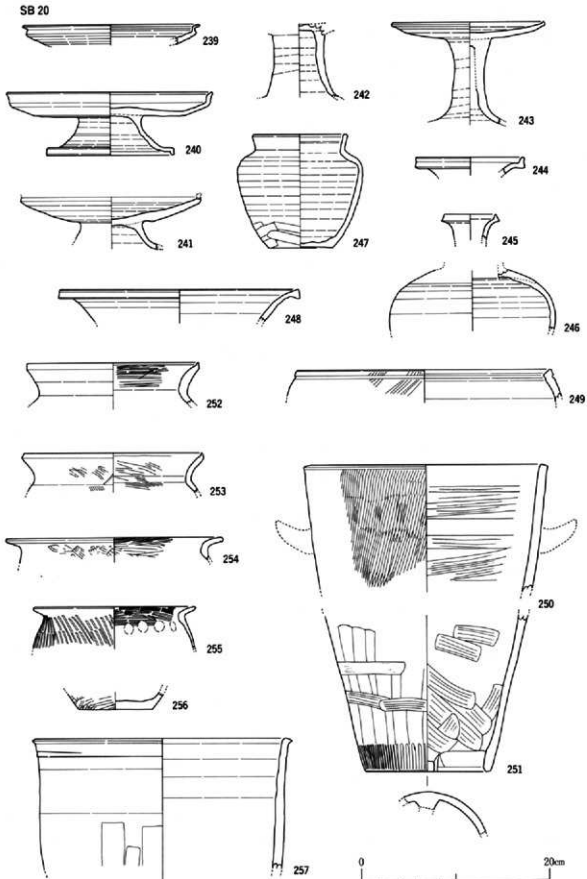
第25図　A期の遺物実測図(7)



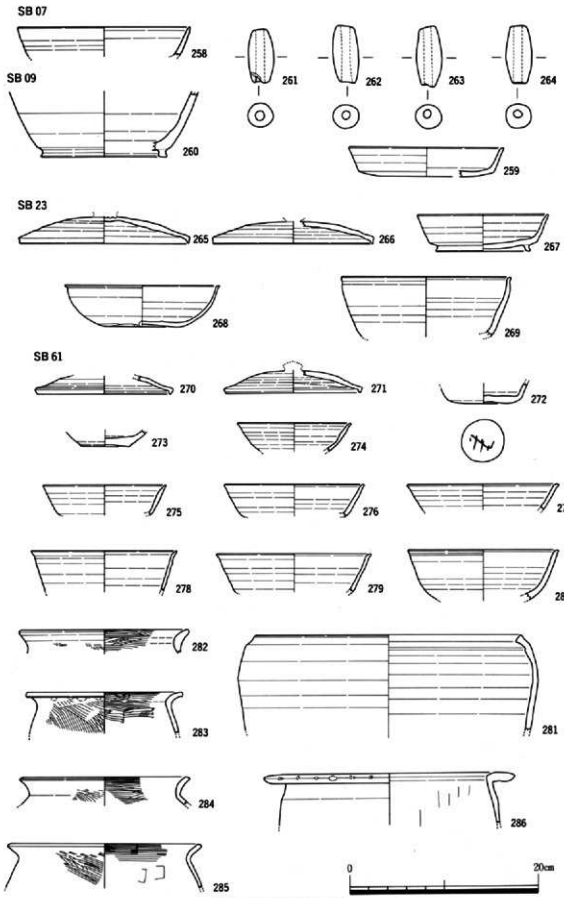
第26図　A期の遺物実測図(8)



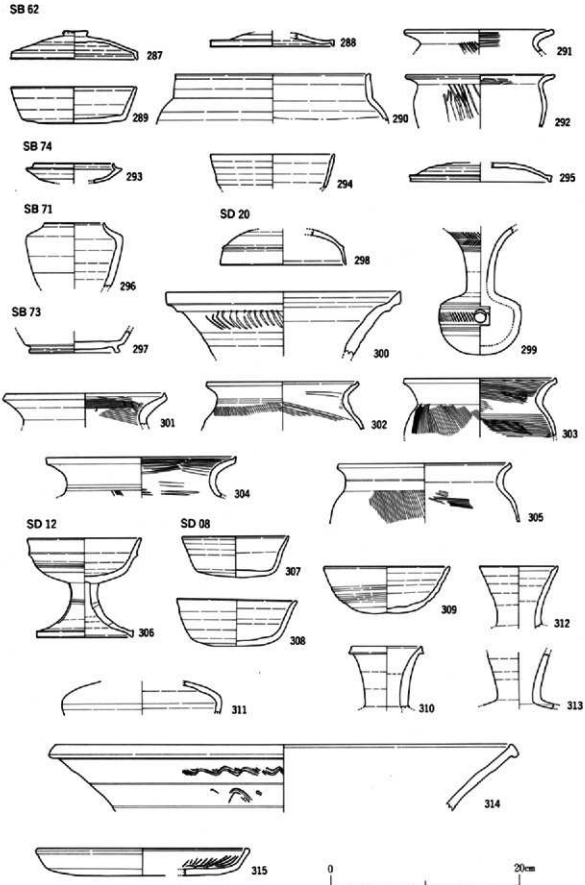
第27図　A期の遺物実測図9）



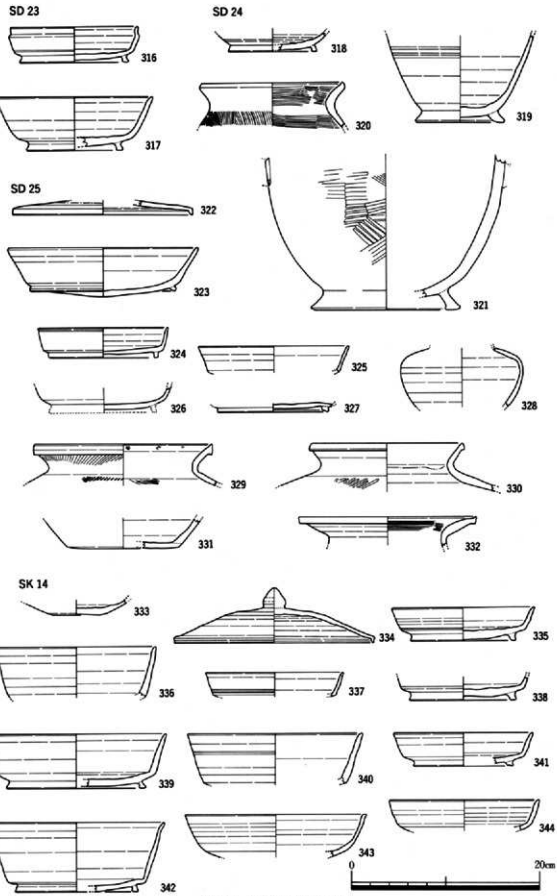
第28図　A期の遺物実測図10



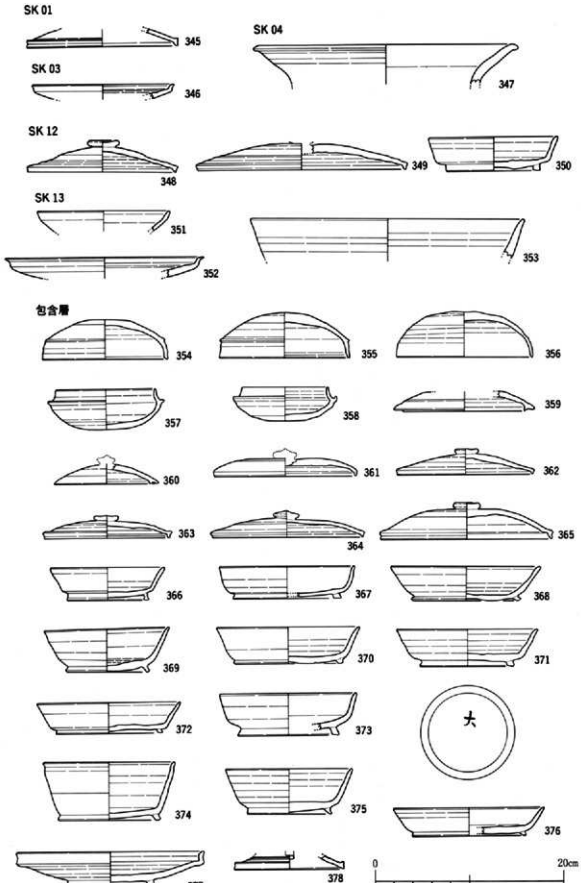
第29図　A期の遺物実測図(1)



第30図　A期の遺物実測図(2)

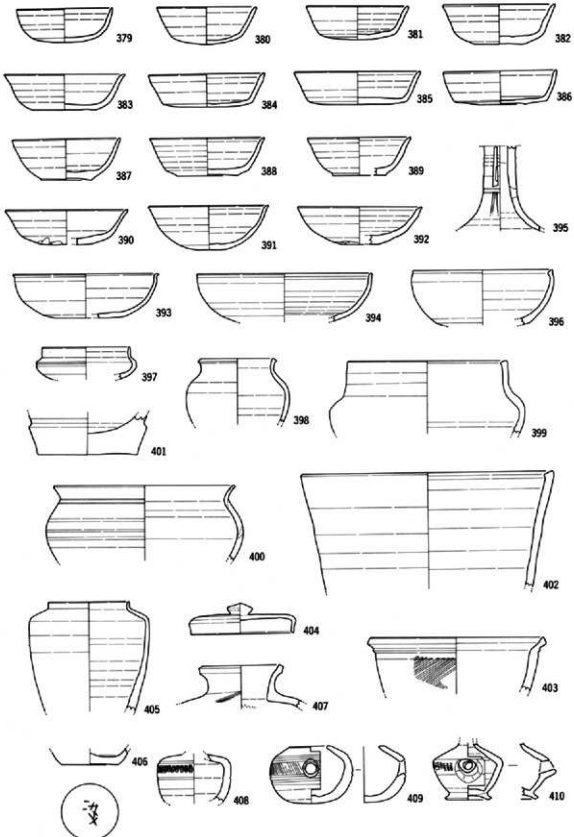


第31図　A期の遺物実測図(3)

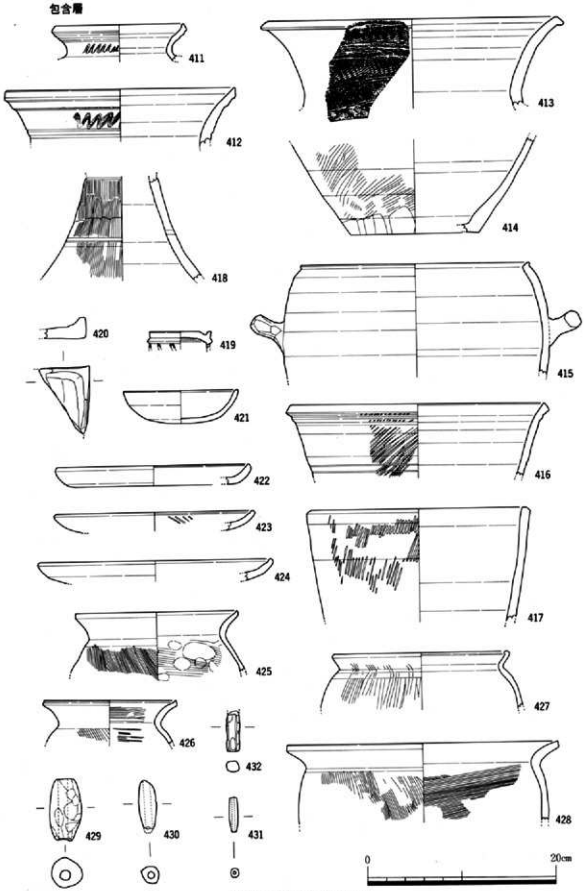


第32図　A期の遺物実測図(4)

包含層



第33図　A期の遺物実測図(5)



第34図　A期の遺物実測図16

第２節　Ｂ期の遺物

Ｂ期の遺物には須恵器と緑釉陶器、灰釉陶器、土師器などがある。調査区中央部の掘立柱建物を中心とした遺構や包含層から墨書土器なども多数出土している。この時期は２つに区分できる。以下、遺構、包含層の順に取り上げて述べる。なお、器種分類は第35図に示した。

１）掘立柱建物柱穴出土遺物

ＳＢ81（第36図－433～438）　ＳＢ81からは灰釉陶器椀・皿、土師器甕Ｃ、土錘が出土している。灰釉陶器はすべて淡緑色の灰釉をうすく漬けがけしたもので、東濃産のものである。灰釉椀（436）は体部が直線的に立ち上がり端部が少し外反する。底部は回転ヘラケズリ調整する。灰釉皿は低めの高台に口縁端部が少し外反するもの（433・434）と高台の内側がやや内湾し口縁端部がまっすぐのびるもの（435）がある。底部はいずれも回転ヘラケズリである。土錘（437）は赤褐色で黒斑のあるものである。Ｉ－２期に属する。

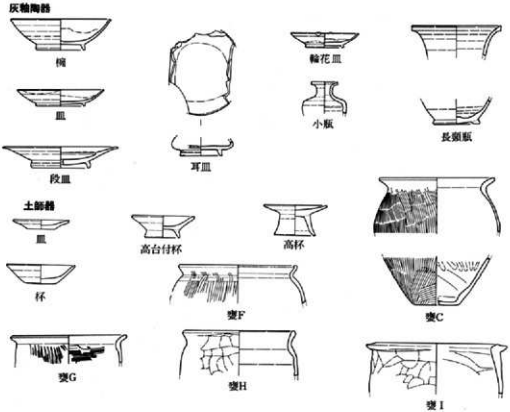
２）その他の遺構・包含層出土土器

ＳＤ82（第36図－439・440）　ＳＤ82はＳＢ81の雨落ち溝と考えられている遺構で、灰釉陶器椀、土師器甕、土錘などが出土している。439は高台が少し内湾し、底部が糸切痕を残すもので、Ｉ－２期に位置付けられる。

ＳＫ81（第36図－442～450）　ＳＫ81は遺物がまとまって出土した土坑で、灰釉陶器椀・皿・段皿、土師器甕Ｃが出土している。灰釉陶器は淡緑色で光沢のある釉をハケ塗りしたもので、東濃産と考えられる。442は底部が回転ヘラケズリするもので、体部は直線的に立ち上がる。445は三日月高台で底部を回転ヘラケズリする。土師器甕Ｃは体部外面は荒いハケメ、横ナデ、ユビオサエで調整し、器壁を薄く仕上げる。底部は平底で、指ナデで仕上げる。Ｉ－１期に属する。

Ｐ81（第39図－530～550）　Ｐ81からは土師器杯・皿・高台付杯・高杯のみが540を除きすべて完形で21点出土した。大別すると胎土が精良で白色泥質のもの（Ａ群－530、532、549）と胎土がやや密で淡褐色のもの（Ｂ群－531、535、538、542、550）と赤褐色で胎土のやや荒い土師質のもの（Ｃ群－533、534、536、537、539～541、543～548）に分かれる。三者ともロクロ成形で杯・皿は底部に回転糸切痕跡を残す。530は特に丁寧に回転ナデ調整がなされている。これらの土器はなにか特殊な用途に使われたのか、杯部内面に赤色の顔料が付着するもの（536、537、550）がある。また火を受けたのかススが口縁端部に付着するもの（531）、脚部下端に付着するもの（541）、外面全体に付着するもの（541、544～546）が見られる。大きくみればＡ群と杯・皿には何も付いていない。高台付杯には赤色顔料が、高杯にはススが付着する。Ⅱ期に属する。

黒褐色砂質土層（第36図－453～第37図－473）　黒褐色砂質土層からは灰釉陶器椀、深椀、皿、長頸瓶、土師器甕Ｈ、Ｉが出土している。灰釉陶器はすべて東濃産と思われる。灰釉陶器椀は腰が張って立ち上がるものと（453）と浅く斜めにまっすぐ立ち上がるもの（457・458）がある。453は少し焼成不良で釉調は不明である。457・458は釉が薄くほとんど剥離している。462は体部全面に施釉し、底部外面にも施釉する。皿は底部回転糸切痕跡を残し低い高台を付ける。灰釉は漬けがけで淡緑色で光沢がある。土師器甕Ｈ（469、472）は体部外面をナデや強いヨコナデで調整するものである。469は外面



第35図　灰釉陶器・土師器　器種分類表（1/6）

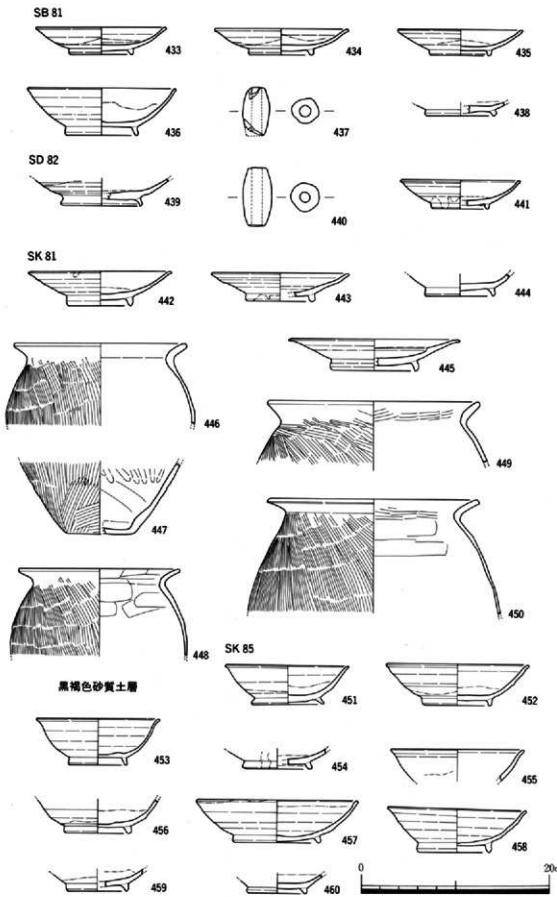
灰釉陶器

椀	体部が丸みを持って立ち上がるもの
稜椀	体部に稜が付く椀
輪花椀	輪花を付けた椀
皿	体部が浅くまっすぐのびるもの
段皿	体部に段が付く皿
耳皿	口縁部の２方向を上に折り曲げる皿
輪花皿	輪花を付けた皿
長頸瓶	口頸部が長く口縁部が開くもの
小瓶	体部が丸みを持ち口頸部が短いもの

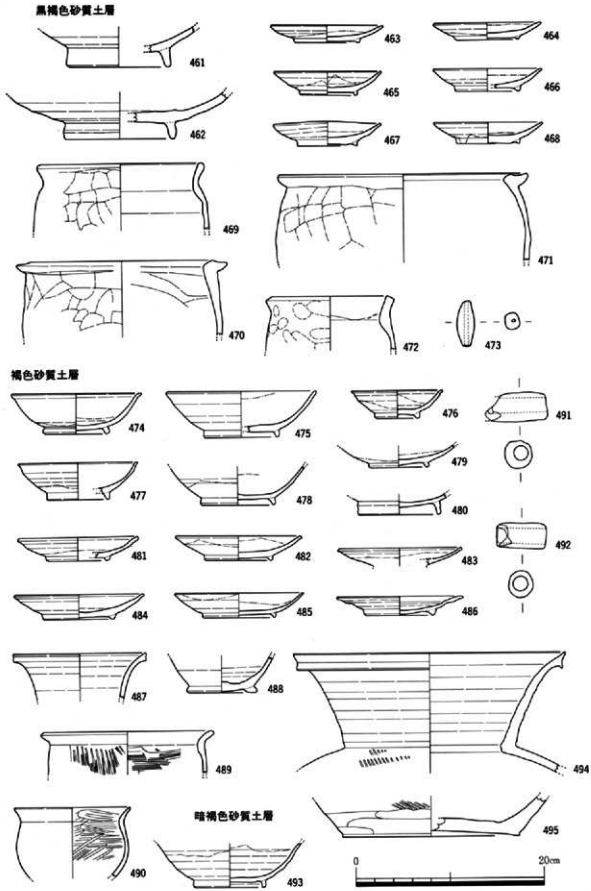
土師器

甕　F	丸みを持つ体部で口縁端部を内側に折り曲げるもの
甕　G	短い頸部を持ち、体部が厚く粗いハケメ調整するもの
甕　H	短い頸部を持ち、体部が厚く粗いナデ調整するもの
甕　I	口頸部を折り曲げるいわゆる“清郷型”と呼ばれるもの

第６表　Ｂ期遺物器種分類



第36図　B期の遺物実測図(1)



第37図　日期の遺物実測図2)

ユビオサエとナデで調整する。外面全面にススが付着する。内面は横方向のヘラケズリをする。472は体部外面をユビオサエと強いヨコナデで調整する。内面をヨコナデするが回転を利用した可能性もある。甕Ⅰ(470,471)はいわゆる"清郷型"と呼ばれるもので外面を雑なヨコナデ、内面をヨコナデする。口縁部内面から外面にかけて全面にススがかかる。土錘は土師質のものである。Ⅰ－2期に属する。

褐色砂質土（第36図－474～492）　褐色砂質土は黒褐色砂質土の上に堆積した層で灰釉陶器椀、皿、段皿、長頸瓶、土師器甕G・Hが出土している。灰釉陶器はすべて漬けがけで胎土などから東濃産であると思われる。474、477は灰釉を漬けがけしたものであるがほとんど剥離している。486は緑色で光沢のある灰釉がかかる。土師器甕G（489）体部外面は縦方向の荒いハケメ調整を施し口縁部から内面はヨコナデをする。ナデは回転を利用している可能性がある。体部内面は横方向のヘラケズリ、板ケズリをする。外面全体にススがつく。490は外面ヨコナデ、内面ヨコナデとヘラによるナデで調整するものである。土錘は赤褐色で大振りのものである。Ⅰ－2期である。

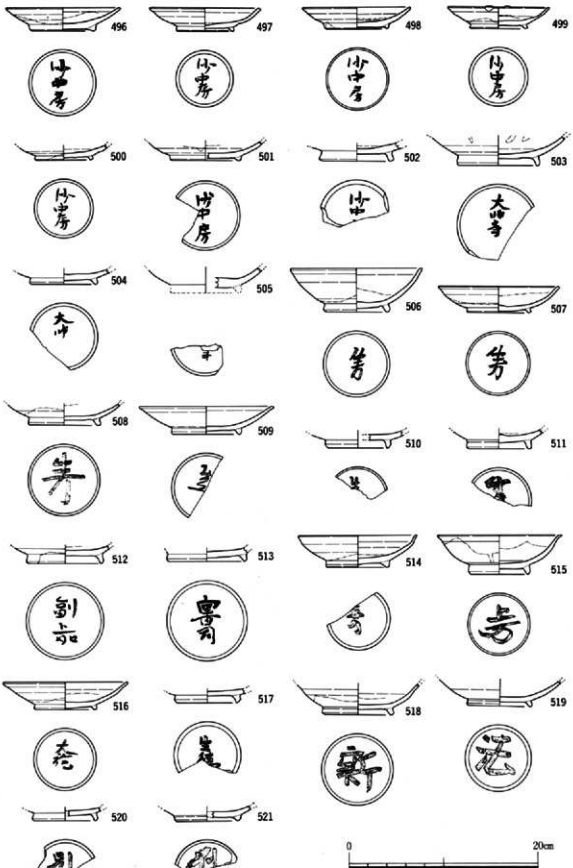
暗褐色砂質土（第37図－493～495）　暗褐色砂質土からは量が少ないが須恵器甕A、灰釉陶器椀、皿、土師器甕が出土している。495は須恵器甕の底部である。体外面はタタキで最下部はヘラケズリする。底部はユビオサエとナデで調整する。Ⅰ－2期に属する。

包含層（第39図－552～590）　灰釉陶器、土師器に混じって包含層からは緑釉陶器が十数点出土している。551～557は緑釉陶器である。551は段皿で淡青緑色の光沢のある釉がかかる。552は口縁部内面に段が付く。554は輪花の椀で、濃緑色の釉が厚くかかる。556は全面に施釉するが、内面のヘラミガキ痕跡が明瞭である。

3）墨書土器（第38図－496～第39図－529）

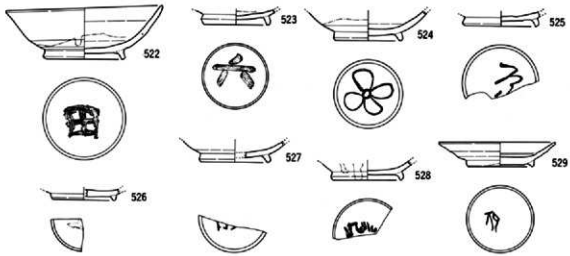
墨書土器は62J、62K区から合計で39点出土した。SD84から出土したもの（518）、SK85から出土したもの（502、511、522）、黒褐色砂質土から出土したもの（496、499、508、515、529）のほかは包含層から出土したものである。器種は灰釉陶器椀、皿、輪花皿ではとんど東濃産のものである。496～502は底部に「沙中房」と墨書する。497、500は底部をナデ調整するが、496、498、499、501、502は回転糸切り痕跡をそのまま残す。釉調は白っぽく薄い釉を漬けがけする。503～505は「大師寺」・「大師」もしくは「大明寺」・「大明」と墨書するものである。3点とも口縁部はないが、底部は回転ヘラケズリ調整する。506、507は「生万」もしくは「□方」とよめるもので、508～511もその1種であろう。506は底部回転ヘラケズリ調整するもので薄い灰釉が漬けがけされるがほとんど剥離している。507も薄い釉がかかり剥離している。字体はそれぞれ違った書き方をしており、前2者が同じ様な書き方をしているのと対照的である。特に508と509は別の字の可能性もある。512は底部のみ残るが底部は回転ヘラケズリする。墨書は肉眼ではほとんど判読できないが赤外線でみると「副嘉」と読める可能性がある。513も赤外線でみると「堂司」とも読むことができるがはっきりしない。514、515は底部を回転ヘラケズリする椀で515は体部もヘラケズリする。墨書は「上万」と読めるが書き方は違っている。516は底部回転ヘラケズリをする皿で読みづらく2番目の文字ははっきりしないが「大福」と読める可能性がある。517は底部の一部を欠き2番目の文字がはっきりしないが「生徳」と読める可能性がある。518はSD84から出土した椀の底部であるが「新」と大きく墨書する。519も一文字で大きく「法」と書く。520、521は一部しか残存しないが「別□」と読める。522はSK85から出土した大振りの椀で底

墨書土器(1)

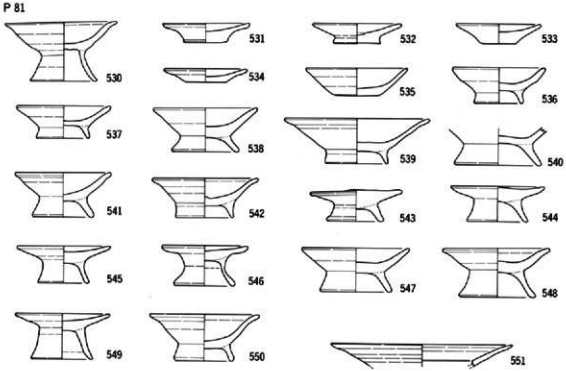


第38図　B期の遺物実測図(3)

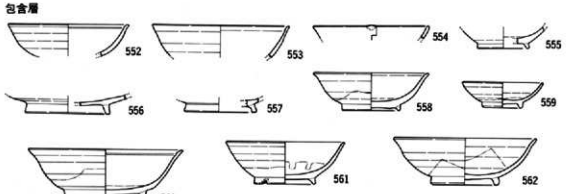
墨書土器(2)



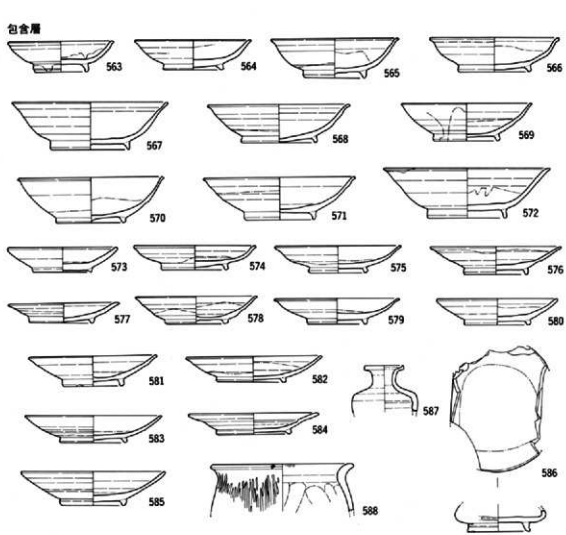
P 81



包含層



第39図　B期の遺物実測図(4)



第40図　B期の遺物実測図5)

部は回転ナデ調整を施す。墨書は太く「田」と記す。523も一文字で「六」と記す。524は文字ではなく花文をえがく。

大きく分けると、「沙中房」、「大師寺」、「堂司」、「法」などの寺院と関連した言葉、「副嘉」、「大福」といった吉祥句の様なもの、その他に分けられる。最も点数の多いのは「沙中房」であるがこの言葉が当てはまる地名はない。おそらく当時の地山が砂であるところから"砂の中の房"と言ったのか"沙弥のいる房"という意味だったかも知れない。「大師寺」や「大明寺」の存在は不明であるが、なんらかの形で寺院に関連した建物が存在した可能性がある。瓦などは出土していないが同じ頃に掘立柱建物が存在しておりその建物の性格を考える上で重要である。灰釉陶器の形態から見ると虎渓山1号窯式の時期に中心があると思われる。

第３節　Ｃ期の遺物

Ｃ期の遺物としては、調査地全域から土器、陶磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品などが多量に出土した。記述に当たっては、主として材質別にまとめることとするが、土器と陶磁器に関してはこれらを一括して述べる。ただし瓦は別項目を設ける。また、土器・陶磁器および木製品は遺構に伴って出土したものを中心に概観し、他の遺物に関しては、出土点数が少ないため種類ごとに記述する。

１．土器と陶磁器

種類と器種

種類としては、土器と陶磁器があり、前者は土師器と瓦器、後者は国産の陶器と中国産などの輸入陶磁器に区分できる。器種は基本的に椀、皿、鉢、壺、瓶、鍋に大別し、さらに第41、42図のように区分する。各器種の分類は第７表および第５章第３部に基づく。なお、種類別の表記は特に断りのない限り、土師器、瓦器のみ記述し、陶器は省略する。

ＳＫ101（第43図－601～第44図－616）　Ⅰ－１期の遺物組成を示す一括資料である。滞水状況を表す黒灰色粘土から、椀Ａ１、皿Ａ１、鉢Ａ、甕、土師器鍋Ａが出土している。椀はすべて高台を持ち、糸切痕を残す。603は底部に「一」と記された墨書がある。610は土師器鍋Ａで、口縁部の形態から新田分類[2]の５類に相当するものである。611は高台を持つ片口鉢、612は堅く焼き締められた無高台の鉢、613～616は甕で、陶器類はすべて常滑窯産である。

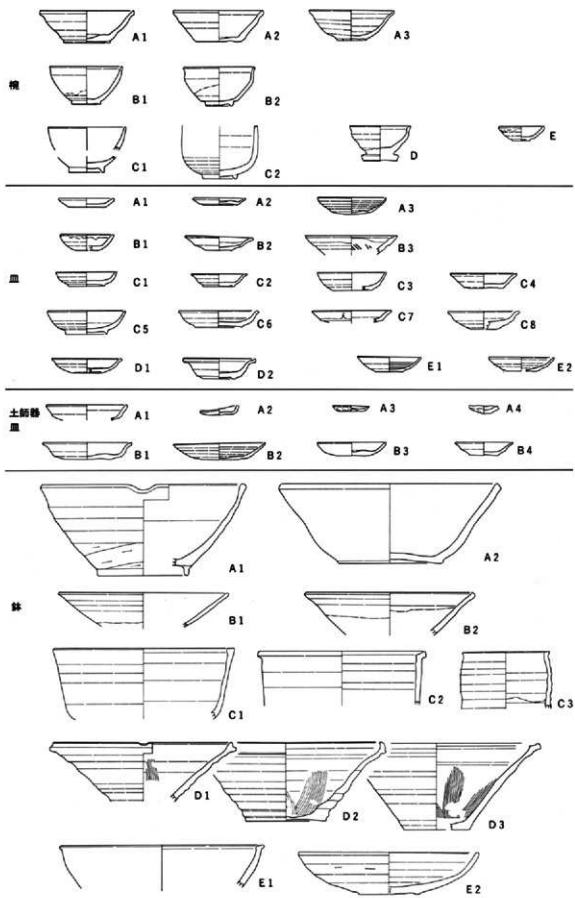
ＳＤ120（第45図－617～636）　Ⅰ－２期の遺物組成を示す一括資料である。溝の埋土から、椀Ａ２、Ａ３、皿Ａ１、Ａ２、鉢Ａ、甕、土師器皿Ａ、土師器鍋Ｂが出土した。椀Ａ２（617）は砂粒を含んだ胎土を持ち、見込み部（内面底部）を強くナデる。椀Ａ３（618～622）は高台を持ち、見込み部にナデを施したもので、器壁は薄い。美濃窯産で、明和１号窯式[3]に相当する。皿は器壁が厚くて砂粒を含む胎土をもつＡ１と、器壁が薄くて見込み部にナデを施す美濃窯産のＡ２がある。土師器皿は口縁部と内面をナデ、底部はユビオサエのみの調整を施す手づくね成形の皿である。

ＳＥ110（第45図－637～648）　出土遺物の半数は井戸枠外からのものであり、井戸枠内の出土遺物は639、640、642、648である。椀Ａ２、Ａ３、皿Ａ２、土師器皿Ａ、土師器鍋Ａ、などが出土した。土師器皿はいずれも手づくね成形で、口縁部を強くナデて、肥厚するもの（642～644）と口縁部をナデるが肥厚しないもの（645）、口縁部は肥厚するが、ナデが著しく弱いもの（646）がある。647は中国産の白磁で、口縁部は外反する。Ⅰ－２期の遺物である。

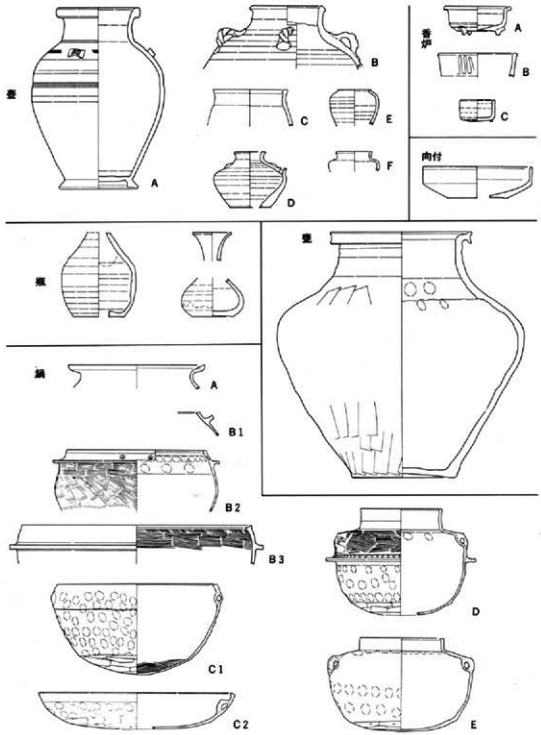
ＳＤ127（第45図－650～654）　皿Ａ２（650、651）、土師器皿Ａ（652、653）のほか、体部に孔を持つ土師器の小壺がある。Ⅰ－２期に所属する。

ＳＥ132（第45図－655～657）　井戸を廃棄する際に埋め土と共に投棄された資料である。655は常滑窯産の鉢Ａで、口縁部は面取りがなされ端部は鈍利である。656は灰釉を施した鉢Ｂで瀬戸美濃窯産である。657は灰釉を施したいわゆる古瀬戸の三耳壺で猿右衛門窯式[4]である。このような古瀬戸の三耳壺あるいは四耳壺は調査区の南半部で比較的多く出土しており、この地区の特徴となっている。このような例として、試掘調査で出土した四耳壺（649）などがある。

ＳＤ136（第46図－658～696）　溝を廃絶する際の埋土から出土した。瀬戸美濃窯産の椀、皿、鉢、



第41図　C期の遺物　器種分類(1)（S＝1/6）



第42図　C期の遺物　器種分類（2）（S＝1/6）

椀

A　無釉の椀。体部は逆ハの字状に開く。灰釉系陶器いわゆる山茶椀と称されるもの。

A－1　高台を持ち、体部外面の凹凸が著しい。口縁端部は肥厚し、器壁は厚い。

A－2　高台を持たず、体部外面の凹凸がある。見込み部にナデを施し、器壁は厚い。

A－3　高台を持ち、体部の器壁は薄い。底径は小さく、胎土は緻密な精製品。

B　高台を持ち、口縁部にくびれを持つ施釉の椀。いわゆる天目茶椀。

B－1　下半部外面に鉄錆釉の化粧掛を施した椀。

B－2　下半部外面に化粧掛を施さない露胎の椀。

C　高台を持ち、口縁部がくびれずに伸びる施釉の椀。いわゆる丸椀。

C－1　体部が逆ハの字状に開く椀。

C－2　体部の下半部は丸みを帯び、上半部は直立し、筒型を呈する椀。

D　底部は台状に広く外に作られ、口縁部がくびれるいわゆる台付椀。

E　法量が著しく小さい小椀。

皿

A　高台をもたない無釉の皿。

A－1　体部は逆ハの字状に開き、器壁が厚い皿。灰釉系陶器の皿。

A－2　器壁が薄く、見込み部にナデを持つ。胎土は緻密な精製品。灰釉系陶器の皿。

A－3　器壁が薄く、体部の凹凸が著しい皿。灰釉系陶器の椀の系譜を引く回転円文皿。

B　口縁部に釉を施釉した、いわゆる緑釉皿。

B－1　口縁部が内湾または直線的に伸びるもの。

B－2　口縁部が外反するもの。

B－3　見込み部におろし目をもつ、いわゆるおろし皿。

C　内面は全面に釉を施した皿。

C－1　付高台で口縁部が内湾または直線的に伸びるもの。

C－2　付高台で口縁部が外反するもの。いわゆる端反りの皿。

C－3　削り込み高台いわゆる碁笥底で、口縁部が内湾または直線的に伸びるもの。

C－4　削り込み高台いわゆる碁笥底で、口縁部が外反するもの。

C－5　削り出し高台で口縁部が内湾するもの。

C－6　削り出し高台で口縁部が外反するもの。

C－7　体部下方に緩の入る、いわゆる腰折皿。

C－8　無高台の皿。口縁部は外反する。

D　内面底部の釉を抜き取った、いわゆる内黒の皿。

D－1　削り込み高台で口縁部が外反する皿。

D－2　体部上方が外反し、端部が短く立ち上がるいわゆる折縁皿。

E　内面に圏線の入った、無釉の同心円文皿。

E－1　圏線の幅が狭く、胎土が灰黒色を呈するもの。

E－2　圏線の幅がやや広く、胎土が赤褐色を呈するもの。

土師器皿

A　手づくねの皿。非ロクロ成形。

A－1　体部内面を２段にナデる皿。口縁部は肥厚する。

A－2　体部内外面を１段にナデる。体部はつまみ上げるように作られる。

A－3　体部外面を指で押さえて調整する皿。

A－4　偏平で体部を持たない皿。

B　ロクロ成形の皿。底部に糸切痕が残る。

B－1　口縁部が外反するもの。

B－2　体部が直線的に伸びるもの。

B－3　口縁部が内湾するもの。

B－4　１～３類に比べ法量が小さくなる皿。

鉢

A　体部は逆ハの字状に開く無釉の鉢。

A－1　高台を持つもの。いわゆる片口鉢。

A－2　高台を持たないもの。焼き締められている。

B　体部は逆ハの字状に開く施釉の鉢。

B－1　口縁部が直線的に伸びるもの。

B－2　口縁部がやや玉縁状に膨らむもの。

C　体部が直立するもの。

C－1　体部下方に丸みをもつもの。

C－2　口縁部が外折れするもの。

C－3　体部の開きが著しいもの。

D　体部は逆ハの字状に開き、内面に擂目を持ついわゆる擂鉢。

D－1　口縁端部が断面三角形のもの。端部が凹むものもある。

D－2　口縁端部に縁帯を成すもの。

D－3　口縁端部が内側に折り返され、内面に突帯を形成するもの。

E　器高が低い浅鉢。

E－1　口縁部が外折れするもの。

E－2　口縁部が内湾するもの。

壺

A　高台をもち、肩に耳を持つもの。いわゆる三耳壺、四耳壺。

B　肩に粘土紐を用いた耳をもつもの。

C　肩がほとんど張らないもの。

D　体部に注口をもついわゆる水柱。

E　頸部が若干立ち上がるのみのいわゆる肩衝系入。

F　頸部が直立し口縁部が丸くなる小壺。

香炉

A　体部が直立し、口縁部が外折れするもの。

B　壺型の香炉。いわゆる袴腰型のもの。

C　体が直立する筒型のもの。

向付

瓶

瓷

土師器鍋

A　口縁部は外反し、端部を内側に折り返すいわゆる伊勢型鍋。

B　鍔を有するもの。

B－1　口縁部は内傾し、最大径が胴部にあるもの。

B－2　口縁部はやや内傾し、鍔と胴部の径がほぼ同一となるもの。

B－3　鍔が最大径になるもの。いわゆる羽釜。

C　口縁部に近い内面に耳を２～３か所設けるもの。

C－1　器高が高いもの。いわゆる内耳鍋。

C－2　器高が低いもの。いわゆる焙烙鍋。

D　壺型を呈し、口縁部は直立、鍔を持ち、肩に耳を持つ。いわゆる茶釜型須恵。

E　壺型を呈し、口縁部は直立、鍔を持たないもの。

第７表　Ｃ期の遺物　器種分類表(1)

壺、常滑窯産の甕の他、土師器皿321点がある。特に土師器皿はそのほとんどは表を向いて折り重なるように出土し、埋め立てる過程で一括して投棄されたものと推定できる。椀はB1、C、D類、皿はB類、鉢はD1類が存在し、古瀬戸の後期[5]から大窯のI期[6]に位置付けられる。土師器皿は4種出土したが、法量からさらに細分できる。B1a類は口径が14.0～15.0cmのもの（666～668）と12.0～13.5cmのもの（669～671）がある。B2a類は口径が14.0～15.0cmのもの（672～674）と11.5～13.0cmのもの（675～677）がある。B4a類は口径が8.0～9.0cmのもの（678～680）と6.5～7.5cmのもの（681～683）がある。A類は胎土が他の土師器皿に比べて砂粒を多く含む灰白色の皿で、体部は退化して器高は1cm強と低いがナデはまだ幅広く施される2a類である。II－1a期。

SD112（第47図－697～718）　II－1a期の遺物組成を示す一括資料である。黒灰色粘土層および溝を埋めて整地した土層から出土した。椀はB1、D類、皿はA3、B類、そのほかに鉢、土師器皿、土師器鍋がある。土師器皿はSD136のように集中的には出土しなかった。土師器鍋はC1類で、体部はやや逆への字状に開き、耳は半球状の粘土塊を用いて作る。711は体部上半部に浅い沈線が一条ある。

SD101（第48図－742～第49図－837）　出土遺物は層位、切り合い関係から3群に大別できる。742～793は下層の黒灰色粘土層から出土した遺物であり、瀬戸美濃窯産の陶器は大窯1期に収まる一群である。椀はB1、灰釉を掛けたC類が主体となり、皿は灰釉のC1類が多く存在する。土師器の皿はB1b、B2b、B4b、A2c類があり、体部に穿孔したもの（768、769）も存在する。土師器鍋はC1類で、口縁部は内湾する。外面下部はヘラケズリ、上部はユビオサエ、内面下部は細かいハケメ調整を施す。耳は細長い粘土帯を用いて作り、耳の孔を開けるために外面が膨らむ。II－1b期の遺物組成を示す遺物群である。794～820は上層の砂が混入した粘質土から出土した一群で、瀬戸美濃窯産の陶器の大半は大窯II期に属するものである。椀はC、D類がなくなり、皿はC2類が多くなる。土師器皿はB1c、B4b、A2c類のほか、体部に全くナデを施さないA4a類（809、810）が現れる。煮炊具は土師器鍋C1のほかに土師器鍋Dがある。II－1c期に所属する。821～837は掘り直された溝の埋土から出土したものである。瀬戸美濃窯産の陶器は大窯II期に位置付けられ、土師器皿、土師器鍋B3、C1、Dなどがある。II－1c期に属する。

SD110（第50図－838～第51図－943）　溝を埋めて整地した土から出土した遺物群であり、II－1b～II－1c期に比定される。瀬戸美濃窯産の陶器は大窯I～II期に属し、椀はB1、皿は鉄釉を施したC類が多い。中国製磁器が他の遺構に比べて多く、染付は椀（867、868）、口縁部が内湾する皿（866）、外反する皿（869、870）があり、胎土が堅緻な精製品である。土師器皿は法量が測定できるものは117点を数える。B1c、B2a、B2c、B3a、B3b、B4a、A4aなどがあるが、一部には煤やタール状の炭化物が付着するものがある。鉢は各種あるが、その中でもC類とD2類が比較的多く、E類（914、915）も見られる。土師器鍋C1類（937）は体部が逆への字状に開き、器壁はやや厚い。

SD111（第52図－944～1002）　溝の埋土から出土した一群であるが、陶器の時期幅はII－1b～II－2a期と広い。椀はB類が数量的には多いが、灰釉（953、954）あるいは長石釉のC類（951）もみられる。955は赤褐色の胎土をもつ楽系の椀である。皿はB、C、D、E類があり、この内D類は体部上方が外反し、端部が短く立ち上がる腰折れの皿（961、962）である。土師器皿はB3b、B4b、A4a類が多くを占める。香炉は袴腰型のもの（B類、987）と、筒状の体部に小さな三足が付くもの（C類、988）

がある。1002は土師質の人形と思われるが、欠損が著しく全容は不明である。

ＳＤ105（第53図－1003～1019）　Ⅱ－1c期に所属する遺物群である。土師器鍋Ｃ１類（1014、1015）は口縁部が内湾する。この他に土師器鍋Ｂ３、Ｄ類の２者があり、1018は焼成以前にヘラ状工具による斜格子状の線刻が施されたものである。

ＳＫ116（第53図－1032～1038）　椀Ｂ、土師器皿Ｂ4cのほかに、龍泉窯産の雷文帯を伴う青磁椀（1035）や、瓦器の火鉢（1038）、火鉢類の脚部（1037）、底部（1036）などがある。

ＳＤ137（第54図－1039～1089）　溝を廃絶する際の埋土から出土した遺物群であるが、下層の遺構群を破壊して作られ、また埋め戻されているので、遺物の混入が著しい。出土量は土量から見れば、非常に少なく、その量比は灰釉系陶器（椀Ａ、皿Ａなど）、須恵器、施釉陶器の順で多い。Ｃ期の遺物としてはⅠ－２期～Ⅱ－2a期までの遺物が見られるため、溝廃絶の時期はⅡ－2a期と考えられる。椀はＢ類のほかにＥ類（1043）のものもあり、皿は灰釉（1046～1049）のほかに長石釉の皿（1050～1052）がみられる。土師器皿はＢ3b（1055）、Ａ4a類（1056～1061）が少量認められるのみである。一方るつぼ（1062～1073）が他の遺構に比べて非常に多く出土する。

ＳＤ142（第55図－1090～第56図－1129）　溝を廃絶する時に石材と共に投棄された遺物群で、瀬戸美濃窯産の陶器の中には、登窯期に位置付けられるもの（1093、1102、1103、1106）がある。Ⅱ－2b期の遺物組成を含む一群である。椀はＢ類、鉢Ｄは３類がそれぞれ多く、土師器皿はＢ1d類が多い。1121は常滑窯産の鉢Ａ類で、焼き締められないいわゆる「赤もの」の鉢である。1123は黒色粒を含む赤褐色の胎土をもつ瓦器の風炉である。三足の脚部を持ち、表面は良く磨かれている。

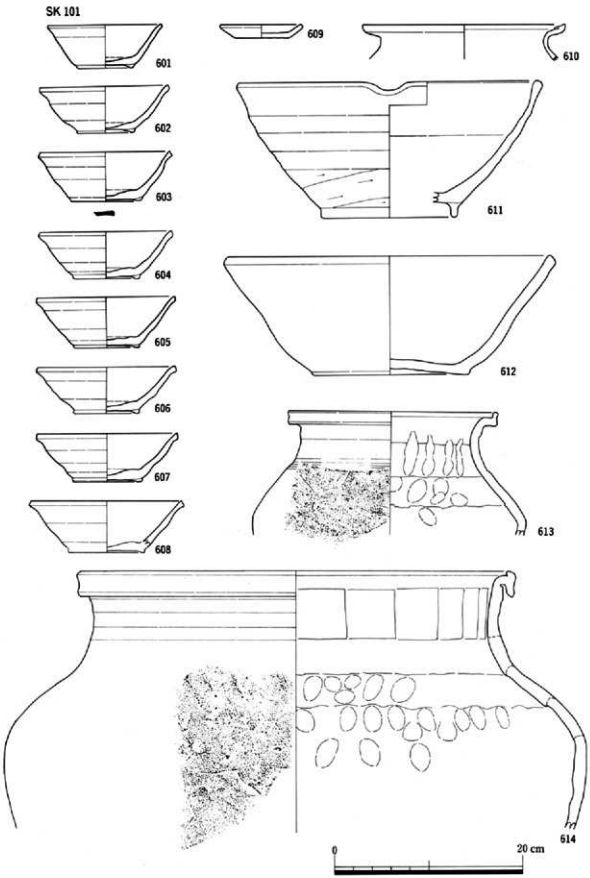
ＳＤ118（第56図－1130～1150）　主に溝廃絶時の埋土から出土した遺物で、時期幅は広く、Ⅱ－1a～Ⅱ－2a期のものが混入する。1134は朝鮮産の椀と思われ、全面に釉が施される。

ＳＫ142（第57図－1151～1173）　Ⅱ－2b期の遺物組成を示す一括資料である。石材と共に投棄されていた。瀬戸美濃窯産の陶器は鉢Ｄ類と瓶は大窯Ⅱ～Ⅲ期、他のものは大窯Ⅲ～登窯期に属するものである。椀Ｂはいづれも２類で、鉄釉の他に長石釉を施したもの（1155）がある。長石釉の椀Ｃ（1156）も存在する。皿Ｃは長石釉が多く、1157は見込み部に鉄絵を描いた削り出し高台の皿、1159～1161は口縁部が外反し、端部を丸めるものである。輸入陶磁器は染付の皿（1158）があり、釉は厚ぼったく、高台部には砂目があり、胎土が黄色を呈する粗製のものである。

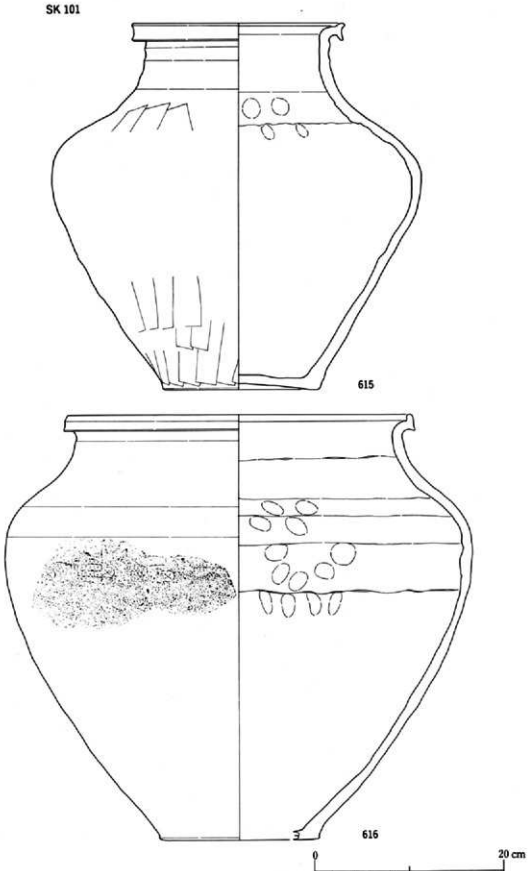
ＳＤ164（第58図－1181～1201）　Ⅱ－2a期の遺物組成を示す一括資料である。瀬戸美濃窯産の陶器は大窯Ⅲ～Ⅴ期に属するものである。椀はＢ類が少なく、黄瀬戸釉の椀Ｃ２類（1181）がある。皿は長石釉の皿Ｃ類のほか、鉄釉の皿Ｃ４類がある。土師器皿は少量出土し、Ａ4a類の（1189～1191）が主体を占める。1192は鋳物に用いられたものと考えられ、底部に金属の溶解物が付着し、釉は被熱で変質している。この他、図示しないが胎土が黒灰色で荒い三足火鉢と推定される脚部があり、同様の溶解物が付着する。1195は常滑窯産の赤ものの鉢である。

ＳＥ133（第58図－1202～1211）　Ⅱ－2a期の遺物群である。

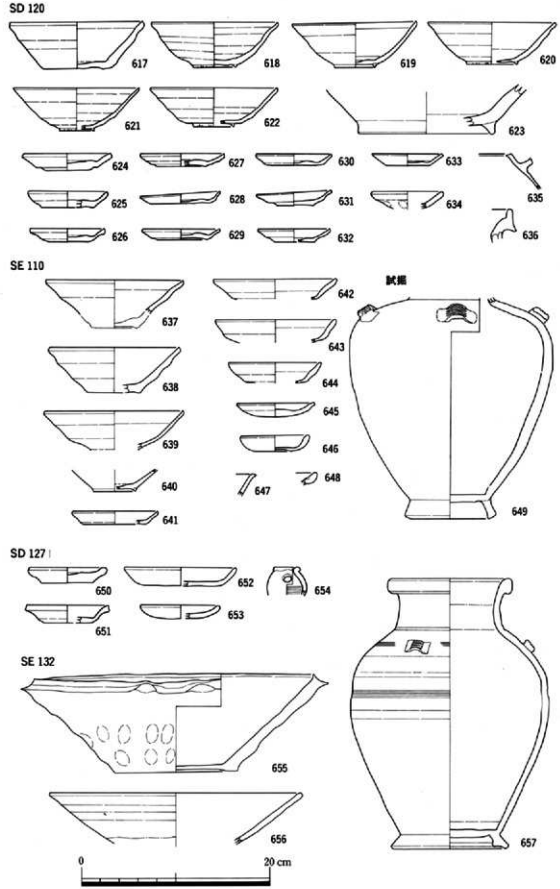
ＳＫ147（第58図－1220～1226）　土師器皿が７点出土しており、その内訳はＢ3b類が２点（1220、1221）、Ａ4b類が５点（1222～1226）である。



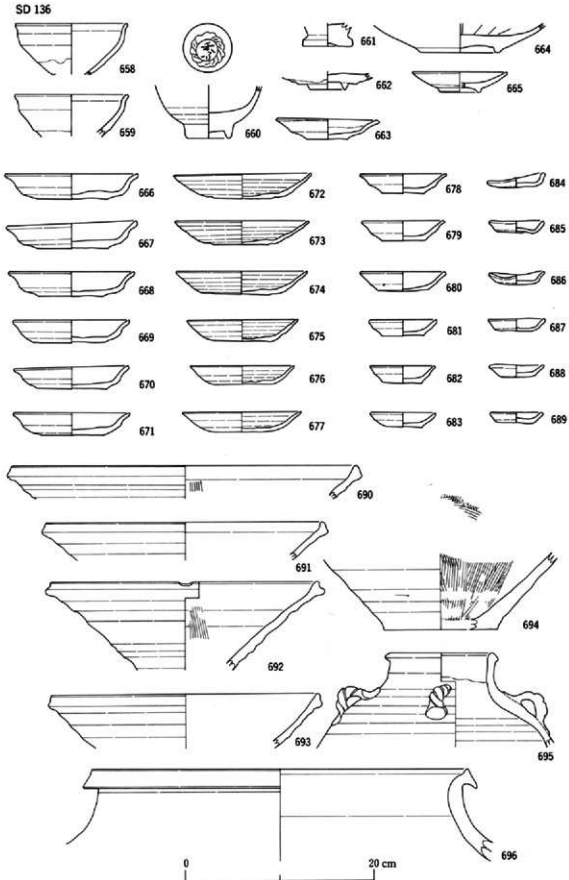
第43図　C期の遺物実測図(1)



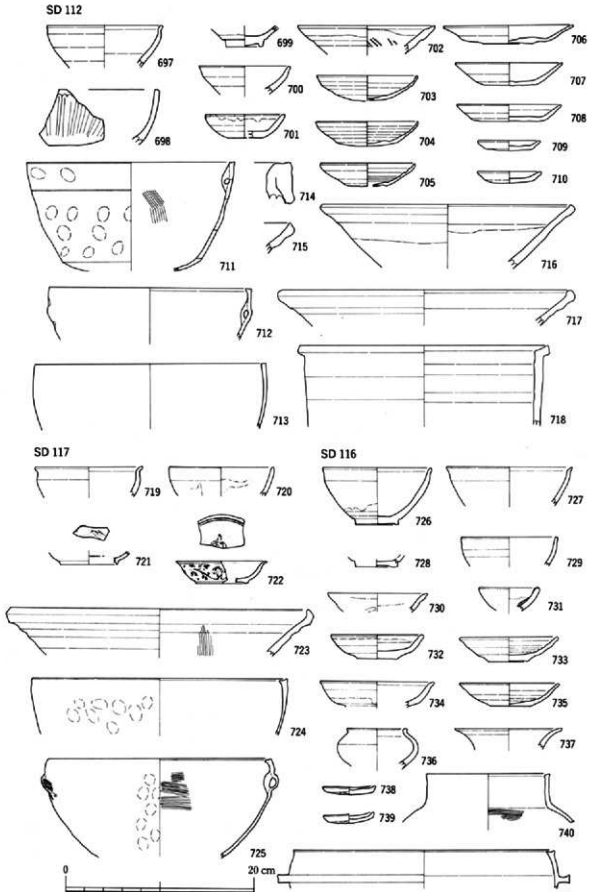
第44図　C期の遺物実測図(2)



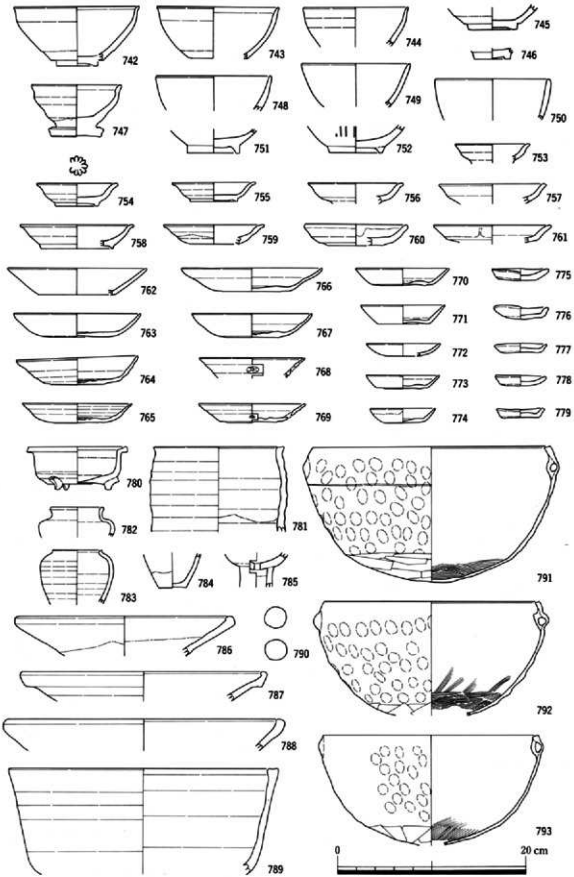
第45図　C期の遺物実測図(3)



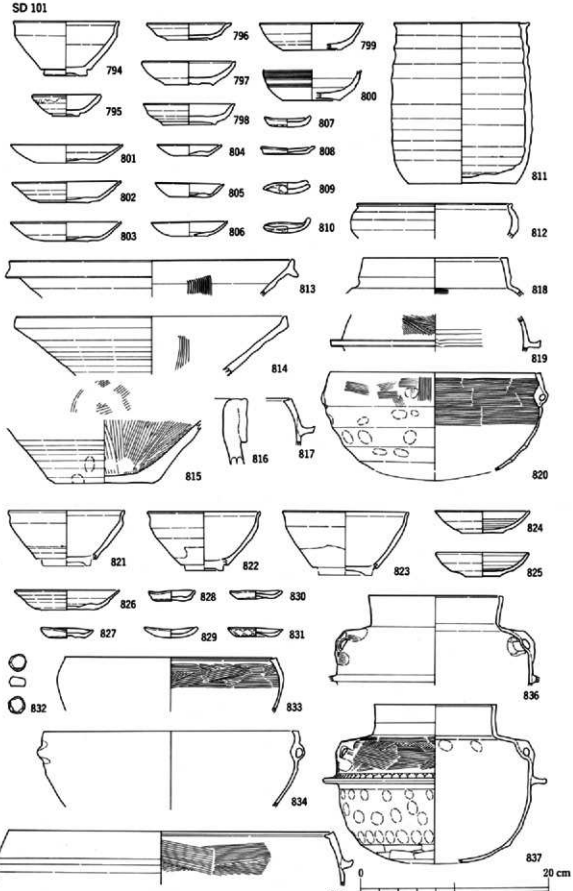
第46図　C期の遺物実測図(4)



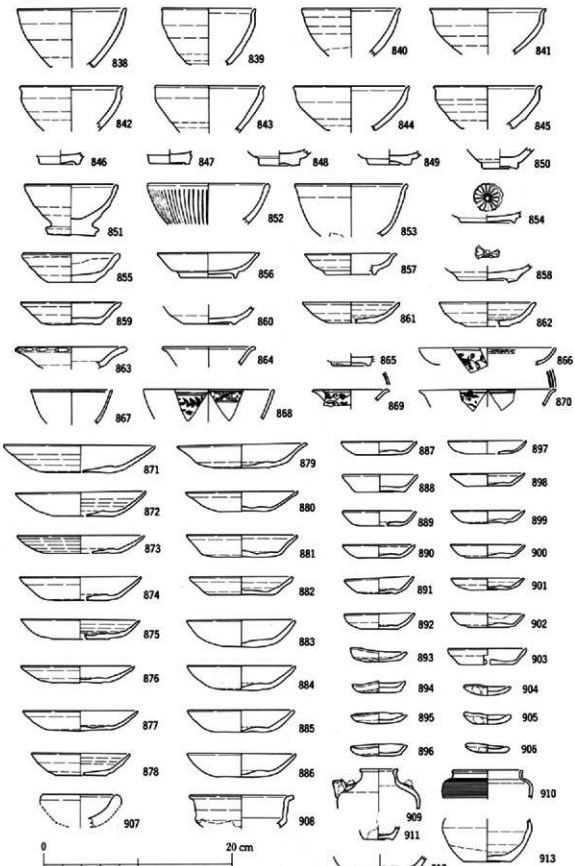
第47図　C期の遺物実測図(5)



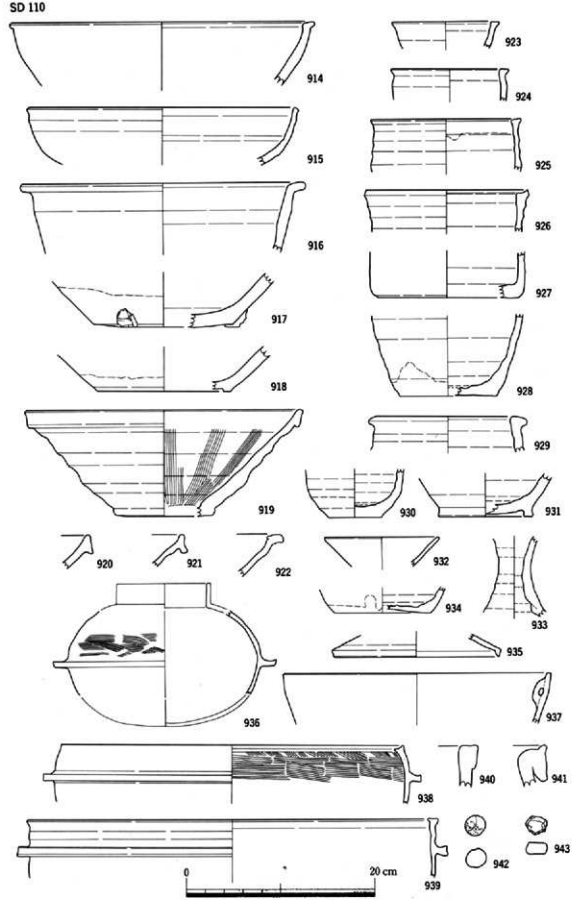
第48図　C類の遺物実測図(6)



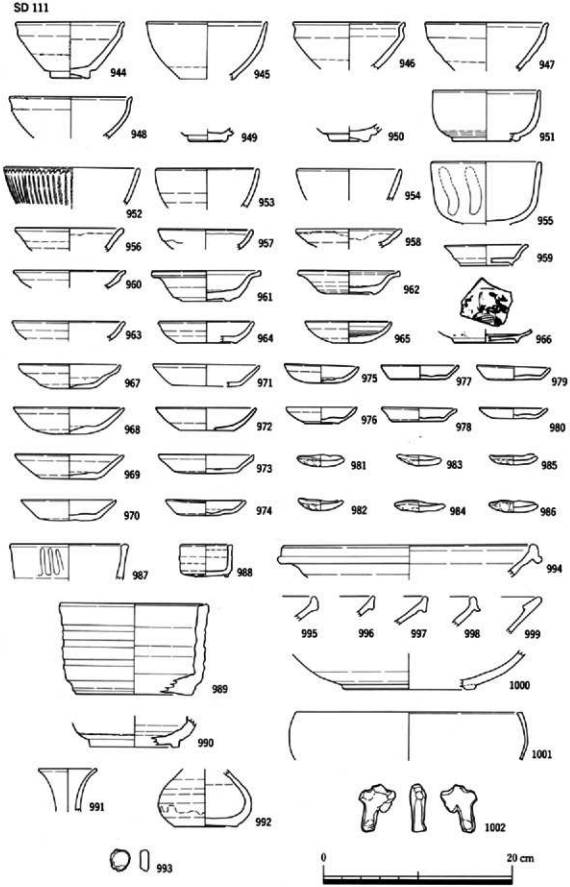
第49図　C期の遺物実測図(7)



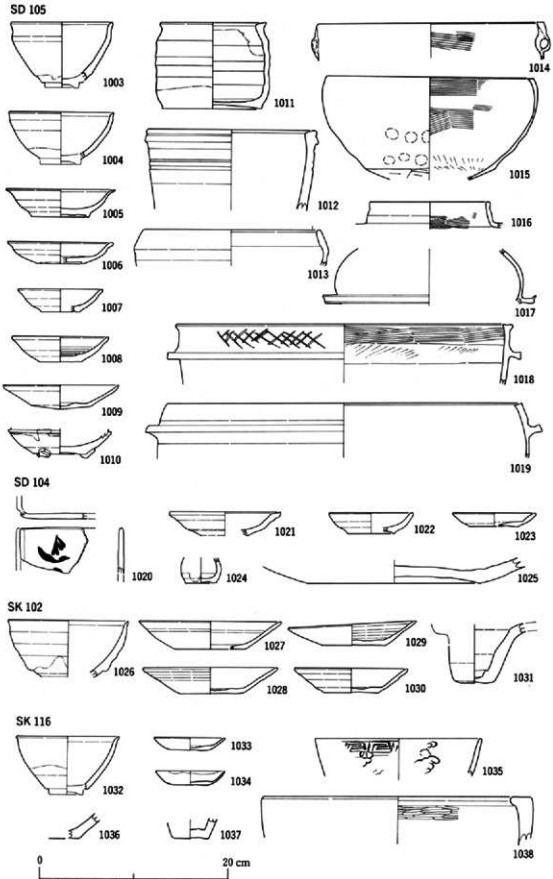
第50図　C期の遺物実測図(8)



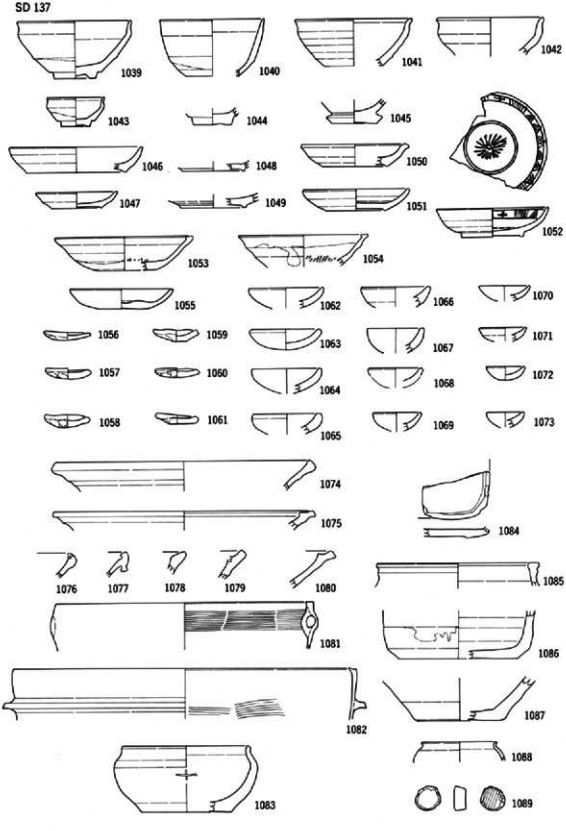
第51図　C期の遺物実測図(9)



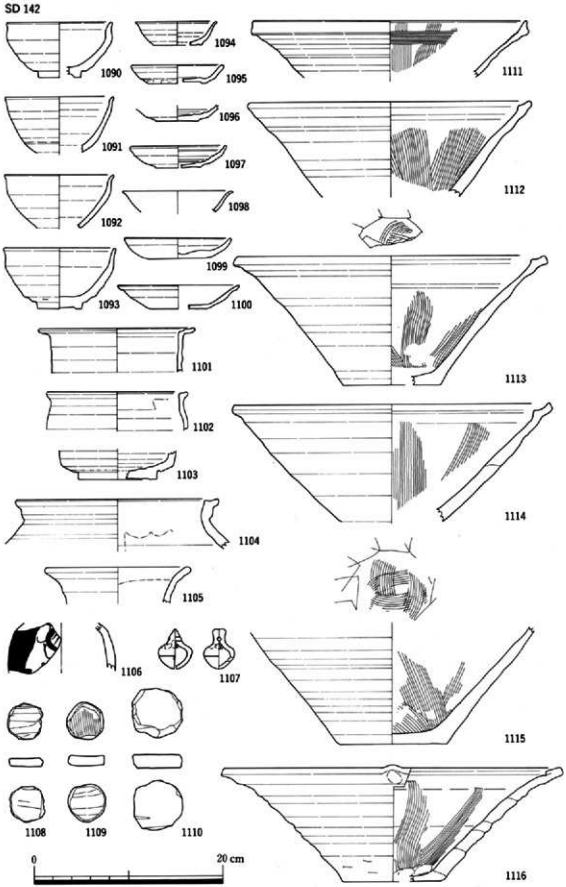
第52図　C期の遺物実測図(3)



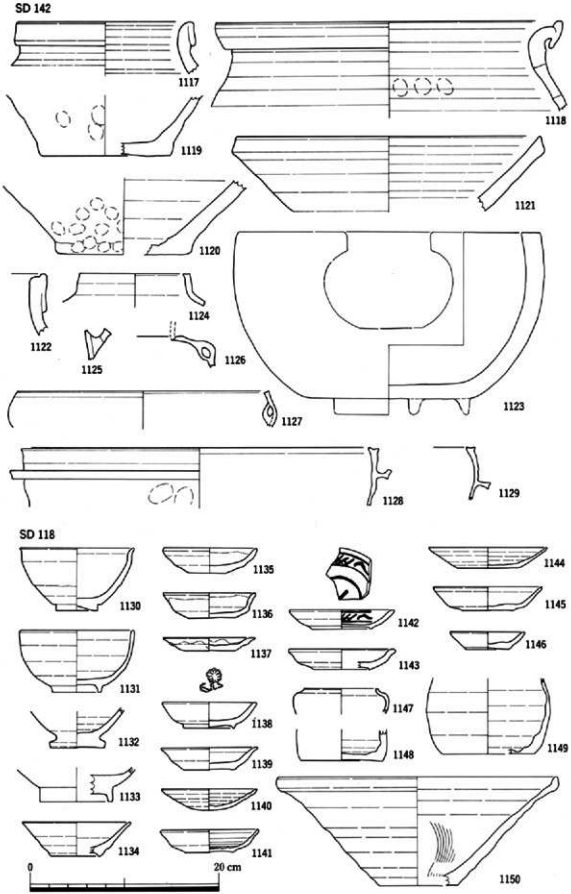
第53図　C期の遺物実測図(1)



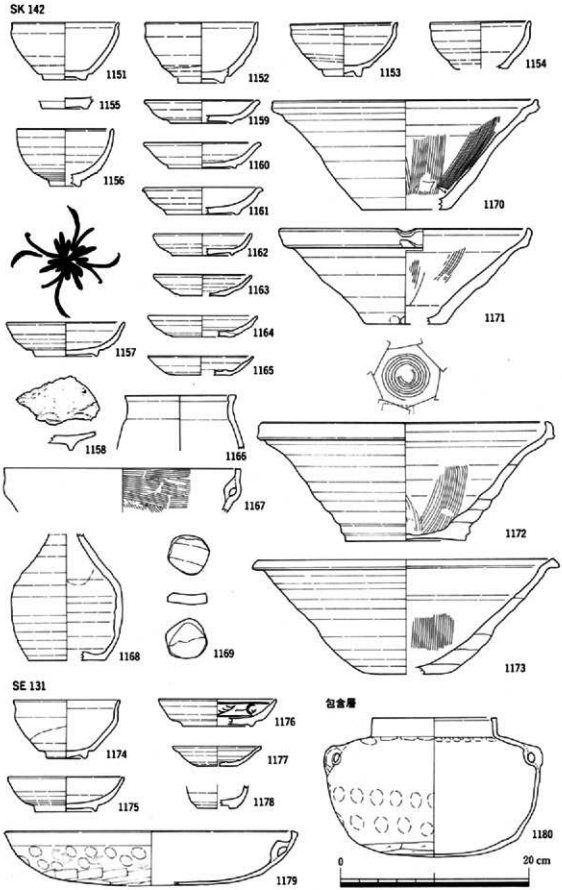
第54図　C期の遺物実測図(2)



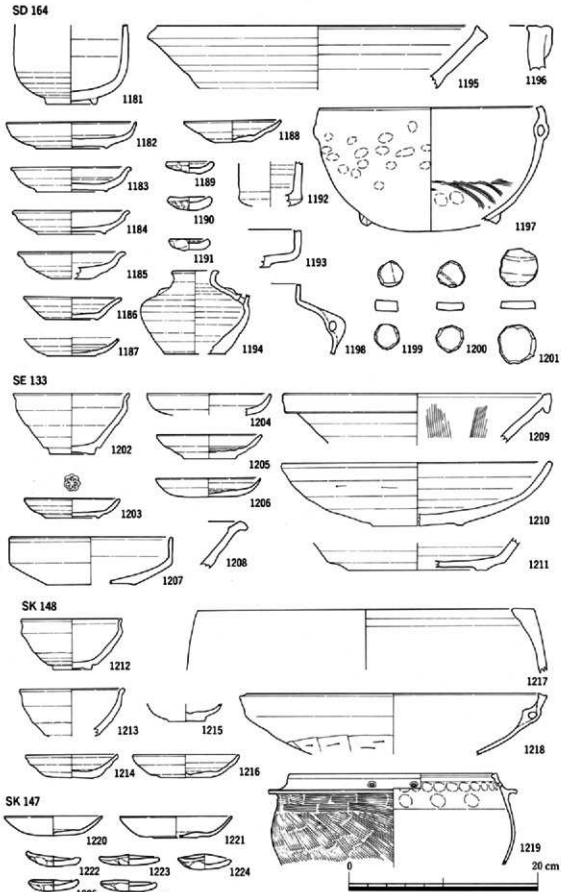
第55図　C期の遺物実測図(3)



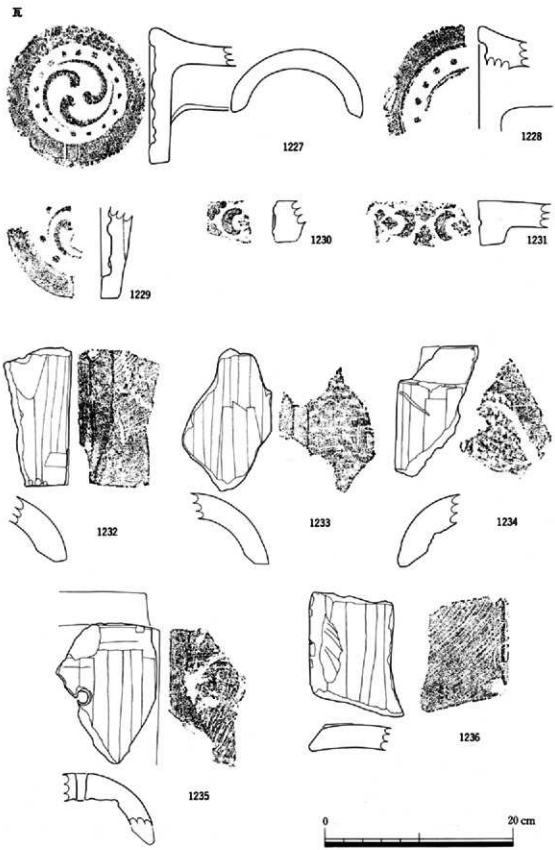
第56図　C期の遺物実測図(4)



第57図　C期の遺物実測図(5)



第58図　C期の遺物実測図⑩



第59図　C期の遺物実測図(7)

2．瓦（第59図－1227～1236）

瓦は軒丸瓦、飾瓦、丸瓦、平瓦が出土した。Ⅱ－2a期以降の遺構および包含層から出土し、Ⅱ－1c期以前の遺構からはほとんど出土しない。出土量は非常に少なく、瓦を出土する遺構でも、その割合は遺物の総破片数の数パーセントに過ぎない。一方、同じ清洲城下町遺跡の中でも、水堀[7]や本丸推定地付近での調査[8]では瓦は多量に出土している。おそらく瓦の使用は本丸付近に限られ、この調査地点では瓦葺の建物はほとんど存在しなかっただろう。また、瓦の使用はⅡ－2a期以降と推察できる。

軒丸瓦は全て、その紋様構成は左巻三巴紋を内区におき、外区に珠紋を巡らすものである。1227は外区に16個の珠紋を巡らし、瓦当の直径は14.7cmを測り、珠紋は小さく低い。小澤分類Ⅱb1類[9]に相当する。1228も外区に16個の珠紋を巡らしたと推定され、小澤分類のⅡb1類であろう。飾瓦（1231、1232）は全て、木瓜の浮彫紋様を施している。丸瓦、平瓦は破片資料のみで、全長を測り得るものは存在しない。丸瓦（1232～1235）は外面は丁寧な縦方向のヘラケズリ調整がなされる。1232、1234、1235は内面に弧線状の圧痕（コビキA）が残存し、縄痕が一条残る。1233は内面に布目痕があり、その上に爪状の圧痕が列を成して存在する。布目の密度は8本／1cmである。平瓦（1236）は外面は縦方向のヘラケズリ調整、内面はコビキAが施される。1229、1232、1234～1236は灰色粘土と白色粘土が縞状に重なり合った胎土を持つ。また、表面に雲母片が付着するものもある。

3．木製品

木製品（木製遺物）は遺存条件が限られるため、出土する遺構は掘形が深い溝の粘土、粘質土中あるいは井戸に限られる。したがって、陶磁器などとの数量的な比較は単純には出来ない。器種は漆椀、曲物桶、結桶、折敷、箱などの容器、下駄、箸、杓子、筧、楔などの生活器具があり、名称は通例に従い前述のものを用いる。ただし、漆椀と下駄に関しては、第60図のように分類する。

ＳＤ101（第61図－1237～1251）　漆椀、曲物桶、下駄、折敷などがある。漆椀はＡ類が大半を占め（6点中4点）、この内1242は底部外面に刻線がある。1241は他の漆椀に比べ薄手で、底部外面に黒漆で「吉」と記される。1243は円盤状の木製品で、一箇所に桜皮を付けたと見られる孔があり、曲物桶の底板と想定される。1244は下駄Ａ類の歯が欠損し、そののち角材を鉄釘で打ち留めて歯を作った転用の下駄である。1247は折敷の底板で、周縁部は朱漆、中央部は黒漆を塗布する。1251は下端部に銅版をはめ込んだ用途不明の木製品で、部分的に黒漆が残存する。上部に釘穴が2か所存在する。

ＳＤ110（第62図－1252～1269）　漆椀、結桶、杓子、板塔婆、箸、人形などがある。漆椀はＡ類が8点中6点を占め、1252、1253、1257は底部に刻線がある。1260、1261は折敷の側板と考えられ、朱漆が塗布される。1262は結桶の側板で、板目板材を用いる。1263は遺存状態が不良だが、表面に朱漆を塗布した杓子である。1264、1265は接続部に竹釘を用いる蓋の一部と思われる。1266は板塔婆で墨は残存しないが墨痕がかろうじて残り、「南無妙法蓮華経□　□いのため」と読める。1269は人形の頭部で漆塗りなどの装飾は成されていない。

ＳＤ111（第62図－1270～1275）　漆椀、下駄などがある。1271は「御ちや三」と記された木簡である。1273は下部に釘穴を設け、桜皮を巻き付けた用途不明の木製品で、朱漆が塗布される。

ＳＤ112（第63図－1276～1278）　漆椀Ｂ類および折敷と思われる板材がある。

ＳＤ116（第63図－1279～1289）　1280は底部に刻線を施す漆椀である。

ＳＤ121（第63図－1294～1298）　漆椀と木簡がある。漆椀はＥ類（1294、1295）とＢ類と思われるもの（1296、1297）がある。1298は表に「百六十」裏に「十」と記された木簡である。

ＳＤ136（第64図－1301～第65図－1330）　漆椀、曲物桶、結桶、折敷、下駄、篦などがある。漆椀はＡ、Ｂ、Ｄ、Ｇ類があり、底部に紋様、刻線を施したものはない。1313は曲物桶であるが、遺存状態がやや不良のため、側板と底板を分けて実測した。底板は側板にはめ込まれるように接続され、樺皮を用いて３か所で留める。側板の上部に方形の孔があり、柄杓であった可能性が高い。1323は下駄Ａ類で、前歯が折れた後に鉄釘を打ち付けて補強している。1324は一部欠損するが、三辺は面取りされた板材で、両面に墨書がある。釈文は表が「□□［鴨ヵ］」、裏が「□」である。箸は40点近く出土した。完形のものは少なく、全長は20.0cm～26.0cmに収まる。

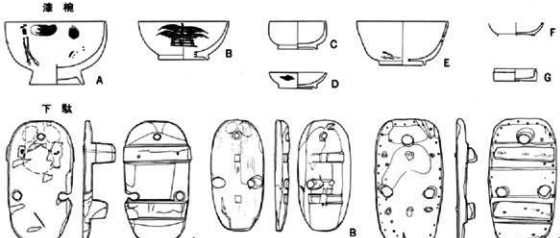
ＳＤ137（第65図－1331～1333）　漆椀、下駄、篦が出土した。1333は朱漆を塗布した篦である。

ＳＥ127、124、113、112（第65図－1335～1339）　井戸の構造物として用いられた結桶のタガを締めるために補強された楔である。板材を削り取って鋭利にしたものでタガの圧痕が残る。

ＳＥ111（第66図－1341）　1341は井戸の内部構造物として用いられた結桶である。板材を縦割りにした割裂法による製材を用い、外面はチョウナ、内面はヤリガンナで調整する。板材は１枚あるいは２枚おきに側面に切り込みを設けており、結果として各板材の接合面で長方形の孔が開いている形となる。水を得るための工夫と考えられる。

ＳＥ120（第67図－1344～1347）　1344～1346は井戸桶で割裂法による製材を外面はチョウナ、内面はヤリガンナで調整した板材を結い合わせている。1345は20枚の板材のうち４枚に直径0.5cmの孔がいくつか穿たれている。1347は釣瓶で、５枚の板材と１本の角材を組み立てて鉄釘で留める。

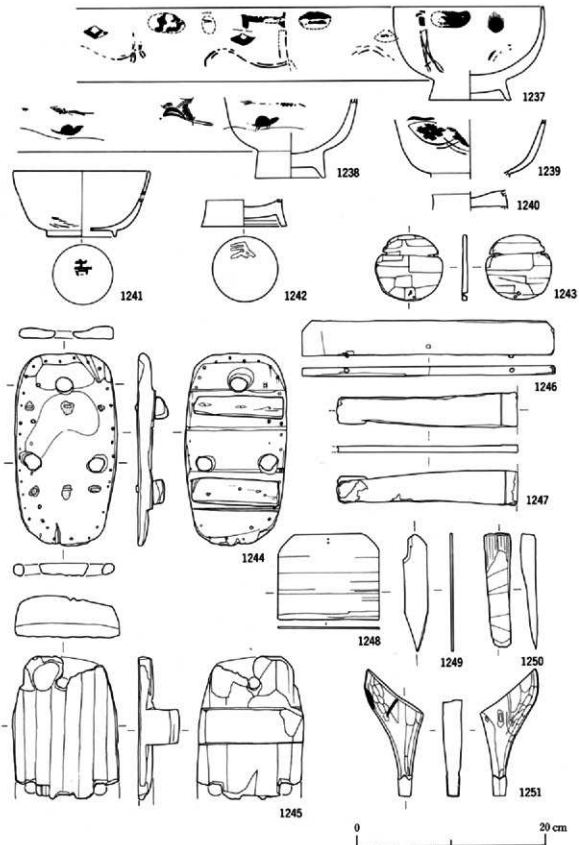
ＳＥ125（第67図－1348）　井戸の構造物として使用された曲物桶で口縁部に多数の孔がある。



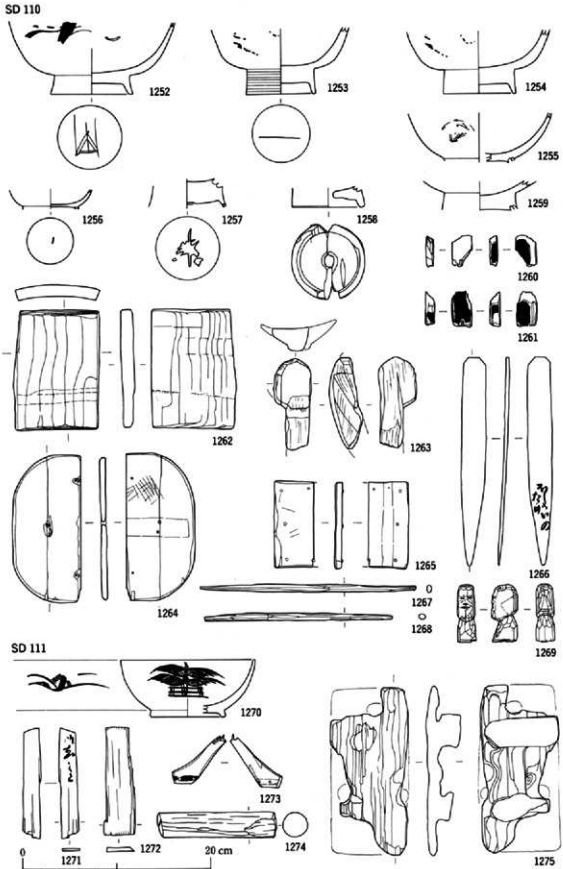
第60図　Ｃ期遺物器種分類(3)（Ｓ＝1/6）

漆椀（ここでは椀の他、皿、香合の形態もすべて漆椀と称する。）		Ｅ	高台が低く、器壁が薄い椀。内外面とも朱漆。口縁端部と高台下端は黒漆の場合がある。
Ａ	高台が高く、器高も高い総体的に大ぶりな形態の椀。外面は黒漆、内面と文様は朱漆。	Ｆ	皿。高台、器高は共に低く、器壁が薄い。内外面とも朱漆。
Ｂ	高台が低く、口径に対して器高も比較的低い椀。外面は黒漆、内面と文様は朱漆。	Ｇ	体部が直立する筒状の容器。いわゆる香合。外面黒漆、内面朱漆。
Ｃ	高台が低く、体部下半部は丸みを持ち、口縁部は内傾する椀。内外面とも黒漆。	下駄	
Ｄ	皿。高台、器高は共に低い。外面は黒漆、内面と文様は朱漆。	Ａ	一木で作られた下駄。
		Ｂ	歯部を差し込んで作るいわゆる露出下駄。
		Ｃ	歯緒部に多数の孔がある下駄。

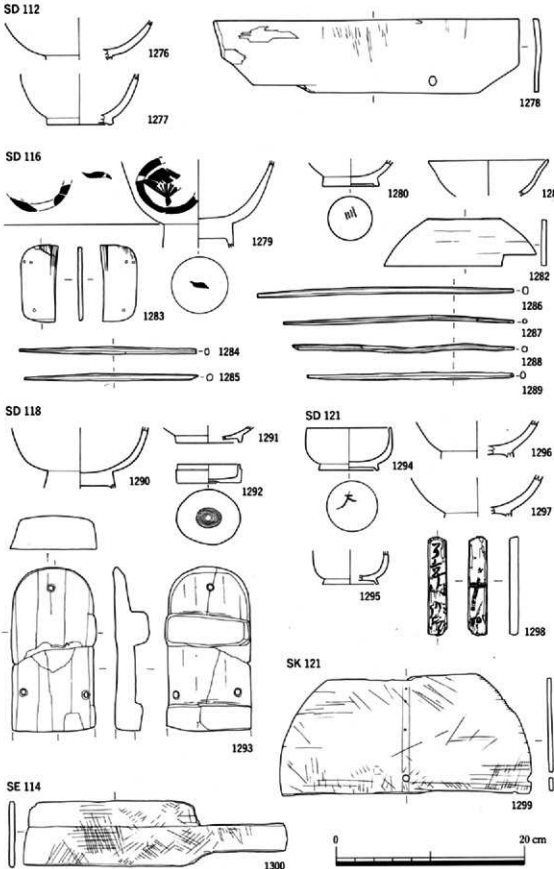
第８表　Ｃ期の遺物器種分類表(2)



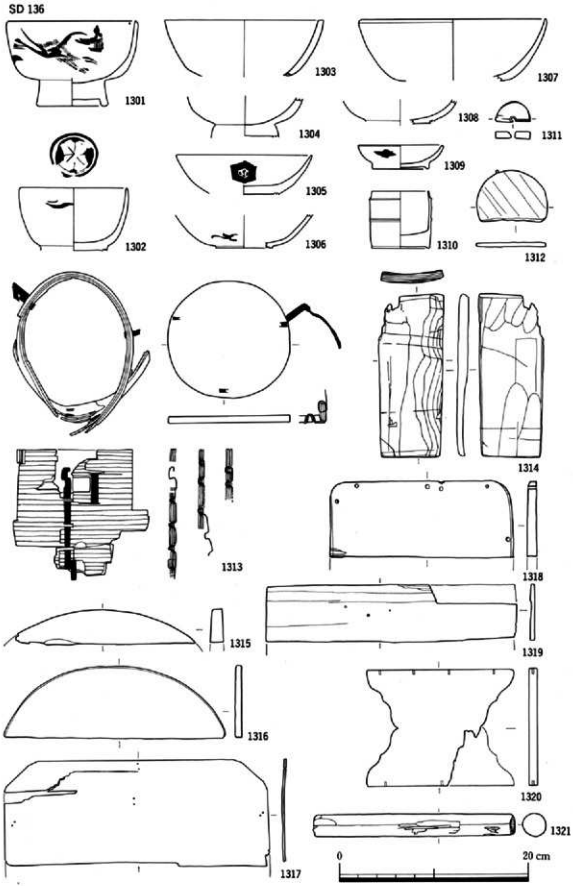
第61図　C期の遺物実測図(8)



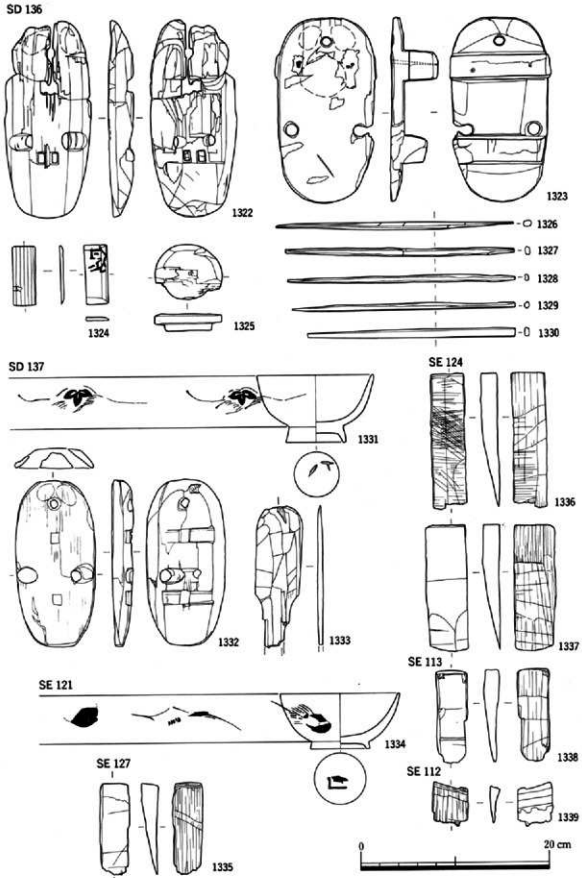
第62図　C期の遺物実測図19



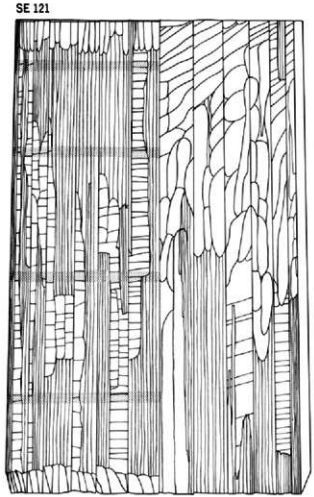
第63図　C期の遺物実測図(2)



第64図　C期の遺物実測図(2)



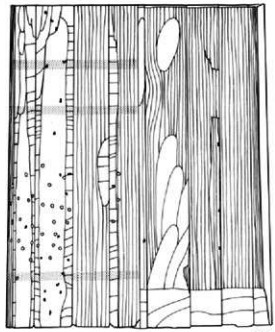
第65図　C期の遺物実測図(2)



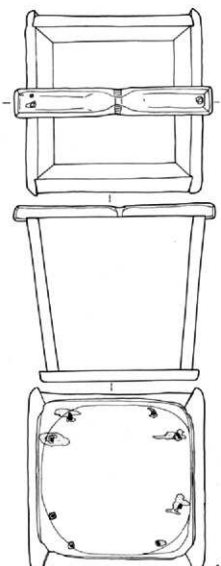
第66図　C期の遺物実測図(2)

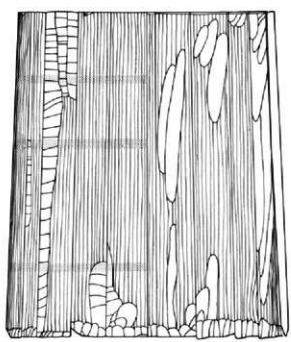
SE 120

1344



1345





1346

SE 125

1348

1347（1：4）

第67図　C期の遺物実測図(2)

4．石製品（第68図－1349～第70図－1374）

器種は硯、砥石、臼、五輪塔、石仏、石製容器などがある。石製品は全遺物量から見れば、その割合は著しく少ない。

1349～1352は硯である。裏面の両側に2本の台を持つもの（1349、1351）と持たないもの（1350、1352）がある。1350はSD111から出土した硯で、裏面に線刻で「正眼寺　仏殿公□　文□　」と記される。砥石は大小様々なものがある。表裏両面に使用痕のあるもの（1354、1356、1358）片面に使用痕のあるもの（1353、1355、1359～1361）、側面に使用痕のあるもの（1360）と分けられる。形態もバチ状を成すもの（1356、1357、1363）、直方体を成すもの（1353、1354、1358～1361）、不定形を成すもの（1355、1362～1364）がある。1361は硯を転用したものである。臼は花崗岩製のもの（1365～1367）と受け皿を設けた茶臼型（1368、1369）がある。前者は風化が激しく目が良好な形で遺存しない。1370は五輪塔の水輪部で、頂部付近を除き表面は凹凸が激しく、製作時の加工痕であると思われる。1371は石仏である。1372～1374はいわゆる笏谷石で作られた石製容器である。表面にのみによる加工痕が無数に残存する。1372はバンドコの体部、1373は筒状のバンドコの底部、1374は脚付の盤である。

5．金属製品（第71図－1375～1410）

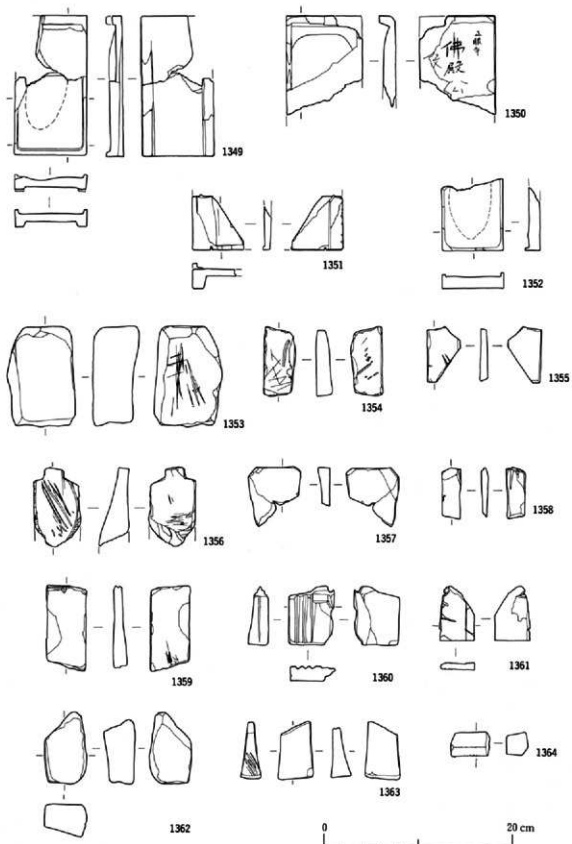
金属製品には銭貨、釘、小刀、刀物の柄、箏などがある。

1375～1401は渡来銭で、すべて銅製である。遺存状態が不良なものが多いが、1392は小さく軽量であるため、鐚銭と思われる。遺構に伴う形ではあまり出土しないが、土坑から一括して5枚出土した例（1375～1379）もある。鉄釘（1402、1403）は数十本出土するが、いずれも頂部が折れ曲がり、断面が方形をなす形態である。1404は小刀の刃部であり、柄部は欠損する。1406～1408は刀物の柄部である。柄は銅製で、1406、1407は鉄製の刃部の一部が残存する。1406は片面に草紋の線刻が施される。1410は銅製の箏である。

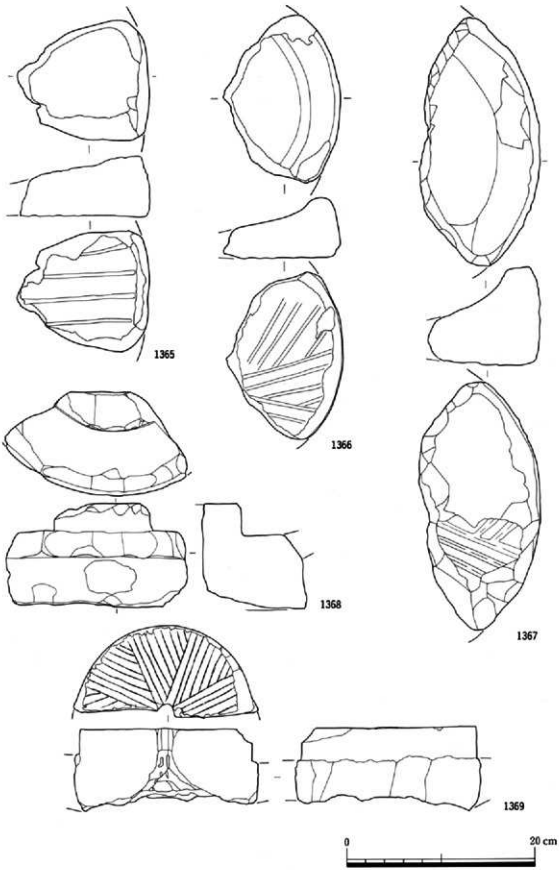
6．その他の遺物（第72図－1411～1414）

1411～1413はふいごの羽口の一部で、いずれもSE133から出土した。完形品はなく、小破片ばかりで全形を復元できるものは存在しない。1411、1412は表面に鉄滓が付着している。胎土は砂粒を多量に含み、脆い。1414は非常に脆く石製品の一種かと思われる。元来は直方体を形作っていたと思われ、このうち3面が遺存している。遺存する3面はいづれも黒褐色を呈し、側面と思われる部分には焼けた土が付着している。高熱を受けたものとみられ、あるいは、鋳型のようなものであると考えられる。

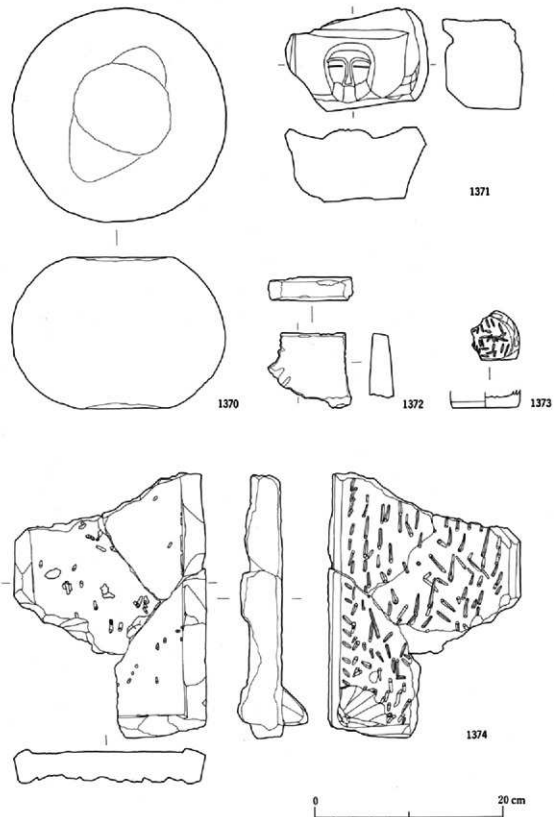
このほかに62L区では、特に南部の方で、鉄滓と考えられる金属の溶解物が多量に出土している。ここでは図示しなかったが、最大のものは一辺が15cmを越え、重量は2kg以上を計る。出土した総重量は5kgを越える。この様に、62L区の南部では、1192のように鉄滓が付着した遺物、ふいご、鋳型のようなもの、鉄滓などの鋳物関係の遺物が多く出土しており、この地点に鍛冶屋などが存在したことが推察される。これらの遺物の時期は共伴する陶磁器などからⅡ－2a期に属するものである。



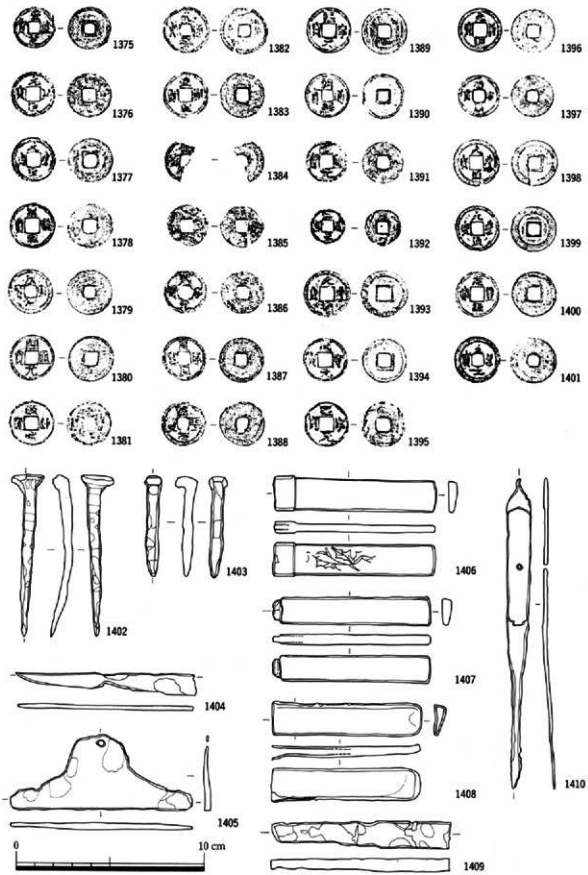
第68図　C期の遺物実測図25)



第69図　C期の遺物実測図(2)



第70図　C期の遺物実測図(2)



第71図　C期の遺物実測図(2)

第４節　その他の時期の遺物（第72図－1415～1429）

その他の時期の遺物には、Ａ期以前の遺物とＣ期以降の遺物がある。Ａ期以前の遺物としては弥生土器が少量ながらＡ期以降の遺構から混入して出土する。弥生時代の遺構は今回の調査では確認できなかったが、弥生土器の出土地点は調査区の中央部から北部にかけて広がる。この土器の分布範囲が、基本層序で見たように第８層の砂層が落ち込んで谷地形を形成する地点までであることや、付近に西田中遺跡が存在することなどを考え合わせると興味深い。該期の遺跡が存在する可能性をうかがうことができる。

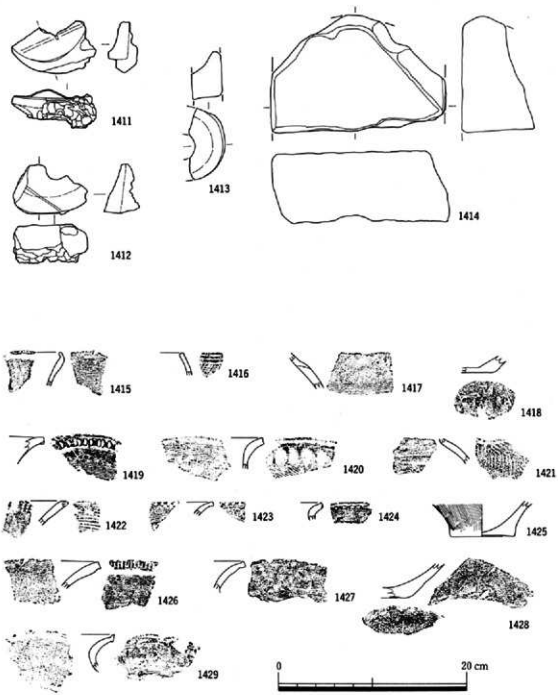
1415、1416は細頸壺の口頸部で、1415は外面に細かい櫛描横線を施す。弥生時代中期と考えられる。1417は壺の胴部、1418は壺の底部で、木葉痕が残る。いずれも弥生時代中期と考えられる。1419、1420、1422～1424は甕の口縁部である。1419、1423、1424は口唇部に刻みを施し、1420は外面に指圧痕、内面にハケを施す。1421は甕の胴部、1425は甕の底部である。いづれも弥生時代中期と考えられる。1426、1427、1429は壺の口縁部である。1426は口唇部に刺突列を設け、1427、1429は口縁部は外反し、口唇部は立ち上がる。1428は壺の底部で、外面をハケで調整する。いづれも弥生時代後期と考えられる。なお、Ａ期以前の遺物の中に古墳時代前期、中期に位置付けられる遺物は存在しなかった。

Ｃ期以降の遺物は図示しなかったが、旧田の耕作土などから若干量出土した。また、SD137の上層から18世紀代に比定される瓶が１点混入している。

注

1）土師器供膳具については奈良国立文化財研究所巽淳一郎氏、玉田芳英氏より種々のご教示を得た。
2）新田洋「伊勢型鏑に関する若干の覚書」（『三重考古学研究』１　1985）
3）田口昭二「美濃窯の山茶椀研究と編年」（『マージナルNO.　7』　1987）
4）楢崎彰一編「美濃の古陶」1976
5）藤澤良祐「"古瀬戸"概説」（『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』1984）
6）井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」（『中近世土器の基礎研究』1985）以下、古瀬戸、大窯の編年は主として注５）、６）による。また、楢崎彰一氏より多くのご教示を得た。
7）「清洲城下町遺跡」（『年報昭和61年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1987）
8）『愛知県埋蔵文化財情報５』愛知県教育委員会　1990
9）小澤一弘「清洲城下町遺跡出土の瓦について」（『年報昭和61年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1987）

なお、木簡類、墨書土器の釈読にあたっては加藤優氏、志水正司氏、綾村宏氏の御教示を得た。特に1271、1324は綾村氏、1298は加藤氏の釈読によるものである。また、石材の同定は永草康次、楯真美子、伊藤隆彦による。



第72図　C期・その他の時期の遺物実測図

第４章　自然科学的分析

第１節　土器胎土重鉱物分析報告

今回の清洲城下町遺跡の発掘調査に関連して、土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。以下はその分析報告である。なお、報告は上記の依頼報告書に基づいたが、一部変更を行っており、その責はすべて編者にある。

１．課題と試料

清洲城下町遺跡Ｂ期（平安時代後期）・Ｃ期（鎌倉時代～江戸時代初期）に所属する土器及びそれに関連して、周辺の遺跡出土遺物を対象にした。試料は、愛知県、三重県、静岡県内の各地の遺跡より出土した10世紀から18世紀までの土師器計58点である。試料の出土した遺跡名、器形、時代、表面観察結果などは第９表に示す。

２．分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、＃250の分析篩により水洗、粒径１/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた１/４－１/８mmの粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

３．分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたが、これに満たない試料が17点あった（第10表）。更に同定粒数が100個に満たない資料はNo28、42、43、48、56、58の６点であった。これらの試料は組成を正しく表していないと考えられるのでデータとして他の試料とは同等には扱えない。したがって後述する試料のグループ分けからは除外した。試料は全体的にみて角閃石・黒雲母を多く含み、少量のジルコンやザクロ石を伴うものが多い（第73図）。しかしNo49、51、53、55、57の５点は斜方輝石と単斜輝石を多く含み他の試料とは組成の傾向が異なる。

４．考察

(1)　試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合せ及びその量比などから以下のような試料グループ分けを行った。

Ⅰグループ

角閃石を最も多く含み、少量の単斜輝石・ジルコン・不透明鉱物を伴う。次の２つのグループに細分した。

Ⅰ－１（No.１、２、12、13、26）

ザクロ石を全くあるいはほとんど含まない。

Ⅰ－２（No.３、５～９、14～16、31～34、36～39、41）

少量のザクロ石を含む。

試料番号	遺跡名（所在地）	調査区・遺構	器形	時代（世紀）	表面の色（表・裏）	表面の質感（表・裏）	表面にみられる砂粒など（表・裏）
1	清洲城下町（清洲町）	62J2 検I	カメ	10～11	灰黄褐～黒褐・にぶい褐	やや粗い	灰色岩片・黒雲母片少量含む。－黒雲母片微量含む。
2	〃	〃	〃	〃	にぶい褐・にぶい赤褐	やや粗い	灰色・白色岩片少量、黒雲母片微量含む。
3	〃	〃	〃	〃	黒褐～褐灰・灰褐	ややきめ細か	黒雲母片微量含む。
4	〃	62J2 検II	〃	〃	明黄褐～にぶい赤褐・にぶい赤褐	粗い	灰色・白色岩片多量・黒色岩片少量含む。
5	〃	〃	〃	〃	灰褐・にぶい橙	やや粗い	白色粒・白色岩片少量含む。－白色粒・白色岩片多量含む。
6	〃	〃	〃	〃	にぶい褐・にぶい橙	粗い－ややきめ細か	白色岩片（最大径3mm）少量含む。
7	〃	62J2 土器群	〃	〃	にぶい橙・にぶい褐	粗い－やや粗い	白色・灰色岩片多量含む。－白色岩片少量含む。
8	〃	〃	〃	〃	にぶい橙・にぶい赤褐	やや粗い－きめ細か	白色粒・白色岩片少量含む。
9	〃	〃	〃	〃	橙・同	粗い	白色岩片多量含む。
10	〃	62J2 検IV	〃	〃	にぶい黄橙・灰褐	粗い	白色・灰色岩片多量含む。－白色粒・白色岩片・灰色岩片多量含む。
11	〃	〃	〃	〃	灰黄褐・灰褐	粗い	白色岩片多量、黒色岩片少量含む。－白色粒・黒色結晶多量含む。
12	〃	〃	〃	〃	にぶい褐・灰褐～にぶい橙	粗い	白色粒・白色岩片多量、黒雲母片微量含む。
13	清郷（一宮市）	包含層	〃	〃	暗灰褐・灰褐	ややきめ細か	黒雲母片少量含む。
14	〃	〃	〃	〃	灰褐・褐灰	ややきめ細か	白色粒微量含む。
15	〃	〃	〃	〃	灰褐・にぶい褐	ややきめ細か－粗い	灰色岩片微量含む。－白色岩片多量含む。
16	〃	〃	〃	〃	にぶい褐・同	ややきめ細か－やや粗い	白色粒微量含む。
17	堀ノ内C（三重・嬉野町）	〃	ナベ（伊勢型ナベ）	12	明褐灰・明褐灰～褐灰	ややきめ細か	白色粒微量含む。
18	〃	〃	〃（〃）	〃	灰褐・浅黄橙	やや粗い	白色粒・黒色結晶多量含む。－灰色岩片少量含む。
19	〃	〃	〃（〃）	〃	にぶい橙・同	やや粗い	白色岩片多量に含む。
20	〃	〃	〃（〃）	〃	灰褐・同	ややきめ細か－やや粗い	白色粒微量含む。－白色粒・白色岩片少量含む。
21	中新田（三重・伊勢市）	〃	〃（〃）	13	褐灰・褐～灰白	ややきめ細か－やや粗い	砂粒目立たず。－灰色岩片微量含む。
22	〃	〃	〃（〃）	〃	黒～灰褐・にぶい橙	粗い	白色粒・灰色岩片多量含む。
23	〃	〃	〃（〃）	〃	黒～灰褐・にぶい橙	粗い	白色粒・灰色岩片多量含む。
24	〃	〃	〃（〃）	〃	褐灰・褐～にぶい黄橙	ややきめ細か－粗い	砂粒目立たず。－白色粒・灰色岩片多量含む。
25	殿ノ下（三重・松阪市）	〃	〃	14末～15	浅黄・同	やや粗い－粗い	灰色岩片少量含む。－灰色岩片多量に含む。
26	古市（三重・白山町）	〃	〃（伊勢型ナベ）	16	にぶい褐・浅黄橙	ややきめ細か	黒雲母片中量含む。－灰色岩片微量含む。
27	〃	〃	〃（〃）	〃	黒褐・灰褐	きめ細か	砂粒目立たず。
28	〃	〃	〃（〃）	〃	にぶい黄橙・にぶい橙	きめ細か	砂粒目立たず。
29	〃	〃	〃（〃）	〃	黒～灰褐・にぶい褐	きめ細か	砂粒目立たず。
30	ミゾコ（三重・松阪市）	大溝	〃（〃）	14	灰白・同	粗い	白色・灰色岩片多量含む。
31	宮竹野際（静岡・浜松市）	SD-03	〃（清郷型ナベ）	10～11	にぶい橙・同	粗い－ややきめ細か	白色岩片多量含む。－黒雲母片少量含む。
32	〃	SD-01	〃（〃）	〃	にぶい橙・同	粗い	白色岩片・黒雲母片多量含む。
33	[illegible]多光院寺（知波田）（静岡・湖西市）	包含層	〃（〃）	〃	明赤褐・にぶい赤褐	粗い－やや粗い	白色粒・白色岩片少量含む。
34	〃	〃	〃（〃）	〃	にぶい橙～灰褐・灰褐	やや粗い	白色粒・白色岩片少量、黒雲母片微量含む。
35	山ノ神（静岡・浜松市）	井戸	〃（内耳ナベ）	16	黒～褐・灰白	ややきめ細か	砂粒目立たず。－灰色岩片少量含む。
36	西浦（三河・一宮町）	SB-01	〃（清郷型ナベ）	10～11	にぶい褐～灰褐・褐灰	きめ粗い－きめ細か	白色岩片微量含む。－砂粒目立たず。
37	〃	〃	〃（〃）	〃	灰褐・褐灰	ややきめ細か	白色粒多量含む。
38	〃	〃	〃（〃）	〃	にぶい橙・同	粗い	白色粒・白色岩片多量含む。
39	朝日西（清洲町）	59E SK236	〃（〃）	〃	明褐灰・灰褐	やや粗い－ややきめ細か	白色粒・白色岩片少量含む。－白色粒微量含む。
40	〃	57 SD03	ナベ（茶釜型ナベ）	16	明褐灰・同	きめ細か	砂粒目立たず。
41	〃	59E 包含層	〃（ほうろく）	〃	黒褐・灰褐	ややきめ細か	微細黒色結晶多量含む。－微細黒色結晶多量白色粒微量含む。
42	〃	〃	羽釜（大型）	〃	灰白・同	きめ細か－やや粗い	砂粒目立たず。－灰色岩片多量含む。
43	〃	〃	ナベ（ほうろく）	〃	灰褐・にぶい褐	ややきめ細か	白色粒少量含む。
44	清洲城下町	62C SK65	〃（内耳ナベ）	〃	黒・同	きめ細か	砂粒目立たず。
45	朝日西	58 SK66	〃	〃	黒～灰褐・灰褐	きめ細か	微細黒色結晶多量に含む。
46	清洲城下町	61B SK45	〃（ほうろく）	18	褐灰・黒	きめ細か	砂粒目立たず。
47	〃	〃	〃（〃）	〃	黒～褐灰・にぶい黄褐～灰褐	ややきめ細か	灰色岩片・白色粒微量に含む。－黒雲母片多量含む。
48		P81(62E P7)	皿（ろくろ）	11	浅黄橙・にぶい黄橙	きめ細か	砂粒目立たず。黒褐粒部分的に多い。
49	朝日西	59E SK235	皿（てづくね）	14	淡橙～浅黄橙・同～同	やや粗い	白色岩片多量に含む。
50	〃	59G SD25	皿（ろくろ）	12	浅黄橙～灰白・淡橙	きめ細か	砂粒目立たず。
51	清洲城下町	P81(62E P7)	〃 〃	11	にぶい橙・にぶい橙～にぶい褐	ややきめ細か	白色粒少量含む。
52	〃	〃	皿（てづくね） 〃	〃	灰白・同	ややきめ細か	灰色岩片微量含む。
53	朝日西	59E SK235	皿（てづくね）	13	浅黄橙・同	やや粗い	灰色岩片少量含む。
54	〃	59G SK65	〃	12	浅黄橙・同	ややきめ細か	褐色粒少量含む。
55	〃	59C SK20	〃	14	灰白・同	やや粗い	白色岩片少量含む。
56	清洲城下町	62C SK65	〃	16	灰白・同	きめ細か	砂粒目立たず。
57	朝日西	59D SD01	〃	15	浅黄橙・同	ややきめ細か	白色岩片少量含む。
58	清洲城下町	62C SK65	皿（ろくろ）	16	浅黄橙～灰白・同～同	きめ細か	砂粒目立たず。φ3mmのチャートあり。

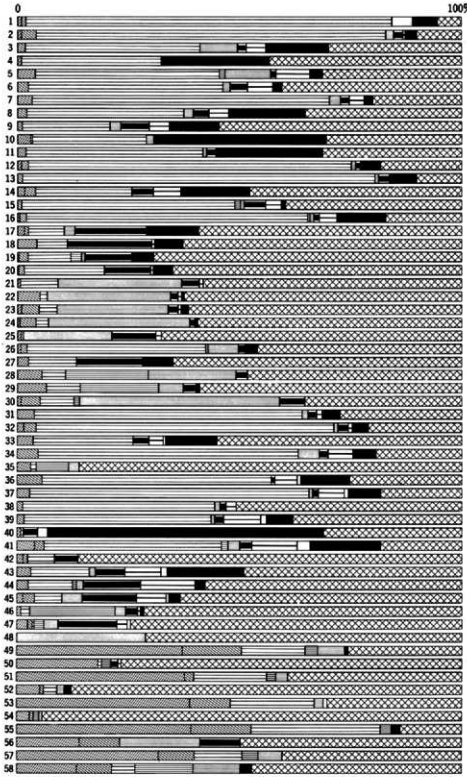
＊ 岩片 ： 粒径約0.5～2mm程度の角ばった砂粒。
粒 ： 粒径0.2mm程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

第9表　清洲城下町遺跡関連試料土器胎土分析試料表

試料番号	重鉱物組成													同定鉱物粒数
	カンラン石	*斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		ジルコン	ザクロ石	電気石	不透明鉱物	その他	
							緑色	赤褐色						
1		2	3	197		8	12		1			12	15	250
2		2	9	194		2	4		5	1		6	27	250
3		1	3	98			21		5	11		35	76	250
4		1	1	78			1		1			59	109	250
5		1	9	103	3		24	2	3	19		7	79	250
6			6	109			2	2	10	14	3	5	99	250
7		1	7	163		3	5	1	5	8	1	5	51	250
8			5	88			2	3	9	11		43	89	250
9			3	49			6		16	11	1	28	136	250
10		7	1	64			4		1		1	96	76	250
11		5		99			2		5		2	60	77	250
12		2	4	176		5	2		2	1		11	47	250
13		1	2	182		15	2		5	1		15	27	250
14		4	6	54					12	15		39	120	250
15			3	118	3	1	2		12	9	1	2	99	250
16		1	4	148	1	10	1	1	3	10	2	27	42	250
17		4	2	20			6		40			29	149	250
18	1		10	13		2			42	1	2	14	135	220
19		1	5	23	6	1	2		26		1	12	173	250
20		1	3	42		3			26	1		11	163	250
21			1	21			51	18	10	1	1		147	250
22			12	4			49	20	4	2		1	158	250
23		1	10	10			51	11	6	1		4	156	250
24		1	9	7			54	25	3			1	150	250
25		1		1			18	18	18	2			124	182
26		1	3	86	1		15		3			6	101	216
27		2		11					15			7	67	102
28			4	4	14		7	8	2				37	76
29			9	11	25		5	3	4			1	86	144
30		1	11	19	3		109	3	14				90	250
31			9	150			3		5	3		10	70	250
32		3	7	162		5	2		6	2		9	54	250
33			8	56					9	8	1	29	139	250
34			11	146			10	2	5	14		13	49	250
35		7		3	18			6					216	250
36			7	70					1	7	1	15	35	136
37			6	154		3	2		3	15	2	18	47	250
38			2	108			2	1	3	6	1		127	250
39			3	105			1	1	5	21	3	15	96	250
40		1		1					6		4	113	57	182
41		5	3	58	2			4	4	15	4	23	27	145
42		1	1	6					5				84	97
43			2	10				1	5	6	1	13	37	75
44			3	13	1		1	1	17	16		3	76	131
45		2	5	9		3	2	7	24	13	1	5	124	195
46		1		5	48		1	5	7	1		2	180	250
47		5	3	1	5		1	7	33	6	2		187	250
48							4						10	14
49		92	33	36	7		12	3	1			1	65	250
50		24		1	3				2	1			104	135
51		93	5	41	5		7						99	250
52		6	1	4			1	1				2	112	127
53		92	22	45			3	2	1		1		73	239
54		6	2		3		1	1					237	250
55		97	34	73	6		1		1	1		2	35	250
56		3	2					4	2				11	22
57		35	9	12	4		1	5					45	111
58		5	3	2	5		2	2				1	18	38

* 数値は全て粒数。

第10表 清洲城下町遺跡関連試料土器胎土重鉱物分析結果



第73図　清洲城下町遺跡関連試料胎土重鉱物組成

II グループ（No.44、45、47）

ジルコンが最も多く次にザクロ石が多い。

III グループ（No.17～20、27）

角閃石またはジルコンが最も多く、少量の不透明鉱物を伴う。

IV グループ（No.4、10、11）

角閃石と不透明鉱物が多い。

V グループ（No.21～25、30）

黒雲母が最も多く、少量の角閃石とジルコンを伴う。

VI グループ（No.29、46）

酸化角閃石が最も多い。

VII グループ（No.40）

不透明鉱物が最も多い。

VIII グループ（No.49、51、53、55、57）

斜方輝石と単斜輝石を主体とする。

IX グループ（No.35、50、52、54）

「その他」が非常に多い。

(2) 胎土と土器の時代・器種との関係について

本分析の試料のうち、最も点数の多い清洲城下町遺跡出土の試料について前項の胎土のグループと土器の時代・器種との間に次のような対応が認められた。すなわち、10－11世紀の煮炊具（カメ）は、すべてIまたはIVグループに属し、12－18世紀の煮炊具（ナベ）はすべてIIまたはVIグループに属する。この関係は、時代による胎土の変遷あるいは器種による胎土の選択を示唆するともいえるが、しかしそれを述べるには更に試料を分析して検討しなければならない。

また、No.49以降の分類項目である「てづくね」・「ろくろ」の区別も特に胎土との関係は認められない。

(3) 土器の移動について

本分析に胎土のグループと遺跡の所在地との間には以下に示すような対応が認められた。

I グループ：濃尾平野に位置する清洲城下町遺跡・清郷・朝日西の各遺跡と静岡県西部に位置する宮竹野際・奥多米廃寺の両遺跡および三河東部の西浦遺跡の試料からなる。No.26の1点のみ三重県の古市遺跡の試料である。

II グループ：濃尾平野の清洲城下町・朝日西の両遺跡の試料のみ

III グループ：三重県の堀ノ内C・古市の両遺跡の試料のみ。

IV グループ：清洲城下町遺跡の試料のみ。

V グループ：三重県の中新田。藪ノ下・ミゾコの各遺跡の試料からなる。

VI・VII グループ：試料数が少ないので関係は不明である。

VIII グループ：濃尾平野の清洲城下町・朝日西の両遺跡の試料のみ。

IX グループ：全4点のうち3点は清洲城下町・朝日西の両遺跡の試料、No.35の1点は浜松の山ノ神

遺跡の試料である。

以上の関係から次の２つのことが言える。

まず、濃尾平野における10～11世紀の土師器の中ではⅠグループのような組成を持つ胎土の一群があり、これとよく似た胎土の土師器が三河地域および静岡県西部にも存在するということである。三河地域と静岡県西部の試料は全て「清郷型鍋」と分類されたものであり、形態的にも濃尾平野の試料との類似性が指摘される。したがって、Ⅰグループの試料は、ある一つの供給地域から供給されたものかあるいは濃尾平野と静岡のどちらかが供給地となって両地域間での土器の移動があった可能性が考えられる。

二つ目は、本分析の三重県の試料の胎土の質はよくそろっており、本分析の愛知県の試料の胎土とはあまり類似性が認められないということである。三重県の試料は、ⅢグループとⅤグループに属し、それぞれ(1)項で述べたように特徴的な組成を示す。つまり、今回の分析からは愛知県と三重県の間で土器の移動があった事を積極的に支持する材料は得られず、さらに検討をしなければならない。

(4) Ⅷグループの組成について

斜方輝石＋単斜輝石を主体とするⅧグループの組成は、志貴野遺跡関連試料の胎土分析の報文[1]で問題にした組成に相当する。その報文中では、問題の組成を示す土器は濃尾平野に位置する遺跡のみから出土することを述べた。本分析でもⅧグループの試料はすべて清洲城下町または朝日西の濃尾平野に位置する遺跡から出土したものである。したがって、斜方輝石＋単斜輝石を主体とする重鉱物組成を持つ胎土の土器が濃尾平野における在地の土器である可能性がさらに高くなったと考える事ができる。

5　まとめ

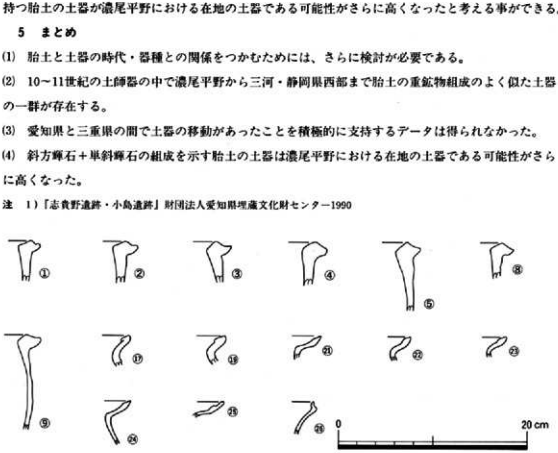
(1) 胎土と土器の時代・器種との関係をつかむためには、さらに検討が必要である。

(2) 10～11世紀の土師器の中で濃尾平野から三河・静岡県西部まで胎土の重鉱物組成のよく似た土器の一群が存在する。

(3) 愛知県と三重県の間で土器の移動があったことを積極的に支持するデータは得られなかった。

(4) 斜方輝石＋単斜輝石の組成を示す胎土の土器は濃尾平野における在地の土器である可能性がさらに高くなった。

注　1)『志貴野遺跡・小島遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990



第74図　胎土分析試料実測図

第２節　材質（樹種）同定

今回の発掘調査に関連して、木製遺物の材質同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。以下はその依頼報告であるが、２回にわたって同定を依頼したため、一部組替え・変更を行い、合わせてここに報告する。その責はすべて編者にある。

（１）資料

試料は135点で13～20世紀（16世紀が主）のものとされる漆椀・下駄・曲物などの木製品である（第11表）。

（２）方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。

（３）結果

試料は遺物の周辺部から少量採取されたものであり、劣化が進み確実な同定のできないものもあったが、135点が以下の14種類（Taxa）に同定された。各試料のおもな解剖学的特徴は次のようなものである。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*）スギ（コウヤマキ）科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は窓状。放射組織は単列。１～５細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*）スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型（Cupressoid）で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・クマシデ属の一種（*Carpinus* sp.）カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に２～５個が複合する。横断面では楕円形、単穿孔をもち、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～40細胞高のものと集合組織よりなる。年輪界は明瞭。

・ハンノキ属の一種（*Alnus* sp.）カバノキ科

散材孔で、管孔は放射方向に２～４個が複合または単独、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔をもち、段（bar）数は10～30。放射組織は同性、単列、１～30細胞高。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

・ブナ属の一種（*Fagus* sp.）ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合、横断面では多角形。道管は単および階段

試料番号	図版番号	調査区・遺構	種別	時期	種名	試料番号	図版番号	調査区・遺構	種別	時期	種名
1	(1)	(62C SK65)	漆椀A	Ⅱ-1	ブナ属の一種	69	1301	63E SD136	漆椀A	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種
2	(2)	(62C SK65)	漆椀A	Ⅱ-1	ブナ属の一種	70	1309	63E SD136	漆椀H	Ⅱ-1a	トチノキ
3	(3)	(62C SK65)	漆椀B	Ⅱ-1	カツラ	71	1304	63E SD136	漆椀A	Ⅱ-1a	クリ
4	(4)	(62C SK65)	漆椀B	Ⅱ-1	サクラ属の一種	72	1307	63E SD136	漆椀A	Ⅱ-1a	トチノキ
5	(5)	(62C SK65)	漆椀F	Ⅱ-1	ブナ属の一種	73	1302	63E SD136	漆椀A	Ⅱ-1a	トチノキ
6	(6)	(62C SK65)	漆椀F	Ⅱ-1	ブナ属の一種	74	1305	63E SD136	漆椀G	Ⅱ-1a	カエデ属の一種
7	(7)	(62C SK65)	漆椀	Ⅱ-1	サクラ属類似種	75	(22)	(63C SD14)	漆椀A	Ⅱ-2b	ブナ属の一種
8	(8)	(62C SD04)	漆椀A	Ⅱ-2a	トチノキ	76	(23)	(63C SD14)	漆椀A	Ⅱ-2b	トチノキ
9	(9)	(62C SD04)	漆椀B	Ⅱ-2a	トチノキ	77	(24)	(63C SD07)	漆椀A	17世紀末	カエデ属の一種
10	(10)	(62C SD04)	漆椀A	Ⅱ-2a	トチノキ	78	(25)	(63C SD07)	漆椀	17世紀末	トチノキ
11	(11)	(62C SD04)	漆椀A?	Ⅱ-2a	トチノキ	79	(26)	(63C SX05)	漆椀	17世紀末	ブナ属の一種
12	(12)	(62C SD04)	漆椀A	Ⅱ-2a	トチノキ	80	(27)	(63C SX05)	漆椀B?	17世紀末	カツラ
13	(13)	(62C SD04)	漆椀B	Ⅱ-2a	トチノキ	81	(28)	(63C SD10)	漆椀B?	Ⅱ-1	ブナ属の一種
14	(14)	(62C SD04)	漆椀B	Ⅱ-2a	トチノキ	82		(63C SD10)	漆椀B?	Ⅱ-1	ケヤキ
15	(15)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	広葉樹(散孔材)	83	1241	63F SD101	漆椀C	Ⅱ-1b	ケヤキ
16	(16)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	トチノキ	84	1237	63F SD101	漆椀A	Ⅱ-1b	トチノキ
17	(17)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	ブナ属の一種	85	1238	63F SD101	漆椀A	Ⅱ-1b	クリ
18	(18)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	ブナ属の一種	86	1240	63F SD101	漆椀A	Ⅱ-1b	クリ
19	(19)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	ケヤキ	87	1242	63F SD101	漆椀A	Ⅱ-1b	クリ
20	(20)	(61B SK45)	漆椀	19世紀中	ブナ属の一種	88	1277	63G SD112	漆椀B	Ⅱ-1a	トチノキ
21	(21)	(61B SK45)	漆椀B	19世紀中	ブナ属の一種	89		(63C SX05)	漆椀	17世紀末	トチノキ
22		(62C SK65)	下駄B本体	Ⅱ-1	モクレン属の一種	90	1280	63H SD116	漆椀B	Ⅱ-1	ブナ属の一種
23		(62C SK65)	下駄B歯部	Ⅱ-1	広葉樹(散孔材)	91	1279	63H SD116	漆椀A	Ⅱ-1	トチノキ
24		(62C SK65)	下駄B本体	Ⅱ-1	モクレン属の一種	92	1270	63K SD111	漆椀B	Ⅱ-2a	トチノキ
25		(62C SK65)	下駄B歯部	Ⅱ-1	モクレン属の一種	93	1257	63K SD110	漆椀A	Ⅱ-1	トチノキ
26		(62C SD04)	下駄B本体	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	94	1258	63K SD110	漆椀A	Ⅱ-1	ハンノキ属の一種
27		(62C SD04)	下駄B歯部	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	95	1256	63K SD110	漆椀D	Ⅱ-1	ケヤキ
28		(62C NR01)	下駄B本体	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	96	1252	63K SD110	漆椀A	Ⅱ-1	トチノキ
29		(62C SK65)	下駄A	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	97	1253	63K SD110	漆椀A	Ⅱ-1	トチノキ
30		(62G SD03)	下駄A	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	98	1259	63K SD110	漆椀A	Ⅱ-1	クリ
31		(62C SD04)	下駄B補強材	Ⅱ-2a	コウヤマキ	99	1255	63K SD110	漆椀B?	Ⅱ-1	ブナ属の一種
32		(62C SK65)	曲物側板	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	100	1323	63E SD136	下駄A	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種
33		(62C SK65)	曲物側板	Ⅱ-1	ヒノキ属類似種	101	1322	63E SD136	下駄B	Ⅱ-1a	ヤマグワ
34		(62C SD04)	曲物側板	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	102	1244	63F SD101	下駄C本体	Ⅱ-1b	ヒノキ属の一種
35		(62C SD04)	曲物側板	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	103	1244	63F SD101	下駄C歯部(前)	Ⅱ-1b	ヒノキ属の一種
36		(62C SD04)	曲物側板	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	104	1244	63F SD101	下駄C歯部(後)	Ⅱ-1b	ヒノキ属の一種
37		(62C SD04)	曲物側板	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	105	1245	63F SD101	下駄A	Ⅱ-1b	ヤマグワ
38	1348	62I SE125	曲物側板	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種	106	1314	63E SD136	桶側板	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種
39		(62C SK65)	箸	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	107	1262	63K SD110	桶側板	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種
40		(62C SD04)	箸	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	108	1318	63E SD136	折敷	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種
41	1347	62H SE120	釣瓶側板	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	109	1317	63E SD136	折敷	Ⅱ-1a	ヒノキ属の一種
42	1347	62H SE120	釣瓶底板	Ⅱ-2a	ヒノキ属類似種	110	1247	63F SD101	折敷	Ⅱ-1b	ヒノキ属の一種
43	1347	62H SE120	釣瓶把手	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	111	1246	63F SD101	折敷	Ⅱ-1b	ヒノキ属の一種
44	1344	62H SE120	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	112	1263	63K SD110	杓子	Ⅱ-1	モクレン属の一種
45	1345	62H SE120	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	113	1342	62E SE108	井戸枠上段	Ⅱ	ヒノキ属の一種
46	1346	62H SE120	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	114	1343	62E SE108	井戸枠下段	Ⅱ	ヒノキ属の一種
47	1340	62H SE121	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	115		(63C SE03)	井戸枠	19世紀	ヒノキ属の一種
48	–	62J SE129	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	116		(63C SE05)	井戸枠	19世紀	コウヤマキ
49		(61A SE05)	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	117	–	63F SE101	井戸枠	現代	スギ
50		(61A SE10)	井戸枠	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	118	–	63G SE103	井戸枠	Ⅱ-2	ヒノキ属の一種
51	–	62F SE110	井戸枠 たて板	Ⅰ-2	コウヤマキ	119	–	63F SE104	井戸枠	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種
52	–	62F SE110	井戸枠 横桟	Ⅰ-2	コウヤマキ	120	–	63E SE119	井戸側板	Ⅰ-2	ヒノキ属の一種
53	–	62H SE120	くさび	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	121	1333	63L SD137	へら	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種
54	–	62H SE120	くさび	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	122	1332	63L SD137	下駄B	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種
55	–	62H SE120	くさび	Ⅱ-2a	ヒノキ属の一種	123	1331	63L SD137	漆椀A	Ⅱ-2a	クマシデ属の一種
56	–	62F SE110	井戸枠 たて板	Ⅰ-2	コウヤマキ	124	(29)	(63C SX05)	漆椀	17世紀末	トチノキ
57		(62C SK65)	箱物	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	125	(30)	(63C SX05)	漆椀	17世紀末	トチノキ
58		(62C NR01)	へら	Ⅱ-1	広葉樹(環孔材)	126	(31)	(63C SX05)	漆椀A?	17世紀末	ブナ属の一種
59		(62C NR01)	板	Ⅱ-1	ヒノキ属類似種	127	(32)	(63C SX05)	漆椀A・B	17世紀末	トチノキ
60		(62C SK65)	板	Ⅱ-1	ヒノキ属の一種	128	(33)	(63C SX05)	漆椀B	17世紀末	ブナ属の一種
61		(62C NR01)	漆椀A	Ⅱ-1	ケヤキ類似種	129	(34)	(63C SX05)	漆椀	17世紀末	ブナ属の一種
62		(62C NR01)	漆椀F	Ⅱ-1	トチノキ	130	(35)	(63C SX05)	漆椀F	17世紀末	トチノキ
63		(62C NR01)	漆椀F	Ⅱ-1	サクラ属類似種	131	(36)	(63C SD14)	漆椀A	17世紀末	ケヤキ
64		(62C SD04)	漆椀A?	Ⅱ-2a	広葉樹(散孔材)	132	(37)	(63C SX05)	漆椀	17世紀末	トチノキ
65		(62C SD04)	漆椀A	Ⅱ-2a	トチノキ	133	(38)	(63C SX05)	漆椀A	17世紀末	トチノキ
66		(62C SD04)	漆椀B	Ⅱ-2a	トチノキ	134	(39)	(63C SX05)	漆椀D	17世紀末	トチノキ
67	1303	63E SD136	漆椀A	Ⅱ-1a	サクラ属の一種	135	(40)	(63C SD07)	漆椀B	17世紀末	ブナ属の一種
68	1306	63E SD136	漆椀B	Ⅱ-1a	トチノキ						

第11表　清洲城下町遺跡出土材の樹種

穿孔をもち、階段穿孔の段数は10前後。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもつ。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*）ニレ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞高幅、1～60細胞高、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

・ヤマグワ（*Morus bombycis*）クワ科

環孔材で孔圏部は1～5列。晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum*）カツラ科

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は横断面では多角形、階段穿孔をもち、段数は20以上。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～30細胞高。年輪界はやや明瞭。

・モクレン属の一種（*Magnolia* sp.）モクレン科

散孔材で、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は横断面では角張った楕円形～多角形、単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。年輪界はやや明瞭。

・サクラ属の一種（*Prunus* sp.）バラ科

散孔材で、単独または2～4個が複合する。道管は横断面では角張った楕円形、単穿孔をもち、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織はⅢ～Ⅱ型、1～6細胞幅、1～50細胞高。年輪界はやや不明瞭。

・カエデ属の一種（*Acer* sp.）カエデ科

散孔材で、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は横断面では角張った楕円形、単穿孔をもち、内壁には不明瞭ならせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～6細胞幅、1～50細胞高。年輪界はやや不明瞭。

・トチノキ（*Aesculus turbinata*）トチノキ科

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層

状に配列し、肉眼ではリップル・マーク（ripple mark）として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

以上の同定結果を検出遺構や用途などとともに一覧表で示す。（第11表）

（4）考察

試料は13～20世紀までの時代幅をもつとされるが、これらを一括して各用途別にその使用樹種を見ると、特定の用途に特定の樹種が用いられている（第12表）。いずれも、これまで各地・各時代の遺物で知られている類例や現在のものと同様の用材である（例えば、島地・伊東1988など）。このうち資料数の最も多い漆椀では使用樹種もまた多く10Taxaが用いられるが、トチノキ・ブナ属が68%を占める。形態による差異は特に見られないが、時期ごとに見てみると、Ⅱ－1期、17世紀末～18世紀前半、19世紀中頃の漆椀はトチノキ・ブナ属の他、2～7 Taxaが用いられるのに対し、Ⅱ－2期の場合はトチノキが8割弱を占める。

類別されている13用途のうち、漆椀、杓子を除く11用途にはヒノキ属が用いられている。しかも、下駄・井戸枠、箆を除く8用途はヒノキ属のみが使われている。井戸枠に関してもⅠ期のものはコウヤマキ製であるのに対し、Ⅱ期では全てヒノキ属が使用されている。また、17世紀以降になると多種類の用材がみられる。

ヒノキ属は、最近では高級建築用材などに限定される傾向にあるが、当時は建築・土木用材から日用雑貨類まで広い範囲に利用されていたことが分かる。資料の多くは16世紀ごろのものと推定されているが、15世紀ごろには大都市などでは材木座が組織され木材の市場が形成されており、また、1606年の駿府城築城の際には、ヒノキ・サワラ多数が木曽から運ばれたとされる（筒井1982）。こうした時代背景を考えると、ここで認められた遺物の中には、近郊から供給されたものだけでなく、製品や原木として遠方から搬入されたものも多く含まれているのではないだろうか。

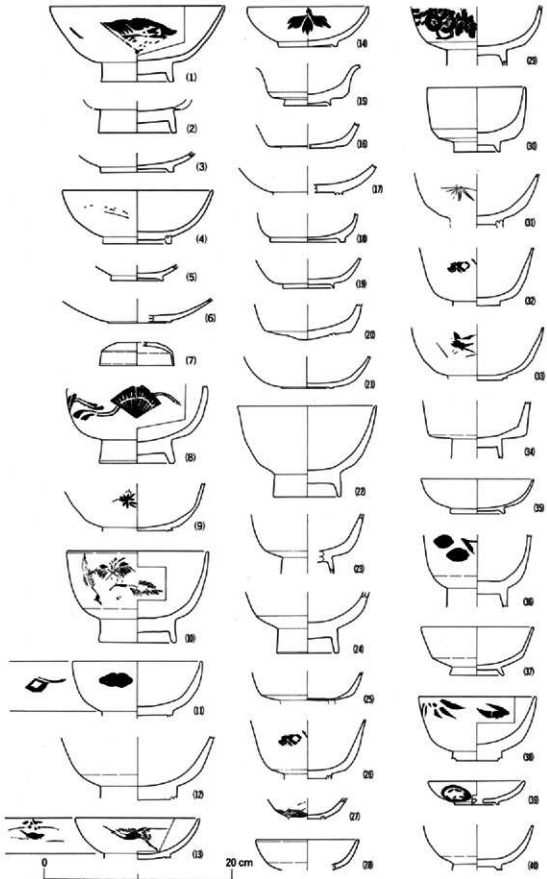
引用文献

島地　謙・伊東隆夫(編)1988　『日本の遺跡出土製品総覧』雄山閣

筒井　迪夫　　1982　『朝日選書219山と木と日本人　林業事始』朝日新聞社

	漆椀					杓子	へら	下駄	曲物	砧板	桶	箸	つるべくさび	箱	板	井戸		
	Ⅱ－1		Ⅱ－2	17C	19C											Ⅰ	Ⅱ	17C以降
	AB	C～F																
ヒノキ属	1						1	10	7	4	2	2	3	3	1	2	12	1
トチノキ	9	2	11	9	1													
ブナ属	5	2	1	5	4													
ケヤキ	2	2		1	1													
クリ	5																	
サクラ属	2	2																
カツラ	1			1														
ハンノキ	1																	
モクレン							1	3										
コウヤマキ								1								3		1
カエデ		1		1														
ヤマグワ								2										
スギ																		1
クマシデ			1															
広葉樹(散孔材)			1		1			1										
広葉樹(環孔材)							1											
	26	9	14	17	7	1	2	17	7	4	2	2	3	3	1	2	3	12	3
																	18	

第12表　用途別の樹種構成



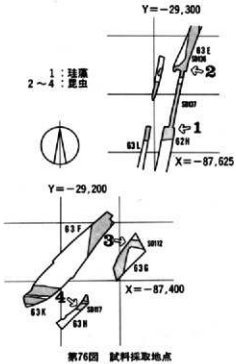
第75図　材質定試料（漆椀）の実測図

第３節　清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸（付・昆虫遺体）

１．試料の採取と処理

愛知県西春日井郡清洲町の清洲城下町遺跡の発掘調査に際して、清須城中堀SD137トレンチより採取した試料の珪藻分析を実施したので、その結果の概要をここに報告する。分析を行った試料は、清洲城下町遺跡62H区中堀トレンチおよびその基盤層から採取した18試料である。分析試料の採取位置は第76図に示すとおりである。

試料の分析にあたって、乾燥重量１ｇをトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。岩片除去ののち、水洗を４～５回くり返しながら、同時に比重選別を行った。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定した。珪藻殻の算定は、400倍で複数枚のプレパラート中の８走査線以上を検鏡し、鏡下に出現した個数と試料の希釈率から算出した。



第76図　試料採取地点

２．珪藻遺骸群集

同定した珪藻遺骸33属159種（変種を含む）のリストを第14表に、その生態値の百分率と出現頻度等を第77図に示した。群集組成と出現頻度等の分析結果から第77図に示したように清洲城下町遺跡の試料は下位よりＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４帯に区分される。以下に各帯の特徴を示す。

Ａ帯（No.１～No.４）

含有殻数は平均3.2×10^6個／ｇであった。とくに優占する種は見られないが、次のような種が比較的多く出現した。好アルカリ性・水流不定性種で付着生種の*Synedra ulna*（13%）およびｐＨ不定性・好止水性種で浮遊生種の*Melosira ambigua*（10%）、ほかに河川や池沼の水生植物などに付着して生活する*Eunotia*属の種群などである。群集組成の特徴は、ｐＨについては真～好アルカリ性種が37%（平均、以下同様）不定性種が53%、真～好酸性種が10%であった。水流性については大部分が不定性種であった。また珪藻の生態性については底生種が30%、付着生種が59%、浮遊生種が11%という割合で出現した。一方、水の影響をあまり受けないところでも生活することができる「陸生珪藻」は、平均で20%と比較的高い出現率を示した。

Ｂ帯（No.５～No.10）

含有殻数平均1.3×10^6個／ｇで、Ａ帯にくらべて減少する。とくに優占する種は見られない。群集組成の特徴は、ｐＨについては真～好アルカリ性種が41%を占め、不定性種および真～好酸性種は47%と12%であった。水流性についてはＡ帯同様、大部分が不定性種で占められた。また珪藻の生態性については底生種が42%、付着生種が49%、浮遊生種が９%という割合であった。陸生珪藻の出現率は

26%に達した。

C帯（No.11～No.14）

含有殻数平均4.1×10^6個／ｇで、全層準中でもっとも多い。とくに優占する種は見られない。群集組成の特徴は、ｐＨについては真～好アルカリ性種が39%、不定性種が49%、真～好酸性種が12%であった。水流性については不定性種が61%と依然高率を示すものの、真～好流水性種の出現率も19%と増加している。また珪藻の生態性については底生種が30%、付着生種が60%、浮遊生種が10%であった。陸生珪藻は減少し、わずかに５%出現したに過ぎない。

D帯（No.15～No.18）

含有殻数平均2.0×10^6個／ｇで、殻数は再び減少する。好アルカリ性・好止水性種で浮遊生種の*Cyclotella meneghiniana*の出現率が平均で50%にも達し、全試料を通じてきわめて優占する。群集組成では、ｐＨについては、真～好アルカリ性種が74%、不定性種が22%、真～好酸性種が４%であった。止水性種の出現率が60%と急増し、かわって不定性種（33%）および流水性種（７%）が著しく減少する。生態性では、底生種と付着生種がそれぞれ17%と26%にとどまり、浮遊生の種群が57%に達するようになる。陸生珪藻の出現率はC帯同様きわめて少なく、６%検出されたのみである。

３．考　察

珪藻遺骸群集から推定される清須城の中堀の古環境について述べる。

A帯中の珪藻遺骸群集は、60%に達する付着生の種群の出現によって特徴づけられる。小河川や池沼の挺水植物・沈水植物の根および茎などに付着して生活する*Synedra ulna*や*Eunotia*属、*Gomphonema*属の種群が多数見いだされること、陸生珪藻の出現率が高いことなどより、A帯は人里近くの水深の浅い湿地帯もしくは沼沢地に堆積した地層であろうと推定される。

B帯のころになると、水深はさらに浅くなり、水流の停滞にともなって水質汚濁が進行した。

つづくC帯は堀が改削されてからの堆積物にあたる。珪藻殻数の増加は水域が珪藻の生息しやすい環境に変化したことを示しており、流水性珪藻の出現率の増加もそれを裏づける。また、底生種および陸生珪藻の出現率の減少は、堀が掘削されて水深が深くなったことを物語っている。

D帯では、*Cyclotella meneghinina*の大増殖が見られた。Hustedt (1927-1966) によれば、*C. meneghiniana*は沿岸性で、海岸付近の汽水性プランクトンとして広く分布する。ｐＨについては好アルカリ性ないし不定性で、流れのゆるやかな富栄養水域に好んで生息する。とりわけ堀や水たまりなどに特有で、しばしば偶発性プランクトンとして異常発生することがあるといわれている。*C. meneghiniana*のこうした生態は、清須城の中堀の古環境を推定するうえで大変興味深い。

謝　辞

珪藻の算定と計数にあたっては、中村明実・服部恵子両名にお世話になった。ここに記して御礼申し上げる。

文　献

Hustedt, F. (1930) Bacillariophyta, *Die Susswasser Flora Mitteleuropas*. 10, *G.* Fischer. Jena. 466p.

Hustedt, F. (1927-1966) Die Kieselalgen Deutschland, Osterreichs und der Schweiz unter Berucksichtigung der Obrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. *Krypt gamen-Flora von Deutschland, Teil* 1～3, *Leipzig, W.*

Deutschland. 920p., 845p., 816p.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986・1988) Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, Pascher *A. Sissuasserflora von Mitteleuropa*. 876p, 596p.
小杉正人「珪藻の古生態学上の基礎的問題」*Diatom*, 2, 1986, 169-174.
森　勇一「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『年報　昭和62年度』財愛知県埋蔵文化財センター　1988、118-137
森　勇一・伊藤隆彦「古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷」『年報　昭和63年度』財愛知県埋蔵文化財センター　1989、76-91.

昆虫遺体

ＳＤ136、ＳＤ112、ＳＤ117、の３地点より採取した試料を、おもにブロック割りによって昆虫を検出した。

結果は第13表に示した。ＳＤ136・ＳＤ112の試料からは食葉性のコガネムシ科が最も優占し、水生昆虫もやや多い。これらの溝は、考古学的には、城下町期前期の屋敷地を囲む溝の一部であると考えられている。昆虫遺体群集からは、溝がある程度の水深を有していたこと、溝の周りにはカキなどの果樹やサクラなどの広葉樹が存在していたことが推定される。

ＳＤ117の試料はＳＤ117が近世以降使用され埋没した土層から採取した。膜翅目（ハエ？）の蛹が多数見つかったほか、ゴミムシ科、ハネカクシ科、ケシガムシ属など汚物に集まる昆虫で占められたことから、ゴミ穴として利用されていたと考えられる。　（森　勇一・伊藤隆彦）

第13表　昆虫遺体分析結果

生態	種名	SD136	SD112	SD117
水生	ゲンゴロウ科　DYTISCIDAE	1		
	キベリクロヒメゲンゴロウ　*Ilybius apicalis* Sharp	2		
	ゲンゴロウ　*Cybister japonicus* Sharp	1	1	
	オオミズスマシ　*Dineutus orientalis* (Modeer)	4		
	ガムシ科　HYDROPHILIDAE		7	
	ガムシ　*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky	2		
	ヒメガムシ　*Sternolophus rufipes* (Fabricius)		1	
	セマルガムシ　*Coelostoma stultum* (Walker)	4		1
	ケシガムシ属　*Cercyon* sp.			3
食糞性	エンマコガネ属　*Onthophagus* sp.	2		
	コブマルエンマコガネ　*Onthophagus atripennis* Waterhouse		2	
食屍性	ヒメエンマムシ　*Margarinotus weymarni* Wenzel		1	
地表性	ゴミムシ科　HARPALIDAE	3	4	3
	ハネカクシ科　STAPHYLINIDAE			3
雑食性	コメツキムシ科　ELATERIDAE	6	1	
食植性	ハムシ科　CHRYSOMELIDAE		3	
	ゾウムシ科　CURCULIONIDAE		1	
	コガネムシ科　SCARABAEIDAE			3
	スジコガネ亜科　RUTELINAE	21	14	
	サクラコガネ属　*Anomala* sp.		17	
	ドウガネブイブイ　*Anomala cuprea* Hope	1	6	
	ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* Motschulsky	1		
	マメコガネ　*Popillia japonica* Newmann	1		2
	シロテンハナムグリ　*Protaetia orientalis* (Gory et Perchelon)	1		
	不明の鞘翅目	164	116	21
	膜翅目？			112

第14表　清洲城下町遺跡中堀より検出された珪藻遺骸

	Species	pH	CURR	ECOL	CI	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	TOTAL
1	*Achnanthes clevei*	Alph	Ind	Epip	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2
2	*Achnanthes coarctata*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	·	·	·	·	·	·	3
3	*Achnanthes exigua*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1
4	*Achnanthes hungarica*	Alph	Ind	Epip	Ind	1	·	1	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	8	·	5	5	9	31
5	*Achnanthes inflata*	Alph	Ind	Epip	Ind	1	2	2	·	·	3	·	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	11
6	*Achnanthes lanceolata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	3	·	6	1	·	1	1	2	6	4	·	1	·	4	6	·	6	41
7	*Achnanthes linearis*	Ind	Ind	Epip	Ind	10	8	2	6	·	4	3	6	6	14	2	17	5	18	3	6	3	4	117
8	*Achnanthes marginulata*	?	?	Epip	?	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
9	*Achnanthes minutissima*	Ind	Ind	Epip	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	·	4
10	*Actinella brasiliensis*	Acph	Liph	Epip	Ind	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	3
11	*Amphora ovalis*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	4	·	2	·	·	8
12	*Amphora ovalis* var. libyca	Alph	Ind	Bent	Ind	1	1	·	·	·	·	1	·	1	1	2	·	·	·	·	·	·	·	7
13	*Amphora venata*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1
14	*Anomoeoneis exilis*	Ind	Liph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	1
15	*Bacillaria paradoxa*	Ind	Ind	Bent	Meha	·	·	·	·	4	1	1	3	2	·	·	1	·	·	·	1	·	·	13
16	*Caloneis bacillum*	Alph	Ind	Bent	Ind	1	1	1	·	·	·	·	·	·	·	2	2	1	1	·	·	·	·	9
17	*Caloneis hyalina*	Alph	Ind	Bent	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
18	*Caloneis silicula*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	3
19	*Ceratoneis arcus*	Alph	R ph	Epip	Ind	2	·	1	1	·	·	4	·	4	2	7	3	6	3	1	·	·	3	37
20	*Cocconeis diminuta*	Albi	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
21	*Cocconeis placentula*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	4	1	1	1	3	·	1	·	2	2	2	·	1	1	·	·	·	19
22	*Cocconeis placentula* var. euglypta	Alph	Ind	Epip	Ind	10	7	5	7	7	6	6	2	2	11	10	7	7	2	3	1	·	1	94
23	*Cyclotella comta*	Alph	Liph	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1
24	*Cyclotella meneghiniana*	Alph	Liph	Plan	Haph	·	1	·	4	1	·	1	4	·	1	·	8	1	25	76	97	123	102	444
25	*Cyclotella stelligera*	?	Libi	Plan	Ind	·	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	3
26	*Cymbella pusilla*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	2
27	*Cymbella aequalis*	Alph	Liph	Epip	Ind	1	·	·	·	1	1	·	·	1	8	·	2	·	1	·	·	·	·	15
28	*Cymbella affinis*	Acbi	Ind	Epip	Ind	1	1	·	·	1	3	1	1	1	·	·	·	·	1	2	·	·	·	12
29	*Cymbella aspera*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	2
30	*Cymbella cistula*	Acph	Libi	Epip	Ind	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
31	*Cymbella cuspidata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	2	·	·	·	1	·	·	·	1	·	·	·	·	4
32	*Cymbella gracilis*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
33	*Cymbella lanceolata*	Acph	Libi	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1
34	*Cymbella minuta*	Ind	R ph	Epip	Ind	5	3	6	6	4	3	12	6	10	·	6	8	13	10	6	1	4	·	103
35	*Cymbella naviculiformis*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	1	·	·	1	·	·	·	·	1	3	1	1	1	1	·	·	1	11
36	*Cymbella perpusilla*	Ind	R ph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	3
37	*Cymbella sinuata*	Ind	Libi	Epip	Ind	·	·	1	·	1	·	·	·	1	·	·	·	·	2	1	·	·	·	6
38	*Cymbella tumida*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	2	·	·	·	·	·	·	4	1	2	·	6	·	1	·	·	1	17
39	*Cymbella turgida*	Albi	Libi	Epip	Ind	·	1	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
40	*Cymbella turgidula*	Ind	Ind	Epip	Ind	7	8	12	8	5	4	4	1	12	2	23	17	14	9	7	2	3	1	139
41	*Denticulopsis lauta*				Euha	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1
42	*Diatoma hiemale*	Alph	R ph	Epip	Hpho	·	2	3	·	4	·	5	·	4	2	1	1	1	1	3	1	·	·	28
43	*Diatoma vulgare*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	1	3	1	1	·	1	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	11
44	*Diploneis ovalis*	Ind	Ind	Bent	Ind	1	3	5	3	1	1	·	4	·	1	2	1	1	·	·	·	·	·	23
45	*Diploneis puella*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	1	5	6	9	9	·	4	1	1	·	·	1	·	·	·	·	·	37
46	*Diploneis smithii*	Alph	Ind	Epip	Meha	1	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	3
47	*Epithemia zebra*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	1	2	1	1	·	3	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	12
48	*Eunotia arcus*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	2
49	*Eunotia diodon*	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	·	4	1	1	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	9
50	*Eunotia flexuosa*	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	·	1	·	1	·	·	·	·	·	4	1	·	1	·	·	·	·	9
51	*Eunotia gracilis*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1
52	*Eunotia lunaris*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	2	·	1	·	·	·	4
53	*Eunotia pectinalis*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	4	·	·	1	·	2	·	·	3	1	·	1	·	·	·	·	·	12
54	*Eunotia pectinalis* var. *minor*	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	6	3	5	5	2	5	2	1	·	10	2	8	2	3	1	1	·	57
55	*Eunotia pectinalis* var. *undulata*	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	·	1	·	1	2	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	8
56	*Eunotia praerupta*	Acph	Ind	Epip	Hpho	8	3	7	15	6	9	8	12	·	7	5	3	2	1	·	·	·	2	88
57	*Eunotia praerupta* var. bidens	Acph	Ind	Epip	Hpho	2	12	5	5	15	1	7	·	6	1	3	·	1	·	·	·	1	·	59
58	*Eunotia polidentula*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1
59	*Eunotia sudetica*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1
60	*Eunotia veneris*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	3	·	1	·	·	2	·	·	2	1	3	2	1	3	·	·	·	18
61	*Fragilaria construens*	Alph	Ind	Epip	Ind	7	6	3	·	1	2	1	1	·	·	·	3	3	3	2	·	1	2	35
62	*Fragilaria construens* var. *subsalina*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
63	*Fragilaria pinnata*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
64	*Fragilaria virescens*	Ind	Ind	Epip	Ind	1	·	·	·	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	4	·	·	8
65	*Frustulia vulgaris*	Ind	Ind	Epip	Ind	1	1	2	2	·	1	·	2	3	2	2	1	2	1	1	·	2	·	23
66	*Gomphonema abbreviatum*					·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	2
67	*Gomphonema acuminatum*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	1	·	·	·	·	·	3
68	*Gomphonema acuminatum* var. *coronata*	Ind	Liph	Epip	Ind	2	·	·	1	·	·	·	·	·	·	6	2	2	·	1	·	·	·	14
69	*Gomphonema angustatum*	Alph	Ind	Epip	Ind	3	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
70	*Gomphonema augur*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
71	*Gomphonema augur* var. *turris*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1
72	*Gomphonema clevei*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	2	1	2	8	6	2	4	·	3	4	2	8	2	6	2	·	·	52
73	*Gomphonema clevei* var. *inaequilongum*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	3	1	1	2	1	·	·	1	3	1	3	1	2	·	6	·	2	27
74	*Gomphonema constrictum*	Alph	Libi	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	1	·	2	2	5	·	2	14
75	*Gomphonema intricatum*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	4
76	*Gomphonema intricatum* var. *vibrio*	Ind	Ind	Epip	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
77	*Gomphonema longiceps*	Ind	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1
78	*Gomphonema olivaceum*	Alph	Ind	Epip	Ind	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	4
79	*Gomphonema parvulum*	Ind	R ph	Epip	Ind	2	10	10	4	4	4	6	1	10	8	7	5	3	9	6	2	11	3	105
80	*Gomphonema subtile*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	·	·	3
81	*Gyrosigma acuminatum*	Acbi	R ph	Bent	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
82	*Gyrosigma scalproides*	?	?	Bent	?	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
83	*Hantzschia amphioxys*	Alph	Ind	Bent	Ind	2	1	2	·	·	12	10	12	4	14	·	1	1	3	3	·	·	3	68
84	*Melosira ambigua*	Ind	Liph	Plan	Ind	28	13	16	19	15	13	23	14	10	5	8	3	26	9	14	4	4	·	224
85	*Melosira granulata*	Alph	Liph	Plan	Ind	·	·	2	2	8	5	·	·	2	·	·	·	·	·	1	·	8	19	47
86	*Navicula americana*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	1	·	·	·	3
87	*Navicula bacillum*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	2	·	·	·	4
88	*Navicula capitata*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5	1	3	·	·	1	·	10
89	*Navicula cincta*	Alph	R ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	2
90	*Navicula clementis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1

(Ecological value: pH, CURR, ECOL, CI)

	Species	pH	CURR	ECOL	Cl	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	TOTAL
		Ecological value																						
91	*Navicula contenta*	Alph	R-ph	Bent	Ind	3	·	4	5	9	5	2	13	3	4	2	5	·	·	1	3	·	1	60
92	*Navicula cryptocephala*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4	·	1	1	2	2	·	5	15
93	*Navicula elginensis*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	3	1	2	2	1	1	2	·	6	1	5	2	3	·	·	1	30
94	*Navicula elginensis* var. *neglecta*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
95	*Navicula exigua*	Ind	Ind	Bent	Hpho	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
96	*Navicula hungarica*	Albi	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1
97	*Navicula laevissima*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	3
98	*Navicula lanceolata*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	2
99	*Navicula meniscus*	Ind	Ind	Bent	Ind	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
100	*Navicula mutica*	Ind	Ind	Bent	Ind	20	34	35	35	28	41	21	25	29	21	5	2	6	1	3	5	8	3	322
101	*Navicula oppugnata*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	2	·	·	·	1	5
102	*Navicula oppugnata* var. *cillis*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	2
103	*Navicula protracta*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
104	*Navicula pseudolanceolata*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1	2
105	*Navicula pupula*	Ind	Ind	Bent	Ind	1	·	1	·	·	2	·	·	1	1	1	6	·	6	·	1	·	1	21
106	*Navicula radiosa*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	2	1	2	·	·	1	9
107	*Navicula radiosa* var. *minutissima*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	4	·	3	·	·	1	1	10
108	*Navicula tokyoensis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	2	1	1	·	·	·	1	·	·	·	·	6
109	*Navicula viridula*	Alph	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	3	3	·	·	·	·	9
110	*Neidium affine* var. *longiceps*	Ind	Liph	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
111	*Neidium ampliatum*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
112	*Neidium bisulcatum*	?	?	Bent	?	1	·	·	2	1	·	1	·	2	1	·	1	1	·	·	·	·	·	10
113	*Neidium iridis*	Ind	Liph	Bent	Hpho	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	1	4	3	4	·	1	·	1	16
114	*Nitzschia acuta*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1
115	*Nitzschia amphibia*	Albi	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
116	*Nitzschia dissipata*	Albi	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1
117	*Nitzschia granulata*				Euha	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
118	*Nitzschia hantzschiana*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	3
119	*Nitzschia hungarica*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	2	·	·	·	·	3
120	*Nitzschia linearis*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1
121	*Nitzschia obtusa*	Alph	?	Bent	Meha	3	2	6	1	5	4	16	7	8	5	2	·	1	1	3	·	·	·	64
122	*Nitzschia palea*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5	·	3	1	1	10
123	*Nitzschia parvula*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	3	·	2	·	3	2	11	·	7	·	3	·	3	1	7	·	1	43
124	*Nitzschia sinuata* var. *tabellaria*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
125	*Nitzschia sublinearis*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	2	·	5	9
126	*Nitzschia tryblionella*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	2
127	*Opephora martyi*	Albi	Liph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	1
128	*Pinnularia acrosphaeria*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	1	·	·	2	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	4
129	*Pinnularia borealis*	Ind	Ind	Bent	Ind	1	·	·	1	4	2	5	8	4	5	·	1	·	·	1	1	2	·	35
130	*Pinnularia braunii*	Acph	Ind	Bent	?	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
131	*Pinnularia cardinalis*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
132	*Pinnularia divergentissima*	Acph	Ind	Bent	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	2
133	*Pinnularia gibba*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	1	·	2	·	·	·	5
134	*Pinnularia hemiptera*	Acph	Libi	Bent	Ind	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
135	*Pinnularia interrupta*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	1	1	·	·	·	·	4
136	*Pinnularia karelica*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1
137	*Pinnularia microstauron*	Acph	Ind	Bent	Ind	1	1	·	4	4	7	3	2	3	7	4	4	3	2	1	3	2	·	51
138	*Pinnularia nodosa*	Ind	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	2
139	*Pinnularia stomatophora*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1
140	*Pinnularia subcapitata*	Ind	Libi	Bent	Ind	2	2	3	10	·	4	11	12	2	3	3	5	3	4	2	3	2	1	72
141	*Pinnularia viridis*	Ind	Ind	Bent	Ind	1	·	1	·	1	·	1	·	3	·	2	1	4	·	2	·	·	·	16
142	*Rhoicosphenia curvata*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
143	*Rhopalodia gibba*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
144	*Rhopalodia gibberula*	Alph	Ind	Epip	Meha	4	5	4	7	9	11	18	12	17	3	·	3	6	1	2	4	1	3	112
145	*Rhopalodia musculus*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2	·	·	1	·	·	·	·	·	5
146	*Stauroneis anceps*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	2
147	*Stauroneis lauenburgiana*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	2
148	*Stauroneis phoenicenteron*	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	·	·	·	·	·	·	·	1	3	1	3	1	2	2.	·	1	16
149	*Stephanodiscus astraea*	Albi	Liph	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1
150	*Surirella angusta*	Alph	Ind	Bent	Ind	1	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	2	1	5	1	1	3	2	17
151	*Surirella ovata*	Alph	Ind	Bent	Haph	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2	·	1	1	·	·	1	7
152	*Surirella robusta*	Ind	Libi	Bent	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	2	·	·	·	·	·	3
153	*Surirella tenera*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	2
154	*Synedra rumpens*	Ind	Liph	Epip	Ind	3	·	1	1	1	·	1	·	4	·	3	·	·	·	3	·	1	·	18
155	*Synedra ulna*	Alph	Ind	Epip	Ind	40	25	25	14	13	12	3	8	17	13	17	12	7	9	5	3	4	3	230
156	*Synedra ulna* var. *contracta*	Alph	Ind	Epip	Ind	2	1	2	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
157	*Synedra vaucheriae*	Alph	R-ph	Epip	Ind	·	·	1	·	4	1	·	1	3	4	4	8	7	5	2	1	·	·	41
158	*Tabellaria fenestrata*	Acph	Ind	Epip	Hpho	2	·	·	1	·	2	·	1	·	·	·	3	·	2	·	·	·	1	12
159	*Tabellaria flocculosa*	Ind	Ind	Epip	Ind	1	3	1	·	·	·	·	1	·	·	3	4	5	3	1	1	1	·	24
	TOTAL					200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	3600

生態値凡例

pH (pH spectra)

Albi: Alkalibiontic forms (真アルカリ性種)
Alph: Alkaliphilous forms (好アルカリ性種)
Ind: Indifferent forms (不定性種)
Acph: Acidophilous forms (好酸性種)
Acbi: Acidobiontic forms (真酸性種)
?: Unknown (不明種)

水流性 (Current spectra)

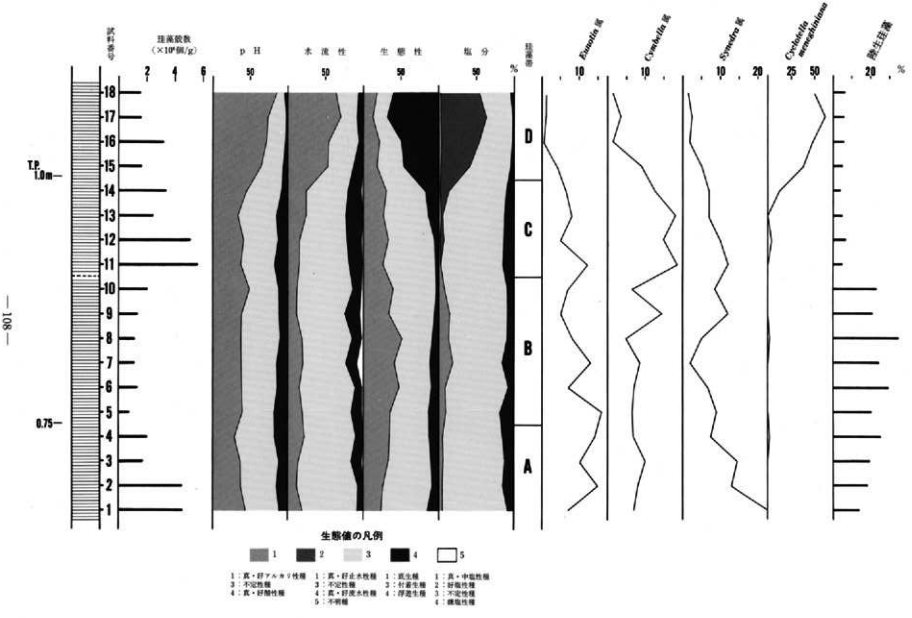
Libi: Limnobiontic forms (真止水性種)
Liph: Limnophilous forms (好止水性種)
Ind: Indifferent forms (不定性種)
R-ph: Rheophilous forms (好流水性種)
R-ph: Rheobiontic forms (真流水性種)
?: Unknown (不明種)

生態性 (Ecology)

Bent: Benthonic forms (底生種)
Epip: Epiphytic forms (付着生種)
Plan: Planktonic forms (浮遊生種)
?: Unknown (不明種)

塩分 (Halobion spectra)

Euha: Euhalobous forms (真塩性種)
Meha: Mesohalobous forms (中塩性種)
Haph: Halophilous forms (好塩性種)
Ind: Indifferent forms (不定性種)
Hpho: Halophobous forms (嫌塩性種)
?: Unknown (不明種)



第77図　清洲城下町遺跡中堀中の珪藻遺骸分析結果

第5章 考 察

第1節 清洲城下町遺跡下層出土土器の検討

今回調査した清洲城下町遺跡では下層より古墳時代後期から平安時代末期までの集落跡が見つかった。主な遺構は竪穴住居70軒・掘立柱建物5棟・柵列・溝などである。これらの遺構出土遺物のなかには一括と思える資料もいくつかある。尾張において当該期の遺構・遺物がまとまって検出された例ははじめてである。この節では清洲城下町遺跡A期における竪穴住居等出土遺物の分析を通じて古代の集落における土器のあり方を考えてみる。

1 器種構成

まず各時期における器種別の割合を示し、その特徴を考えてみる。第15表では須恵器・土師器ごとに器種分類しそれぞれ口縁部計測法[1]で比率を出した。しかし、もととなる個体数があまり多くなく口縁部がないものもあるので個々の器種間の比較には破片数も有効であると考え、補助的に破片数計算法[2]でもその比率を求め（ ）内に示し、2つの数字を用いて各時期ごとの器種構成を考えることとした。以下の文中で示した%は特に触れていない場合は口縁部計測法によるものである。

土師器と須恵器の割合 今回の計測はすべて竪穴住居出土遺物を用いているので、より生活に即した数字が出てくる。土師器は細片になりやすいので破片数計算法よりも口縁部計測法が実体に近いものであろう。第15表によるとⅠ期とⅡ－1期は須恵器が約63%、土師器が約37%でおおよそ2：1の割合である。Ⅱ－2期以降は須恵器が約80%、土師器が約20%でおおよそ4：1の割合である。Ⅱ－3期はかなり偏りがあるがこれは土師器の口縁部が極端に少ないために出た数字であり全個体数を比較すると他の時期と大差ない数字である。また、Ⅱ－3期の中心となったSB20は廃棄土坑と考えられ完形に近い須恵器供膳具が多数出土したため極端な数字になった。

用途別の割合 須恵器・土師器を用途別にまとめてみると土師器はほとんど全て煮炊具である。

供膳具はほとんど全て須恵器で占める。土師器の供膳具は識内からの搬入品と考えられる[3]ものがわずかに数点出土しているのみで在地産と思われ

時 期	Ⅰ	Ⅱ－1	Ⅱ－2	Ⅱ－3	Ⅱ
須恵器					
杯 蓋 B	10.9 (5.4)	+ (7.1)	7.1 (6.7)	+ (6.8)	
杯 蓋 A		7.6 (1.8)	5.7 (1.2)		
杯 蓋 B	1.8 (1.1)	3.9 (3.6)	2.1 (1.5)	23.2 (22.3)	22.0 (7.1)
杯 H	40.7 (9.3)	+ (8.0)	12.3 (8.3)	9.8 (1.0)	+ (0.2)
杯 A	3.1 (1.8)	13.7 (5.4)	20.7 (4.0)	8.5 (4.8)	28.3 (7.3)
杯 B		8.1 (1.8)	2.3 (1.3)	37.4 (15.0)	18.8 (9.2)
椀 A				5.8 (2.5)	2.4 (2.1)
椀 B					
椀 C					
椀 D				1.7 (1.0)	5.8 (1.3)
皿 M	1.0 (2.3)	1.9 (8.9)	7.7 (4.3)		
皿 B				0.3 (0.8)	+ (1.7)
皿 C				2.5 (0.8)	+ (0.2)
高 盤				1.1 (0.3)	
供膳具計	57.5 (18.9)	35.5 (36.6)	52.9 (26.1)	91.3 (50.3)	79.3 (29.0)
鉢 A			1.6 (0.3)	+ (0.3)	+ (0.2)
鉢 B			0.9 (0.3)		
鉢 C					+ (0.5)
鉢 D					
調理具計	0 (0)	0 (0)	2.5 (0.6)	0 (0.3)	0 (0.8)
壺 蓋					
壺 A			+ (1.5)		+ (0.2)
壺 B		+ (1.8)	2.4 (0.9)	2.7 (0.8)	+ (1.9)
壺 C			+ (0.3)		+ (0.3)
瓶	1.5 (0.7)	2.4 (1.8)	1.7 (1.2)		
長 頸 瓶		+ (0.5)	+ (0.6)	1.3 (2.0)	3.5 (3.0)
平 瓶		+ (3.6)	12.6 (9.6)	+ (0.3)	+ (0.3)
横 瓶	+ (0.9)	+ (0.9)	2.3 (1.8)		2.7 (1.0)
斯 瓶		+ (1.8)	+ (0.6)		+ (0.2)
鬼 瓶	+ (0.2)	+ (0.9)			
壺	2.4 (3.5)	22.8 (9.8)	+ (11.0)	0.6 (4.8)	1.1 (14.8)
貯蔵具計	3.7 (5.3)	25.2 (21.5)	19.0 (35.5)	4.3 (7.9)	7.3 (21.0)
甕	1.8 (9.4)	3.0 (2.6)	+ (1.8)	2.4 (1.3)	1.6 (1.3)
煮炊具計	1.8 (9.4)	3.0 (2.6)	(0) (1.8)	2.4 (1.3)	1.6 (1.3)
須恵器計	63.0 (24.6)	63.5 (61.7)	79.4 (69.0)	98.0 (59.6)	79.2 (52.7)
土師器					
杯	37.0 (75.0)	29.9 (27.5)	16.7 (46.6)	2.0 (40.0)	20.8 (46.8)
椀	0.5 (0.5)	7.6 (9.9)	2.9 1.2		+ (0.6)
煮炊具計	37.5 (75.5)	36.5 (36.4)	19.6 (50.0)	2.0 (40.0)	20.8 (47.4)
杯・皿			1.1 (0.6)		
土師器計	37.5 (75.5)	36.5 (36.4)	20.7 (50.6)	2.0 (40.0)	20.8 (47.4)
総 計	100.5(100.1)	100.0(100.1)	100.1 (99.6)	100.0 (99.6)	100.0(100.1)

第15表 器種構成

るものはない。供膳具を全体からの割合でみてみるとⅠ期からⅡ－２期が約60%弱、Ⅱ－３期とⅢ期が約70%前後であると思われる。Ⅱ－１期の割合が少ないのは須恵器甕がSB54から多く出土しているためでその点を勘案すれば他の時期とほぼ同じとなろう。Ⅱ－３期は前述の通り供膳具の割合は多い。

鉢などの調理具はⅡ－２期以降見られるものでほぼ１%弱である。

貯蔵具はⅡ－１期の須恵器甕、Ⅱ－２期の平瓶を除くとほぼ４～７%の数字が出てくる。

煮炊具は土師器甕が多く、その傾向は須恵器と土師器の割合の項で述べた。甑についてみてみると須恵器甑は２%前後、土師器甑は１%前後と須恵器の方が多い。須恵器・土師器を含めた煮炊具全体ではⅠからⅡ－１期までが約40%弱、Ⅱ－２期以降が20%前後の割合を占める。

器種別の特徴　この項では各時期にみられる特徴的な器種について考えられることを列挙する。

１．須恵器杯蓋Ｈ・杯Ｈは口縁部を見るとばらつきがあるが破片数を見てみると蓋も身もほぼ同数でⅠ期からⅡ－２期までが約７～８%、Ⅱ－３期が約１%、Ⅲ期になるとほとんど見られなくなる。

２．杯蓋ＡはⅡ－１期とⅡ－２期のみにみられる。

３．Ⅱ－２期とⅡ－３期を境にして杯・高杯の供膳形態が杯・椀・盤の供膳形態に変化する。

４．鉢はⅡ－２期からみられる。

５．瓶・提瓶はⅡ－２期までででそれ以降はみられなくなる。

６．Ⅱ期以降になると上記以外の壺・瓶類は数%の割合で存在する。

７．土師器甕はⅠ期・Ⅱ－１期は30%前後を占めるがⅡ－２期以降は20%前後である。

８．甑は各時期を通じて須恵器・土師器を合わせて約３%前後を占める。

２　清洲城下町遺跡出土土器の変遷

以上、器種構成を検討することにより各時期の器種の組合せの特徴を見てきたが、それを踏まえて清洲城下町遺跡出土土器の編年試案を提示する。その基準となったものは器種の組合せの他に須恵器杯の形態、土師器甕の形態[4]である。他の比較資料が少ない[5]ので安定したものではないが、集落遺跡での土器様相の一端を示すという意味で敢えて示すものである。なお、実年代についてはそれを比定する資料は持っていないので、とりあえず生産地である猿投窯編年[6]と対比することによりおおよその年代観を示しておく。

１期　遺構のあり方を含めたＡ期の時期区分のⅠ期の古段階に相当する。代表的な遺構としてSB14・52などが挙げられる。供膳具は須恵器杯蓋Ｈ・杯Ｈのみで占められる。杯蓋Ｈは口径約13cmで天井部の稜線ははっきりしている。杯Ｈは口径約11cm前後で蓋受けのかえりも長くしっかりとしたものである。これに高杯・瓶が加わり基本的な器種構成となる。高杯は２方から３方の２段透かしが入る長脚のものや透かしのない短脚のものがある。瓶は口頸部が長く注口はまだ突出しておらず、口縁部や体部に列点文がつく。土師器甕は口縁部が外湾しながら立ち上がり端部を上につまみ上げる。底部は丸底で器面は細かいハケメを丁寧に施す。

２期　遺構の時期区分では１期と２期をまとめてⅠ期としたが須恵器杯Ｈに新しい様相のものがあり、土師器甕の形態変化を含めて２期を設定した。代表的な遺構としてSB15が挙げられる。２期も器種構成では１期と同じであるが須恵器杯Ｈの蓋受けのかえりが退化しやや短くなり、口径も約10cm前後と縮小する。高杯は透かしが２方向になり、線状になるものもある。土師器甕は口

縁部の外湾が弱くなり比較的直線的に立ち上がり、端部のつまみ上げも少し小さくなる。調整は簡略化の方向にあり内面のハケメを省略しナデのみのものもある。

3期　Ⅱ－1期に相当する。代表的な遺構としてSB54が挙げられる。供膳具では新しく須恵器杯蓋A・杯A・Bが出現し杯Bにかわって中心的な器種となる。杯蓋Aのかえりはしっかりしている。杯Aは口縁端部が少しくぼみ、底部を回転ヘラケズリする。高杯は透かしが消失する。土師器甕の口縁部の屈曲は弱くなり長さも短かくなる。端部のつまみ上げも少なくなる。

4期　Ⅱ－2期に相当する。代表的な遺構としてSB50・63が挙げられる。須恵器杯蓋B・杯Aがかなり多く見られる。杯蓋Aのかえりは退化したものとなる。杯Aは小平底になる。杯Bのなかには底部が高台より下に突出するものがある。新しく鉢類が加わり器種は豊富になる。土師器甕の口縁端部のつまみ上げは痕跡程度となり体部内面のハケメ調整はなくなる。それに代わって新しく口縁端部がそのまま開く平底の甕Cが見られるようになる。土師器の全体に占める割合が減少する。またこの時期には暗文の入った土師器椀・皿・高杯などがみられる。産地はいずれも畿内と考えられるが、ほぼこの時期のみにみられるものである。

5期　Ⅱ－3期に相当する。代表的な遺構としてSB20が挙げられる。古墳時代の様相はほぼ一掃され供膳具は新しい“律令的土器様式”[7]で占められる。前代の基本的セットであった杯蓋H、杯H、高杯、はほとんど見られなくなる。かわって中心となるのは杯蓋B・杯Bである。杯Aは底部を回転ヘラケズリをするものが中心であるが静止ヘラケズリするものも見られる。杯蓋Bは天井部が笠型になり口縁端部はほぼまっすぐのびる。杯Bは法量にバラエティーがあり、器高の高く深いものも見られる。新しく椀・盤類が出現するのもこの時期の特徴である。土師器甕Cは口縁部を短く“く”の字状に強く折り返し、端部はそのまま伸びる。ハケメは荒く体部は薄くなり、底部は平底で“木の葉”の圧痕が見られるものがある。

6期　Ⅲ期に相当する。代表的な遺構としてSB02・61などが挙げられる。須恵器では杯蓋B、杯A・B、椀A・Cなどがある。5期に多かった有台杯身の杯Bに代わって杯A・椀Aの無台形態が中心となる。杯蓋Bは器高が低くなり口縁端部を屈曲させる。杯Aは底部を回転ヘラケズリした定型化したものとなる。椀Cは底部を静止ヘラケズリするものであるが、つくりは丁寧である。土師器甕は口縁部が少し厚くなり緩やかに外側に開くようになる。この時期には体部にハケメ痕がなく口縁部を直角に折り曲げる甕Eがわずかながらみられる。

清洲編年	遺構の時期区分		猿投編年	年代
1	Ⅰ		H－44	600
2			H－50	
3	Ⅱ	1	I－17	
4		2	I－41	700
			C－2	
5		3	I－25	
			NN－32	
6	Ⅲ		0－10	800
			IG－78	

第16表　編年対比表

注

1）宇野隆夫「考察の方法」『丹波園山窯址』1982

2）注1）に同じ

3）土師器供膳具については奈良国立文化財研究所巽淳一郎氏、玉田芳英氏より種々の御教示を得た。

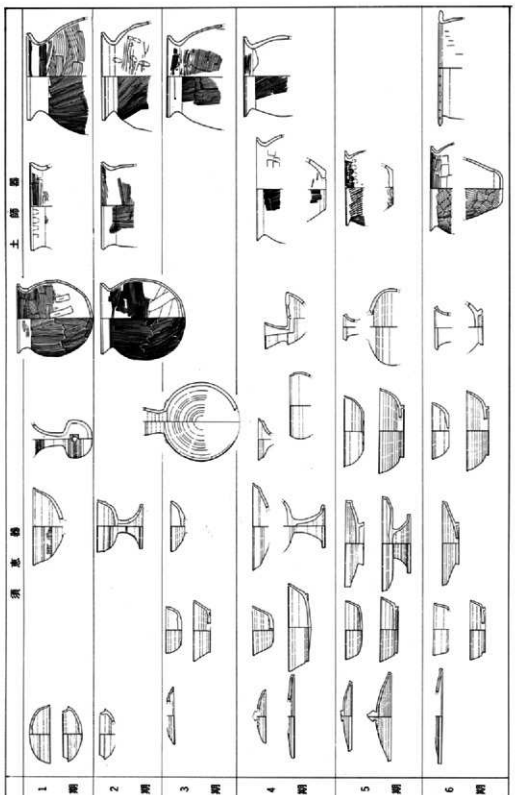
4）城ヶ谷和広『三の丸遺跡出土の奈良・平安時代土器－尾張の集落址における様相－』『年報昭和63年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター　1989で名古屋市三の丸遺跡の分析をおこなったので参照されたい。

5）土師器の甕の形態変化については三の丸遺跡でも若干の検討を

おこなっている。(城ヶ谷和広「古代における集落の展開」『名古屋城三の丸遺跡』Ⅰ　1990)

6）楢崎彰一・斉藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ1983

7）西　弘海「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論文集』1982



第78図　清洲城下町遺跡出土須恵器・土師器変遷図（S＝1：8）

第２節　Ａ期の遺構の変遷

ここでは、前節で考察した時期区分を基に遺構の変遷を整理し、Ａ期の集落構成について検討する。

Ａ期の遺構群は微高地を形成する黄褐色シルト層上に展開しており、このシルト層が落ち込む62Ｌ区以南では、遺構は存在しない。今回の調査では調査区が細長く狭いため住居配置などの変遷は検討できないが、遺構の形態と分布範囲から遺構群を大きく３期に区分できる。Ⅰ期は住居内にカマドを持つ段階、Ⅱ期は住居内にカマドを持たない段階、Ⅲ期は住居内にカマドを持たず、住居域が２つに分裂する段階である。またⅡ期は更に３小期に区分できる。以下に各小期ごとに集落の移り変わりを概観する。

１　Ⅰ期　　この小期に属する遺構は、62Ｅ区～62Ｉ区の範囲で検出された。溝ＳＤ03を境に北東部に遺構は全く無く、溝と住居群の間に空間があることから、ＳＤ03は居住域を画する溝と推定できる。南を画する遺構は検出できなかったが、62Ｉ区南半部までが居住域の範囲であろう。住居は竪穴住居で、カマドを持つ一群である。この内、２軒住居が重複したものが５組あり、更に２期の小区分が可能であろう。また、ＳＤ06、ＳＤ07は、平行して走り、集落内を通る道路が想定される。

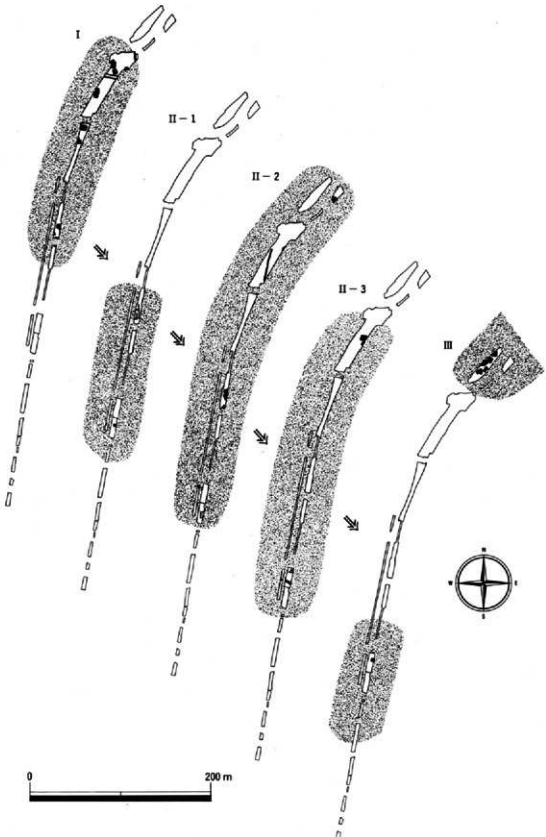
２　Ⅱ－１期　　この小期に所属する遺構は、62Ｊ区で検出された竪穴住居２軒、62Ｈ区で検出された掘立柱建物がある。調査区の北部には該期の遺構、遺物が全く存在しない。集落の構成は竪穴住居が集中する地区と掘立柱建物が集中する地区と分けられていたようで、Ⅰ期とは様相が異なる。なお、Ⅱ期以降の竪穴住居はカマドを持たない形態となる。

３　Ⅱ－２期　　この小期に位置付けられる遺構は63Ｇ～62Ｊ区の範囲で検出された。Ⅱ－１期より若干集落の範囲を広げる。前代と同様、竪穴住居と掘立柱建物の分布範囲が分かれ、62Ｊ区に掘立柱建物が建てられるようになる。居住域を画する溝はないが、集落内をほぼ南北に走る溝（ＳＤ08）があり、集落内の排水路あるいは居住域を再分割する溝と思われる。現況が水田である中央地区では住居跡が耕作によって破壊された可能性があり、住居の配置などは正確には知り得ない。

４　Ⅱ－３期　　この小期の遺構は62Ｅ～62Ｊ区の範囲に分布する。居住域はⅡ－２期とほとんど変わらないが、南端部に居住域を画する溝ＳＤ24が現われ、掘立柱建物は全く見られなくなる。住居は後世の削平を受けていない島畑部分でのみ検出され、恐らく、他の調査区でも該期の住居は存在したものと考えられる。ただし、63Ｋ区などの北部では後世の削平を受けていないにも拘らず、この時期の遺構・遺物がないことから、集落は北部にまでは及ばなかっただろう。

５　Ⅲ期　　この小期に該当する遺構は63Ｆ・63Ｋ区の２調査区に所在し、居住域を区画する溝は検出できなかった。今回の調査区の北に位置する清洲町の調査地区で確認された遺構・遺物もこの時期に所属する事から、集落の範囲は63Ｋ区を南限としてそこから北へ展開すると思われる。住居は切り合い関係を持ち、時期の細分も可能だろう。住居は一辺が３ｍ～５ｍと規模が小さくなる。

各小期に所属する遺構の同時代性は厳密には検証し得ないが、集落の範囲が各時期によって移動している様子は伺える。遺構の埋没状況から見て、たびたび氾濫によって浸水することがあり、そのたびに居住域を変えた可能性も想定できる。なお、墓域、水田などの遺構は検出されていない。水田などの生産遺構は東に広がる湿地帯に展開したと考え得るが、集落の総体的な把握は出来ない。



第79図　A期遺構変遷図

第3節　C期の遺物

1　資料の性格

清洲城下町遺跡で出土するC期の遺物は、溝から多量に出土する場合が多く、土坑から量的にまとまって出土する例は少ない。特に北部の調査区では、この傾向が著しく、例えば63G区では遺構から出土した土器・陶磁器の総破片数（接合を行った後、極微小なものを除く破片数）1119点のうち、SD112から出土した点数は769点（69%）を占め、土坑・ピットからは遺構数29基に対し、出土点数350点に過ぎない。従って、土坑の資料は一括廃棄したと推定できるようなまとまった出土状況を示すSK142などを除き、良好な資料となりにくい。

一方、量的には豊富な溝出土資料についても、なお注意を要する。特に、幅3mを越える規模の大きい溝については次のような問題点がある。①ほとんどの場合深さは1mを越え、当然のことながら掘削の際、下層の遺構を破壊すると同時に下層の遺物が混入する。また、溝を廃絶し埋め戻す際にも同様の現象が起きる。極端な例をあげれば、C－II－2a期の中堀と推定されるSD137は62H区における土器・陶磁器の総破片数628点のうち、A・B期に属する遺物が209点、灰釉系陶器いわゆる山茶椀などのC－I期に属する遺物が227点あり、これらが半数以上を占める。②溝が廃絶され埋没した後も溝の部分は湿地のような状態となる。これは後述するように溝などが後世の絵図や地籍図や現在の地形に現れることからも裏付けられる。この様な粘質土の堆積に後世の遺物が混入することも容易に考えられることであり、実際にSD137には18世紀に比定される遺物が僅かに出土する。③特に屋敷地を囲む溝については、土師器皿を多量に出土する場合が多い（例えばSD136など）。出土状況から見て、一括して投棄されたものと見られ、この土器群の同時代性はある程度証明できよう。しかし、この土師器皿の形態の差異が時期差によるものか、遺構の性格の差によるものかは更に検討を要する。

この様な状況では遺構の時期の認定は難しい。ここではある一定量出土した最新の遺物の特徴をもって遺構の廃絶の時期と決定する。遺構の存在期間は遺構の共存関係や遺物の出土状況などを合わせて考えることとする。

2　土師器皿

土師器皿はすでに第7表で分類を行っているが、ここでは更に細かく分類する（第80図）。この分類を基に各遺構から出土した土師器皿を抽出し、整理してみたい。

分類	A									B														
遺構	1	2				3	4			1				2				3			4			
		a	b	c	d		a	b		a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	a	b	c	
SE110	○	○																						
SD136			○							○				○							○			
SD101 下層				○							○				○			○				○	○	
SD101 上層				○			○					○										○		
SD101 掘り直し				○		○										○								
SD110							○					○		○				○	○			○	○	
SD111							○				○						○		○	○		○		
SD137							○												○					
SD142													○						○					
SD164							○				○													
SK147									○										○					

第17表　各遺構出土の土師器皿一覧

これらを分析すると次のような段階区分ができる。

Ⅰ　A類のみを出土する段階。

Ⅱ　A・B類を共伴して出土する段階。

Ⅱ段階を更に細かく区分すれば、以下のようになる。

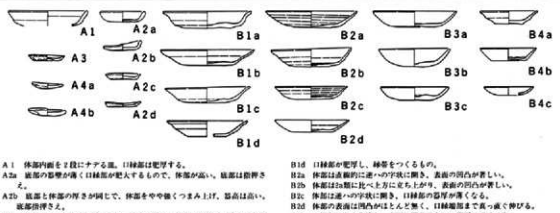
Ⅱ－1　B1、B2、B4a、A2類を共伴して出土する段階。B3類を伴わない。

Ⅱ－2　B3類が出現する段階。

Ⅱ－3　A4a類が出現する段階。

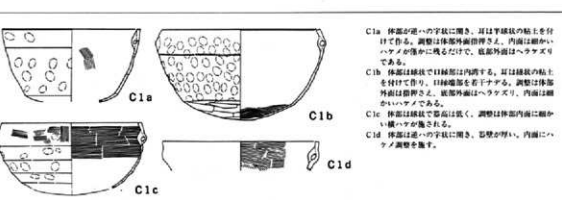
Ⅱ－4　B4、A2類がなくなり、A4類が多くなる段階。

Ⅰ段階は12世紀後半以降主流を占めていた非ロクロ成形の土師器皿のみが出土する段階で、佐藤公保の変遷試案[1]では、「C類とB1類が混在する」Ⅲ1期に相当すると思われる。Ⅱ段階は15世紀後半代



A1　体部内面を2段にナデる皿。口縁部は肥厚する。
A2a　底部の器壁が薄く口縁部が肥大するもので、体部が高い。底部は指押さえ。
A2b　底部と体部の厚さが同じで、体部をやや強くつまみ上げ、器高は高い。底部指押さえ。
A2c　体部のつまみ上げが弱くなり、器高は低く、体部は内外面に横ナデを残す。
A2d　体部は強かにつまみ上げ、内面には明瞭な横ナデは見られない。体部外面は横ナデ。
A3　体部外面を指で押さえて調整する皿。
A4a　内面にはナデを施し、外面には指またはその圧痕が残る。
A4b　内面には8方向板が残り、外面には手のひらの圧痕が残る。
B1a　外面に2段の横ナデを強く施し、体部下半に稜をもつ。器厚は厚い。
B1b　内面に2段の横ナデを施し、口縁端部は若干内湾する。器厚は薄い。
B1c　体部外面に弱い横ナデを施し、口縁端部はつまむようにナデる。
B1d　口縁部が肥厚し、稜等をつくるもの。
B2a　体部は直線的に逆ハの字状に開き、表面の凹凸が著しい。
B2b　体部はB2a類に比べ土方に立ち上がり、表面の凹凸が著しい。
B2c　体部は逆ハの字状に開き、口縁部の器厚が薄くなる。
B2d　体部の表面は凹凸がほとんど無く、口縁端部まで真っ直ぐ伸びる。
B3a　口縁部がやや内湾し、表面に凹凸はない。器厚はほぼ一定。
B3b　体部から口縁部にかけて内湾し、見込み部中央には凹む。器厚は厚く、器高は高い。
B3c　体部から口縁部にかけて内湾し、内面では体部と底部の境は不明瞭。
B4a　外面を2段にナデ、体部中央に稜をもつ。口縁部は外反する。
B4b　体部の直線的に逆ハの字状に開く、ナデを1段施し、内湾するものもある。
B4c　底部から体部にかけて内湾し、底部と体部の境がはっきりしない。器高は低い。

第80図　土師器皿統分類一覧（S＝1/6）



C1a　体部が逆ハの字状に開き、耳は半球状の粘土を付けて作る。調整は体部外面指押さえ、内面は細かいハケメが強かに残るだけで、底部外面はヘラケズリである。
C1b　体部は球状で口縁部は内湾する。耳は球状の粘土を付けて作り、口縁端部を若干ナデる。調整は体部外面は指押さえ、底部外面はヘラケズリ、内面は細かいハケメである。
C1c　体部は球状で器高は低く、調整は体部内面に細かい横ハケが施される。
C1d　体部は逆ハの字状に開き、器壁が厚い。内面にハケメ調整を施す。

第81図　土師器鍋C1類の分類（S＝1/6）

以降にロクロ成形の土師器皿へ転換していく時期に相当し、非ロクロ成形の土師器皿は駆逐される。佐藤[2]の「ロクロ成形の土師器皿と非ロクロ成形の土師器皿が混在する」Ⅵ1期に相当する時期の遺物群は今回の調査では存在しないが、Ⅳ2期、Ⅳ3期にあたる段階は存在する。Ⅱ段階は更にB3類の出現やA類の変化から再区分した。総体的にみれば、ロクロ成形の土師器皿は口縁部が内湾化して法量が小さくなり、非ロクロ成形の土師器皿は体部の矮小化など作りが簡略化されてくる。このような変化の傾向が汎用できるか否かは、今後の調査を期待したい。

3　土師器鍋

煮炊形態は、従来は脚を持たない鍋（土鍋）と脚を持つ釜（土釜）と区分されてきた[3]この区分は使用形態を考慮しており、竈の使用を意識した分類である。しかし、この大区分は前述の第2表の分類のB類やD・E類などの分類に若干の不都合や無理が生じる。ここでは脚の有無を問わず煮炊形態の遺物については「鍋（土師器鍋）」という呼称を設定して述べることにする。

土師器鍋の分類は先に示した通りであるが、C1類について若干補足する。C1類は体部の形状、耳の付け形、口縁部の形態、調整方法などから第81図のように分類できる。

さて、これらの土師器鍋が、土師器皿による段階区分とどう対応するかを見たい。土師器鍋A・B1類はSD120・SE110の出土遺物組成から土師器皿のⅠ段階に位置付けられる。このⅠ段階はB1類の出現をもって更に区分できる。B3・C・D・E類は土師器皿のⅡ段階にみられる。それぞれの器種がどの小段階で出現するかは資料的な限界があるため明言できないが、土師器皿で見られたⅠ・Ⅱ段階の画期を境に煮炊具の形態が豊富になり、様相は一転する。また、C1類については共伴関係から、C1a類がⅡ－1段階、C1bがⅡ－2段階、C1c類がⅡ－3～4段階、C1d類がⅡ－4段階に相当すると推定できる。

4　陶器

陶器は瀬戸美濃窯産が多数を占め、他に常滑窯産などの遺物も存在する。この陶器類が先に検討した土師器皿の段階区分といかに対応するかを見て、清洲城下町遺跡のC期の時期区分を考察したい。ここでは、C期を2期に分け、更に細分を試みた。

Ⅰ期　土師器皿のⅠ段階に相当する。陶器類は椀A、皿A、鉢Aなどがある。

Ⅰ－1期　SK101を指標とする。椀A1、皿A1が主体となる時期。土師器皿は不明。土師器鍋はA類が存在する。

Ⅱ－2期　SD120・SE110を指標とする。椀A2とA3と皿A2が伴って出土する時期。

Ⅱ期　土師器皿のⅡ段階に相当する。陶器類は供膳形態に施釉したものが爆発的に増える。

Ⅱ－1a期　SD112・SD136出土遺物を指標とする。椀B1、椀D、皿A3、皿B、鉢D1が共伴する時期。土師器皿のⅡ－1段階。土師器鍋はC1aが主体。

Ⅱ－1b期　SD101下層出土遺物を指標とする。土師器皿のⅡ－2段階で、新たに皿C、皿E1、鉢D2が出現する。椀はB1、皿はC2、土師器鍋はC1bが主となる。

Ⅱ－1c期　SD101上層・SD105出土遺物を指標とする。土師器皿のⅡ－3段階で、新たに皿Dが出現する。椀はB1、鉢はD2、土師器鍋はB3、C1c、Dが多い。

Ⅱ－2a期　SD137、SD164を指標とする。土師器皿のⅡ－4段階の前半に当たる。新たに長石

釉を施したもの、椀Ｂ２、鉢Ｄ３が登場する。

Ⅱ－2b期　ＳＤ142、ＳＫ142出土遺物を指標とする。土師器皿のⅡ－４段階の後半に相当する。
銅緑釉を用いた織部製品が出土する。椀Ｂ２は器高が低くなり、鉢はＤ３が多くなる。

5　遺物組成

ここでは、主要な遺構を取り上げ、大分類ごとにその比率を算出したい。資料の数量化に当たっては、本来あった個体数と計測値との誤差が少ない方法を用いるのが望ましい。その一例として口縁部計測法[1]などがあるが、この方法では数値に現れない資料が生じることがあり、破損状況の差異を無視して、接合作業後の総破片数を求めることとした。なお、一辺が約５㎜以下の極小片はカウントしない。結果は第18表の通りである。

この結果から次のことが言える。①土師器皿の出土量（割合）は遺構によってかなり異なる。特に溝に一括して投棄された出土状況を呈し、使用痕や遺存状態などから一過性の使用を思わせるものがあり、これらは何らかの儀礼的な使用を想定させる。②下層からの混入を除いた陶器の椀と皿の比率はＳＥ110を除きほぼ１：１か、椀が若干多くなる。③Ⅰ期の土師器鍋の出土量はⅡ期に比べ少ない。壺、瓶、鉢、香炉などの器種もまた同様である。④輸入陶磁器の割合は異常に少なく、１％にも満たない。また、Ⅰ－１期のＳＫ101を除けば、陶器は瀬戸美濃窯産の製品が大多数を占める。瀬戸美濃窯以外の陶器としては褐が常滑窯産である他は、備前窯産の鉢などが若干出土した程度である。

注

1）佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)－朝日西遺跡の様相－」（『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター1986）

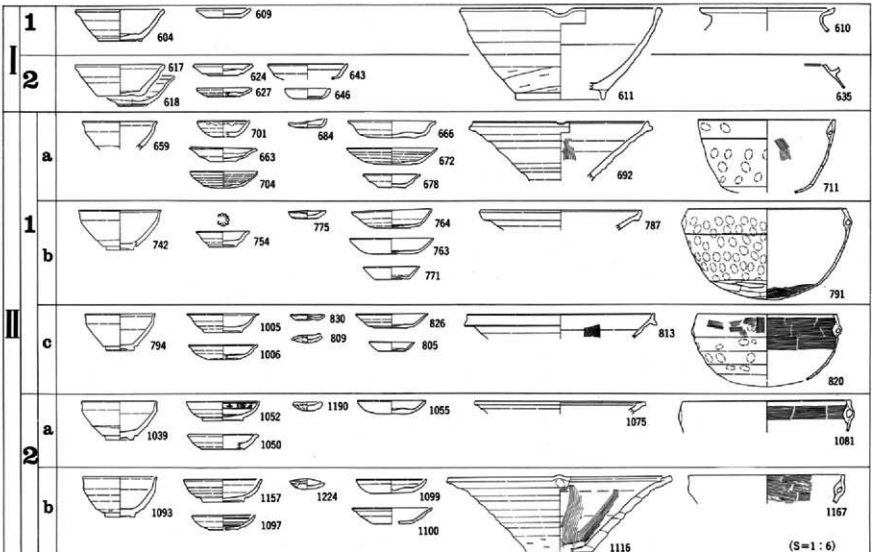
2）佐藤公保「中世土師器研究ノート(2)－朝日西遺跡の様相－」（『年報昭和61年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター1987）

3）佐藤公保「尾張の土師器査滑具－15世紀～17世紀を中心に－」（「マージナルNo. 9」1988）

4）宇野隆夫「考察の方法」（『京都大学埋蔵文化財調査報告－白河北殿北辺の調査－』Ⅱ　京都大学埋蔵文化財研究センター　1981）

		ＳＤ120	ＳＥ110	ＳＤ112	ＳＤ119	ＳＤ137	ＳＤ142
椀	A	31 (26.5)	118 (15.4)	183 (23.6)	20 (1.5)	178 (28.3)	113 (18.3)
	B			6 (0.8)	68 (5.2)	21 (3.3)	21 (3.4)
	C			2 (0.3)	3 (0.2)	1 (0.2)	
	D			1 (0.1)	2 (0.2)		
	E						
皿	A	30 (25.6)	11 (1.4)	57 (7.4)	12 (0.9)	41 (6.5)	17 (2.8)
	B			5 (0.7)	7 (0.5)	2 (0.3)	2 (0.3)
	C				49 (3.7)	18 (2.9)	10 (1.6)
	D				1 (0.1)		
	E				8 (0.6)	2 (0.3)	3 (0.5)
土師器皿	A	24 (20.5)	575 (75.3)	5 (0.7)	33 (0.5)	3 (0.5)	10 (1.6)
	B			266 (34.6)	508 (38.5)	22 (3.5)	188 (30.1)
鉢	A	3 (2.6)	5 (0.7)	3 (0.4)	2 (0.2)	8 (1.3)	10 (1.6)
	B			3 (0.4)	15 (1.1)	1 (0.2)	18 (2.9)
	C			3 (0.4)	7 (0.5)		3 (0.5)
	D			35 (4.6)	168 (12.7)	27 (4.3)	44 (7.1)
	E				2 (0.2)		
香炉					3 (0.2)		
壺・瓶		7 (6.0)		13 (1.7)	52 (3.9)	16 (2.5)	15 (2.4)
褐		8 (6.8)	4 (0.5)	15 (2.0)	61 (4.6)	2 (0.3)	26 (4.2)
土師器鍋		6 (5.1)	5 (0.9)	129 (16.8)	137 (10.4)	20 (3.2)	94 (15.2)
輸入陶磁器			2 (0.3)	1 (0.1)	11 (0.8)	2 (0.3)	4 (0.6)
瓦					6 (0.5)	24 (3.8)	3 (0.5)
その他			12 (1.6)	3 (0.4)	72 (5.5)	31 (4.9)	19 (3.1)
A・B期の遺物		8 (6.8)	30 (3.9)	39 (5.1)	71 (5.4)	209 (33.3)	20 (3.2)
計		117	764	769	1318	628	618

第18表　主要遺構出土遺物組成表



第82図　清洲城下町遺跡・C期　主要器種変遷図

第４節　Ｃ期の遺構の変遷

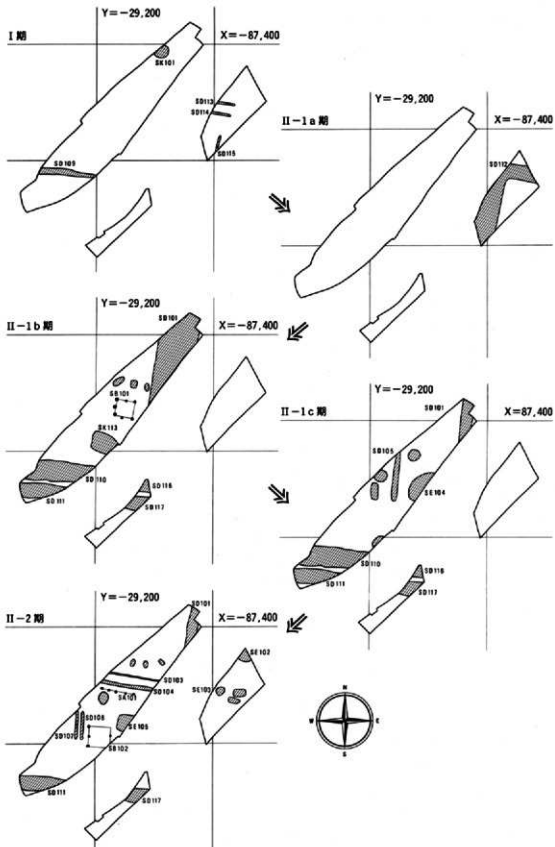
前節で考察した時期区分を基に遺構の変遷を考えてみたい。

Ⅰ－１期　明確にこの時期に属する遺構はSK101などである。古代以降再び集落が営まれる前段階と見られ、あるいは調査地点より北側に遺構群が広がるかもしれない。

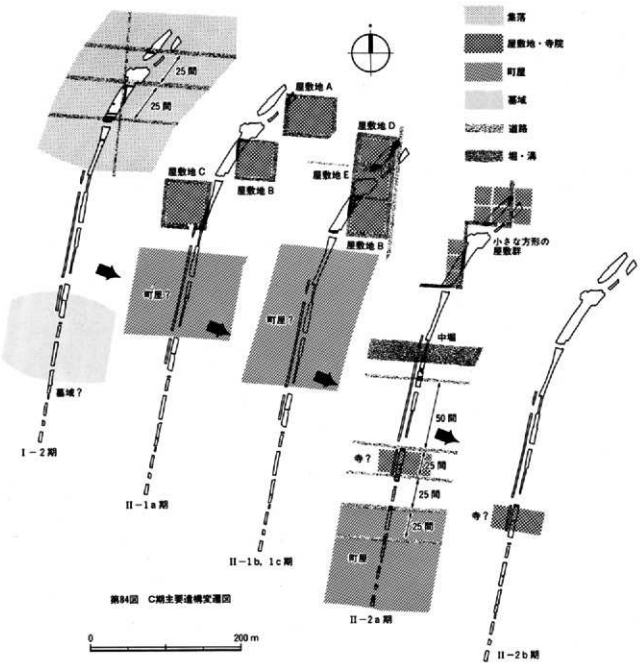
Ⅰ－２期　この時期はＮ－７°－Ｅの方位を基準として地割が形成された時期で、Ⅱ期以降もこの地割の方位が基本的に踏襲される。このため、Ⅰ期の遺構はⅡ期の遺構によって破壊された場合が多く、他にもⅠ－２期の遺構があった可能性が高い。基本的な地割はSD109、SD120、SD122、SD125、SD127などで構成される。SD109とSD120およびSD120とSD127のそれぞれの溝心心間距離はおよそ45ｍを測る。SD125とSD127の間は道路であったと思われ、SD109、SD120の北にそれぞれ平行する溝を想定し道路があったと仮定すると、南北方向は25間間隔（１間＝1.8ｍで計算）の地割が道路によって構成されたと考えられる。恐らく１町単位の地割とは若干異なる25間間隔の方格地割が存在しただろう。地割は五条川や自然堤防などの地形の制約を受けたと見られる。建物跡などは後世の削平で破壊されて不明であるが、地割内に井戸が配置されている。特定の防御施設などもみられないことから、調査区北部では中世の一般的な集落があったと想定できる。調査区南部では遺構のあり方は不明であるが、四耳壺などの遺物が出土することから墓域の存在も考え得る。

Ⅱ－1a期　この時期の遺構はSD112、SD118、SD136、SE125などである。溝は幅が４ｍ前後と大規模になり、Ｌ字に屈曲する。これらは屋敷地を防御のために囲郭する溝と考えられ、方形居館を形成していたと思われる。その規模から見て、有力家臣が居住した屋敷地を想定したい。溝の方位は前代のものを引き継ぐが、地割自身は25間間隔の方格地割には当てはまらず、遺構どうしの地割的関係も薄く、散在的である。屋敷地内の構造は調査区の制約で不明であるが、SD112で画される屋敷地Ａは北辺に柵を設け、西辺の堀にはテラス状の掘り込みがみられる。SD118で区画される屋敷地ＢはSD119と共に２重の溝で囲まれ、２条の溝の間には該期の遺構はなく、ここに土塁が存在したと推察できる。SD136で囲まれる屋敷地Ｃは南面東端に土橋をつくる。一方、調査区の中央部にも該期の井戸が１基あり、居住空間があったことがうかがえ、町屋の存在が想定できる。

Ⅱ－1b期　この時期はSD101、SD110、SD111、SD116、SD117、SD118などで囲郭される屋敷地が展開する。溝は幅４ｍ前後の規模を持ち、前代と同様、屋敷地を方形に囲むものであろう。Ⅰ－２期の地割に基づいて屋敷地が構成されたと見られるが、南北方向については、それぞれの溝心心間距離は一定ではなく、若干の地割の変更を行っている。この時期はⅡ－1a期に存在した屋敷地は、屋敷地Ｂを除いて消滅し、かわって南北に連なって３区画が配置され整然と集中している。SD101、SD110、SD116で囲まれる屋敷地Ｄには掘立柱建物SB101と列状に配置された土坑群などがある。検出された建物は小屋的なもので、屋敷の主屋と推定されるものは検出されなかった。SD111、SD117、SD118で囲まれる屋敷地ＥはSD117の検出状況から北面東端に土橋があったと見られる。屋敷地内の遺構は後世の耕作で既に大半は遺存しないが、時期が特定できない井戸が３基あり、このうちいずれかは該期に属するものであろう。屋敷地の境界は、囲郭する溝によるが、屋敷地Ｂと屋敷地Ｅの間のように道路を設定する場合もある。



第83図　C期北地区主要遺構変遷図



第84図　C期主要遺構変遷図

I期　佐藤公保「清須周辺の中世村落」による。

II－1期　梅本博志「信長期における清須城下町の様相」による。

II－2期　千田嘉博「清須城とその城下町一地籍図による復元的考察」による。

第85図　清洲周辺の変遷（1：100000）

Ⅱ－1c期　この時期の基本的な地割や遺構配置はⅡ－1b期と変わらず、屋敷地B、D、Eが継続して存在する。しかし、各々の屋敷地内の遺構配置に変化があったと考えられ、内部構造が比較的良く分かる屋敷地Dで顕著にみられる。屋敷地Dを囲むSD101は一旦掘り直されて溝幅が狭くなり、前代で見られたテラス状の落ち込みとSD102は姿を消す。そして、SD101の脇のテラスを埋め立てた場所に井戸が掘られ、また、SD101に平行してSD105も掘削される。建物については詳細は不明であるが、屋敷地内の建物構成に大きな変動があった可能性も考え得る。

Ⅱ－2a期　この時期の遺構群は調査区全域に広がり、地区によって様相が異なる。地割はⅠ－2期以来の伝統を受け、遺構はN－7°－Eの方位を基準として設定される。この時期の主な遺構は幅25mにも及ぶSD137があげられ、その規模・位置から「清須村古城絵図」（蓬左文庫蔵）に見られる「中堀」と推定される。中堀は清須城を3重に囲む総構の一部で、その掘削時期は、①環状2号線関連の調査で検出された中堀から「天正十四」銘の瓦が出土したこと、②五条川河川改修関連の調査で検出した中堀は天正地震よりも後に掘削されたことなどから天正14年が比定される。

前代に方形居館が展開した地点ではSD101、SD111、SD118（南北方向のみ）が引き続き残り、基本的な地割を構成する。屋敷地D地点では、更に小溝を設けて屋敷地を細区分する。SD104、SD106で囲まれる屋敷地では棚、井戸、掘立柱建物が配置される。SD103、SD101で囲まれる屋敷地はSD103に沿って土坑が並び、建物跡を想定させる。SD101の東側でも井戸があり、細かい屋敷地が想定できる。SD118の西側では井戸が数基集中して存在し、地割を示す遺構は残らないが、井戸が並列して並ぶ短冊型地割の町屋の状況とは異なり、細かい方形の屋敷地を考えたい。このような細分化された方形の屋敷地は中下級家臣の屋敷地が想定されよう。なお、SD110からは板塔婆、刻書硯などが出土しており、屋敷地E地点に日蓮宗関係の寺院があった可能性もある。しかし、SD110はⅡ－16～2a期の時期幅があり、どの段階で寺院が存在したかは特定できない。

SD137から南では溝が平行して走る場合が多く、SD138とSD140の間、SD143とSD144の間、SD148とSD149の間、SD153とSD154の間は道路であったと考えられる。SD142の北にも道路があったと推定すると、それぞれの道路心の距離は約45mあるいは90mを測り、25間間隔の地割が想定できる。道路側溝は概して規模は小さいが、SD142やSD153そしてSD164などは幅が3mを超え、排水路としての機能を持っていたと思われる。SD140とSD142で囲まれる区画は井戸を検出したに過ぎず、性格は不明である。地籍図による分析では、この地点は武家屋敷地と推定される。SD142とSD143で囲まれる区画は、その内部構造は不明であるが、SD142の出土遺物から寺院跡を想定したい。SD144から南の区画は、井戸、溝、土坑があり、建物跡は不明である。中でもSD154から南では東西方向に走る溝が多く、このうち幾つかは屋敷地の境界を表すものとみられ、東西方向に細長い屋敷が考えられる。これは短冊型地割の形態を示し、町屋が想定される。調査区の最南部では出土遺物から鍛冶屋が想定される。

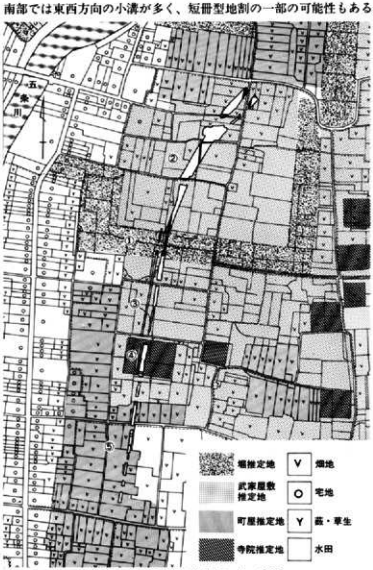
Ⅱ－2b期　この時期の遺構は調査区の南部に点在する。遺構の極端な減少傾向を見ると、Ⅱ－2a期の遺構が2b期まで残存したと解釈するのが適切であろう。この時期の遺構は、廃絶時に石材などを多量に投棄した例が多い。Ⅱ－2b期以降の遺構が全く存在しないことから、Ⅱ－2a期の終りに城下町の遺構の大半は削滅し、それ以降も遺構が残存する地点についてもⅡ－2b期には終焉しただろう

第5節　今回の調査と清須城下町

1　地籍図と遺構の関係

地籍図による遺跡の復元的考察は、その有効性が高く評価される[1]が、依然として、地籍が何時の土地利用を表現するかという時期的問題と、地籍の読取り方の問題が残る。ここでは、検出された遺構と地籍図による復元との符合性について触れたい。地籍図による復元は千田嘉博の考察[2]による。

①中堀推定地は幅25mのSD137を検出し、符合する。②中堀内の武家屋敷推定地は、Ⅱ－1期の方形居館群、Ⅱ－2期の細かい方形屋敷地が展開し、方形居館の大区画は地籍図の道割りと対応する。但し、Ⅱ－1a期の区画は地籍図からは看取されない。③中堀外の武家屋敷推定地は遺構が稀薄なため対応関係は不明である。④寺院推定地は、若干のズレがあるが、北辺でSD142を検出し、石仏などの宗教的な遺物も出土した。⑤町屋推定地は地籍も少し錯乱しているためか遺構とは符合しない。調査区最南部では東西方向の小溝が多く、短冊型地割の一部の可能性もある。



第86図　調査区付近の地籍（S＝1：5000）
千田嘉博「地籍図8.7(「清須―織豊期の城と都市―資料編」1988)による

以上のように大規模な溝による区画と性格の分析についてはかなりの高率で符合することが分かる。時期についてはⅡ－2期の遺構を表現し、Ⅱ－1期の遺構はⅡ－2期まで残存する状況においてのみ推定でき、Ⅱ－1a期の遺構は表現されていなかった。

2　年代

Ⅰ期は椀A（灰釉系陶器）などの窯編年[3]からⅠ－1期は13世紀前半、Ⅰ－2期は13世紀後半から14世紀前半に比定される。Ⅱ－1期は遺構の規模と在り方から清須城下町の成立した段階と考えられる。瀬戸美濃窯産の陶器の編年では、Ⅱ－1a期は古瀬戸後期[4]から大窯Ⅰ期[5]に相当する陶器が出土し、15世紀後半から16世紀前半に比定される。このことから、Ⅱ－1期の開始年代は下津から守護所が移転した文明

10年（1478）前後を考えたい。また、Ⅱ－1a期は土師器皿の年代観[6]からは16世紀前半代となり、これは出土状況からⅡ－1a期の終末の時期を示すだろう。ここではⅡ－1b期の状況を考え合わせ、16世紀初頭としたい。Ⅱ－1b期は大窯Ⅰ期に位置付けられる一群で、16世紀前半に比定できる。[7]Ⅱ－1c期は大窯Ⅱ期を主体とし、大窯Ⅲ期の遺物も存在する時期である。大窯Ⅱ期の終りを小谷城跡、一乗谷朝倉氏遺跡、岩倉城遺跡などから永禄年間に当てており[8]、これらを考え合わせるとⅡ－1c期は16世紀中葉に比定される。Ⅱ－2期は中堀の検討から天正14年（1586）前後を開始年代とし、遺構が急速に減少するⅡ－2b期は城下町が移転する「清須越」の慶長15年（1610）以降を考えたい。瀬戸美濃窯産の陶器の編年ではⅡ－2a期は大窯Ⅴ期に当たり、16世紀末から17世紀初頭に位置付けられる[9]。土師器皿の年代観[10]も同様である。Ⅱ－2b期は登窯Ⅰ期の遺物を含み、17世紀中葉に比定できる。[11]

3　総括

以上を歴史的にまとめると、次のようになる。13世紀前半に古代以降再び人々が住み始め、13世紀後半に集落を形成する。この時期の清洲周辺は、朝日西・土田・森南・阿弥陀寺・大溝遺跡など中世村落があり[12]今回の調査地点も散在する中世村落の一つであろう。この集落がどの程度条理制地割の影響を受けたかは今後の検討を要するが、一定の地割を有する。そして、集落は一旦14世紀代に消滅する。その後、15世紀後半に有力家臣が居住したと考えられる居館群が構築され大きな画期を迎えるが、地割は前代の影響を受ける。居館群は当初独立・散在したが、16世紀前半に幹線道路沿い[13]に、一定の規制を受けた。居館群の南で井戸や該期の遺物が存在することから商工業者の町屋の混在も想定し得る。次に遺構の展開が大きく変化するのは16世紀末で、中堀を始めとする３重の堀（総構）が巡らされる。城下町の構成に大きな変動があったと見られ、有力家臣の居所は別の地区に移転し、代わって、中下級家臣が居住したと思われる小さな方形の屋敷地が展開する。中堀の外側は武家屋敷、寺院、町屋が存在した。これらの遺構は17世紀初頭に大半は廃棄され、「清須越」という城下町の移転が大規模に行われたと言える。しかし、一部には17世紀中葉まで残る遺構もあり、城下町後の清須の様子を知る上で興味深い。

注

1）桑原公徳（「地籍図」学生社1976）、小林健太郎（「戦国城下町の研究」大明堂1985）など。
2）千田嘉博「清須城とその城下町－地籍図による復元的考察－」（「清須－織豊期の城と都市－研究報告編」1989）
3）田口昭二「美濃窯の山茶椀研究と編年」（「マージナルNo. 7」1987）
4）藤澤良祐「"古瀬戸"概説」（「美濃陶磁歴史館報Ⅲ」1984）
5）井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」（「中近世土器の基礎研究」1985）
6）佐藤公保「中世土師器研究ノート(2)－朝日西遺跡の様相」（「年報昭和61年度」財団法人愛知県埋蔵文化財センター1987）
7）注5と同じ。
8）注5と同じ。
9）注5と同じ。
10）注6と同じ。
11）注5と同じ。
12）佐藤公保「清須周辺の中世村落」（「清須－織豊期の城と都市－研究報告編」1989）
13）屋敷地Dなどの東には小牧街道が通っていたと見られ、基本となる交通路であった。梅本博志「信長期における清須城下町の様相」（「清須－織豊期の城と都市－研究報告編」1989）

第6章　まとめ

本章では発掘調査の成果についてまとめる。

今回の調査で検出された遺構は、前述の通り、A期（古墳時代後期～平安時代初期）、B期（平安時代後期）、C期（鎌倉時代～江戸時代初期）の3時期にまとめられる。

A期以前には遺構は検出できなかったが、弥生時代中期～後期にかけての遺物が出土した。該期の遺跡の存在が想定されるが、本格的に遺跡が展開するのは古墳時代後期に入ってからのことである。このA期の遺構群の存在は、今回の調査で始めて明らかになったもので、さらに細かく時期区分が可能である。竪穴住居を中心とする集落跡であるが、その集落が展開する範囲は各時期によって若干異なり、たびたび浸水にみまわれたと思われる。この集落は平安時代の初期に姿を消し、これ以降の遺物は出土しない。尾張地方では、貞観7年（865）の広野川（木曽川）の大洪水などの水害が多発した時期であるといわれ、本遺跡でもその影響を受けていた可能性が考えられる。

再び遺構が現れるのは平安時代後期に入ってからのことである。このB期の遺構群は調査区の南に局所的に存在し、寺院跡を想定させるものであった。周辺の地形やその後の土地利用の在り方などから、この時期の遺構群は調査区の東に位置する日吉神社付近を中心に展開したものと推定される。この地点は、B期以降も四耳壺など墓域を想定させる遺物が出土したり、寺院跡を想定させる区画が現れたりし、他とは性格が異なる地点であったと考える。

調査区の北部を中心に再び集落が形成されるのは、鎌倉時代の後半に当たる。この集落は一定の地割を持ち、14世紀代には削滅する。集落がなくなった後、15世紀後半に幅4m程度の堀を巡らす屋敷地が形成されるようになり、清須城下町に関連するものと見られる。清須城は応永年間に築城されたといわれるが、15世紀前半の遺構群は存在しない。本格的に城下町の遺構群が展開するのは守護所が移されたとされる15世紀後半になってからと考えられ、今回の調査区の北部は有力家臣の屋敷地が展開したと思われる。16世紀末には3重の堀を巡らして城下町全体を囲郭し、城下町内は大きく構成が変わったと考えられ、清須城下町における最大の画期といえるだろう。

城下町は名古屋に移転された後に急速に衰微し、代わって、美濃街道の宿場町として五条川沿いに町並みが広がったと推定される。今回の調査地点は町並みの背後の新田畑として開発されたであろう。

付　表

主要遺構一覧

A期

建物

番号	調査区No-遺構番号	時期
S B01	63F区S B06	III
S B02	63F区S B05	III
S B03	63F区S B01	III
S B04	63F区S B02	III
S B05	63F区S B03	III
S B06	63F区S B04	III
S B07	63K区S B01	III
S B08	63K区S B02	III
S B09	63K区S B03	III
S B10	63K区S B06	III
S B11	63K区S B05	
S B12	63G区S B01	II－2
S B13	63H区S B01	
S B14	62E区S B01	I
S B15	62E区S B03	I
S B16	62E区S B02	I
S B17	62E区S B08	I
S B18	62E区S B06	II－1
S B19	62E区S B15	
S B20	62E区S B07	II－3
S B21	62E区S B12	I
S B22	62E区S B13	
S B23	62E区S B04	II－3
S B24	62E区S B05	
S B25	62E区S B14	
S B26	62F区S B35	
S B27	62F区S B16	
S B28	62F区S B17	I
S B29	62F区S B30	I
S B30	62F区S B34	
S B31	62F区S B18	
S B32	62F区S B15	
S B33	62F区S B32	
S B34	62F区S B19	
S B35	62F区S B31	
S B36	62F区S B33	
S B37	62F区S B22	I
S B38	62F区S B27	I
S B39	62F区S B26	I
S B40	62F区S B36	
S B41	62F区S B23	
S B42	62F区S B25	
S B43	62F区S B24	
S B44	62F区S B37	I
S B45	62F区S B38	I
S B46	62F区S B21	
S B47	62F区S B20	
S B48	63E区S B01	I
S B49	62H区S B01	II－2
S B50	62H区S B02	II－2
S B51	62H区S B05	II－3
S B52	62H区S B08	I
S B53	62H区S B09	I
S B54	62H区S B04	II－1
S B55	62H区S B03	I
S B56	62H区S B06	II－2
S B57	62H区S B07	I
S B58	62 I区S B01	I
S B59	62 J区S B01	
S B60	62 J区S B02	
S B61	62 J区S B03	III
S B62	62 J区S B04	III
S B63	62 J区S X06	II－1
S B64	62 J区S X07	II－3
S B65	63N区S B08	II－2
S B66	63N区S B10	II－2
S B67	63N区S B11	
S B68	63N区S B01	
S B69	63N区S B04	II－1
S B70	63N区S B05	I
S B71	(P11－P17)	II－1
S B72	(P18－P22)	II－1
S B73	(P23－P31)	II－1
S B74	(P38－P49)	II－2

柵

番号	調査区No-遺構番号	時期
S A01	(P01－P10)	III
S A02	(P32－P37)	II－1

溝

番号	調査区No-遺構番号	時期
S D01	63K区S D11	
S D02	63H区S D04	
S D03	62E区S D07	I
S D04	62E区S D08	
S D05	62E区S D11	
S D06	62E区S D10	I
S D07	62E区S D09	I
S D08	62F区S D19	II－2
S D09	62F区S D36	
S D10	62F区S D35	
S D11	62F区S D32	
S D12	62F区S D33	I
S D13	62E区S D12	
S D14	62F区S D30	
S D15	62F区S D31	
S D16	62F区S D34	
S D17	62F区S D29	
S D18	62F区S D26	
S D19	62F区S D37	
S D20	62F区S D38	I
S D21	62H区S D05	
S D22	62 J区S D06	
S D23	62 J区S D07	II－3
S D24	62 J区S D08	II－3
S D25	62 J区S D09	II－3
S D26	62 J区S D22	

土坑

番号	調査区No-遺構番号	時期
S K01	63F区S K44	III
S K02	63K区S K36	
S K03	63K区S K33	III
S K04	63K区S K38	III
S K05	63K区S K34	
S K06	63K区S K32	
S K07	63H区S K02	
S K08	62E区S K20	
S K09	62E区S K21	
S K10	62E区S K15	
S K11	62E区S K12	
S K12	62E区S K13	II－3
S K13	62E区S K22	
S K14	62E区S K24	
S K15	62F区S K54	
S K16	62F区S K53	
S K17	62F区S K60	
S K18	62F区S K59	
S K19	62F区S K58	
S K20	62H区S K07	
S K21	62H区S K11	
S K22	62H区S K09	
S K23	62H区S K21	
S K24	62H区S K20	
S K25	62H区S K19	
S K26	62 J区S K15	
S K27	62 J区S K16	
S K28	62 J区S K65	

ピット

番号	調査区No-遺構番号	時期
P01	63F区P37	
P02	63F区P38	
P03	63F区P39	
P04	63F区P40	
P05	63F区P48	
P06	63F区P49	
P07	63F区P50	
P08	63F区P51	
P09	63F区P52	
P10	63F区P53	
P11	62H区P14	
P12	62H区P15	
P13	62H区P16	
P14	62H区P17	
P15	62H区P18	
P16	62H区P19	
P17	62H区P20	
P18	62H区P35	
P19	62H区P36	
P20	62H区P37	
P21	62H区P38	
P22	62H区P42	
P23	62H区P21	
P24	62H区P22	
P25	62H区P23	
P26	62H区P24	
P27	62H区P25	
P28	62H区P26	
P29	62H区P27	
P30	62H区P28	
P31	62H区P29	
P32	62H区P30	
P33	62H区P31	
P34	62H区P32	
P35	62H区P33	
P36	62H区P34	
P37	62H区P40	
P38	62 J区P66	
P39	62 J区P67	
P40	62 J区P68	
P41	62 J区P69	
P42	62 J区P70	
P43	62 J区P71	
P44	62 J区P72	
P45	62 J区P73	
P46	62 J区P74	
P47	62 J区P75	
P48	62 J区P76	
P49	62 J区P78	

B期

建物

番号	調査区No-遺構番号	時期
S B81	(P82－P91)	I－2

溝

番号	調査区No-遺構番号	時期
S D81	62 J区S D19	
S D82	62 J区S D20	I－2
S D83	62 J区S K58	
S D84	62 K区S D12	I－2

土坑

番号	調査区No-遺構番号	時期
S K81	62 J区S K33	I－1
S K82	62 J区S K59	
S K83	62 J区S K60	
S K84	62 J区S K61	
S K85	62 K区S K70	I－2

ピット

番号	調査区No-遺構番号	時期
√P81	62 E区P07	II
P82	62 J区S K63	
P83	62 J区S K50	
P84	62 J区S K51	
P85	62 J区S K55	
P86	62 J区S K47	
P87	62 J区S K49	
P88	62 J区S K52	
P89	62 J区S K56	
P90	62 J区S K46	
P91	62 J区S K57	

C期

建物

番号	調査区No-遺構番号	時期
S B101	63F区P39,51-39	II－1b
S B102	63K区P37,38,39	II－2a

柵

番号	調査区No-遺構番号	時期
S A101	63F区P36,37－39	II－1a
S A102	63G区P14－17	II－2a

溝

番号	調査区No-遺構番号	時期
S D101	63F区S D01－06	II－1b～II－2a
S D102	63F区S D08	II－1b
S D103	63F区S D02	II－2a
S D104	63F区S D01	II－2a
S D105	63F区S D03	II－1c
S D106	63K区S D05	II－2a
S D107	63K区S D04	II－2a
S D108	63K区S D05	
S D109	63K区S D10	I－2
S D110	63K区S D02	II－1b～II－2a
S D111	63K区S D01	II－1b～II－2a
S D112	63G区S D01	II－1a
S D113	63G区S D02	I－2
S D114	63G区S D03	I－2
S D115	63G区S D01	I－2
S D116	63H区S D01	II－1b～II－2a
S D117	63H区S D03	II－1b～II－2a
S D118	62E区S D01	II－1b～II－2a
S D119	62E区S D02	II－1b～II－2a
S D120	62E区S D04	I－2
S D121	62E区S D03	II
S D122	62E区S D06	I－2
S D123	62F区S D16	II
S D124	62F区S D15	II－2a
S D125	62F区S D18	I－2
S D126	62F区S D14北	II－2a
S D127	62F区S D14南	I－2
S D128	62F区S D13	II－1～II－2a

主要遺構出土遺物一覧

S D129	62 F区 S D23	
S D130	62 F区 S D24	
S D131	62 F区 S D22	
S D132	62 F区 S D20	II－2a
S D133	62 F区 S D21	I－2
S D134	63 E区 S D02	II－2a
S D135	63 E区 S D03	II－2a
S D136	63 E区 S D01	II－1a
S D137	62 H区 S D01	II－2a
〃	63 L区 S D01	
S D138	62 H区 S D02	II－2a
S D139	62 H区 S D03	
S D140	62 H区 S D04	II－2a
S D141	63 M区 S D01	
S D142	62 J区 S D01	II－2b
S D143	62 J区 S D10	II－2a
S D144	62 J区 S D11	II－2a
S D145	62 J区 S D12	II－2a
S D146	62 K区 S D08	
S D147	62 K区 S D09	II－2
S D148	62 K区 S D01	II－2a
S D149	62 K区 S D04	II－2a
S D150	62 K区 S D02	
S D151	62 K区 S D09	II－1
S D152	62 L区 S D05	I－2
S D153	62 L区 S D02	II－1
S D154	62 L区 S D03	II－2a
S D155	62 L区 S D04	II－2a
S D156	62 L区 S D31	II－2a
S D157	62 L区 S D34	II－2a
S D157	62 L区 S D36	II－2a
S D159	62 L区 S D37	II－2a
S D160	62 L区 S D38	II－2a
S D161	62 L区 S D56	II－2a
S D162	62 L区 S D53	II－2a
S D163	62 L区 S D54	II－2a
S D164	62 L区 S D52	II－2a
S D165	62 L区 S D55	II－2a

井戸

番号	調査区杭・遺構番号	時期
S E101	63 F区 S E01	現代
S E102	63 G区 S K01	II－2b
S E103	63 G区 S K09	II－2a
S E104	63 F区 S K41	II－1c
S E105	63 F区 S K01～04	II－2a
S E106	62 E区 S E03	II
S E107	62 E区 S E02	II
S E108	62 E区 S E01	II
S E109	62 F区 S K36	II
S E110	62 F区 S K31	I－2
S E111	62 F区 S K30	II－1
S E112	62 F区 S K24	II
S E113	62 F区 S K28	II
S E114	62 F区 S K27	II
S E115	62 F区 S K26	I－2
S E116	62 F区 S K38	
S E117	62 F区 S K34	I－2
S E118	62 F区 S K37	
S E119	62 E区 S E01	I－2
S E120	62 H区 S E01	II－2a
S E121	62 H区 S E02	II
S E122	62 H区 S K03	
S E123	62 H区 S E04	
S E124	62 I区 S E01	II－2a
S E125	62 I区 S E02	II－1a
S E126	62 I区 S E03	II－2a
S E127	62 I区 S E04	II－2a
S E128	62 I区 S E05	II－2a
S E129	62 J区 S E01	II－2
S E130	62 K区 S K46	II－2a
S E131	62 K区 S K16	II－2a
S E132	62 K区 S E01	II
S E133	62 L区 S E51	II－2a

道跡

番号	調査区杭・遺構番号	時期
S F101	63 K区、63 H区	II－1b～II－2c

土坑

番号	調査区杭・遺構番号	時期
S K101	63 F区 S X01	I－1
S K102	63 F区 S K27	II－1c
S K103	63 F区 S K26	II－2a
S K104	63 F区 S K15	II－2a
S K105	63 F区 S K29	II－2a
S K106	63 F区 S K08	II－1
S K107	63 F区 S K37	II－1b
S K108	63 F区 S K22	II－1b
S K109	63 F区 S K14	II－1b
S K110	63 F区 S K06	II－2a
S K111	63 F区 S K35	
S K112	63 K区 S K01	
S K113	63 K区 S K05	
S K114	63 K区 S K04	
S K115	63 K区 S K07	II－1c
S K116	63 K区 S K27	
S K117	63 G区 S K15	II－2a
S K118	63 G区 S K02	II－2a
S K119	63 G区 S K03	II－2a
S K120	63 G区 S K17	II－2a
S K121	62 E区 S K06	I
S K122	62 E区 S K08	I－2
S K123	62 E区 S K04	I－2
S K124	62 E区 S K09	I－2
S K125	62 E区 S K05	19世紀
S K126	62 F区 S K56	I
S K127	62 F区 S K39	II
S K128	62 F区 S K44	II－2a
S K129	63 E区 S K01	II
S K130	62 I区 S K01	II－2
S K131	62 J区 S K05	II－2
S K132	62 J区 S K04	II－2
S K133	62 J区 S K07	II－2
S K134	62 J区 S K06	II－2
S K135	62 J区 S K08	II－2
S K136	62 J区 S K02	II－2
S K137	62 J区 S K17	II－2
S K138	62 J区 S K19	II－1
S K139	62 K区 S K41	II
S K140	62 K区 S K29	II－2a
S K141	62 K区 S K14	II
S K142	62 K区 S K34	II－2b
S K143	62 K区 S K36	II－2b
S K144	62 K区 S K37	II－2a
S K145	62 L区 S K20	II－1
S K146	62 L区 S D07	
S K147	62 L区 S K85	II－2a
S K148	62 L区 S K76	II－2a

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
1	62 E－587	杯H	S B14	10.5	4.1	－	
2	62 E－588	杯H	S B14	10.6	4.7	－	
3	62 E－589	土師器B	S B14	19.5	－	－	
4	62 E－569	土師器A	S B14	15.8	－	－	
5	62 E－581	杯H	S B17	10.7	3.8	4.8	
6	62 E－567	杯H	S B15	10.4	－	－	
7	62 E－566	杯H	S B15	10.6	－	－	
8	62 E－660	杯H	S B15	9.4	3.4	－	
9	62 E－565	杯H	S B15	10.4	3.5	－	
10	62 E－568	杯H	S B15	13.8	－	－	
11	62 E－564	杯H	S B15	10.0	－	－	
12	62 E－570	土師器B	S B15	15.2	－	－	
13	62 E－572	土師器B	S B15	19.7	－	－	
14	62 E－571	土師器B	S B15	16.3	－	－	
15	62 E－563	土師器B	S B15	20.0	－	－	
16	62 E－586	土師器B	S B16	24.0	－	－	
17	62 E－573	土師器C	S B15	－	－	－	
18	62 E－583	杯H	S B21	10.0	3.5	－	
19	62 E－584	杯H	S B21	10.7	－	－	
20	62 E－585	土師器B	S B21	15.0	－	－	
21	62 F－501	鉢B	S B28	25.5	－	－	
22	62 F－504	杯蓋H	S B39	13.2	4.2	－	
23	62 F－503	杯蓋H	S B39	11.9	－	－	
24	62 F－505	杯蓋H	S B39	10.3	－	－	
25	62 F－506	土師器B	S B39	17.5	－	－	
26	62 F－507	土師器D	S B39	20.0	－	－	
27	62 F－509	土師器B	S B29	16.2	19.4	－	
28	62 H－529	杯H	S B57	11.0	4.8	－	
29	62 H－530	杯H	S B57	12.0	3.7	－	
30	62 H－531	高杯	S B57	－	－	－	
31	62 H－532	高杯	S B57	－	－	11.2	
32	62 H－533	甕	S B57	10.0	－	－	
33	62 H－536	壺A	S B57	25.8	－	－	
34	62 H－535	甕	S B57	－	－	－	
35	62 H－508	土師器壺	S B57	13.6	－	－	
36	62 H－538	土師器壺	S B57	15.6	－	－	
37	62 H－537	土師器甕	S B57	－	－	－	
38	62 H－513	杯蓋H	S B57	12.2	－	－	
39	62 H－514	杯蓋H	S B53	12.8	4.5	－	
40	62 H－512	杯蓋H	S B53	13.8	－	－	
41	62 H－515	杯H	S B53	11.6	－	－	
42	62 H－511	甕	S B53	23.2	－	－	
43	62 H－506	土師器壺A	S B53	14.7	－	－	
44	62 H－505	土師器壺D	S B53	15.7	－	－	
45	62 H－507	土師器壺A	S B53	16.8	－	－	
46	62 H－508	杯蓋H	S B38	11.8	－	－	
47	62 H－539	杯蓋H	S B52	13.0	4.8	－	
48	62 H－542	杯H	S B52	12.4	－	－	
49	62 H－541	杯H	S B52	11.2	－	－	
50	62 H－540	杯H	S B52	10.8	4.4	－	
51	62 H－543	杯蓋H	S B52	16.1	－	－	
52	62 H－521	壺A	S B52	16.0	－	－	
53	62 H－504	土師器壺	S B52	9.8	－	－	
54	62 H－503	土師器壺	S B52	16.2	－	－	
55	62 H－529	土師器壺	S B52	20.0	－	－	
56	62 H－519	土師器壺A	S B52	18.0	－	－	
57	62 H－516	土師器壺B	S B52	－	－	－	
58	62 H－518	土師器壺B	S B52	－	－	－	
59	62 H－502	土師器甕	S B52	30.6	－	－	
60	62 H－517	土師器甕	S B52	－	－	11.8	

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
61	63E－688	杯蓋H	SB48	12.6	－	－	
62	62H－526	甕A	SB51	－	－	－	
63	62H－569	杯蓋H	SB55	13.4	4.8	－	
64	62H－570	杯H	SB55	10.5	4.5	3.8	
65	63N－510	杯A	SB65	10.0	－	－	
66	63N－504	高杯	SB69	－	－	10.6	
67	63N－514	鉢B	SB69	8.7	4.5	－	
68	62I－501	高杯	SB58	17.7	－	－	
69	63N－508	土師器甕D	SB67	10.8	－	－	
70	63N－502	杯H	SB70	11.0	－	－	
71	63N－503	杯蓋H	SB70	10.5	－	－	
72	63N－501	高杯	SB70	－	－	11.9	
73	62H－556	杯蓋H	SB50	13.2	－	－	
74	62H－558	杯H	SB50	－	－	－	
75	62H－557	杯H	SB50	10.6	4.2	－	
76	62H－554	杯A	SB50	11.8	3.6	6.4	
77	62H－551	杯蓋A	SB50	12.0	－	－	
78	62H－553	杯蓋B	SB50	18.2	－	－	
79	62H－552	杯蓋B	SB50	16.0	－	－	
80	62H－555	高杯	SB50	－	－	8.6	
81	62H－561	鉢A	SB50	13.8	－	－	
82	62H－562	鉢B	SB50	9.0	－	－	
83	62H－560	硯	SB50	11.1	－	－	
84	62H－559	硯	SB50	－	－	12.8	
85	62H－563	甕A	SB50	26.0	－	－	
86	62H－564	土師器皿A	SB50	12.4	2.0	6.6	暗文あり
87	62H－565	土錘	SB50	－	－	－	長さ5.4cm 幅1.1cm
88	62H－510	土師器甕B	SB50	12.6	－	－	
89	62H－566	土師器甕B	SB50	16.5	－	－	
90	62H－568	土師器甕B	SB50	－	－	－	
91	62H－567	土師器甕B	SB50	18.7	－	－	
92	62H－548	杯B	SB49	－	－	9.6	
93	62H－547	高杯	SB49	11.6	－	－	
94	62H－550	土師器甕B	SB49	17.2	－	－	
95	62H－549	土師器甑	SB49	34.0	－	－	
96	62H－509	土師器甑	SB49	28.5	－	－	
97	62H－571	杯H	SB54	13.7	－	－	
98	62H－573	杯A	SB54	10.6	3.6	4.2	
99	62H－574	杯B	SB54	13.8	3.9	9.7	
100	62H－572	杯蓋A	SB54	13.2	－	－	
101	62H－575	高杯	SB54	11.4	－	－	
102	62H－576	高杯	SB54	－	－	－	
103	62H－625	提瓶	SB54	－	－	－	
104	62H－522	甕A	SB54	20.8	－	－	
105	62H－577	甑A	SB54	27.3	－	－	
106	62H－523	土師器甕B	SB54	15.8	－	－	
107	62H－525	土師器甕B	SB54	18.8	－	－	
108	62H－524	土師器甑	SB54	17.1	－	－	
109	62H－501	杯蓋B	SB56	16.3	－	－	
110	62H－544	杯B	SB56	14.6	4.2	10.6	
111	62H－545	高杯	SB56	16.6	－	－	
112	62H－546	高杯	SB56	19.4	－	－	
113	62H－527	横瓶	SB56	12.3	－	－	
114	62H－534	平瓶	SB56	5.9	－	－	
115	62H－528	土師器甕C	SB56	20.0	－	－	
116	63G－501	杯A	SB12	13.3	3.9	－	
117	63G－502	平瓶	SB12	－	－	－	
118	62E－578	杯B	SB18	14.8	－	－	
119	62E－579	土師器甕B	SB18	19.8	－	－	
120	62E－580	土師器甑	SB18	25.6	－	－	
121	62F－502	甑	SB37	－	－	－	
122	62J－556	壺B	SB64	11.2	－	－	
123	63N－505	杯A	SB66	11.8	4.7	5.8	
124	63N－506	杯A	SB66	12.9	4.6	－	
125	63N－507	杯A	SB66	11.2	4.9	3.8	
126	63N－509	高杯	SB66	－	－	9.2	
127	62J－594	杯H	SB63	9.7	－	－	
128	62J－595	杯蓋A	SB63	12.2	－	－	
129	62J－599	杯A	SB63	－	－	－	
130	62J－596	杯A	SB63	9.0	－	－	
131	62J－598	杯B	SB63	－	－	8.2	
132	62J－597	高杯	SB63	9.0	－	－	
133	62J－600	硯	SB63	9.5	－	－	
134	62J－537	土師器高杯	SB63	16.2	－	－	
135	62J－555	土師器甕C	SB63	26.0	－	－	
136	62J－538	土師器甕C	SB63	28.5	－	－	
137	62J－539	土師器甕C	SB63	14.8	－	－	
138	62J－541	土師器甕C	SB63	18.4	－	－	
139	62J－542	土師器甕C	SB63	－	－	7.9	
140	63F－554	杯蓋B	SB06	17.7	－	－	
141	63F－553	杯B	SB06	14.5	3.6	11.1	
142	63F－555	杯B	SB06	－	－	11.2	
143	63F－552	杯B	SB06	11.8	－	－	
144	63F－556	盤B	SB06	19.4	3.8	9.5	
145	63F－545	灰釉長頸瓶	SB06	9.2	－	－	
146	63F－544	灰釉長頸瓶	SB06	7.8	－	－	
147	63F－546	灰釉長頸瓶	SB06	－	－	7.8	
148	63F－547	土錘	SB06	－	－	－	
149	63F－541	杯蓋B	SB03	－	－	－	
150	63F－542	椀A	SB03	13.2	4.3	6.2	
151	63F－543	椀A	SB03	12.8	3.9	7.4	
152	63F－549	杯B	SB05	14.1	－	－	
153	63K－562	杯B	SB05	－	－	8.0	
154	63F－548	杯蓋B	SB05	22.8	－	－	
155	63F－550	椀A	SB05	－	－	7.2	
156	63K－563	甑C	SB05	28.3	－	－	
157	63F－551	土師器甕C	SB05	12.0	－	－	
158	63F－539	椀A	SB05	12.1	－	－	
159	63F－540	杯B	SB05	11.6	4.3	8.4	
160	63F－537	灰釉長頸瓶	SB07	－	－	－	
161	63F－36	甑C	SB07	－	－	－	
162	63F－538	土師器甑	SB07	－	－	－	
163	63F－559	杯蓋B	SB07	23.8	－	－	
164	63F－561	杯A	SB11	12.3	4.4	－	ヘラ記号「+」
165	63F－561	杯B	SB11	17.7	3.7	13.7	
166	63F－560	杯B	SB11	13.7	3.5	10.6	
167	63F－557	杯B	SB11	11.4	－	－	
168	63F－562	椀D	SB11	18.4	5.1	11.2	
169	63F－565	甑B	SB11	30.0	－	－	
170	63F－563	硯	SB11	－	－	－	
171	63F－566	土師器手づくね	SB11	11.7	－	－	
172	63F－564	土師器甑	SB11	－	－	－	
173	63F－567	杯蓋B	SB01	－	－	－	
174	63F－568	杯蓋B	SB01	20.4	－	－	
175	63F－569	杯B	SB01	－	－	11.0	
176	63F－570	壺C	SB01	－	－	12.5	
177	63F－571	土師器甕C	SB01	18.4	－	－	
178	63F－572	土師器甕C	SB01	－	－	4.9	
179	63K－560	杯A	SB08	－	－	9.2	
180	63F－533	杯B	SB08	14.0	－	－	

図版番号	登録番号	種　別	遺　構	口径	高さ	底径	備　考
181	63K－537	壺B	S B08	－	－	11.4	
182	63K－536	杯B	S B08	14.7	－	－	
183	63K－534	杯蓋B	S B08	18.1	－	－	
184	63K－535	椀A	S B08	14.1	－	－	
185	63K－530	壺B	S B08	11.5	－	－	
186	63K－559	土師器甕C	S B08	16.0	－	－	
187	63K－531	土師器甕C	S B08	17.7	－	－	
188	63K－532	土師器C	S B08	18.8	－	－	
189	63K－546	杯蓋B	S B10	15.0	－	－	
190	63K－545	杯B	S B10	19.7	－	－	
191	63K－547	壺B	S B10	－	－	11.3	
192	63K－548	壺B	S B10	11.3	－	－	
193	63K－549	土師器甕C	S B10	20.0	－	－	
194	62E－512	杯H	S B20	13.6	－	－	
195	62E－557	杯蓋B	S B20	16.5	2.9	－	
196	62E－560	杯蓋B	S B20	15.6	2.6	－	
197	62E－559	杯蓋B	S B20	15.6	3.0	－	
198	62E－561	杯蓋B	S B20	16.0	3.5	－	
199	62E－562	杯蓋B	S B20	17.3	－	－	
200	62E－697	杯蓋B	S B20	17.8	－	－	
201	62E－698	杯蓋B	S B20	16.9	－	－	
202	62E－556	杯蓋B	S B20	16.8	－	－	
203	62E－510	杯蓋B	S B20	18.0	4.2	－	
204	62E－511	杯蓋B	S B20	18.9	3.9	－	
205	62E－558	杯蓋B	S B20	20.1	5.6	－	
206	62E－509	杯蓋B	S B20	20.3	4.8	－	
207	62E－515	杯A	S B20	12.8	3.9	6.2	
208	62E－513	杯A	S B20	12.3	4.5	－	
209	62E－514	杯A	S B20	13.8	4.2	8.4	
210	62E－516	杯A	S B20	13.9	4.0	－	
211	62E－518	杯A	S B20	12.6	3.4	－	
212	62E－517	椀A	S B20	－	－	5.0	
213	62E－519	椀A	S B20	12.8	4.1	6.1	
214	62E－521	椀A	S B20	13.4	4.1	4.0	
215	62E－520	杯A	S B20	12.2	4.3	－	
216	62E－523	杯B	S B20	11.8	4.0	8.6	
217	62E－522	杯B	S B20	11.8	3.7	8.8	
218	62E－535	杯B	S B20	13.2	4.4	10.2	
219	62E－524	杯B	S B20	13.4	3.6	9.8	
220	62E－529	杯B	S B20	13.7	3.8	10.7	
221	62E－526	杯B	S B20	14.5	3.2	10.2	
222	62E－528	杯B	S B20	14.9	3.8	12.3	
223	62E－525	杯B	S B20	14.8	4.0	10.7	
224	62E－527	杯B	S B20	14.4	4.0	11.0	
225	62E－531	杯B	S B20	15.1	4.0	11.8	
226	62E－530	杯B	S B20	15.4	4.1	11.0	
227	62E－533	杯B	S B20	15.7	4.4	10.7	
228	62E－532	杯B	S B20	15.2	3.55	12.2	
229	62E－534	杯B	S B20	21.3	3.9	17.2	
230	62E－542	杯B	S B20	16.4	5.5	12.2	
231	62E－538	杯B	S B20	17.0	6.4	11.8	
232	62E－537	杯B	S B20	16.0	5.7	11.9	
233	62E－536	杯B	S B20	17.0	7.4	12.2	
234	62E－541	杯B	S B20	17.0	5.2	11.5	
235	62E－539	杯B	S B20	17.8	6.5	12.6	
236	62E－540	杯B	S B20	19.2	6.35	14.4	
237	62E－544	椀D	S B20	19.7	5.6	－	
238	62E－543	椀D	S B20	21.7	－	－	
239	62E－547	壺B	S B20	16.6	－	－	
240	62E－549	壺C	S B20	21.8	6.7	－	
241	62E－548	壺C	S B20	－	－	－	
242	62E－545	壺C	S B20	－	－	－	
243	62E－546	高盤	S B20	16.0	－	－	
244	62E－503	灰釉長頸瓶	S B20	11.4	－	－	
245	62E－550	灰釉長頸瓶	S B20	5.4	－	－	
246	62E－551	灰釉長頸瓶	S B20	－	－	－	
247	62E－552	壺C	S B20	9.7	7.0	－	
248	62E－553	甕A	S B20	25.2	－	－	
249	62E－555	甕B	S B20	27.0	－	－	
250	62E－501	甕A	S B20	26.0	－	－	
251	62E－502	甕A	S B20	－	－	13.6	
252	62E－505	土師器甕B	S B20	18.0	－	－	
253	62E－507	土師器甕B	S B20	18.8	－	－	
254	62E－506	土師器甕C	S B20	22.7	－	－	
255	62E－504	土師器甕C	S B20	17.0	－	－	
256	62E－508	土師器甕C	S B20	－	－	7.6	
257	62E－554	土師器甕	S B20	26.6	－	－	
258	63K－538	杯B	S B07	18.0	－	－	
259	63K－539	杯A	S B07	16.3	3.1	－	
260	63K－540	灰釉長頸瓶	S B09	13.2	－	－	
261	63K－541	土錘	S B09	－	－	－	長5.7cm 最大32.4cm
262	63K－543	土錘	S B09	－	－	－	長8.1cm 最大32.7cm
263	63K－542	土錘	S B09	－	－	－	長8.6cm 最大32.7cm
264	63K－544	土錘	S B09	－	－	－	長8.2cm 最大32.7cm
265	62E－575	杯蓋B	S B23	17.8	－	－	
266	62E－574	杯蓋B	S B23	16.9	－	－	
267	62E－576	杯B	S B23	13.9	4.9	10.0	
268	62E－577	椀C	S B23	16.3	4.4	7.6	
269	62E－576	杯B	S B23	17.9	－	－	
270	62J－718	杯蓋B	S B61	14.0	－	－	
271	62J－717	杯蓋B	S B61	14.2	－	－	
272	62J－712	杯A	S B61	－	－	6.2	
273	62J－706	椀A	S B61	－	－	5.4	
274	62J－709	椀A	S B61	11.9	－	－	
275	62J－711	杯B	S B61	12.9	－	－	
276	62J－714	杯B	S B61	14.6	－	－	
277	62J－713	杯B	S B61	16.0	－	－	
278	62J－716	杯B	S B61	15.3	－	－	
279	62J－715	杯B	S B61	16.2	－	－	
280	62J－710	椀B	S B61	15.8	－	－	
281	62J－707	低B	S B61	28.1	－	－	
282	62J－704	土師器甕C	S B61	17.6	－	－	
283	62J－705	土師器甕C	S B61	16.4	－	－	
284	62J－658	土師器甕C	S B61	17.3	－	－	
285	62J－706	土師器甕C	S B61	19.8	－	－	
286	62J－703	土師器甕E	S B61	22.8	－	－	
287	62J－720	土師器甕B	S B62	13.4	3.0	－	
288	62J－719	杯蓋B	S B62	13.1	－	－	
289	62J－721	杯A	S B62	13.3	3.9	11.0	
290	62J－722	低B	S B62	20.6	－	－	
291	62J－723	土師器甕C	S B62	15.6	－	－	
292	62J－724	土師器甕C	S B62	16.0	－	－	
293	62J－725	杯H	S B74	8.4	－	－	
294	62J－736	杯B	S B74	13.2	－	－	
295	62J－739	杯蓋B	S B74	15.0	－	－	
296	62H－578	壺C	S B71	6.2	－	－	
297	62H－579	杯B	S B73	－	－	9.5	
298	62F－516	杯蓋H	S D20	13.2	－	－	
299	62F－515	鉢	S D20	－	－	－	
300	62F－517	甕A	S D20	29.8	－	－	

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
301	62F－510	土師器甕B	SD73	16.9	－	－	
302	62F－512	土師器甕B	SD73	16.0	－	－	
303	62F－513	土師器甕B	SD73	16.1	－	－	
304	62F－511	土師器甕B	SD73	20.0	－	－	
305	62F－514	土師器甕B	SD73	13.2	－	－	
306	62F－518	高杯	SD12	11.8	5.5	10.1	
307	62F－525	杯A	SD08	11.2	4.4	7.7	
308	62F－526	杯A	SD08	12.6	5.0	6.7	
309	62F－524	杯A	SD08	13.2	5.0	－	
310	62F－523	灰釉長頸瓶	SD08	7.4	－	－	
311	62E－582	灰釉長頸瓶	SD08	－	－	－	
312	62F－522	平瓶	SD08	8.2	－	－	
313	62F－521	平瓶	SD08	－	－	－	
314	62F－520	甕	SD08	48.6	－	－	
315	62F－519	土師器皿A	SD08	22.3	2.9	16.0	暗文あり
316	62J－736	合子	SD23	13.4	3.8	11.2	
317	62J－737	杯B	SD23	16.4	5.7	10.0	
318	62J－734	椀D	SD24	－	－	9.1	
319	62H－595	灰釉長頸瓶	SD24	－	－	9.2	
320	62J－735	壺A	SD24	－	－	15.0	
321	62H－596	土師器甕A	SD24	14.8	－	－	
322	63N－512	杯蓋B	SD25	19.0	－	－	
323	63N－513	杯B	SD25	19.9	5.3	15.2	
324	62J－730	杯B	SD25	13.6	3.2	10.8	
325	62J－731	杯B	SD25	15.8	－	－	
326	62J－733	杯B	SD25	－	－	－	
327	62J－732	杯B	SD25	－	－	11.8	
328	62J－726	壺B	SD25	－	－	－	
329	62J－729	甕A	SD25	18.6	－	－	
330	62J－728	甕A	SD25	16.0	－	－	
331	62J－727	甕A	SD25	－	－	11.8	
332	63N－511	土師器甕A	SD25	18.8	－	－	
333	62E－601	椀A	SK14	－	－	5.2	
334	62E－591	杯蓋B	SK14	21.2	5.8	－	
335	62E－597	杯B	SK14	15.0	3.5	11.0	
336	62E－594	杯B	SK14	17.0	－	－	
337	62E－598	杯B	SK14	14.5	－	－	
338	62E－599	杯B	SK14	－	－	11.1	
339	62E－593	杯B	SK14	19.0	5.8	14.4	
340	62E－592	杯B	SK14	18.5	－	－	
341	62E－596	杯B	SK14	14.6	3.6	10.4	
342	62E－595	杯B	SK14	18.5	7.4	12.8	
343	62E－602	椀D	SK14	19.0	－	－	
344	62E－600	杯B	SK14	15.7	－	－	
345	63F－574	杯蓋B	SK01	25.7	－	－	
346	63K－550	盤B	SK03	14.9	－	－	
347	63K－551	甕A	SK04	26.8	－	－	
348	62E－603	杯蓋B	SK12	13.6	3.0	－	
349	62E－694	杯蓋B	SK12	22.0	－	－	
350	62E－604	杯B	SK12	13.3	3.5	9.9	
351	62E－606	椀A	SK13	13.8	－	－	
352	62E－605	盤B	SK13	20.8	－	－	
353	62E－590	鉢	SK13	28.8	－	－	
354	62H－598	杯蓋H	包含層	13.1	4.2	－	
355	62E－689	杯蓋H	包含層	13.7	4.8	－	
356	62H－580	杯蓋H	包含層	14.3	4.5	－	
357	62E－693	杯H	包含層	10.5	4.3	－	
358	62J－589	杯H	包含層	9.0	3.6	4.6	
359	62J－601	杯蓋A	包含層	12.8	－	－	
360	62H－603	杯蓋A	包含層	10.8	－	－	
361	62J－694	杯蓋B	包含層	16.0	－	－	
362	62E－680	杯蓋B	包含層	14.3	2.8	－	
363	62J－695	杯蓋B	包含層	13.2	2.5	－	
364	62E－681	杯蓋B	包含層	15.9	2.8	－	
365	62J－696	杯蓋B	包含層	18.1	3.4	－	
366	62E－687	杯B	包含層	11.8	3.5	8.4	
367	62F－580	杯B	包含層	14.2	3.4	11.4	
368	63L－508	杯B	包含層	15.8	3.6	11.2	
369	63N－523	杯B	包含層	13.0	4.6	8.5	
370	62F－582	杯B	包含層	15.0	3.9	11.6	
371	62E－629	杯B	包含層	14.8	4.0	9.8	墨書「大」
372	62J－608	杯B	包含層	15.0	3.3	5.5	
373	63F－579	杯B	包含層	14.4	4.5	10.6	
374	62J－505	杯B	包含層	13.8	6.2	10.6	
375	63G－503	杯B	包含層	13.2	4.8	8.8	
376	63F－578	杯B	包含層	12.0	－	－	
377	62J－507	盤B	包含層	19.8	4.3	9.6	
378	63K－558	盤C	包含層	－	－	－	
379	62H－597	杯A	包含層	10.2	3.6	－	
380	62J－697	杯A	包含層	10.5	4.0	－	
381	62F－530	杯A	包含層	10.6	3.6	6.0	
382	62J－699	杯A	包含層	11.8	4.2	5.2	
383	62E－677	杯A	包含層	12.6	3.8	6.7	
384	62J－698	杯A	包含層	12.3	3.5	7.1	
385	62E－676	杯A	包含層	13.2	3.5	7.0	
386	63K－557	杯A	包含層	11.9	3.5	5.2	
387	62J－510	椀A	包含層	15.5	4.4	5.3	
388	62J－610	椀A	包含層	12.0	4.0	6.4	
389	62F－576	椀A	包含層	－	－	5.7	
390	62E－690	杯A	包含層	12.8	3.7	－	
391	62J－700	杯A	包含層	12.8	4.7	－	
392	62E－678	杯A	包含層	13.0	4.0	3.6	
393	62E－679	椀C	包含層	15.3	4.7	6.6	
394	62E－685	椀C	包含層	18.4	－	－	
395	62H－608	高杯	包含層	－	－	－	
396	62H－585	鉢D	包含層	14.8	－	－	
397	62H－604	鉢B	包含層	9.1	－	－	
398	62E－670	壺B	包含層	7.7	－	－	
399	62J－652	鉢B	包含層	16.8	－	－	
400	63F－592	鉢B	包含層	19.1	－	－	
401	62E－657	鉢C	包含層	－	－	10.4	
402	62K－514	瓶	包含層	26.5	－	－	
403	63L－507	鉢C	包含層	13.3	－	－	
404	62E－669	壺蓋	包含層	10.8	3.3	－	
405	62J－667	壺C	包含層	8.4	－	－	
406	62K－512	壺C	包含層	－	－	6.0	刻書「汝」
407	62E－671	横瓶	包含層	8.1	－	－	
408	62F－591	𤭯	包含層	－	－	－	
409	62E－661	𤭯	包含層	4.5	6.1	－	
410	63E－691	𤭯	包含層	－	－	4.2	
411	62F－535	甕A	包含層	13.6	－	－	
412	63E－692	甕A	包含層	24.2	－	－	
413	62J－663	甕A	包含層	30.6	－	－	
414	62J－661	甕A	包含層	－	－	13.1	
415	62E－662	瓶B	包含層	24.0	－	－	
416	62E－664	瓶A	包含層	26.9	－	－	
417	62E－665	瓶A	包含層	22.8	－	－	
418	62I－505	器台	包含層	－	－	－	
419	63K－556	円面硯	包含層	－	－	6.2	
420	63F－573	長方硯	包含層	－	－	－	

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
421	63N－515	土師器椀C	包含層	－	－	－	
422	62H－592	土師器皿A	包含層	20.4	－	－	
423	62H－594	土師器皿B	包含層	20.8	－	－	暗文あり
424	62H－591	土師器皿A	包含層	24.6	－	－	
425	62H－619	土師器甕B	包含層	17.2	－	－	
426	63N－529	土師器甕B	包含層	14.0	－	－	
427	62J－672	土師器甕F	包含層	18.4	－	－	
428	62H－622	土師器甕B	包含層	28.8	－	－	
429	62I－503	土錘	包含層	－	－	－	長さ6.4cm 最大巾3.4cm
430	62E－668	土錘	包含層	－	－	－	
431	62J－659	土錘	包含層	－	－	－	長さ3.7cm 最大巾0.9cm
432	62H－593	不明	包含層	－	－	－	
433	62J－546	灰釉皿	包含層	13.5	2.9	6.5	
434	62J－545	灰釉皿	包含層	13.0	3.4	6.6	
435	62J－543	灰釉皿	包含層	13.2	2.7	6.2	
436	62J－544	灰釉椀	包含層	15.5	5.0	7.5	
437	62J－568	土錘	包含層	－	－	－	最大巾2.8cm
438	62J－567	灰釉皿	包含層	－	－	7.0	
439	62J－512	灰釉椀	包含層	－	－	8.2	
440	62J－511	土錘	包含層	－	－	－	長さ6.3cm 最大巾3.0cm
441	62K－503	土錘	包含層	12.5	3.1	5.8	
442	62J－523	灰釉皿	包含層	14.6	3.6	6.5	
443	62J－522	灰釉皿	包含層	14.2	3.0	6.9	
444	62J－521	灰釉椀	包含層	－	－	7.0	
445	62J－524	灰釉段皿	包含層	17.4	3.3	8.8	
446	62J－525	土師器甕C	包含層	18.0	－	－	
447	62J－526	土師器甕C	包含層	－	－	7.2	
448	62J－527	土師器甕C	包含層	16.8	－	－	
449	62J－528	土師器甕C	包含層	22.2	－	－	
450	62J－529	土師器甕C	包含層	21.9	－	－	
451	62J－570	灰釉椀	SK85	13.2	4.2	14.0	
452	62J－569	灰釉椀	SK85	14.8	4.5	6.8	
453	62J－588	灰釉椀	黒褐色砂質土層	12.8	4.9	6.0	
454	62J－587	灰釉椀	黒褐色砂質土層	－	－	6.6	
455	62J－591	灰釉椀	黒褐色砂質土層	14.0	－	－	
456	62J－593	灰釉椀	黒褐色砂質土層	－	－	6.6	
457	62J－571	灰釉椀	黒褐色砂質土層	16.8	4.5	－	
458	62J－585	灰釉椀	黒褐色砂質土層	14.8	4.6	7.6	
459	62J－644	灰釉椀	黒褐色砂質土層	8.5	2.7	3.9	
460	62J－633	灰釉椀	黒褐色砂質土層	16.2	5.6	8.3	
461	62J－561	灰釉大椀	黒褐色砂質土層	－	－	10.2	
462	62J－562	灰釉大椀	黒褐色砂質土層	－	－	11.6	
463	62J－560	灰釉皿	黒褐色砂質土層	12.0	1.9	6.9	
464	62J－581	灰釉皿	黒褐色砂質土層	11.2	1.8	6.4	
465	62J－580	灰釉皿	黒褐色砂質土層	11.2	2.5	5.8	
466	62J－584	灰釉皿	黒褐色砂質土層	11.4	2.4	6.6	
467	62J－583	灰釉皿	黒褐色砂質土層	15.1	2.5	6.4	
468	62J－582	灰釉皿	黒褐色砂質土層	11.4	2.3	6.7	
469	62J－469	土師器甕H	黒褐色砂質土層	19.4	－	－	
470	62J－565	土師器甕I	黒褐色砂質土層	17.0	－	－	
471	62J－566	土師器甕I	黒褐色砂質土層	26.4	－	－	
472	62J－563	土師器甕H	黒褐色砂質土層	12.0	－	－	
473	62J－558	土錘	黒褐色砂質土層	－	－	－	長さ4.9cm 最大巾1.8cm
474	62J－589	灰釉椀	褐色砂質土層	13.6	4.4	6.3	
475	62J－550	灰釉椀	褐色砂質土層	15.6	4.9	7.7	
476	62J－578	灰釉椀	褐色砂質土層	9.6	3.0	4.4	
477	62J－577	灰釉椀	褐色砂質土層	12.4	3.9	6.0	
478	62J－513	灰釉椀	褐色砂質土層	－	－	7.6	
479	62J－576	灰釉椀	褐色砂質土層	－	－	5.8	
480	62J－533	灰釉椀	褐色砂質土層	－	－	8.4	
481	62J－547	灰釉皿	褐色砂質土層	12.4	2.5	6.0	
482	62J－549	灰釉皿	褐色砂質土層	13.2	2.6	6.8	
483	62J－552	灰釉皿	褐色砂質土層	12.8	－	－	
484	62J－530	灰釉皿	褐色砂質土層	13.6	2.6	7.4	
485	62J－532	灰釉皿	褐色砂質土層	13.5	2.6	7.4	
486	62J－520	灰釉段皿	褐色砂質土層	13.1	2.0	9.6	
487	62J－551	灰釉長頸瓶	褐色砂質土層	14.0	－	－	
488	62J－531	灰釉長頸瓶	褐色砂質土層	－	－	7.0	
489	62J－579	土師器甕G	褐色砂質土層	17.8	－	－	
490	62J－502	土師器壺	暗褐色砂質土層	12.2	－	－	古墳時代か
491	62J－548	土錘	暗褐色砂質土層	－	－	－	最大巾3.1cm
492	62J－553	土錘	暗褐色砂質土層	－	－	－	最大巾3.7cm
493	62J－586	灰釉椀	暗褐色砂質土層	－	－	7.6	
494	62J－557	甕A	暗褐色砂質土層	29.0	－	－	
495	62J－559	甕A	暗褐色砂質土層	－	－	18.8	
496	62J－675	灰釉皿	黒褐色砂質土層	12.0	3.4	7.6	墨書「沙中房」
497	62J－680	灰釉皿	包含層	11.4	3.5	5.8	墨書「沙中房」
498	62J－679	灰釉皿	包含層	11.3	2.3	6.2	墨書「沙中房」
499	62J－674	灰釉輪花皿	黒褐色砂質土層	10.8	3.3	5.8	墨書「沙中房」
500	62J－678	灰釉輪花皿	包含層	－	－	5.6	墨書「沙中房」
501	62J－573	灰釉輪花皿	包含層	－	－	7.3	墨書「沙中房」
502	62K－521	灰釉輪花皿	SK85	－	－	8.0	墨書「沙中房」
503	62J－691	灰釉輪花皿	包含層	－	－	8.5	墨書「大師寺」
504	62K－517	灰釉輪花皿	包含層	－	－	7.0	墨書「大師」
505	62J－683	灰釉輪花皿	包含層	－	－	－	墨書「□□寺」
506	62J－692	灰釉椀	包含層	13.8	4.6	6.4	墨書「生方」
507	62K－507	灰釉皿	包含層	12.9	2.8	6.8	墨書「生方」
508	62J－554	灰釉皿	黒褐色砂質土層	－	－	7.6	墨書「生方」
509	62J－690	灰釉皿	包含層	14.0	3.0	7.2	墨書「□」
510	62J－688	灰釉皿	包含層	－	－	6.4	墨書「□」
511	62K－501	灰釉皿	SK85	－	－	6.6	墨書「生□」
512	62K－506	灰釉皿	包含層	－	－	7.8	墨書「副山」
513	62J－501	灰釉皿	包含層	－	－	8.0	墨書「堂司」カ
514	62J－682	灰釉椀	包含層	12.4	3.4	6.6	墨書「上方」
515	62J－677	灰釉椀	黒褐色砂質土層	12.0	4.2	6.2	墨書「上方」
516	62J－683	灰釉皿	包含層	12.0	2.9	6.2	墨書「大福」カ
517	62K－518	灰釉皿	包含層	－	－	6.4	墨書「生徳」カ
518	62K－502	灰釉椀	SD84	－	－	7.2	墨書「新」
519	62J－681	灰釉椀	包含層	－	－	6.8	墨書「法」
520	62J－689	灰釉皿	包含層	－	－	6.6	墨書「則□」
521	62J－687	灰釉皿	包含層	－	－	6.5	墨書「則□」
522	62K－508	灰釉椀	SK85	4.8	16.5	8.0	墨書「田」
523	62J－686	灰釉皿	包含層	－	－	7.0	墨書「大」
524	62K－505	灰釉椀	包含層	－	－	7.0	墨書「□」
525	62K－519	灰釉皿	包含層	－	－	7.6	墨書「□」
526	62K－520	灰釉皿	包含層	－	－	6.4	墨書あり
527	62K－516	灰釉皿	包含層	－	－	7.2	墨書あり
528	62J－685	灰釉皿	包含層	－	－	7.4	墨書あり
529	62J－676	灰釉段皿	黒褐色砂質土層	12.3	3.1	6.8	墨書「□」
530	62E－620	土師器高杯	P81	11.6	5.3	6.9	
531	62E－609	土師器皿	P81	9.1	2.0	5.4	
532	62E－608	土師器皿	P81	9.0	2.1	5.0	
533	62E－611	土師器皿	P81	8.9	2.1	3.5	
534	62E－612	土師器皿	P81	8.5	1.4	4.4	
535	62E－613	土師器杯	P81	10.6	2.9	4.8	
536	62E－625	土師器高台付杯	P81	9.6	3.8	5.0	
537	62E－624	土師器高台付杯	P81	9.8	3.5	5.5	
538	62E－626	土師器高台付杯	P81	10.8	4.7	7.0	
539	62E－610	土師器高台付杯	P81	15.0	4.8	6.6	
540	62E－607	土師器高台付杯	P81	－	－	9.1	

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
541	62E−619	土師器高台付杯	P81	10.0	4.7	6.3	
542	62E−621	土師器高台付杯	P81	11.1	4.3	6.1	
543	62E−616	土師器高杯	P81	9.8	3.3	5.8	
544	62E−618	土師器高杯	P81	9.6	3.7	6.4	
545	62E−614	土師器高杯	P81	9.6	4.0	5.9	
546	62E−617	土師器高杯	P81	8.9	4.3	6.4	
547	62E−623	土師器高杯	P81	11.2	4.7	7.4	
548	62E−627	土師器高杯	P81	10.8	5.3	8.0	
549	62E−615	土師器高杯	P81	9.9	4.9	6.4	
550	62E−622	土師器高台付杯	P81	11.3	4.9	6.2	
551	62J−604	緑釉段皿	P81	19.3	−	−	
552	62J−602	緑釉碗	包含層	12.7	−	−	
553	62J−603	緑釉碗	包含層	14.5	−	−	
554	62J−519	緑釉輪花碗	包含層	12.3	−	−	
555	62J−606	緑釉碗	包含層	−	−	5.4	
556	62K−526	緑釉皿	包含層	−	−	7.9	
557	62J−605	緑釉皿	包含層	−	−	7.5	
558	62J−657	灰釉碗	包含層	12.0	4.0	6.0	
559	62J−644	灰釉碗	包含層	8.5	2.7	3.9	
560	62J−633	灰釉碗	包含層	16.2	5.6	8.3	
561	62J−651	灰釉碗	包含層	12.4	4.5	6.1	
562	62J−648	灰釉碗	包含層	15.0	5.0	6.7	
563	62L−501	灰釉碗	包含層	10.8	3.3	5.5	
564	62J−627	灰釉碗	包含層	12.2	3.2	6.2	
565	62J−656	灰釉碗	包含層	13.5	4.2	6.3	
566	62J−637	灰釉碗	包含層	13.6	3.7	7.4	
567	62J−641	灰釉碗	包含層	16.4	5.1	8.2	
568	62J−645	灰釉碗	包含層	14.8	4.1	7.6	
569	62J−640	灰釉碗	包含層	13.7	4.0	6.7	
570	62J−638	灰釉碗	包含層	15.3	4.8	7.2	
571	62J−653	灰釉碗	包含層	15.9	4.5	7.2	
572	62J−516	灰釉碗	包含層	17.5	5.3	8.2	
573	62J−631	灰釉皿	包含層	11.5	2.6	6.2	
574	62J−612	灰釉皿	包含層	12.8	2.6	7.0	
575	62J−624	灰釉皿	包含層	13.3	2.9	5.8	
576	62J−536	灰釉皿	包含層	13.8	3.0	6.6	
577	62J−620	灰釉皿	包含層	11.4	2.3	6.5	
578	62J−630	灰釉皿	包含層	12.8	2.9	6.0	
579	62J−623	灰釉皿	包含層	13.1	2.7	6.3	
580	62J−615	灰釉皿	包含層	12.6	2.8	6.8	
581	62J−634	灰釉皿	包含層	13.3	3.2	6.2	
582	62J−619	灰釉皿	包含層	14.3	2.7	6.5	
583	62J−622	灰釉皿	包含層	14.4	2.9	7.0	
584	62J−612	灰釉皿	包含層	13.6	2.4	7.3	
585	62J−632	灰釉皿	包含層	14.2	3.6	6.6	
586	62J−612	灰釉耳皿	包含層	−	−	6.6	
587	62J−666	灰釉小瓶	包含層	4.0	−	−	
588	62K−528	土師器甕G	包含層	14.8	−	−	
589	62J−534	甕A	包含層	29.6	−	−	
590	62J−518	甕A	包含層	29.0	−	−	
591	62E−696	杯A	包含層	−	−	−	ヘラ記号あり
592	62J−749	土師器甕	SB61	−	−	−	
593	62J−744	灰釉輪花皿	黒褐色砂質土層	−	−	−	墨書あり
594	62J−745	灰釉深碗	包含層	−	−	−	墨書あり
595	62J−746	灰釉碗	包含層	−	−	−	墨書あり
596	62J−747	灰釉碗	包含層	−	−	−	墨書あり
597	62K−569	灰釉皿	包含層	−	−	−	墨書あり
598	62J−748	灰釉碗	包含層	−	−	−	墨書あり
599	62K−570	灰釉皿	包含層	−	−	−	墨書あり
600	62K−571	灰釉碗	包含層	−	−	−	墨書あり
601	63F−171	碗A1	SK101	12.2	4.5	5.9	
602	63F−168	碗A1	SK101	13.6	5.0	5.9	
603	63F−162	碗A1	SK101	13.8	5.2	7.2	墨書「一」
604	63F−161	碗A1	SK101	14.0	5.0	6.8	
605	63F−160	碗A1	SK101	14.5	5.5	6.7	
606	63F−169	碗A1	SK101	14.5	5.0	6.7	
607	63F−165	碗A1	SK101	14.7	5.1	7.1	
608	63F−164	碗A1	SK101	15.8	5.5	−	
609	63F−166	皿A1	SK101	8.6	1.4	5.8	
610	63F−163	土師器鍋A	SK101	21.5	−	−	
611	63F−173	鉢A1	SK101	31.6	14.5	14.0	
612	63F−172	鉢A2	SK101	34.2	12.6	16.4	
613	63F−174	甕	SK101	22.0	−	−	
614	63F−176	甕	SK101	45.3	−	−	
615	63F−177	甕	SK101	22.1	39.1	16.2	
616	63F−175	甕	SK101	36.3	45.4	16.7	押印帯
617	62E−27	碗A2	SD120	14.4	5.0	7.2	
618	62E−22	碗A3	SD120	13.6	4.8	4.4	
619	62E−23	碗A3	SD120	13.4	4.8	4.3	
620	62E−25	碗A3	SD120	13.6	4.5	5.4	
621	62E−28	碗A3	SD120	13.4	4.6	3.6	
622	62E−26	碗A3	SD120	13.6	4.2	4.2	
623	62E−41	鉢A3	SD120	−	−	14.4	
624	62E−42	皿A1	SD120	8.6	1.8	4.4	
625	62E−34	皿A1	SD120	8.6	1.7	3.6	
626	62E−36	皿A2	SD120	8.0	1.4	4.0	
627	62E−38	皿A2	SD120	8.8	1.4	4.6	
628	62E−40	皿A2	SD120	8.6	1.5	6.3	
629	62E−37	皿A2	SD120	8.4	1.1	5.4	
630	62E−39	皿A2	SD120	8.1	1.2	5.6	
631	62E−24	皿A2	SD120	8.0	1.4	3.9	
632	62E−32	皿A2	SD120	7.8	1.4	4.2	
633	62E−33	皿A2	SD120	7.4	1.3	4.6	
634	62E−45	土師器皿A2a	SD120	7.8	−	−	
635	62E−32	土師器鍋B1	SD120	−	−	−	
636	62E−44	甕	SD120	−	−	−	常滑窯産
637	62F−21	碗A2	SE110	14.5	−	−	
638	62F−22	碗A2	SE110	13.6	4.9	5.5	
639	62F−23	碗A3	SE110	14.7	−	−	
640	62F−24	碗A3	SE110	−	4.5	4.5	
641	62F−25	皿A2	SE110	9.0	1.4	6.4	
642	62F−26	土師器皿A1	SE110	13.0	−	−	
643	62F−27	土師器皿A1	SE110	12.8	−	−	
644	62F−28	土師器皿A1	SE110	9.9	−	−	
645	62F−29	土師器皿A2a	SE110	8.2	1.5	3.6	
646	62F−30	土師器皿A2a	SE110	7.0	1.7	4.0	
647	62F−31	白磁碗	SE110	−	−	−	
648	62F−32	土師器鍋A	SE110	−	−	−	
649	試掘−1	壺A	包含層	−	−	6.2	灰釉
650	62F−16	皿A1	SD127	7.9	1.7	5.5	
651	62F−15	皿A2	SD127	8.7	1.9	5.2	
652	62F−17	土師器皿A2a	SD127	11.6	2.0	6.5	
653	62F−19	土師器皿A2a	SD127	8.0	1.5	4.0	
654	62F−14	土師器壺	SD127	2.5	−	−	
655	62K−40	鉢A2	SE132	29.8	10.3	12.6	
656	62K−39	鉢B1	SE132	26.8	−	−	
657	62K−41	壺A	SE132	12.4	28.9	12.0	灰釉
658	63E−6	碗B1	SD136	11.8	−	−	鉄釉
659	63E−10	碗B1	SD136	12.0	−	−	鉄釉
660	63E−19	青磁碗	SD136	−	−	4.4	

図版番号	登録番号	種　別	遺　構	口径	高さ	底径	備　考
661	63E－30	椀D	SD136	－	－	5.2	銭転
662	63E－16	椀C	SD136	－	－	3.8	灰釉
663	63E－31	皿B 2	SD136	10.2	2.3	4.3	灰釉
664	63E－17	青磁壺	SD136	－	－	8.4	
665	63E－7	白磁皿	SD136	10.0	2.2	4.4	
666	63E－32	土師器皿a	SD136	14.4	2.7	7.6	
667	63E－33	土師器皿a	SD136	13.9	2.7	7.7	
668	63E－34	土師器皿a	SD136	13.4	2.6	7.4	
669	63E－35	土師器皿a	SD136	12.5	2.3	7.0	
670	63E－36	土師器皿a	SD136	12.2	2.3	7.5	
671	63E－37	土師器皿a	SD136	12.3	2.5	6.9	
672	63E－38	土師器皿a	SD136	14.5	2.7	7.7	
673	63E－39	土師器皿a	SD136	14.2	2.3	7.5	
674	63E－40	土師器皿a	SD136	14.0	2.5	6.0	
675	63E－41	土師器皿a	SD136	11.8	2.2	6.9	
676	63E－42	土師器皿a	SD136	12.4	2.2	5.5	
677	63E－43	土師器皿a	SD136	11.0	2.1	6.4	
678	63E－44	土師器皿a	SD136	9.3	2.1	4.2	
679	63E－45	土師器皿a	SD136	9.3	2.1	4.4	
680	63E－46	土師器皿a	SD136	9.2	2.1	5.7	
681	63E－47	土師器皿a	SD136	7.2	1.8	4.3	
682	63E－48	土師器皿a	SD136	7.0	1.8	4.3	
683	63E－49	土師器皿a	SD136	7.0	1.6	4.2	
684	63E－50	土師器皿Ab	SD136	5.9	1.1	－	
685	63E－51	土師器皿Ab	SD136	6.0	1.3	－	
686	63E－52	土師器皿Ab	SD136	6.0	1.1	－	
687	63E－53	土師器皿Ab	SD136	5.9	1.3	－	
688	63E－54	土師器皿Ab	SD136	5.8	1.2	－	
689	63E－55	土師器皿Ab	SD136	5.7	1.2	－	
690	63E－4	鉢D 1	SD136	37.4	－	－	銭転
691	63E－3	鉢D 1	SD136	30.0	－	－	銭転
692	63E－5	鉢D 1	SD136	29.4	－	－	銭転
693	63E－8	鉢D 1	SD136	28.2	－	－	銭転
694	63E－2	鉢D	SD136	－	－	12.0	銭転
695	63E－1	壺B	SD136	12.0	－	－	鉄釉
696	63E－11	壺	SD136	41.6	－	－	茶渋変成
697	63G－5	椀B 1	SD112	12.2	－	－	鉄釉
698	63G－18	青磁椀	SD112	－	－	－	
699	63G－29	椀B 1	SD112	－	－	4.0	鉄釉
700	63G－23	椀D	SD112	9.6	－	－	銭転
701	63G－3	皿B 1	SD112	8.4	2.5	3.6	灰釉
702	63G－22	皿B 3	SD112	14.6	－	－	灰釉
703	63G－4	皿A 3	SD112	10.6	2.7	3.7	
704	63G－6	皿A 3	SD112	10.8	2.6	4.4	
705	63G－12	皿A 3	SD112	10.0	2.4	4.1	
706	63G－19	土師器皿a	SD112	13.8	1.9	5.2	
707	63G－8	土師器皿b	SD112	11.4	2.4	5.4	
708	63G－7	土師器皿b	SD112	11.0	1.8	5.6	
709	63G－9	土師器皿Ac	SD112	6.6	1.1	－	
710	63G－11	土師器皿Ac	SD112	6.8	1.2	－	
711	63G－13	土師器C3a	SD112	22.0	－	－	
712	63G－23	土師器C3a	SD112	21.4	－	－	
713	63G－24	土師器C3a	SD112	24.6	－	－	
714	63G－25	壺	SD112	－	－	－	茶渋変成
715	63G－16	鉢D 1	SD112	－	－	－	銭転
716	63G－26	鉢B 2	SD112	21.4	－	－	鉄釉
717	63G－1	鉢D 1	SD112	31.0	－	－	銭転
718	63G－2	鉢C 2	SD112	26.2	－	－	銭転
719	63H－30	椀B	SD117	11.4	－	－	鉄釉
720	63H－29	椀D	SD117	11.0	－	－	銭転

図版番号	登録番号	種　別	遺　構	口径	高さ	底径	備　考
721	63H－28	染付皿	SD117	－	－	6.0	
722	63H－31	染付皿	SD117	9.4	2.4	5.4	
723	63H－32	鉢D 2	SD117	31.4	－	－	銭転
724	63H－33	土師器C3b	SD117	27.1	－	－	
725	63H－35	土師器C3c	SD117	23.6	－	－	
726	63H－19	椀B 1	SD116	11.4	6.1	4.7	銭転
727	63H－8	椀B	SD116	13.5	－	－	銭転
728	63H－3	椀B 1	SD116	－	－	4.6	銭転
729	63H－7	椀D	SD116	10.0	－	－	銭転
730	63H－23	皿B 2	SD116	10.4	－	－	銭転
731	63H－4	ふつば	SD116	6.4	－	－	鉄滓付着
732	63H－17	皿B 1	SD116	9.6	2.6	4.1	灰釉
733	63H－1	皿E 1	SD116	10.2	2.6	4.2	
734	63H－24	皿B 2	SD116	12.1	－	－	灰釉
735	63H－18	皿E 1	SD116	10.3	2.5	4.3	
736	63H－5	壺E	SD116	6.3	－	－	銭転
737	63H－6	瓶	SD116	11.3	－	－	灰釉
738	63H－14	土師器Ad	SD116	5.4	0.8	－	
739	63H－15	土師器Ad	SD116	5.2	0.9	－	
740	63H－21	土師器鍋D	SD116	13.1	－	－	
741	63H－22	土師器鍋D	SD116	27.7	－	－	
742	63F－56	椀B 1	SD101	13.2	6.3	4.3	銭転
743	63F－62	椀B 1	SD101	12.8	－	－	銭転
744	63F－68	椀B	SD101	11.0	－	－	銭転
745	63F－28	椀B 1	SD101	－	－	5.2	銭転
746	63F－70	椀B 1	SD101	－	－	3.8	銭転
747	63F－43	椀D	SD101	9.5	5.6	5.3	銭転
748	63F－72	椀C 1	SD101	11.8	－	－	灰釉
749	63F－52	椀C 1	SD101	11.4	－	－	灰釉
750	63F－55	椀C 1	SD101	12.0	－	－	灰釉
751	63F－24	椀C 1	SD101	－	－	5.6	灰釉
752	63F－67	椀C 1	SD101	－	－	5.6	灰釉
753	63F－74	皿C 2	SD101	7.6	－	－	灰釉
754	63F－22	皿C 2	SD101	8.5	2.4	4.4	灰釉印花
755	63F－23	皿C 2	SD101	8.8	2.0	5.0	灰釉
756	63F－73	皿C 2	SD101	10.0	－	－	灰釉
757	63F－59	皿C 7	SD101	11.2	－	－	灰釉
758	63F－40	皿C 2	SD101	12.0	2.5	7.6	灰釉
759	63F－58	皿C 4	SD101	10.6	2.1	5.1	灰釉
760	63F－71	皿D 1	SD101	10.8	2.4	5.6	灰釉
761	63F－38	皿C 7	SD101	12.4	－	－	灰釉
762	63F－45	土師器B3a	SD101	14.7	2.9	8.0	タール付着
763	63F－14	土師器B3a	SD101	13.4	2.5	6.6	
764	63F－8	土師器B2b	SD101	12.8	3.1	5.6	
765	63F－4	土師器B3c	SD101	11.5	2.1	5.1	タール付着
766	63F－17	土師器B1b	SD101	14.6	2.6	6.2	
767	63F－15	土師器B1b	SD101	12.6	2.6	5.6	
768	63F－35	土師器B2c	SD101	11.3	－	－	体部穿孔
769	63F－10	土師器B2b	SD101	11.2	2.0	5.2	体部穿孔
770	63F－11	土師器B4b	SD101	9.8	1.9	4.8	タール付着
771	63F－42	土師器B4b	SD101	8.8	1.9	5.4	
772	63F－51	土師器B4c	SD101	7.8	1.4	－	
773	63F－44	土師器B4b	SD101	7.8	1.4	3.7	
774	63F－37	土師器B4b	SD101	7.0	1.5	4.2	タール付着
775	63F－50	土師器A3c	SD101	6.0	1.3	－	
776	63F－21	土師器A3c	SD101	5.5	1.5	－	
777	63F－20	土師器A3c	SD101	5.4	1.0	－	
778	63F－18	土師器A3c	SD101	5.2	1.2	－	
779	63F－31	土師器A3c	SD101	4.8	1.0	－	
780	63F－61	香炉A	SD101	10.4	4.5	6.4	銭転

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
781	63F－64	鉢C3	SD101	13.8	－	－	鉄釉
782	63F－39	壺F	SD101	5.5	－	－	鉄釉
783	63F－66	壺E	SD101	5.2	－	－	鉄釉
784	63F－32	壺E	SD101	3.0	－	－	鉄釉
785	63F－48	燭台	SD101	－	－	－	鉄釉
786	63F－57	鉢B2	SD101	22.3	－	－	鉄釉
787	63F－47	鉢D2	SD101	26.0	－	－	錆釉
788	63F－41	鉢B2	SD101	29.0	－	－	灰釉
789	63F－29	鉢C1	SD101	28.6	－	－	鉄釉
790	63F－60	陶丸	SD104	2.3	2.2	－	
791	63F－1	土師器鍋C1b	SD104	25.7	14.5	－	
792	63F－2	土師器鍋C1b	SD104	23.3	－	－	
793	63F－3	土師器鍋C1b	SD104	22.7	－	－	
794	63F－76	碗B1	SD104	11.1	5.8	4.6	鉄釉
795	63F－78	碗E	SD104	7.0	2.3	2.9	鉄釉
796	63F－79	皿C2	SD104	8.8	1.8	4.7	灰釉
797	63F－80	皿C1	SD104	9.8	2.5	5.0	灰釉
798	63F－81	皿C1	SD104	9.4	2.2	5.5	灰釉
799	63F－84	皿C3	SD104	10.8	2.9	6.0	鉄釉
800	63F－83	壺D?	SD104	－	－	6.0	錆釉
801	63F－102	土師器皿B2d	SD104	11.9	2.0	5.8	
802	63F－99	土師器皿B2d	SD104	11.5	2.4	5.5	
803	63F－100	土師器皿B2d	SD104	11.5	2.1	4.8	
804	63F－98	土師器皿B4b	SD101	6.8	1.2	3.5	
805	63F－96	土師器皿B4b	SD101	7.2	1.6	3.8	
806	63F－101	土師器皿B4b	SD101	8.0	1.6	4.0	タール付着
807	63F－97	土師器皿A2d	SD101	4.8	1.1	3.0	
808	63F－95	土師器皿A2d	SD101	5.4	0.9	4.7	
809	63F－87	土師器皿A4a	SD101	4.8	1.3	－	
810	63F－88	土師器皿A4a	SD101	4.8	1.1	－	
811	63F－77	鉢C3	SD101	14.0	17.3	11.4	鉄釉
812	63F－82	壺E	SD101	16.3	－	－	常滑窯産
813	63F－92	鉢D2	SD101	29.7	－	－	錆釉
814	63F－93	鉢D1	SD101	23.4	－	－	錆釉
815	63F－94	鉢D	SD101	－	－	10.3	錆釉
816	63F－91	甕	SD101	－	－	－	常滑窯産
817	63F－103	土師器鍋B3	SD101	－	－	－	
818	63F－86	土師器鍋D	SD101	15.2	－	－	
819	63F－90	土師器鍋D	SD101	－	－	－	
820	63F－104	土師器鍋C1c	SD101	30.6	－	－	
821	63F－116	碗B1	SD101	12.2	－	－	鉄釉
822	63F－115	碗B1	SD101	12.0	－	－	鉄釉
823	63F－117	碗B1	SD101	13.2	－	－	鉄釉
824	63F－113	皿E1	SD101	10.0	2.4	4.2	
825	63F－112	皿E1	SD101	9.6	2.6	3.6	
826	63F－114	土師器皿B2c	SD101	11.0	2.2	5.3	
827	63F－107	土師器皿A2c	SD101	5.5	1.1	3.6	
828	63F－110	土師器皿A2c	SD101	4.9	1.1	3.4	
829	63F－105	土師器皿A2c	SD101	5.3	0.9	3.0	
830	63F－108	土師器皿A2c	SD101	5.4	0.9	3.8	
831	63F－111	土師器皿A3	SD101	5.7	1.1	4.0	
832	63F－118	加工円盤	SD101	1.8	1.0	－	
833	63F－121	土師器鍋C1c	SD101	22.4	－	－	鉢D転用
834	63F－120	土師器鍋C1b	SD101	27.0	－	－	
835	63F－122	土師器鍋B3	SD101	32.4	－	－	
836	63F－119	土師器鍋D	SD101	14.3	－	－	
837	63F－123	土師器鍋D	SD101	13.0	－	－	
838	63K－80	碗B1	SD110	11.4	－	－	鉄釉
839	63K－81	碗B1	SD110	9.8	－	－	鉄釉
840	63K－40	碗B1	SD110	10.3	－	－	鉄釉
841	63K－78	碗B	SD110	12.2	－	－	鉄釉
842	63K－82	碗B1	SD110	10.7	－	－	鉄釉
843	63K－39	碗B1	SD110	11.4	－	－	鉄釉
844	63K－77	碗B	SD110	12.1	－	－	鉄釉
845	63K－79	碗B2	SD110	11.2	－	－	鉄釉
846	63K－71	碗B1	SD110	－	－	4.3	鉄釉
847	63K－73	碗B1	SD110	－	－	4.3	鉄釉
848	63K－72	碗B1	SD110	－	－	4.4	鉄釉
849	63K－70	碗B2	SD110	－	－	4.5	鉄釉
850	63K－75	碗B2	SD110	－	－	3.8	鉄釉
851	63K－68	碗D	SD110	9.6	5.5	5.0	錆釉
852	63K－29	青磁碗	SD110	12.6	－	－	
853	63K－22	碗C1	SD110	11.8	－	－	灰釉
854	63K－85	皿C	SD110	－	－	5.6	鉄釉印花
855	63K－52	皿B1	SD110	10.0	3.0	4.9	灰釉
856	63K－7	皿C2	SD110	10.7	2.7	6.0	灰釉
857	63K－10	皿C2	SD110	9.4	2.3	5.2	灰釉
858	63K－8	皿C	SD110	－	－	6.0	灰釉印花
859	63K－69	皿C4	SD110	10.4	2.4	5.4	鉄釉
860	63K－84	皿C4?	SD110	－	－	5.6	鉄釉
861	63K－76	皿E1	SD110	10.1	2.2	4.8	
862	63K－83	皿E1	SD110	10.0	2.5	4.5	
863	63K－30	青磁皿	SD110	11.0	－	－	
864	63K－17	白磁碗	SD110	9.5	－	－	
865	63K－12	白磁皿	SD110	－	－	4.2	
866	63K－18	染付皿	SD110	14.4	－	－	
867	63K－16	染付碗	SD110	8.4	－	－	
868	63K－19	染付碗	SD110	13.6	－	－	
869	63K－20	染付皿	SD110	7.7	－	－	
870	63K－21	染付皿	SD110	14.4	－	－	
871	63K－117	土師器皿B2a	SD110	15.7	2.9	7.0	
872	63K－116	土師器皿B2a	SD110	13.6	2.7	6.6	
873	63K－56	土師器皿B2a	SD110	13.3	1.9	7.0	タール付着
874	63K－95	土師器皿B2a	SD110	12.8	2.5	6.5	
875	63K－111	土師器皿B3a	SD110	12.4	2.1	6.2	
876	63K－58	土師器皿B3a	SD110	11.4	1.8	5.1	
877	63K－112	土師器皿B3a	SD110	12.0	2.1	7.0	タール付着
878	63K－110	土師器皿B3a	SD110	10.3	2.4	5.3	
879	63K－114	土師器皿B1c	SD110	13.6	2.7	6.0	
880	63K－113	土師器皿B1c	SD110	12.6	2.1	5.0	
881	63K－93	土師器皿B1c	SD110	11.6	2.4	7.0	
882	63K－94	土師器皿B1c	SD110	10.8	1.9	6.9	
883	63K－92	土師器皿B3b	SD110	11.3	2.9	4.0	
884	63K－96	土師器皿B3b	SD110	11.5	2.7	4.0	
885	63K－91	土師器皿B3b	SD110	11.3	2.4	6.0	タール付着
886	63K－100	土師器皿B3b	SD110	11.6	2.5	5.0	
887	63K－107	土師器皿B4b	SD110	7.6	1.4	5.0	内面墨痕
888	63K－98	土師器皿B4b	SD110	7.9	1.9	5.2	
889	63K－59	土師器皿B4b	SD110	7.6	1.6	4.4	
890	63K－55	土師器皿B4b	SD110	7.5	1.4	4.2	
891	63K－97	土師器皿B4b	SD110	7.3	1.9	3.6	
892	63K－104	土師器皿B4b	SD110	7.3	1.8	4.0	
893	63K－57	土師器皿A2c	SD110	5.8	1.2	－	
894	63K－101	土師器皿A2c	SD110	5.6	1.2	－	
895	63K－102	土師器皿A2c	SD110	5.6	1.2	－	
896	63K－103	土師器皿A2c	SD110	5.7	1.3	－	タール付着
897	63K－28	土師器皿B4b	SD110	8.4	1.5	5.5	タール付着
898	63K－54	土師器皿B4b	SD110	7.4	1.4	4.6	
899	63K－108	土師器皿B4b	SD110	7.8	1.4	4.2	変色
900	63K－109	土師器皿B4b	SD110	7.9	1.4	4.4	変色

図版番号	登録番号	種　別	遺　構	口径	高さ	底径	備　考	図版番号	登録番号	種　別	遺　構	口径	高さ	底径	備　考
901	63K－106	土師器皿B4b	SD110	7.5	1.3	4.1		961	63K－132	皿D2	SD111	11.2	3.3	5.0	鉄釉
902	63K－105	土師器皿B4b	SD110	7.6	1.6	4.3	タール付着	962	63K－141	皿D2	SD111	10.5	2.5	5.4	鉄釉
903	63K－99	土師器皿B4b	SD110	8.4	1.8	5.5		963	63K－171	皿C	SD111	11.8	－	－	鉄釉
904	63K－61	土師器皿A4a	SD110	3.8	1.2	－		964	63K－175	皿C3	SD111	10.0	2.3	5.3	長石釉
905	63K－62	土師器皿A4a	SD110	4.6	1.8	－		965	63K－143	皿E1	SD111	9.0	2.3	3.2	
906	63K－63	土師器皿A4a	SD110	4.2	0.8	－		966	63K－120	染付皿	SD111	－	－	6.6	
907	63K－13	るつぼ	SD110	8.2	－	－	鉄滓付着	967	63K－176	土師器皿B1b	SD111	10.7	2.6	4.4	
908	63K－86	香炉A	SD110	10.7	－	－	錆釉	968	63K－154	土師器皿B3b	SD111	11.5	2.9	3.7	
909	63K－25	壺D	SD110	3.8	－	－	鉄釉	969	63K－155	土師器皿B3b	SD111	11.3	2.6	5.5	
910	63K－14	壺E	SD110	7.3	－	－	錆釉	970	63K－153	土師器皿B3b	SD111	9.8	2.2	4.5	
911	63K－74	壺	SD110	－	－	3.2	鉄釉鉄化粧	971	63K－156	土師器皿B3d	SD111	11.2	2.3	7.0	タール付着
912	63K－37	壺F	SD110	－	－	7.0	鉄釉鉄化粧	972	63K－124	土師器皿B3c	SD111	10.4	2.4	5.7	タール付着
913	63K－50	壺D？	SD110	－	－	5.0	鉄釉	973	63K－125	土師器皿B3d	SD111	10.0	2.0	5.8	
914	63K－1	鉢E1	SD110	31.6	－	－	鉄釉	974	63K－152	土師器皿B3c	SD111	9.2	1.6	4.1	
915	63K－2	鉢E2	SD110	28.0	－	－		975	63K－122	土師器皿B4c	SD111	7.7	2.0	3.6	
916	63K－5	鉢C2	SD110	29.4	－	－	錆釉	976	63K－128	土師器皿B4b	SD111	7.2	1.8	3.5	
917	63K－49	鉢B	SD110	－	－	14.6	鉄釉	977	63K－123	土師器皿B4b	SD111	8.0	1.6	4.5	
918	63K－48	鉢B	SD110	－	－	14.2	鉄釉	978	63K－121	土師器皿B4b	SD111	7.7	2.0	3.6	
919	63K－35	鉢D2	SD110	29.0	11.3	10.4	錆釉	979	63K－127	土師器皿B4b	SD111	7.6	1.6	5.2	
920	63K－67	鉢D2	SD110	－	－	－	錆釉	980	63K－126	土師器皿B4b	SD111	7.1	1.1	4.5	
921	63K－66	鉢D2	SD110	－	－	－	錆釉	981	63K－157	土師器皿A4a	SD111	4.4	1.1	－	
922	63K－65	鉢D3	SD110	－	－	－	錆釉	982	63K－160	土師器皿A4a	SD111	4.5	1.1	－	
923	63K－23	鉢C3	SD110	11.4	－	－	鉄釉	983	63K－158	土師器皿A4a	SD111	4.6	1.1	－	
924	63K－87	鉢C3	SD110	12.2	－	－	鉄釉	984	63K－161	土師器皿A4a	SD111	4.8	1.0	－	
925	63K－3	鉢C3	SD110	15.6	－	－	鉄釉鉄化粧	985	63K－159	土師器皿A4a	SD111	4.8	0.9	－	
926	63K－6	鉢C3	SD110	17.2	－	－		986	63K－162	土師器皿A4a	SD111	4.6	1.1	－	
927	63K－51	鉢C3	SD110	－	－	14.8		987	63K－179	香炉B	SD111	12.0	－	－	鉄釉
928	63K－44	鉢？	SD110	－	－	10.2	鉄釉	988	63K－177	香炉C	SD111	5.4	3.4	5.0	灰釉
929	63K－47	壺B	SD110	14.4	－	－	鉄釉	989	63K－130	鉢C3	SD111	15.4	9.2	12.2	
930	63K－38	瓶	SD110	－	－	5.6	鉄釉	990	63K－131	瓶？	SD111	－	－	9.4	鉄釉
931	63K－43	壺	SD110	－	－	10.0	鉄釉	991	63K－140	瓶	SD111	6.0	－	－	鉄釉
932	63K－15	瓶	SD110	12.0	－	－	鉄釉	992	63K－142	瓶	SD111	－	－	6.7	鉄釉鉄化粧
933	63K－45	瓶	SD110	－	－	10.2	鉄釉鉄化粧	993	63K－164	加工円盤	SD111	2.3	0.9	－	鉄釉製品転用
934	63K－46	瓶	SD110	－	－	－	鉄釉	994	63K－166	鉢D2	SD111	26.6	－	－	錆釉
935	63K－24	蓋	SD110	17.4	－	－	鉄釉	995	63K－148	鉢D1	SD111	－	－	－	錆釉
936	63K－31	土師器鍋D	SD110	－	－	－		996	63K－149	鉢D2	SD111	－	－	－	錆釉
937	63K－27	土師器鍋C1a	SD110	28.6	－	－		997	63K－144	鉢D2	SD111	－	－	－	錆釉
938	63K－34	土師器鍋B3	SD110	36.4	－	－		998	63K－145	鉢D2	SD111	－	－	－	錆釉
939	63K－33	土師器鍋B3	SD110	46.0	－	－		999	63K－150	鉢D3	SD111	－	－	－	錆釉
940	63K－90	甕	SD110	－	－	－	常滑窯産	1000	63K－172	鉢E	SD111	－	－	14.0	鉄釉
941	63K－89	甕	SD110	－	－	－	常滑窯産	1001	63K－146	土師器鍋C1b	SD111	24.0	－	－	
942	63K－118	陶丸	SD110	2.0	2.3	－		1002	63K－129	土製品	SD111	－	－	－	
943	63K－26	加工円盤	SD110	2.2	1.7	－	鉢D転用	1003	63F－130	碗B1	SD105	10.6	－	－	鉄釉
944	63K－169	碗B1	SD111	11.3	5.9	4.2	鉄釉	1004	63F－126	碗B1	SD105	11.0	－	－	鉄釉
945	63K－167	碗B1	SD111	12.6	－	－	鉄釉	1005	63F－124	皿C2	SD105	11.4	3.0	6.2	灰釉
946	63K－168	碗B2	SD111	11.6	－	－	鉄釉	1006	63F－125	皿D4	SD105	10.9	2.4	5.0	鉄釉
947	63K－134	碗B1	SD111	12.8	－	－	鉄釉	1007	63F－129	皿C4	SD105	8.8	2.4	4.1	鉄釉
948	63K－138	碗B	SD111	12.8	－	－	鉄釉	1008	63F－128	皿E1	SD105	10.1	2.7	4.4	
949	63K－119	碗B1	SD111	－	－	3.8	鉄釉	1009	63F－132	土師器皿B2d	SD105	12.1	2.5	6.2	
950	63K－173	碗B1	SD111	－	－	4.8	鉄釉	1010	63F－131	香炉B	SD105	－	－	5.4	鉄釉
951	63K－170	碗C2	SD111	11.1	5.4	7.1	長石釉	1011	63F－127	鉢C3	SD105	11.2	9.1	10.5	鉄釉
952	63K－165	青磁碗	SD111	14.2	－	－		1012	63F－134	鉢C2	SD105	17.4	－	－	鉄釉
953	63K－178	碗C1	SD111	10.6	－	－	灰釉・漆付着	1013	63F－133	鉢？	SD105	－	－	－	
954	63K－139	碗C1	SD111	10.8	－	－	灰釉	1014	63F－135	土師器鍋C1c	SD105	24.0	－	－	
955	63K－180	碗C2	SD111	11.4	－	－	紫系	1015	63F－138	土師器鍋C1c	SD105	22.0	－	－	
956	63K－136	皿B2	SD111	11.4	－	－	灰釉	1016	63F－136	土師器鍋D	SD105	12.8	－	－	
957	63K－133	皿B1	SD111	9.9	－	－	灰釉	1017	63F－137	土師器鍋D	SD105	－	－	－	
958	63K－135	皿B1	SD111	11.1	－	－	灰釉	1018	63F－140	土師器鍋B3	SD105	35.6	－	－	
959	63K－147	皿C2	SD111	8.7	2.2	5.6	灰釉	1019	63F－139	土師器鍋B3	SD105	37.0	－	－	
960	63K－137	皿C	SD111	11.8	－	－	灰釉	1020	63F－144	向付	SD104	－	－	－	長石釉鉄絵

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考	図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
1021	63F－143	皿C7	SD104	11.6	－	－	灰釉	1081	62H－24	土師器鍋C1c	SD137	27.4	－	－	
1022	63F－141	皿C3	SD104	8.7	2.3	4.8	長石釉	1082	62H－29	土師器鍋B3	SD137	36.6	－	－	
1023	63F－145	土師器皿B4b	SD104	8.1	2.0	5.0	タール付着	1083	63L－17	短頸壺	SD137	13.1	7.1	9.7	体部刻印
1024	63F－142	瓶?	SD104	－	－	3.5	鉄釉鉄化粧	1084	63L－8	向付	SD137	－	－	－	長石釉
1025	63F－146	鉢E	SD104	－	－	18.0	備前窯産	1085	63L－2	鉢C3	SD137	17.2	－	－	鉄釉
1026	63F－157	碗B1	SK102	12.6	－	－	鉄釉	1086	62H－27	鉢C3	SD137	－	－	12.8	鉄釉
1027	63F－152	土師器皿B2a	SK102	15.0	3.1	7.2		1087	63L－15	鉢D	SD137	－	－	9.2	錆釉
1028	63F－153	土師器皿B2a	SK102	14.2	2.8	6.2		1088	62H－15	壺E	SD137	8.0	－	－	鉄釉
1029	63F－155	土師器皿B2a	SK102	13.4	2.7	6.6		1089	62H－16	加工円盤	SD137	2.4	1.3	－	鉢D転用
1030	63F－156	土師器皿B2a	SK102	11.8	2.6	5.7		1090	62J－2	碗B2	SD142	11.2	5.8	4.4	鉄釉
1031	63F－151	瓦器大鉢	SK102	－	－	－		1091	62J－8	碗B1	SD142	11.4	－	－	鉄釉
1032	63K－216	碗B1	SK116	10.8	－	－	鉄釉	1092	62J－9	碗B1	SD142	11.6	－	－	鉄釉
1033	63K－222	土師器皿B4c	SK116	7.6	1.3	4.0		1093	62J－5	碗B2	SD142	11.8	6.4	4.6	鉄釉
1034	63K－221	土師器皿B4c	SK116	7.3	1.5	3.5	タール付着	1094	62J－11	皿C2	SD142	8.6	2.5	5.2	灰釉
1035	63K－217	青磁碗	SK116	17.5	－	－		1095	62J－3	皿C3	SD142	9.8	2.0	5.9	鉄釉
1036	63K－219	瓦器	SK116	－	－	－		1096	62J－63	皿E2	SD142	－	－	4.4	
1037	63K－220	瓦器大鉢	SK116	－	－	－		1097	62J－12	皿E2	SD142	10.2	2.3	4.6	
1038	63K－218	瓦器大鉢	SK116	28.1	－	－		1098	62J－21	白磁皿	SD142	11.6	－	－	
1039	63L－18	碗B2	SD137	11.9	6.2	4.4	鉄釉	1099	62J－20	土師器皿B3b	SD142	11.2	2.2	6.1	タール付着
1040	62H－31	碗B2	SD137	11.2	－	－	鉄釉	1100	62J－57	土師器皿B1d	SD142	12.8	2.5	5.8	
1041	63L－7	碗B2	SD137	12.3	－	－	鉄釉	1101	62J－25	鉢C2	SD142	16.4	－	－	灰釉
1042	63L－1	碗B	SD137	11.2	－	－	鉄釉	1102	62J－22	鉢C3	SD142	14.8	－	－	鉄釉鉄化粧
1043	62H－2	碗E	SD137	6.0	3.1	2.9	鉄釉	1103	62J－23	鉢C3?	SD142	－	－	8.2	鉄釉
1044	63L－16	碗B1	SD137	－	－	4.0	鉄釉	1104	62J－31	壺	SD142	21.4	－	－	鉄釉
1045	63L－6	碗D	SD137	－	－	4.9	錆釉	1105	62J－1	瓶	SD142	15.4	－	－	鉄釉
1046	63L－19	皿C1	SD137	13.8	2.6	10.5	灰釉	1106	62J－53	瓶	SD142	－	－	－	頸部
1047	62H－6	皿C1	SD137	8.4	2.3	5.2	灰釉	1107	62J－49	土錘	SD142	3.4	4.3	－	
1048	62H－22	皿D	SD137	－	－	6.6	灰釉	1108	62J－67	加工円盤	SD142	3.9	0.8	－	鉢B転用
1049	62H－21	皿C	SD137	－	－	6.8	灰釉	1109	62J－32	加工円盤	SD142	4.0	1.1	－	鉢D転用
1050	63L－20	皿C4	SD137	11.0	2.3	7.0	長石釉	1110	62J－60	加工円盤	SD142	5.1	1.4	－	常滑製品転用
1051	62H－30	皿C3	SD137	11.4	2.3	6.2	長石釉	1111	62J－6	鉢D1	SD142	29.2	－	－	錆釉
1052	62H－7	皿C5	SD137	11.8	3.1	6.5	長石釉鉄絵	1112	62J－44	鉢D3	SD142	30.0	－	－	錆釉
1053	63L－14	皿B3	SD137	14.3	3.6	6.7	灰釉	1113	62J－43	鉢D3	SD142	33.1	10.2	13.5	錆釉
1054	63L－15	皿B3	SD137	13.6	－	－	灰釉	1114	62J－41	鉢D3	SD142	33.4	－	－	錆釉
1055	63L－5	土師器皿B3b	SD137	10.7	2.2	4.5	タール付着	1115	62J－37	鉢D	SD142	－	－	11.2	錆釉
1056	63L－26	土師器皿A4a	SD137	4.6	0.8	－		1116	62J－54	鉢D3	SD142	36.2	10.8	11.9	錆釉
1057	62H－1	土師器皿A4a	SD137	4.3	1.3	－		1117	62J－30	甕	SD142	18.6	－	－	常滑窯産
1058	63L－24	土師器皿A4a	SD137	4.5	1.4	－		1118	62J－48	甕	SD142	36.4	－	－	常滑窯産
1059	62H－14	土師器皿A4a	SD137	4.8	1.3	－		1119	62J－56	甕	SD142	－	－	13.4	常滑窯産
1060	62H－3	土師器皿A4a	SD137	4.2	1.2	－		1120	62J－7	甕	SD142	－	－	14.0	常滑窯産
1061	63L－25	土師器皿A4a	SD137	3.9	1.0	－		1121	62J－38	鉢A2	SD142	32.2	－	－	常滑窯産
1062	62H－13	るつぼ	SD137	8.0	－	－	鉄滓付着	1122	62J－66	甕	SD142	－	－	－	常滑窯産
1063	62H－23	るつぼ	SD137	7.6	2.1	－	鉄滓付着	1123	62J－39	瓦器風炉	SD142	32.0	－	－	
1064	62H－4	るつぼ	SD137	7.4	－	－	鉄滓付着	1124	62J－62	土師器鍋D	SD142	11.6	－	－	
1065	62H－25	るつぼ	SD137	7.4	－	－	鉄滓付着	1125	62J－61	土師器鍋	SD142	－	－	－	
1066	62H－26	るつぼ	SD137	7.4	－	－	鉄滓付着	1126	62J－24	土師器鍋D	SD142	－	－	－	
1067	62H－19	るつぼ	SD137	6.0	－	－	鉄滓付着	1127	62J－33	土師器鍋C1	SD142	26.6	－	－	
1068	62H－9	るつぼ	SD137	5.8	－	－	鉄滓付着	1128	62J－51	土師器鍋B3	SD142	40.1	－	－	
1069	62H－8	るつぼ	SD137	5.2	－	－	鉄滓付着	1129	62J－42	土師器鍋B3	SD142	－	－	－	
1070	62H－12	るつぼ	SD137	5.4	－	－	鉄滓付着	1130	62E－47	碗B2	SD118	12.2	6.7	4.4	鉄釉
1071	62H－11	るつぼ	SD137	4.6	－	－	鉄滓付着	1131	62E－48	碗C2	SD118	12.2	6.6	5.5	灰釉
1072	62H－10	るつぼ	SD137	4.2	1.5	－	鉄滓付着	1132	62E－49	碗D	SD118	－	－	5.8	錆釉
1073	62H－18	るつぼ	SD137	4.0	－	－	鉄滓付着	1133	62E－50	青磁碗	SD118	－	－	5.5	
1074	63L－4	鉢B2	SD137	26.8	－	－	鉄釉	1134	62E－51	碗	SD118	11.3	3.7	5.0	朝鮮産?
1075	63L－3	鉢D3	SD137	27.4	－	－	錆釉	1135	62E－52	皿B1	SD118	10.0	2.7	4.5	灰釉
1076	62H－17	鉢D1	SD137	－	－	－	錆釉	1136	62E－53	皿B2	SD118	9.8	2.8	5.2	灰釉
1077	63L－10	鉢D2	SD137	－	－	－	錆釉	1137	62E－54	皿B2	SD118	9.8	1.4	5.0	鉄釉
1078	63L－22	鉢D3	SD137	－	－	－	錆釉	1138	62E－55	皿C1	SD118	10.0	2.8	5.4	灰釉
1079	63L－21	鉢D3	SD137	－	－	－	錆釉	1139	62E－56	皿C4	SD118	10.4	2.4	5.6	鉄釉
1080	63L－9	鉢D3	SD137	－	－	－	錆釉	1140	62E－57	皿A3	SD118	10.1	2.3	3.9	

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
1141	62E－58	皿E1	SD118	10.6	2.4	4.8	
1142	62E－59	皿C3	SD118	11.2	2.1	6.4	長石釉鉄絵
1143	62E－60	皿C4	SD118	11.4	2.1	5.8	長石釉
1144	62E－61	土師器皿B2a	SD118	12.6	2.2	6.6	
1145	62E－62	土師器皿B1c	SD118	12.9	2.7	4.9	
1146	62E－63	土師器皿B4a	SD118	8.0	1.9	4.7	
1147	62E－64	壺E	SD118	3.9	－	－	鉄釉
1148	62E－65	鉢C3	SD118	－	－	8.8	鉄釉
1149	62E－66	瓶	SD118	－	－	9.8	鉄釉
1150	62E－67	鉢D1	SD118	30.0	11.5	8.4	錆釉
1151	62K－29	椀B2	SK142	11.2	6.1	4.6	鉄釉
1152	62K－18	椀B2	SK142	11.6	－	－	鉄釉
1153	62K－3	椀B2	SK142	11.4	5.7	3.8	鉄釉
1154	62K－6	椀B2	SK142	10.6	－	－	鉄釉
1155	62K－21	椀B2	SK142	－	－	4.8	長石釉
1156	62K－8	椀C1	SK142	10.2	6.0	3.2	長石釉
1157	62K－16	皿C5	SK142	12.4	3.6	6.6	長石釉鉄絵
1158	62K－10	染付皿	SK142	－	－	－	
1159	62K－28	皿C2	SK142	11.7	2.5	6.4	長石釉
1160	62K－1	皿C2	SK142	12.4	2.7	7.0	長石釉
1161	62K－19	皿C2	SK142	12.0	2.9	7.7	長石釉
1162	62K－2	皿C3	SK142	10.4	2.3	6.4	鉄釉
1163	62K－4	皿E2	SK142	10.4	2.2	4.8	
1164	62K－9	皿E2	SK142	11.6	2.2	6.2	
1165	62K－5	土師器皿B2c	SK142	11.2	2.0	6.0	
1166	62K－23	壺C	SK142	11.6	－	－	錆釉
1167	62K－22	土師器鍋C1d	SK142	23.1	－	－	
1168	62K－7	瓶	SK142	－	－	8.0	鉄釉
1169	62K－20	加工円盤	SK142	4.4	1.1	－	鉄釉製品転用
1170	62K－17	鉢D3	SK142	28.4	11.5	9.4	錆釉
1171	62K－12	鉢D2	SK142	26.8	10.0	8.4	錆釉
1172	62K－14	鉢D2	SK142	31.6	12.4	12.6	錆釉
1173	62K－13	鉢D3	SK142	32.4	12.0	6.0	錆釉
1174	62K－31	椀B2	SE131	11.4	6.2	4.4	鉄釉
1175	62K－32	皿C1	SE131	12.4	3.7	6.4	長石釉
1176	62K－30	皿C5	SE131	12.4	2.9	7.4	長石釉鉄絵
1177	62K－33	皿E1	SE131	9.4	2.1	9.4	
1178	62K－35	瓶	SE131	－	－	4.2	長石釉
1179	62K－37	土師器鍋C2	SE131	31.2	5.9	－	
1180	62J－68	土師器鍋E	包含層	13.1	14.8	－	
1181	62L－1	椀C2	SD164	－	－	5.3	黄瀬戸釉
1182	62L－19	皿C3	SD164	13.6	2.8	7.4	長石釉
1183	62L－6	皿C6	SD164	12.6	2.6	7.4	長石釉

図版番号	登録番号	種別	遺構	口径	高さ	底径	備考
1184	62L－5	皿C2	SD164	12.3	2.5	7.0	長石釉
1185	62L－9	皿C8	SD164	11.4	2.9	4.2	長石釉
1186	62L－7	皿C4	SD164	10.3	2.3	5.3	鉄釉
1187	62L－8	皿E1	SD164	－	－	5.2	
1188	62L－3	土師器皿B1b	SD164	10.2	2.3	－	タール付着
1189	62L－17	土師器皿A4a	SD164	5.3	1.3	－	
1190	62L－11	土師器皿A4a	SD164	4.7	1.4	－	
1191	62L－14	土師器皿A4a	SD164	4.3	1.2	－	
1192	62L－27	壺?	SD164	－	－	6.6	灰釉?鉄釉付着
1193	62L－13	向付	SD164	－	－	－	長石釉
1194	62L－10	壺D	SD164	5.0	8.8	6.4	鉄釉鉄化粧
1195	62L－21	鉢A2	SD164	33.8	－	－	常滑窯産
1196	62L－15	甕	SD164	－	－	－	常滑窯産
1197	62L－4	土師器鍋C1b	SD164	13.6	－	－	
1198	62L－18	土師器鍋D	SD164	－	－	－	
1199	62L－22	加工円盤	SD164	2.7	1.1	－	常滑製品転用
1200	62L－23	加工円盤	SD164	2.9	0.8	－	椀B転用
1201	62L－24	加工円盤	SD164	4.0	0.8	－	椀B転用
1202	62L－31	椀B1	SE133	12.2	6.4	4.5	鉄釉
1203	62L－29	皿C1	SE133	10.0	2.1	5.5	灰釉印花
1204	62L－30	皿C	SE133	13.0	－	－	長石釉
1205	62L－34	皿E	SE133	11.0	2.5	5.4	
1206	62L－42	土師器皿B3c	SE133	11.0	2.0	－	
1207	62L－32	向付	SE133	17.0	5.1	9.1	長石釉
1208	62L－38	鉢D3	SE133	－	－	－	錆釉
1209	62L－45	鉢D2	SE133	28.2	－	－	錆釉
1210	62L－33	鉢E2	SE133	28.4	6.6	9.4	錆釉
1211	62L－28	向付?	SE133	－	－	14.4	長石釉
1212	62L－48	椀B1	SK148	10.8	5.4	4.0	鉄釉
1213	62L－59	椀B2	SK148	11.2	－	－	鉄釉
1214	62L－53	皿E2	SK148	9.8	2.5	4.4	タール付着
1215	62L－52	土師器皿B3	SK148	－	－	3.9	
1216	62L－50	土師器皿B3c	SK148	11.2	2.4	5.5	
1217	62L－57	瓦器火鉢	SK148	36.0	－	－	
1218	62L－56	土師器鍋C2	SK148	31.0	－	－	
1219	62L－55	土師器鍋B2	SK148	22.1	－	－	
1220	62L－66	土師器皿B3b	SK147	10.3	2.1	3.5	
1221	62L－65	土師器皿B3b	SK147	11.7	2.3	4.8	
1222	62L－62	土師器皿A4b	SK147	5.6	1.5	－	
1223	62L－64	土師器皿A4b	SK147	6.2	1.1	－	
1224	62L－63	土師器皿A4b	SK147	5.4	1.4	－	
1225	62L－60	土師器皿A4b	SK147	5.0	1.2	－	
1226	62L－61	土師器皿A4b	SK147	5.8	1.2	－	

図版番号	登録番号	種別	遺構	備考
1227	62K－301	軒丸瓦	SK142	
1228	63K－301	軒丸瓦	SD111	
1229	62J－301	軒丸瓦	SD142	
1230	63L－301	鬼瓦	SD135	
1231	62H－304	鬼瓦	SD137	
1232	62H－301	丸瓦	SD137	
1233	62H－302	丸瓦	SD137	
1234	62K－302	丸瓦	SK142	
1235	62K－303	丸瓦	SK142	
1236	62H－303	平瓦	SD137	
1237	63F－W－2	漆椀A	SD100	
1238	63F－W－1	漆椀A	SD100	
1239	63F－W－5	漆椀A?	SD100	
1240	63F－W－3	漆椀A	SD100	
1241	63F－W－7	漆椀C	SD100	
1242	63F－W－4	漆椀A	SD100	
1243	63F－W－6	曲物桶	SD101	
1244	63F－W－9	下駄C	SD101	
1245	63F－W－10	下駄A	SD101	
1246	63F－W－15	折敷	SD101	
1247	63F－W－8	折敷	SD101	
1248	63F－W－13	折敷	SD101	
1249	63F－W－14	櫛	SD101	
1250	63F－W－11	楔	SD101	
1251	63F－W－12	不明	SD101	
1252	63K－W－3	漆椀A	SD110	
1253	63K－W－6	漆椀A	SD110	
1254	63K－W－2	漆椀A	SD110	
1255	63K－W－21	漆椀B?	SD110	
1256	63K－W－10	漆椀D	SD110	
1257	63K－W－15	漆椀A	SD110	内面黒漆
1258	63K－W－4	漆椀A	SD110	
1259	63K－W－14	漆椀A	SD110	
1260	63K－W－23	折敷	SD110	朱漆
1261	63K－W－22	折敷	SD110	朱漆
1262	63K－W－19	結桶側板	SD110	
1263	63K－W－29	杓子	SD110	黒漆
1264	63K－W－30	曲物桶蓋?	SD110	黒漆
1265	63K－W－7	箱?	SD110	
1266	63K－W－1	板草履	SD110	墨痕
1267	63K－W－26	箸	SD110	
1268	63K－W－25	箸	SD110	
1269	63K－W－8	人形	SD110	
1270	63K－W－5	漆椀B	SD111	
1271	63K－W－12	椀（木地）	SD111	
1272	63K－W－18	箱?	SD111	
1273	63K－W－11	不明	SD111	朱漆
1274	63K－W－17	栓	SD111	

図版番号	登録番号	種別	遺構	備考
1275	63K-W-16	下駄A	SD111	
1276	63G-W-2	漆椀B	SD112	
1277	63G-W-1	漆椀B	SD112	
1278	63G-W-3	折敷?	SD112	
1279	63H-W-1	漆椀A	SD116	
1280	63H-W-3	漆椀B	SD116	
1281	63H-W-2	漆椀	SD116	
1282	63H-W-6	曲物柄?	SD116	
1283	63H-W-5	箸?	SD116	
1284	63H-W-13	箸	SD116	
1285	63H-W-15	箸	SD116	
1286	63H-W-9	箸	SD116	
1287	63H-W-10	箸	SD116	
1288	63H-W-11	箸	SD116	
1289	63H-W-14	箸	SD116	
1290	62E-W-5	漆椀A	SD118	
1291	62E-W-3	漆椀B	SD118	
1292	62E-W-2	漆椀F	SD118	
1293	62E-W-4	下駄A	SD118	
1294	62E-W-6	漆椀E	SD121	
1295	62E-W-7	漆椀E	SD121	
1296	62E-W-9	漆椀B	SD121	
1297	62E-W-8	漆椀B	SD121	
1298	62E-W-1	板(木簡)	SD121	
1299	62E-W-10	蓋?	SK121	
1300	62E-W-6	板	SE114	
1301	63E-W-1	漆椀A	SD136	
1302	63E-W-16	漆椀A?	SD136	内外面黒漆
1303	63E-W-36	漆椀	SD136	内外面黒漆
1304	63E-W-48	漆椀A	SD136	
1305	63E-W-25	漆椀G	SD136	
1306	63E-W-43	漆椀B	SD136	内外面黒漆
1307	63E-W-3	漆椀	SD136	
1308	63E-W-33	漆椀	SD136	
1309	63E-W-2	漆椀H	SD136	
1310	63E-W-47	漆椀F	SD136	
1311	63E-W-35	不明	SD136	
1312	63E-W-26	曲物柄	SD136	
1313	63E-W-5	曲物柄	SD136	
1314	63E-W-14	結桶側板	SD136	
1315	63E-W-11	桶底板	SD136	
1316	63E-W-9	桶底板	SD136	
1317	63E-W-8	折敷	SD136	
1318	63E-W-10	折敷	SD136	
1319	63E-W-12	折敷	SD136	
1320	63E-W-44	不明	SD136	
1321	63E-W-27	棒	SD136	
1322	63E-W-7	下駄B	SD136	
1323	63E-W-6	下駄A	SD136	
1324	63E-W-15	箸?(木簡)	SD136	
1325	63E-W-4	蓋	SD136	
1326	63E-W-17	箸	SD136	
1327	63E-W-50	箸	SD136	
1328	63E-W-20	箸	SD136	
1329	63E-W-19	箸	SD136	
1330	63E-W-18	箸	SD136	
1331	63L-W-1	漆椀A	SD137	
1332	63L-W-4	下駄B	SD137	
1333	63L-W-2	箆	SD137	
1334	62H-W-29	漆椀B	SE121	

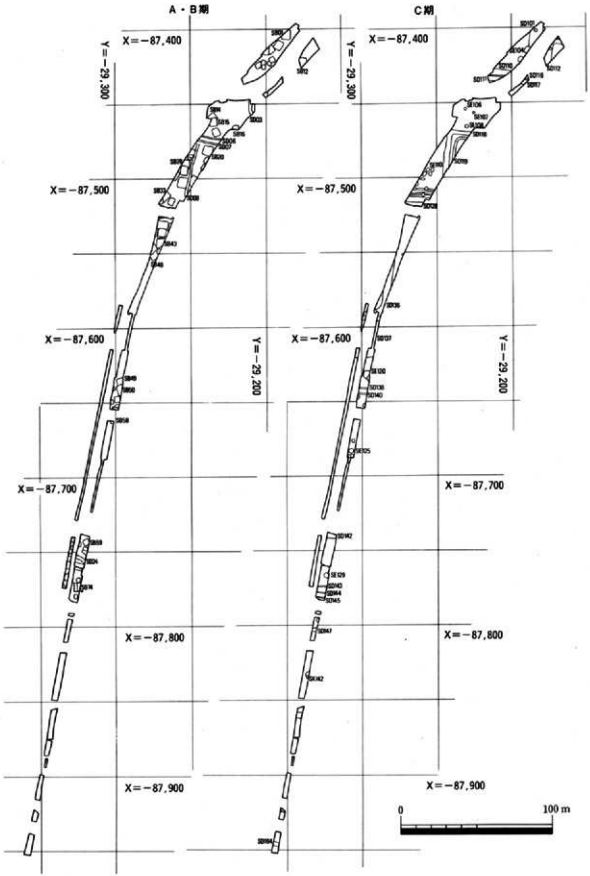
図版番号	登録番号	種別	遺構	備考
1335	62I-W-7	櫛	SE127	
1336	62I-W-4	櫛	SE128	
1337	62I-W-2	櫛	SE128	
1338	62F-W-7	櫛	SE113	
1339	62F-W-3	櫛	SE112	
1340	62H-W-51	結桶	SE121	
1341	62F-W-51	結桶	SE111	
1342	62E-W-51	結桶	SE108	
1343	62E-W-52	結桶	SE108	
1344	62H-W-52	結桶	SE120	
1345	62H-W-53	結桶	SE120	
1346	62H-W-54	結桶	SE120	
1347	62H-W-55	釣瓶	SE120	
1348	62I-W-51	曲物桶	SE125	
1349	62K-S-1	硯	包含層	頁岩
1350	63K-S-1	硯	SD111	頁岩
1351	62H-S-4	硯	SD117	頁岩
1352	62E-S-2	硯	SD118	粘板岩
1353	62E-S-6	砥石	SD120	凝灰岩
1354	63E-S-5	砥石	SD136	凝灰岩
1355	62J-S-8	砥石	包含層	凝灰岩
1356	62K-S-2	砥石	包含層	?
1357	62J-S-5	砥石	包含層	凝灰岩
1358	62H-S-5	砥石	SD137	泥岩
1359	62H-S-3	砥石	包含層	凝灰岩
1360	62L-S-3	砥石	包含層	泥岩
1361	63L-S-1	砥石	SD137	硯転用　泥岩
1362	62L-S-4	砥石	包含層	砂岩
1363	62E-S-3	砥石	包含層	凝灰岩
1364	62L-S-2	砥石	包含層	凝灰岩
1365	62H-S-2	臼	SD137	花崗岩
1366	62H-S-1	臼	SD137	花崗岩
1367	63F-S-1	臼	SD104	花崗岩
1368	62J-S-3	臼	SD142	?
1369	63F-S-2	臼	SE105	安山岩
1370	63K-S-2	五輪塔(水輪)	SD110	花崗岩
1371	62J-S-1	石仏	SD142	流紋岩
1372	62E-S-1	盤	SK125	凝灰岩
1373	63F-S-3	石製容器	包含層	
1374	62H-S-6	盤	SD137	緑色凝灰岩
1375	62K-M-1	銭(熙寧元宝)	SK140	3.4g
1376	62K-M-2	銭(元祐通宝)	SK140	2.6g
1377	62K-M-3	銭(元豊通宝)	SK140	3.3g
1378	62K-M-4	銭(皇宋通宝)	SK140	3.5g
1379	62K-M-5	銭(皇宋通宝)	SK140	3.0g
1380	62E-M-1	銭(開元通宝)	SD118	2.8g
1381	62E-M-2	銭(政和通宝)	SD120	2.3g
1382	63K-M-1	銭(永楽通宝)	SD110	1.9g
1383	63K-M-2	銭(元□通宝)	SD110	2.0g
1384	62L-M-1	銭	包含層	1.0g半欠
1385	62L-M-2	銭	包含層	1.7g一部欠
1386	63K-M-3	銭(熙寧元宝)	SD111	2.7g
1387	63F-M-1	銭(皇宋通宝)	SD100	2.9g
1388	63K-M-4	銭(治平元宝)	SK112	2.7g
1389	62K-M-6	銭(熙寧元宝)	SK142	2.7g
1390	62J-M-1	銭(祥符通宝)	SD142	3.6g
1391	63K-M-5	銭(開元通宝)	包含層	1.8g
1392	63K-M-6	銭(洪武通宝)	包含層	1.6g
1393	62E-M-3	銭(元豊通宝)	包含層	2.1g
1394	62H-M-1	銭(熙寧元宝)	包含層	2.7g

図版番号	登録番号	種別	遺構	備考
1395	62K-M-7	銭(熙寧元宝)	包含層	3.4g
1396	62K-M-8	銭(元符通宝)	表土	2.4g
1397	62K-M-9	銭(□元□宝)	表土	2.1g
1398	62K-M-10	銭(元豊通宝)	表土	2.8g
1399	62L-M-3	銭(元豊通宝)	包含層	3.4g
1400	62L-M-4	銭(元豊通宝)	表土	3.0g
1401	62L-M-5	銭(至道元宝)	表土	3.3g
1402	62K-M-11	釘	包含層	
1403	62J-M-2	釘	包含層	
1404	62L-M-6	刃物	包含層	
1405	62L-M-7	不明	SD164	
1406	63E-M-1	刃物	SD136	
1407	62H-M-2	刃物	SE120	
1408	62K-M-12	刃物	包含層	
1409	62J-M-3	刃物	SD142	
1410	63K-M-7	管	トレンチ	
1411	62L-67	ふいご	SE133	
1412	62L-68	ふいご	SE133	
1413	62L-69	ふいご	SE133	
1414	62L-70	不明	SE133	
1415	63K-401	弥生土器	SD130	
1416	63K-402	弥生土器	SD111	
1417	63K-403	弥生土器	包含層	
1418	62H-401	弥生土器	SE122	
1419	63K-404	弥生土器	SD111	
1420	63K-405	弥生土器	SD111	
1421	62H-402	弥生土器	包含層	
1422	63K-406	弥生土器	SD130	
1423	63K-407	弥生土器	SD111	
1424	63K-408	弥生土器	SD111	
1425	63K-409	弥生土器	包含層	
1426	63K-410	弥生土器	SD111	
1427	62H-403	弥生土器	SE120	
1428	62H-404	弥生土器	SE120	
1429	63K-411	弥生土器	SD111	

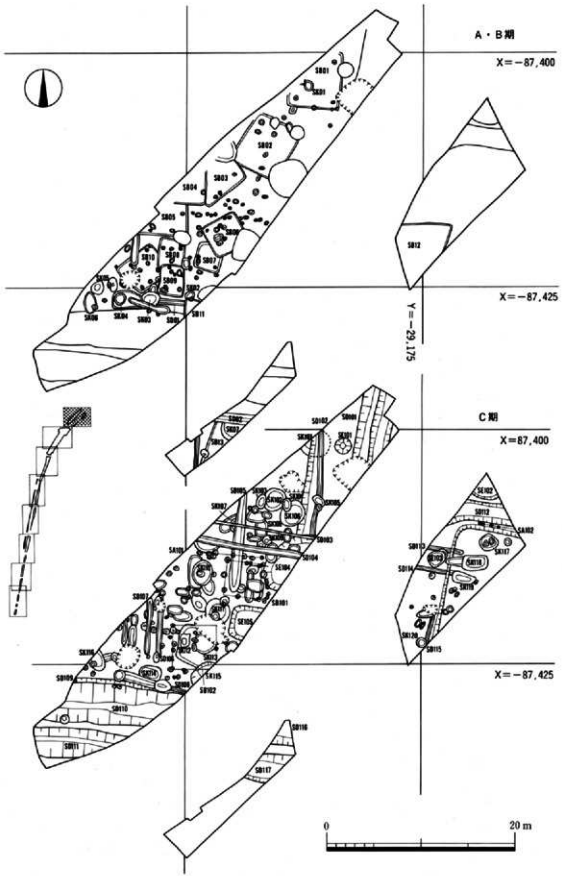
図　版

遺 構 図　1：2500
　　1：400
遺物写真　1：3

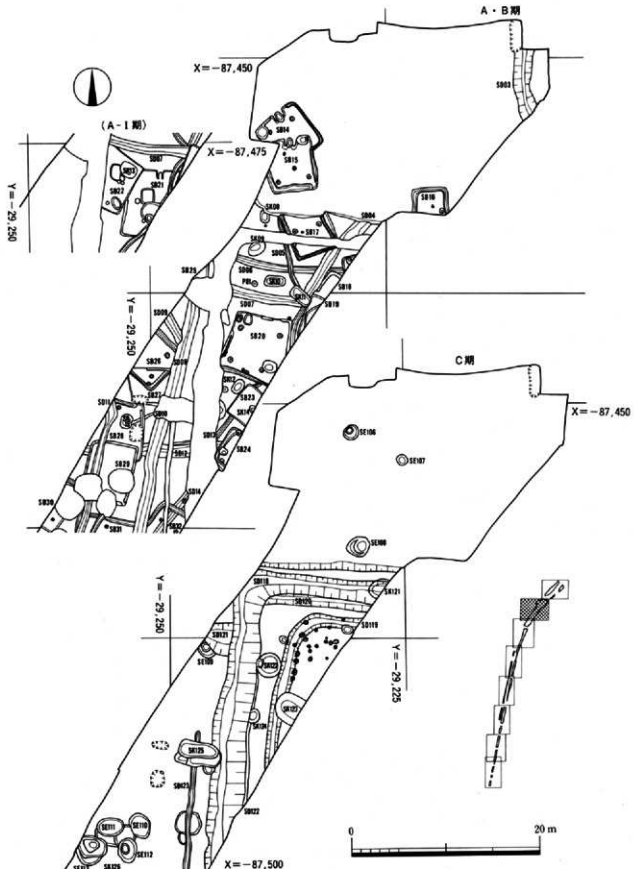
図版1　遺構図(1)


A・B期
C期
X=−87,400
X=−87,500
X=−87,600
X=−87,700
X=−87,800
X=−87,900
Y=−29,300
Y=−29,200
0
100 m

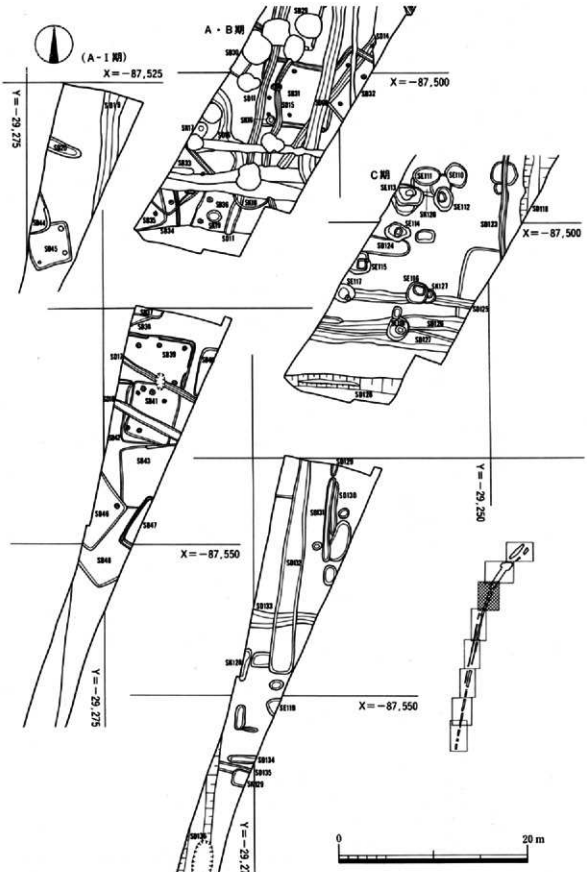
図版 2　遺構図(2)



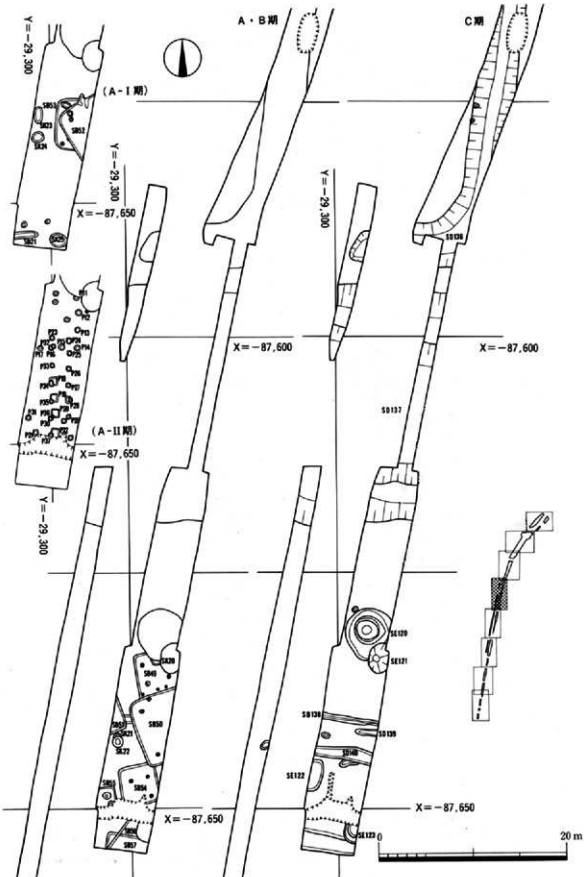
図版3　遺構図(3)


A・B期
X=−87,450
(A−1期)
X=−87,475
Y=−29,250
Y=−29,250
C期
X=−87,450
Y=−29,250
Y=−29,225
0
20 m
X=−87,500

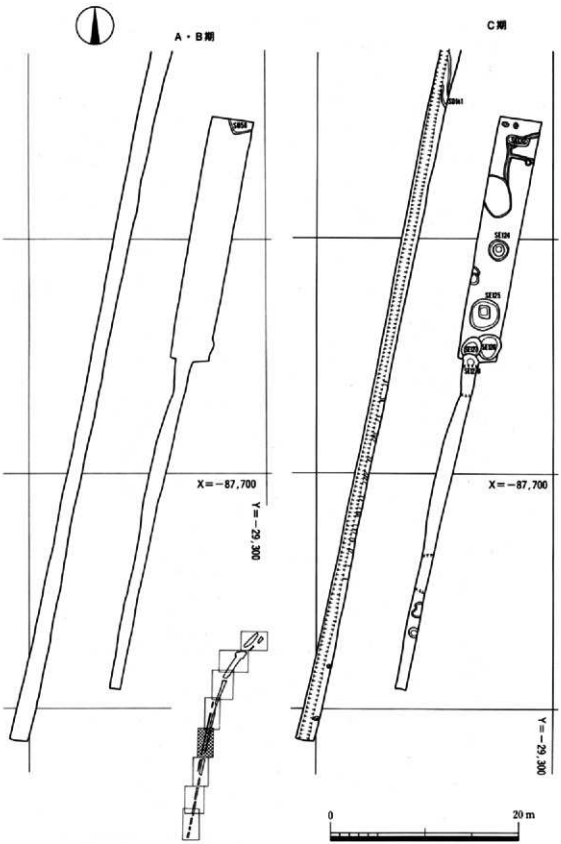
図版 4　遺構図(4)


A・B期
(A-1期)
C期
X=−87,525
X=−87,500
X=−87,500
X=−87,550
X=−87,550
Y=−29,275
Y=−29,275
Y=−29,250
Y=−29,275
0
20 m

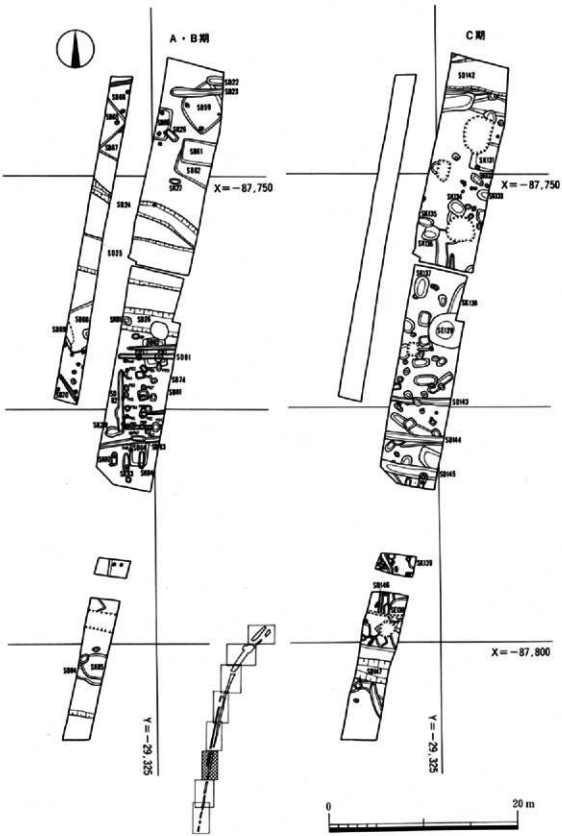
図版5　遺構図(5)


A・B期
C期
(A-I期)
(A-II期)
Y=−29,300
X=−87,650
X=−87,600
SB27
SB26
SB23
SB24
SB25
SB28
SB40
SB50
SB51
SB52
SB54
SB57
SB58
SB137
SB138
SB139
SB140
SE122
SE123
SE129
SE121
0
20 m

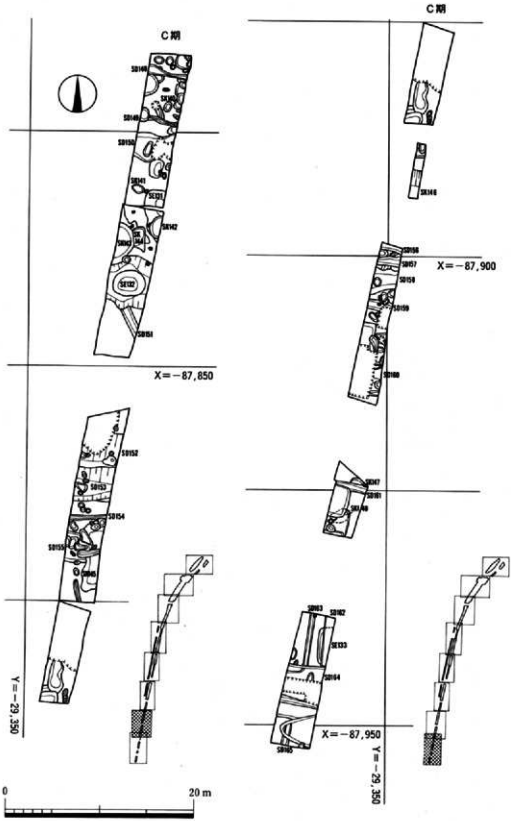
図版 6　遺構図(6)



図版7　遺構図(7)



図版 8　遺構図(8)



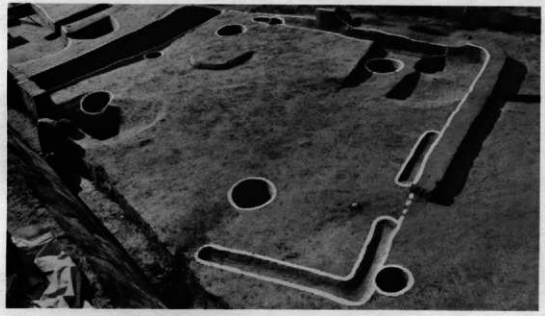
63 F区A期全景
（北から）

63 K区A期全景
（北から）

62 F区A期全景
（北から）

図版10

SB14・SB15
（南から）



SB20
（東から）

SB60
（南から）

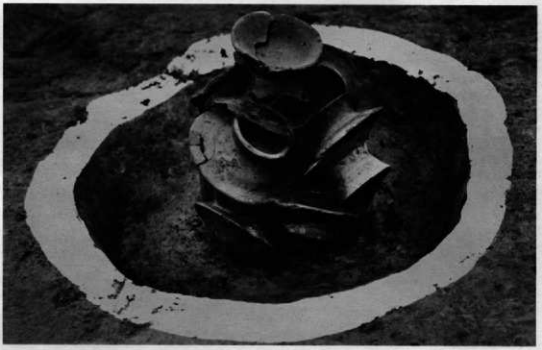
SB29
土器出土状態
（南から）

SB74
（北から）

62H区
掘立柱建物群
（北から）

62 J区B期全景
（北から）

SK85
土器出土状態
（東から）



P81
土器出土状態
（南から）

62F区C期全景
（北から）

63K区C期全景
（南東から）

63F区C期全景
（北から）

SD112
（南西から）

SD136
（南から）

SD118
（南西から）

62 J区C期全景
（北から）

62 K区C期全景
（南から）

62 L区C期全景
（南から）

図版16

SE125
（西から）

SE110
（南から）

SE108
（西から）

SD137
SE120
（南から）

SE120
（西から）

SB101
（東から）

SD136
土器出土状態
（東から）

SK142
土器出土状態
（西から）

SD142
遺物出土状態
（南から）

図版19　A期の遺物

47

18

64

28

196

195

205

309

307

404

391

211

308

217

225

234

406

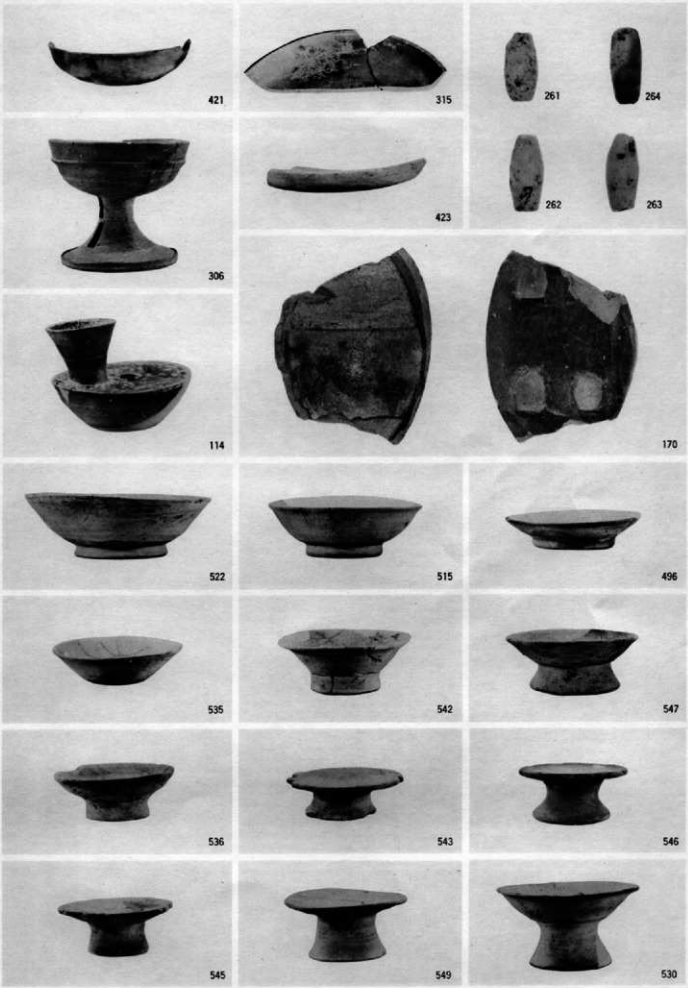
591

230

16

104

図版20　A・B期の遺物


421
315
261
264
306
423
262
263
114
170
522
515
496
535
542
547
536
543
546
545
549
530

図版21　A・B期の遺物

(1：4)　3

450

(1：4)　4

256

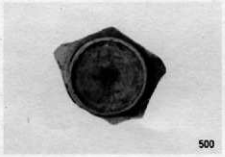
592

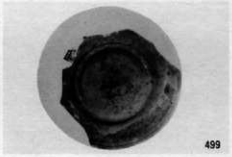
(1：4)　60

250
251

図版22　B期・墨書土器

501


500


499

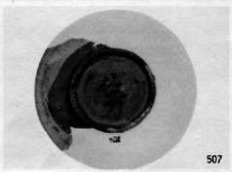
496

498

502

506

508


507

514

515

518

503

505

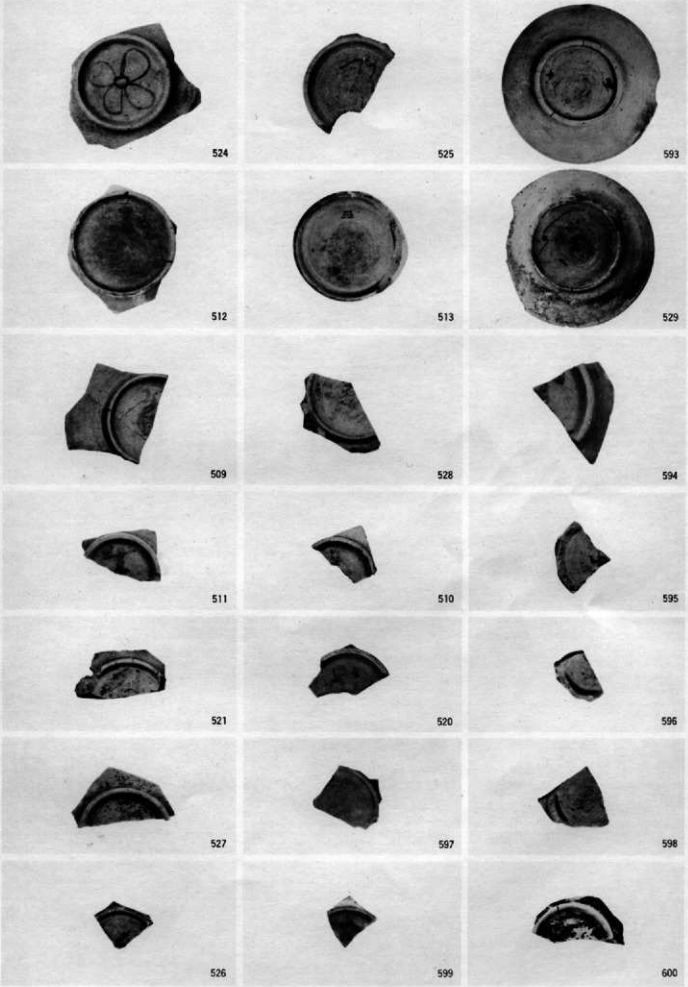
519

523

516

522

図版23　B期・墨書土器


524
525
593
512
513
529
509
528
594
511
510
595
521
520
596
527
597
598
526
599
600

図版24　C期の遺物

607

660

668

606

665

666

673

612

675

678

655

682

688

685

(1：4)
615

657

図版25　C期の遺物

743

754

919

747

780

765

1015

776

777

837

962

966

1039

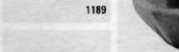
1151

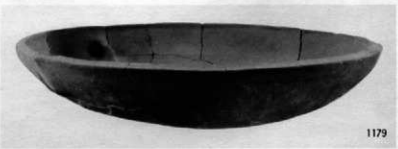
1180

1052

1181

1189

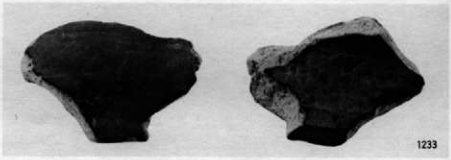

1190

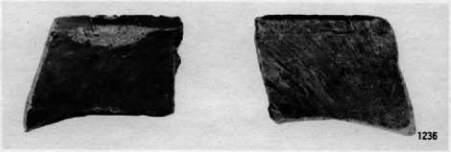

1179

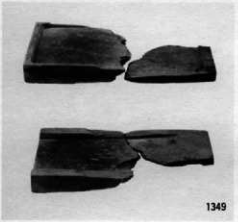
図版26　C期の遺物(瓦・石製品・銭貨)

1227

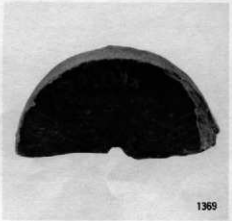
1230


1233


1236


1349

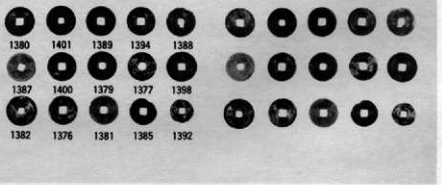
1350


1369

1371

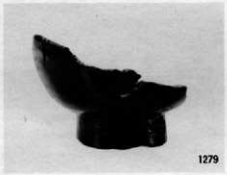
1368

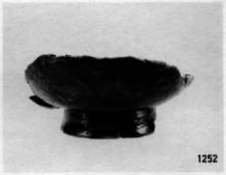
1366

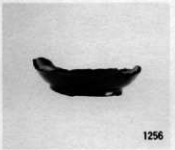


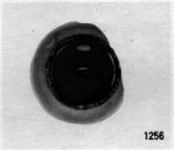
図版27　C期の遺物(木製品)

1237


1279

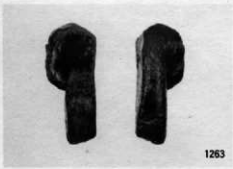

1252


1256

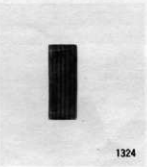

1256

1242

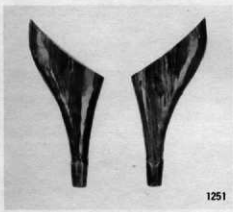
1310


1263

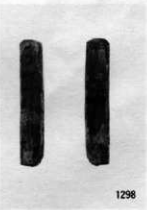
1269

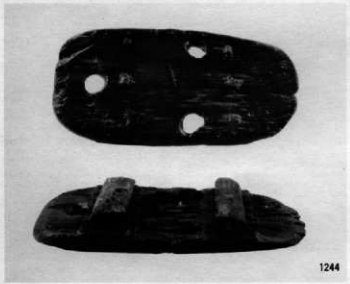

1324

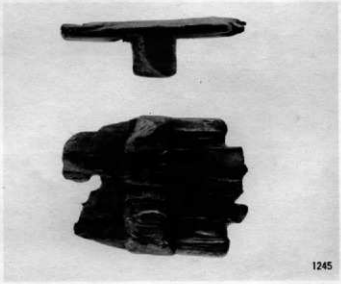
1266


1251

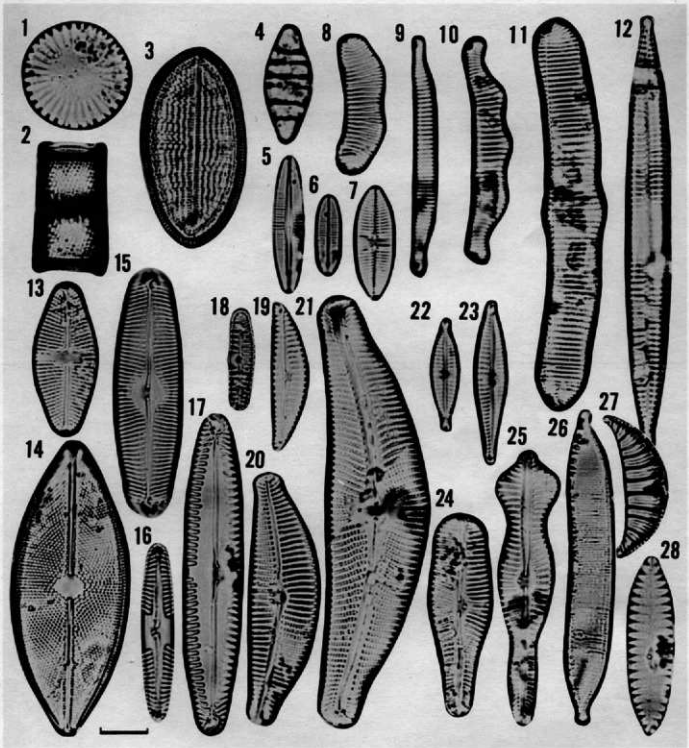
1271


1298


1244


1245

図版28　珪藻遺骸の顕微鏡写真



1. *Cyclotella meneghiniana* Kützing
2. *Melosira ambigua* (Grun.) O. Müller
3. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehrenberg)
4. *Diatoma vulgare* Bory
5. *Achnanthes linearis* W. Smith
6. *Achnanthes linearis* W. Smith
7. *Achnanthes hungarica* Grunow
8. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow
9. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kütz.) Rabenhorst
10. *Eunotia polydentula* Brun.
11. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* Ralfs
12. *Synedra ulna* (Nitz.) Ehrenberg
13. *Navicula mutica* Kützing
14. *Navicula takyoensis* H. Kobayasi
15. *Pinnularia karelica* Cleve
16. *Pinnularia subcapitata* Gregory
17. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve
18. *Cymbella sinuata* Gregory
19. *Cymbella minuta* Rabenhorst
20. *Cymbella turgidula* Grunow
21. *Cymbella tumida* (Bréb.) V. Heurk
22. *Gomphonema parvulum* Kützing
23. *Gomphonema gracile* Ehrenberg
24. *Gomphonema constrictum* Ehrenberg
25. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg
26. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
27. *Rhopalodia musculus* (Kütz.) O. Müller
28. *Surirella angusta* Kützing

（バースケールは10um）

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第17集

清洲城下町遺跡

1990年3月31日

編集・発行　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　(株)　ク イ ッ ク ス